であらうと考へながら見過した。黄色の明りを孕んだ障子の工合といひ、飛石の濕つたのにはその明りが映つてゐたのや、殘雪の睡てゐる山々の姿といひ、川べりの星のうつつたものはなかつた。凡ては古くさいまでに纏まりすぎた姿であつた。暗夜の中に實にわたしはまだ百年くらゐこのままな靜かさがわたし自身の中にあるやうな氣がした。しかも遠い村落の灯のあかりを凝然と見戍つてゐると、この世には決して幽遠とかいふものの姿の亡びることのないことが頼もしくもわたしを勇氣づけ暗夜のなかに永く佇たせたのである。

その三

わたしの散歩友だちはかなり多いと言つてよい。三軒目に陸軍少將の休職になつたのが、これも晴れ間にはよく川べりを歩きながらゐた。どうかすると朝日の光が、禿げた頭にかがやいて、爽然とこころもちよく見えた。何時會つても笑ひ顔を見せないで、むづかしさうな、腹のふくれてゐるやうな食ひ足りた顔つきで、それ故に一段と氣むづかしさうだつた。人生の仕事の一段落をいまは悠々と自適してゐるらしく、雪の日は雪も掻いてゐたりした。わたしはこの男をみるたびに全くの人生の歸宿を感じた。こんな平和な、そして屈托のない暮しがあるだらうかと、傲然たる少將の姿をわたしは心柔らかに眺めることができた。或る雨の夕方に、偶然に少將が歩いてゐるうしろから、女中が走つて來て、

「お待遠さまでございました。」

と言つて夕餉の知らせをしてゐるのを見たが、少將は依然としてああとか言つて肯づいたが、いかにも重々しい調子だつたに拘はらず、色の白い小悧巧げな女中は、その口のあとから何かはやり唄のあたらしいのをうたひながら、少將のさきに家の中へ飛び込んだ。まるで娘のやうな女中ぢやないか？——わたしはそれから最う一度少將が袴を着けながら陸軍記念日に出かける姿を、なるほど少將らしいと思つて眺めたことがあつた。そればかりではない、どういふ日でも少將の姿がわたしの家の前をゆききしないことがないほど、少將は運動ずきらしかつた。ああいふ立派なからだの老後をあんなにまで錬り鍛へる必要があらうかと、わたしは自身のろくでもない羸弱なからだを持てあましてゐるのをいまいましく感じた。

わたしの家主は海軍の中佐で、大きくふとつたからだの、すぐ垣隣りに住んでゐた。暴風の時は夜の目もねむらないで明るい二階をゆききしながら戸や障子にしんばり棒をつかへ、增水した川の上をながめながら何か目に見えないものとでも戰つてゐるらしいのが、わたしの窓の方から見えた。そんなときわたしは中佐がいつか外室したをりの制服姿の、き

ちんとした服裝を思ひ出しながら、中佐の家やわたしの家、それから川べり一帶の家々が大きな軍艦のやうに思へて仕方がなかつた。四角な窓々や灯のついた二階家がまるで艦上の景色そつくりだつた。中佐はれいの子供らしい善人のやうな顏つきで、何か號令のやうな懸聲をしてゐるやうで、わたしはわたしで暴風の渡る瀨の上の凄まじい音をききながら何度も床の上に起きなほり、動いてゐる電燈を不安と危惧との念ひに充たされ眺めてゐた。さういふときわたしは中佐の書齋の明るい電燈と、中佐のかげのうつる障子を見るごとに勇ましく感じた。そしてわたし自身も元氣づくやうな氣がした。あるひは坐つてゐられない暴風の二階のゆれうごくときには、わたしはわざわざ硝子のある窓の布をひいて、

「中佐は？——」

と、そのかげを托み見たりした。中佐は椅子によりながら川幅一杯の風がかうかうと照りかがやいて、月の漏れる水の上に渡るのを凝然と眺めてゐた。わたしはそんなとき平常何もしないで遊んでゐる無爲の中佐が、日露當時に何かの艦上に乗込んでゐた姿がさもあらうと、わたしは田舍の子供のやうな好奇の氣もちでかれの姿を見た。ふしぎなことには、この川岸一帶の軍艦が全くの軍艦になつてしまひ、中佐の號令のもとにあるやうな氣がし出したことである。中佐の家もわたしの家も一軒家のやうな位置にあつたから風當りが酷く、硝子戸はめりめりと鳴つた。

夜が明けると、わたしは銘仙の絣を着込んだ中佐が、今年二つになつた男の子を抱きながら、空や川の上を見渡し、

「昨夜はえらい暴風でしたなあ、——今年では稀らしい暴風です。」

さう言つて圓い顏を笑はせてゐるので、何だか昨夜の勇敢なる人物と別のやうな氣がして呆氣ない氣もちで眺めた。わたしの空想してゐた短劍袴服の人物は眼前から消え失せ、どこか近在から出て來た男のやうに思はれてならなかつた。

あるときには、「海軍の軍人なんて役に立たんものでしてなあ。機械はどんどん新しく變つてゆきますし、その方の指揮にしても形式が變るわけですから……」さう言つて今更ら敎師でもないし小役人はいやだしと、さつぱりとこの世の仕事から思ひあきらめてゐるありさまが、ちよつと枯淡でよかつた。せいぜいからだでもよくするか、大阪あたりへ行つて機械の方を勉强するかと二つくらゐしかない、——中佐は常人のやうに寂しくさういふと、軍人が持つ小氣味のよいあきらめの中で決して世間と組しない氣質を自分が知つてゐるため、世間に投じないところが、わたしには何より好ましかつた。

「それにしても中佐は軍艦に乗り合してゐたから、あんな暴風くらゐ平氣でゐられさうなものぢやないか？——」

わたしはさうも心で尋ねてみたが、いや却つて海上にゐた

から暴風が怖いのかも知れない、――それにいまは四つくらゐの娘さんと男の子と、眼のきれいな細君があり、家も自分の所有ぢやないか？――ああして目覺めて己れの一家をまもることは、むかしの海上の暮しよりもつとふさはしい大切なしごとであつた眞劍さがあるのではなからうか、さう思ふと人の善ささうな童顏の中佐の心が、わたしには能く釋くことができた。同時に少將にしてもあんな暴風の晩は、一人めざめながら決してむかし軍隊にゐたころのやうな氣もちではなく、もつとじつくりと暴風の凄まじかつたことを考へてゐたに違ひないと思つた。――

その四

わたしの室からも見えたが對岸に古い屠牛場があつた。三人の老人と、一人の中年の女とが毎朝缺さずに通ひ、屠牛の鮮血を飲んでは不治の病養にあてゝゐるらしく、二重廻しを着たその老人だちがとぼとぼと辿るのが、荒涼たる風景の、朝ごとに點出する姿であつた。が、その非常に驗があると云はれてゐる牛の鮮血をもらひに通ふ人々は、たいがい二年目くらゐに人が變るさうであつた。早いので一年位ゐ來れば何時の間にか通はなくなるさうである、それは癒つてしまふのではなく、決定的に亡くなるものが亡くなるのださうである。とにかくわたしの毎朝見る姿は、そんな人達の仲間らしく頼りない眺めの一つであつた。何んでも彼でも遺れるだけ遺つてみるといふ氣もちは勇敢ではあるが、しかしそれも人間にけものの鮮血が足しになるかどうかは分らないが、わたしは無氣味な卑しげな氣もちにさへなつた。黑いマントの兩袖が、蝙蝠の羽根か何かのやうに風に吹かれ、古い田舍の帽子に傘を持つた姿は、何かの劇のなかに出てくる姿のやうで、死がとぼとぼと途昏れて歩いてゐるやうだつた。ゆつくり見てゐると散らばつた川原の白い石の上にゐる鴉のむれまで、不吉な呪文のうたをつづりながら、人生からこの人だちを摺り落すやうに思はれた。一帶の、長い川べりの土手のふたがはには、まだ筋ばかりの枯れ草が、茫々たる半年の冬をそのまに止め、その老人だちが歩きつかれて腰を伸したりしてゐるのを見ると、峨々たる山脈の重疊きでが目のさきに迫つてゐるやうな思ひがした。何處かぢごくの鉦の音までが、かんかんと照りかがやいてゐる

屠牛は毎朝曳かれてゆくが、歸りは箱車に肉片となるに過ぎない、――その屠牛の遲い歩みがもうもうと鳴きながら、よくわたしの机のそばにきこえた。瀨の音があるので聞えるわけがないのだが、もう、う、もうとわたしには聞耳を立たせるのである。それと同時にその屠牛を待ちかまへてゐる老人だちが一しよに牛と連れ立ち、やがては己れの體内にめぐるであらう鮮血の靈驗に迷はされたかれらの老ぼれた魂が、

なほこの世のうたげにありつかうと舌なめづりをしてゐるやうで、やはりこの世ながらのぢごくを見るやうだつた。

わたしの愛する海軍中佐はそんなものに目も呉れないで、何か事があると正服を着てよく記念日には出かけて行き、夕方つかれてかへるらしかつた。その姿にわたしは一點の私情もなく、休職になればたまにあいふ姿で散歩もいいだらうと、むしろ無邪氣にさへ思へた。

「やあ、町はたいへんな人出でしてな――。」

さう言つて門前を過ぎる中佐は、ただ、一介の童子に過ぎない。わたしは微笑つて自分もあんな身分になつても今では後悔しなかつたらう、平凡と無爲との暮しを戀ひ慕ふやうになつたわたしは、晴天の風景を愛するとも先づ己れの健康から、それを望んでゐる方だから、思ひ切つて凡俗の内に生涯をくらすのが、氣骨が折れなくてわたしらしく相應しい暮しのやうに思はれた。さういふ氣もちすら今のわたしの年齢がさう考へさせるのかも知れないと思つた。

その五

若葉が黑ずむとなほ川の瀨が淺くなり、何か骨だらけになつてゐるやうな傷ましい氣をさせた。毎日机の上からそれを眺めてゐるとわたしの骨までひびいて痛むやうな思ひがした。一日づつ疲れが深まつてゆくやうでならない。――子供が水遊びしてゐるのさへ、老いさらばうた川の背の上の重荷のやうな氣がした。さういふ風色の間に、わたしの母もまた老いながら川原のわたしの家をたづねて來た。母の瘠軀を見るたびに川原にいつも坐つてゐるのが起きて歩いて來たやうな氣がした。なぜかと言へば彼の女は一色の灰いろめいた乾いたさみしい感じを裝うてゐたからであつた、彼の女ももはや人間界のものでありながら、わたしには磊々たる河原の果にゐて子息の冥福を祈つてゐるもののやうに思はれてならなかつた。母は風呂敷包みを持つてゐてわたしの眼の前で、その包みを開いた。絹地の表裝をしてない幅である。

「此間のはお前が氣に入らないと言ふから書きなほして貰つたのぢや。」

母のゐる寺にこの春から六十くらゐの老人の畫家が來てゐて、そこらの婆さん連中が五圓十圓を投じて書いて貰ふので、自分もつい欲しくなつて賴んで書いて貰つたと言つて、此間楠公父子別れの繪をもつてきたのである。楠正成が一子正行にその太刀を與へてゐるのが、稈拙以上の稈拙さで書かれてあつた。正成の髭は唐黍の紅毛のやうである。松の蔭にゐるこの忠臣親子の畫を前に置いて呆然としてしまつた。

「氣に入らぬかの。」

わたしはこんな繪はきらひであることをそれとなく言つた。聞けばその老人のところへいろいろな人がたのみに來る

さうである。母はとくに托んでやすく描いてもらつたと言つた。こんな畫をかいて假りにも渡世ができるといふことに、わたしはむしろ驚嘆したのである。田舍寺の繪馬堂にある額でもこれよりうまいと思つた。

今、母のひらいて見せたのは、松のやうな櫻の山々の遠望に、仔牛を舐めいつくしんでゐる親牛が遊んでゐる畫がらであつた。櫻は紅く、牛は斑ら毛の牛である。天來居士寫とかいてある。わたしはどうして母がこんなものを描き改めさせたのかと思つたら、この間のは、

「楠正成の畫ではあるがよくよく考へると子別れの圖だからえんぎが、わるかつたから止めた。」

と言つた。そしてこんどは仔をつれた牛をかいてもらつたのだと言つた。牛はわたしの年であるからと母は言葉を添へた。再び呆然として母を見つめてゐるうち、この繪はどうしたものであらうと思つた。母にこれは持つて歸つて呉れと言つても、折角だからしまつて置くやうにと遠慮でもしてゐるのと思つたのか、わたしの机の上に置いて行つた。横濱にゐたのが燒け出されてこんな片田舍へ流れて來たのである。わたしは老いさらばうた畫かきが、遲日の筆を運んでゐるお寺のうすぐらい室の様子は知らないが、水洟をすすりながら幾日もかかつて出來上つたらしいこの繪絹を新聞紙に卷いて、眼のとどかないところに片づけて了つた。

わたしはその繪絹のことから妙にその老畫家のことが氣にかかるばかりでなく、その事に考へ浮ぶと直ぐ呆然として寂しくなつて了つた。ああいふものを描き改めさせた母も母ながら、又わづか五圓くらゐで唯々として書きあらためる畫家も畫家である。しかもそれが息子の氣に入らなくて失望したやうに歸つて行く母も母である。それらはみな泣きたいやうな人物である。わたし自身にしてもああいふ畫をしまつて置いて、扨て何にする氣さへ起らない。ただ、泣きたいやうな氣ばかりが募るだけである。——それはああいふ畫をこれから後にもうまく賣り込んで行けるかといふことだけでも、わたしにかかはりの無いことながら一層氣を欝がせてくるのであつた。しかも母の言草によると彼の畫はいまに値の高くなるものださうであることであつた。母はそれを信じて疑はないのである。わたしはどう言つていいか分らないのだ。だからわたし自身もああ然うですかと言ふより外にことばがない。——わたしはこんな畫を預かることがしまひには忌はしくさへなつた。

その六

わたしは釣を垂れてゐる、——澄んだ日でないと鮎は釣れないことを知りながら、やや濁つた瀨だまりに絲を落してゐる。若鮎はびりびりとくるのだが、纖いからだに手をふれる

と、冷たくて何ともいへない爽やかな氣もちになる、……おそい日ぐれに絲目が分らなくなるまでわたしはがまんをして絲を垂れてゐる。わたしの魚籠のところに新らしい鑑札が木綿の袋に入れられて下つてゐる。毛皮の尻當もうしろに垂れてゐる。絲は水の面を上つたり下つたりしてゐる。そのたびに美しい纖い若鮎がなよらしい肌をひからしては釣れる。魚籠にそれを入れる。ひと荐りに跳ねてゐるが間もなく靜まる。水の上の蒼みが空のあかりだけになつて絲のところだけしか見えない。それでもわたしはまだ絲を落したままでゐる。そしてゐるうちにわたしには此の老いさらばうた川が生きものやうに、ときたま、どつしりした重みを次第に加へてくるやうな氣がした。その重みは却つて釣る人を惹いてゆくやうな思ひをさせることであつた。目に見えない深みへだんだんに辷つてゆくやうな、それが加はつてゆくごとに到底そこから遁れることのできないやうな氣がした。そればかりではない！

「あんなに群がり集つてゐる山嶽までが、このひとすぢの絲の先きを引いてゐるやうな氣がするではないか？」

なるほど左う言へば、わたしの眼界にあるものの一切がわたしを惹いてゐるやうな氣がした。あえぎながら蒼い泡を吹いてゐる流れが、ちやうど苦しみあがいてゐるやうだ。その聲や叫びが黄ろくわたしの耳底に騒ついてゐる。——わたしはその叫びの中に身を置いてゐるのだ。何千年もむかしから叫び疲れてゐるものが、もうどれだけも力を持つてゐない、——あるだけのものを出し盡した蒼白い齢がいま訪れてゐる。……そしてなほ何百年かを流れてゐることだらう。さういふ思ひに耽つてゐたときに、鮎がいきなり絲を力強く惹いた。そのときわたしは全く嚴肅なと云へば云はれるほど吃驚りした。その驚きから心を取りなほしたときに、いつかの、シイツを乾してゐた奥さんが通りすぎたらしく、眼前二三歩のところに奥さんの姿があつた。わたしは又急に魚籠が一そうの重みを加へたことを感じた。向岸にもわたしと同様な釣人が群れてゐる。それが段々わたしには幽遠な人物になり、わたしと同様に動けないもののやうに見えた。何かあえぎながら縛られてでもゐるやうに、重々しく悶えながら絲を引いてゐる。

「釣れますか？——」

知らない人がかう聲をかけてゆくのが、自分に言つてゐるのではないやうに思はれ出した。それ故、わたしは默つて返事をしなかつた。

あたりが蒼茫としたころに、わたしは絲のさきに恐ろしく長い此の老いたる川が、のた打つて蜒蚰として續いてゐるやうに思はれ出した。そしてその尖端が何かとかげのやうにひりひり震へてゐる。——そのうめき聲がわたしの耳底をさわ

き立ててくる。わたしは恐ろしくなつた。わたしはありもしないことを言ふのではない。まるで肩のところが石のやうに凝つてしまつたのだ。そしてわたしの手にある長い竿は一たい何處まで伸びてゐるのかさへ覺えてない。わたしの手はしびれてゐる。からだは前のめりになる。陷ちさうになる。わたしはこの老川に吸ひ取られやうとしてゐるではないか？

――危ない！　と左う思つた。こんな靜かな景色の中にも、こんな異體の知れない物恐ろしさがわたしを待ち伏せてゐたのか、身を引いてわたしは竿をたたみ出した。頭がひどく疲れてゐる。こんなくらゐなら却つて雜鬧の中がよい。こんな息苦しい風景などといふものはない。――わたしはわが家の灯に向つて歩き出したときに、全く蹌踉とした疲勞の中にゐた。

「恐ろしい目にあつた。あれではまるで命を奪はれるやうなものだ。」

その七

或晩、わたしは寢床の中で、不意に眼をさました。時計をみると最う二時をさしてゐる。雨戸のそとは瀨の音がさうざうしく流れてゐる。――眼がしだいに冴え返つて寢つかれなになつてゐる。瀨の音がひと頻り烈しく寢室に亂れながら入つた。

白い磧の石が月夜の中に浮いてゐる。いつも見える山麓の籔つづきに灯が一つ漏れてゐるだけで、あとは一望蒼茫たる景色であつた。向岸にいまごろ誰が歩いてゐるのであらう、ゆつくりと散歩でもしてゐるやうな樣子である。彼の男のあとを追つて見たら、その顏を覗き込んで見たらと、譯の分らぬことを考へた。川べりといふものは不思議な男がよく歩くものであるが、こんな眞夜中に散歩でもあるまいと思つた。わたしは家族の目をさまさないやうに二階からめしめし降りた。階段が玄關に向いてゐるので直ぐ玄關の硝子戸をしづかに開けた。そして門の潜り戸を開けて石垣の上へ出たときに眞夜中の流れはわたしの頭腦を亂れ打つては通り過ぎ、暗い薔薇色をした月夜が露ぼく川の上を蓋をしてゐた。

「あの男は松田權二に似てゐる。わたしと一しよに文學に志ろ歩いてゐるわけはないが、それにしても今ごろ松田權二を考へるといふことは、少しをかしい。」

人間は途方もないときに關係のない人物のことを考へるものだ。あの男の文學的志望が中途で廢されたことと、こんな月夜と、そしてわたしといふ人物とを調和させて見ると、偶然にあの男のことを考へるわたしの心に無理もないことのやうに思はれた。あの男はニイチエとかキリストとかを好いて

ゐた。言ふことも生意氣で、理窟ぼくて何でも頭からけなしつけるやうな人物であつた。わたしの知らない理窟をかれは考へ出して、わたしをいやがらせた男であつた。かれは相當の金持ちであつたために食ふに事を缺かなかつた。

「おれは別に文學をもつて世に立たうといふ氣はないが、だが　印刷にだけはしておきたいものだ。」

と、かれは一切が、こんな風な切口上であつた。顏さへ見れば議論を吹きかける男で、わたしはかれがなるべく議論をしてくれないやうに、會ふごとに左う思つた。わたしは世の中に議論ほど空恐ろしくにがにがしいものはないと、今もその以前も考へてゐるのであつた。理窟といふものの編み方解き方を知らないわたしは、たとへその心を知つてゐても、聞いたり言つたりすることが嫌ひであつた。松田權二はいつも一體藝術などといふものはと云ふ調子でわたしに食つてかかるのであつた。

「いまどき彼奴が出てきて又わたしにむづかしい議論を吹きかけるのではなからうか？――あいつはわたしの知らないことを考へ出しては食つてかかつたのだ。わたしが藝術論や人生觀なんといふものを昔からせんさくしたり議論したりすることはできないことを知つてゐる筈だのに、どうして今ごろやつて來たのであらう。――」

或ひは都會を離れてゐるために都會めいた空想をすつかり無くしたわたしを一本やり込める氣か？――それとも田舍にゐて草とか木とか、山や河だけに限られた憐れな空想家の末路を歩んでゐるわたしを嗤ひに出て來たのであらうか、どちらにしてもわたしは能く知つてゐる。もう空想などといふものを人生や都會の中でなくしてしまつたわたしの、やつとこのごろ草木山河の間に逆もどりした年齡を知つてゐる。しかしそれを嗤ひに來たのなら、ちよつと待てと言ひたくなつた。わたしは息をぬいてゐるのだ。あえぎあえぎ考へつめたことも、このごろは古絆のやうにぼろぼろになつたから、これから一つ考へなほさうとしてゐるところだと！

「だがそんな辯疏はよせ。自餒、君は幼稚ではあり何も知つてゐることとて無い筈だ。こんな山河の間にゐても、軍なる君のこじつけた頭では解りはしないだらう。おれは山河の中にゐるし、君はまだ外側にゐる！

「へん！」

わたしは寂しく苦笑ひした。

「君はいまごろ何の爲めに迷ひ出て來たのだ。月夜のせゐか？」

「君にあひたいためだ。君の有つてゐる詰らない考へだけで、まことに不思議なほど調子よく、世の中へ出られたことを嗤ひに出て來たのだ。おれの知つてゐるかぎりの君は一口にいへば馬鹿で、何一つ取りやうのない男であつた。君はまだ

知つてゐるかね。私製ハガキに繪をかいて、そして詰らない詩の一片を書いて寄越した途方もない男だつたことを！」

わたしは松田權二の顏を凝視めた。白い光らない皮膚の下に意地惡い過去を負つてゐる彼の心が差し覗いてゐた。

「何も彼も知つてゐる。だが、おれが君だつたら決して迷つて出て來はしないつもりだ。わたしは馬鹿なみにそれを押し通して來たばかりだ。君のニイチエは君を幽靈にしただけだよ。」

松田權二は笑つた。かれ一流の鼻さきにかかつた聲である。

「なるほど、おれのニチイエはおれからしまひに失敬をした。しかしおれはまだ一度も文學的穉氣を嘗める屈辱を敢てしなかつた。それはこの世に於ての、おれのたつた一つの名譽ではないか。君はその不名譽の下をくぐつてあるいて、やつと芽立ちのできた男だ。そんな男の思想などといふものは、曾つておれの一度だつて考へたことのない代物だつたのだ。」

「ふむ、不名譽！　とは能く言つた。だが結局君は名譽の中で死んだから、それを潔しとしてゐるのか。」

「さうだとも！　おれはさつぱりとした氣持ちでゐられた。だが君はそんな氣もちで未だ一度もゐたことはなかつたらう、現在だつてさうではないか？　當然恥ぢなければならなかつたことも、君は平氣で歩いたのだ。」

わたしはやや頭がつかれたので、その理窟をどういふ風に現はさうかと考へた。わたしには名譽も不名譽もも一つ屈辱をも、ただ何時の間にやら通り越えたくらゐに何も彼も過ぎてしまつたやうに思へた。それだのに、この理窟好きの亡靈はこんな半夜にわたしをいぢめようとするのだ。

「權二よ、こんな月夜を選りぬいて逍つく君も少々どうかしてゐるではないか？　早く消えてしまつたらどうだ。」

「大きにお世話だ。おれにも時たまこんな月夜が慰めになるのだ。」

松田權二はかういふと昂然として歩き出した。かれはこの古い風景の中を川上の方へ行つた。――あんな人物が今どきに何のために出て來たのか、わたしにはまだ頭のわるい故ばかりだとは思はれなかつた。わたしの腹の底にあるまだうらい若い穉氣が、松田權二に似てゐるらしいものが折々さし覗いて出てくるのを感じた。

わたしは再び二階へ上つて、さつきの雨戸から川べりを眺めてゐたが、松田權二は川上の霧の中をかげを引いて歩いてゐる。止みがたく故郷に斃れた文學的亡靈、――必ず曇りがちな月夜には、わたしを脅やかしてくる氣の毒な一つの想念、――そしてわたし自身さへなほ迷ひながら途昏れてゐるやうな、とぼとぼと辿つてゐるやうな道すぢに、きつとあいつが迷ひ出してくる……。

身邊

母と妻とが鮎を燒いてゐる。

「そんなに不恰好に燒いて了つては折角のお土產も駄目になつてしまふ。鮒屋へ電話をかけて燒かせたらどう？」

「その方がよござんすね。こんなに尾も頭も黑く焦げては鮎だか何だか分りませんからね。電話をかけませう。」

妻が左う言ふ間に母はまた新らしく鮎串を火の上に置いた。あとにいくらも無いのだから此方で燒いたらいゝぢやないか？　六時きつかりの間に合ふかどうか分らないし、第一じぶん時だから料理屋も混んでゐるにちがひないと母が言つた。

「それもさうだが鮎なんてものは眼で食べるものですからね。お前、行つてかけて來て呉れ。この間托んでおいたから直ぐ來てくれるにちがひないから。」

「六二四番でしたね。」

妻は紺屋まで電話をかけに行つた。すれちがひに甥の兄弟が白い襯衣に手拭をすつぽりと後腦で括つて、鮎網をかつぎながら這入つて來た。草鞋は瀨踏みの荒いために擦り切れ、弟の方は片方だけ脫いでゐる。

「時間がないから餘計捕れなかつた。それでも十五尾くらゐゐるかも知れません。おい、開けて見い。」

兄の由種が弟に魚籃をあけさせた。かなり大きなのがゐる。

「ほう！　なかなか大きいのがゐたね。」

わざわざ今日わたしが東京に行くことを知つてゐる兄弟が、一週間ばかり食べられないだらうと言ふんで、中學の時間の濟むのを間に合せ、川上へ網をかついで行つた好意を美しいものに思うた。

「このお禮に白靴を買つてやらう！」

妻が戻つて來て料理屋が來て呉れると告げた。――母はまだ一心に鮎を燒いてゐる。由種も鮎の活きたのを殺してゐる。匂ひがあたりにしてゐる。

「時間は？」

「まだ一時間あります。」

しんまいの女中が答へた。

そこへ近所の女の子どもが二人、目高を掬つたのを持つて

來て、石手洗に入れてゐる。この間の晩をちさん何かお話して呉れと言つたので、稻垣足穗の星の話を一つしてやつたら、もう一つ話してくれたら明日きつと目高をすくつて來てあげようと言つてから、隔日くらゐに前の川から目高をすくつては持つて來てくれるのである。三つある石手洗は目高で一杯になつた。

「ありがたう、もうこれで澤山ですよ。」

「お留守のときにも入れておいてあげます。」

子供はさう云つて出て行つた。

鮎釣の人が川岸にたくさんゐるので俥はやめにして、由種と女中が鞄をもつて送つてくれた。

「こんど東京へゆくのが心配になつて仕方がない。」

母はこんなことを川の瀨の音で能く聞えない門の前で言つた。なに大丈夫ですよとわたしは答へた。上野の鏗石の上を洋杖で一つ敲いてあるき出したら、十四年も住んだところだものといふ腹があつた。けれども何か知らこだはりを東京に感じた。わずか一週間くらゐ旅行して東京へ入ると胸さわぎするくらゐだ。まして、田舍に暮しを移してゐると一層氣兼ねらしいものの物怖ぢしたものを感じた。

ひとり上野の鏗石の上に立つと、公園の大きな銀杏の樹の伐り込んだ姿が、五本の指をそらに向けたやうな、手の形をして芽を吹いてゐた。厭な姿だとすぐに左う思つた。

旅館は驛前でぼろぼろに缺けた庭石と二三本の櫻の外に、蟻一疋這うてゐなかつた。蜘蛛もゐないやうだつた。みんな死んだのか知らと思つた。

「さうおつしやれば蟻なんてまだ一疋も見ませんわ。」

聲の美しい女中が次の間で着物を疊みながら言つた。その東京辯が泥くさい黑ずんだ田舍言葉に慣れたわたしには、耳ざはり美しく實際誇張ではなく音樂みたいなやうな氣がした。それに最一つは十四年間の東京辯も田舍では一朝にして破れてしまひ、いま、かうして東京言葉で話すのに骨が折れてならなかつた。それにわたし自身の聲の大きく荒々しくなつたことにも氣がついた。

朝、おみをつけの中に、柔らかい葱をつまみあげたときに東京にゐるらしい甘口のおつゆの感じをほほゑみながら感じた。箸を擱いてこんど上京の用件を考へると、又しても暗然とした。とにかく辯護士の八郎氏へ葉書を出した。宿へ來て貰ふのは失禮ではあり、たづねるには道案内の勝手が分らず、止むを得ないで三橋亭までおはこびをお願ひすると書いた。書いてから一たい三橋亭といふのが未だあるか知らと思ひ、女中に尋ねると有りますと言つた。

鮎を車やにたのんで知人に送つた。時間の都合で牛込の本屋までタクシに乘つた。乘つてみてから東京に自動車の數が

殖えたやうな氣がした。埃と塵とにまみれた空氣のわるさは、くもり硝子をすかして見るやうな曇天つづきの中に、悲しさうな家々がつらなつて見えた。わけても新建の木地のえがらつぽい肌地が、なまなましく頭腦に刺立つた感じをあたへた。

町の遠景が見え、家々が見え、電車自動車が見え、通行人が見え、その間を驅る自動車の上で久振りで目まひを催した。長途の疲れも加はつた快よい目まひであつた。神樂坂から北町へ曲るところで、ぢやりぢやりと自動車に何かぶつかつた。見ると小包郵便の車とぶつかつたのだつた。

「降りるよ、降りるよ。」

わたしは子供のやうに左う叫んだ。そんなこともあるだらうと思つてゐる矢先きだつたので、なほ胸さわぎがした。

「どうも濟みません。」

歩きながら運轉手が平氣な顏をしてゐた。本屋の石造の上にゐても不安だつた。こんな神經はやくざな神經だと思つたが、人と話をしてゐても話の間にときどき留守になるやうな何ものかを感じた。

かへり途は電車に乘つた。どの人の表情にも殺伐な色があつた。夏帽子の裏に挿んだ田舍の回數券を落した。往復のかへりを帽子にはさむときに落したのだ。誰も氣をつけて見てゐもしないのに、がらにもなく赧らんで了つた。——窓から見えるものは矢張り埃と曇天と目まぐるしい人通りである。今年の十月に歸京するつもりでゐたのが、どうやら最う少し田舍にゐたい氣もちになりかけ、こんな惡い空氣は生れ立ての子供によくないだらう、まだ出京するのは早い、どうせ行つたつひでだから落着いてゐようと心で決めかけた。さういふ心は花屋の主人と花屋の畑へでかけたときの、二千歩からある高臺の田舍の畑のことまで、女々しく思ひ起された。そこの畑のまんなかにトタン屋根の番小屋がこしらへてあり、植木を買ひに行つたわたしは木の枯枝を集め、火を焚いて茶を淹れてくれた。目をさへぎるものは紫舍んだ山と青い田圃とか林や森だけであつた。

花屋の主人は町から花の手入れや、花の剪り立てのために半日ぐらゐづつ此處へ來るらしかつた。茶をのんだが熱いうまい番茶だつた。

「一時間くらゐ晝寢もしましてね。それから町へかへるんですよ。」

花屋の主人はこんなたはいない事を言つたが、そんな詰らない言葉がなぜにわたしに思ひ出されたのか？ひとつはわたしのやうに次第に蝸牛のからの中にちゞこまり、天下の事に鈍く、己れだけを守るくすんだ氣もちをそつと撫でてくれるからである。今の世は己れ一身のことを考へるだけでも物憂く悲しい。人のことなど元よりどうにもなるものではない。

己れの病ひは己れでなほさなければならない。左う思ふと矢張り山川の間にいましばらく住んでゐた方がからに合つてゐるやうに思はれた。東京に居ても人と交際するではなし、會合へなぞ人見知りのわたしが出て行くことも少ないのだ。少數の友人を守つてゐたら最早やわたしなぞは何と言はれやうとも、ひとところに滯つてゐたらいいのだ。こんな埃の中から早く逃げ出したい。こんな埃の中を泳ぐ勇敢の人もあるだらう。しかしわたしには不向きである。わたしはわたしらしいものに凝り固まつて居ればよい。世評それ何ぞやである、……わたしはかう思ひ返して、灰だみた町々の風色をながめ、これが十四年間もわたしを育ててくれた都だと思ひ、恩謝の心湧かないでもなかつた。それ故にまたこの都の落着いたむかしどほりの薄ら日の中に浮び、そこに落着いて暮らすことが祈られたのである。

午後過ぎA氏と一しよに日本橋仲通りを歩きながら、むかしの仲通りの瀟洒たる骨董店をあさらうとしたが、それは最う空想に近いものであつた。ボール紙造りの家並みに挿まれた二三軒の道具屋にも、急場に蒐めた氣品に乏しい陶器などが僅かに目に留るだけで、何一つむかしの仲通りをもの語るものとてなかつた。

「これぢや當分どころではない、二三年はだめですね。」

と、わたしは言つた。

「廢めてしまつた店もあるらしい。——やはり當分ゐなかにゐた方がよいやうですね。子供のためにも。」

仲通りを過ぎてからA氏はかう云つた。しかし唯一軒だけ石をひさいだ店さきに、青い石手洗を見たとき、水くさい苔の匂ひのなかに、むかしの仲通りの餘影がないでもなかつた。わたしはそれを目にゐがきながら、A氏と田舍には未だないアイスクリームソーダを飲んだ。

上野三橋亭で辯護士の八郎氏を待つために三品の壹飯を濟したが、折柄じぶん時のせゐか込んで空いたテエブルは一つもなかつた。見知り合の女らの顏もなく、みんな若い女ばかりであつた。微笑一つするでもない此の女らは白い皿をあちこち行きして搬んでゐたが、べつに浮いたやうなところもなかつた。女學生か令孃のやうな裝ひや顏容なぞも田舍から來た眼にはかういふ境涯の女らが次第にむかしのカフエ女らしくなりかけてゐるのを知つた。

約束の一時になつても八郎氏は來ないので、階下の卓と卓の間を搜してもその顏は見えなかつた。八郎氏では先方の本屋とぢかに會つた方が早わかりだから、徒らに手紙で談判するより先方に來るやうに言つてやつたと云ふのだつたが、何しろこんな著作上の問題は本屋に良心がなかつたらどうにも仕方がないと言つて、田舍のわたしへ知らせて來たのだつ

た。

この事件は三年ほど前に寫した原稿が、震災後になつて大阪の本屋から出版されたのが此の春のことだつた。月映といふ命題を肉の記錄として處女國といふのを肉を求める者と改め、廣告には肉欲の聖典と書いてあつた。しかもその本は檢印もなし又寄贈もしてこなかつた。俗惡卑俗な裝幀で出版されたことは言ふまでもない、——こんな事を考へてゐるうちにわたしはいゝ加減な本屋から本を出したことを悔いたが、それにしても齒がみしていゝのか、泣いて見たらいゝのか、また、慍れるだけ怒つてみたらいゝのか、混雜した一時の感情がまるで靜かな山川の中にゐるわたしを凶暴なむかしの氣質にさへ逆もどりさせ、何か人間に暴力が最後のものとして許されるならと言ふ氣にさへなつた。二三日經つてから氣もちは沈むばかりで、何をしても面白くないやうな氣がした。ことに、その本の中にはもはや近頃のわたしらしい靜かな氣もちさへ含まれてゐる作が多かつたから、なほ肉慾の聖典には腹立たしかつた。大方　わたしの以前にかたむきかけた或る病的な作の一部分を俗人らしく肉的なものと考へ込んで、さういふ廣告をしたものであらう、わけて題命を變へるなどゝいふことも亂暴どころではない、作家を畏敬することを知らない遣り方であつた。

わたしはこの事件では泣寢入りすることが厭であつた。作品はわたしの子供のやうなもので、裝幀や命題はきものや魂みたいなものである。三年位かゝつて書いた永い年月の間の頭の疲れや痛さの積みかさなつて行つたものがまざまざと泥まみれにされてゐることを例令わたしがどんなに大概のことを默つて過ごす性分であらうとも、これだけは苦笑ひさへできなかつた。飯嚥喉を通らぬ氣もちだけでも舐めさせないで置かれなかつた。わたしは自分のことは決して人に相談しない男である。わたしはよいにつけ惡いにつけ一人で考へ、その考へを結果を別にして押し進む男である。それ故先方へ交渉したがいづれ上京の上おわびをするといふ體のいい挨拶であつた。條件として裝幀をあらため改題することであつたが、そんな事が事實行はれるものではなし、又、厚顏の本屋のことではありして、呉れさうもなかつたから、八郎氏へは六大新聞に謝罪廣告を出させることに手紙で交渉し、いまの世は名譽毀損をも物質に換へることにより懲戒する傾きはあるが、わたしはそれはしたくないことを手紙でつたへた。とにかく一遍會つた上で君の氣もちを聞かうといふ八郎氏の返事であつた。最近出る本のこともあり、こんどの上京となつたのである。

二時になつても八郎氏がこないので、ナプキンに宿にゐるから來てくれるやうにと書いて、宿できつことにした。そとへ出ると大道藝人が賣つてゐる小さい繪日傘をこの間見て置

いたので、それを廣小路まで子供の土產のために買ひに行つた。そして宿の前へくるとレインコートを抱へた歌人であるつた。十年前に會つたとほりの若々しい男である。

「こんどはいろいろありがたう。」

「何しろ一度會はないことにや仕事がやりにくいものだから。」

奥まつたとは云へ、バラックではあつたが鳥渡離れのやうになつた部屋に這入ると、八郎氏はとにかくこんな問題は先方の良心に據る外はないと言ひ、命題を換へたのは刑法の箇條にふれてゐると言つた。先方は今月の八日ころに出京しては見覺えのあるペン文字にさへ屈辱的な嫌厭をかんじた。

「僕の考へではもう何も彼も遲いやうな氣がするのです。地方の本屋へ廻つてゐる分もあり、それを一々裝幀を變へさせる譯にゆかない、そのためにあんなやくざな本のために頭を疲らせたことも今更らどうにもなるものではありませんからね。」

わたしはここまで言ふと、矢張り嘆息より外にはなかつた。山川の都市であんなに考へ憤つたことも、いまでは自らつた。

「では謝罪文でも書かせた上以後は絶版にさせるやうにする片の謝罪文で事濟みになることくらゐは平氣なことですから。」

より外に方法はありませんね。それもずるい男だとすれば一

「つまりあの本屋がうかうかと遣つて見はしたが、いまになると、これはこちらが惡かつたといふふうに、じつくり考へてくれるやうな人物なら、僕も面倒だからどうせ災難のこと命に變へはしないだらうし……。」

だし諦らめもしますがね。さういふ人物ならあんな淫らな題

「とにかくできるだけ良心をえぐり立てて見るんですね。法律が背景をしてくれてゐてもそれが用に立つことと立たないことがありますから。」

これでは結局やはりわたしの泣寢入りになりはしないか？謝罪文がわたしの沈欝な氣持ちに何の役立たう、そんな義理一片のものに一息つくことなぞ表面的すぎるとも思はれた。

「結局は僕の損をした分の氣もちには一つも還つて來さうもありませんね。」

「全く何一つつぐなふためにはなりませんよ、唯、あの男の心もちに或る種の悔悟を感じさせるだけですよ。それが肝心なことではないですか？——」

「悔悟、——さうですね。」

わたしは困り切つて八郎氏の顔をながめた。結局それより

外に仕方がない。悔悟が冷笑となつてもこの世の中のことが一人の人間の怒りや悔みを容れるやうには出來てゐない。それ故に法律にも人情にも手頼れさうもなかつた。損をしたりしたりするものはそれ以外のものでその屈辱を償へさうもなかつた。

「とにかく俗人にはかなひませんね。理窟も何もわからない。思ひ切り俗人には高びしやに出るか、對手にならないかの二途あるのみですね。」

わたしはかう言ふと、もう何か莫迦々々しいことだらけで、一體わたしの怒りなどといふものも結局自身の中に沁みこんでしまふところの、極めて淡々しいものに過ぎなかつた。言はば自分自身で世の中の何も彼も諦らめてしまふやうな卑怯な人情、己れを最極端まで他人にひろげて見せることの面倒ぼい退屈さに、つい自分までも默り込んで見せるやうな性質などと言ふやうなものは、わたしなどの年輩者の、そして明治時代の最後の性質かも知れないと思つた。こんな純東洋風な人情は早く早く亡びてしまへばいい、こんな人情のある間は人間が卑屈にさへなる、……と言つてもわたし自身のこんな淡々しい氣もちはどうなるものではない、——。

「法律上の問題などといふものも、ぎりぎりは人情の問題になつて了ふんですからね。」

八郎氏は併し「やるだけは遣つて懲らしめる必要がある。」とも言つた。

「とにかくその本はここにはないんですか？——」

「まだ一度も見ないんです。見ることが厭なんで本屋の店さきへも近づかないんですが、故郷の本屋へ來てゐるさうでそれを知らして呉れた人もあるが、それには困りましたね。故郷にまで恥を露らすやうな氣がしましてね。」

うつかり本屋へ這入つて行つたら、そんなやくざな自分のやんと來てしまつてゐる……。

本が眼にふれるかと、本屋へも行かなかつた。それが最うち

「僕は生涯法律なんてものに關係のない人間だと思つてゐたら存外ですね。ことに君にこんな事件で會はうとは思はなかつた。」

「全く僕もその感が深いんですよ。」

八郎氏はもと都會詩人などと號して、血氣に迅まつた詩や歌の破調のものを雜誌で書いてゐた。かうして見たかれはその破調風な性格はあるが、いつの間にか一味の落着きが風貌の上に加へられ、しまひに妻帶すべきかどうかと言ふことまで話し合つた。わたしは妻帶をすすめた。

「一人きりの女でみんなが、收まつてゐるから妙ですね。僕にはそれがとても出來さうもない。——」

「美人はそとで見てくれればいいぢやありませんか？」

かうわたしが巫山戲ていふと、八郎氏は持前の大聲で、

「ははは……」と笑つた。

獨身で苦學力行したかれが妻をめとることに幾度か迷ひ惑うてゐる有樣が、この變に快活らしく又妙に寂しい笑聲の中にこもつて見えた。

田端のもとゐた家の近くへまで行つたが、もとゐた家の前を通る氣がしなかつた、樹のある家々の庭さきや、角の酒屋や菓子屋なども別に變つたところがなかつた。肌ぬぎになつた酒屋のかみさんがわたしの姿を見て、ふしぎさうな表情であとを見送つてゐた。出入りの車やだけへ途すぢではあり顏だけ出して見たが、仕事にあくせくしないかれはその晩も家にゐて、わたしの顏を見るとびつくりして狹い土間の緣の上にこれは記念にいただいたのだからと、わたしから遣つたよごれた座蒲團などを取り出した。そしてさきにゐた女中のお仲はこのすぐ坂の上のカフエに女給をしてゐると言つた。

「あれは家がいい筈だからそんなカフエなんぞ出なくともいいんだが。」

「好きで出たらしいんです。この間もそんな所へ行つてゐるより堅氣な奉公をしたらどうだと言ひましたら默つてゐましたが、まだ居るらしいのです。何か動けないことでもあるんぢやないんですか。」

お仲は獨逸女のやうにがつしりして　使ひに出ると近所の男の子の首つ玉を引つかへたまま二三間ばかり引きずりに引摺つて行くといふふうな女であつた。二年ばかりわたしの家にゐたが震災當時生死を賭して赤羽落ちをしたりしたくらゐで、わたしはその話にあはれを感じた。わたしの妻と手紙のやり取りをしてゐたが、お仲のところ書きは田端のもとゐた同番地の、或るおめかけさんの氣附だつたところから少し可笑しいと思つたが、やはりカフエへなぞ出たのかと思うた。

車やを出ると私は坂の上の、明るいカフエを目がけて歩き出した。且那さまがお好きだからと云ひ、田舍へわざわざ行つて土賊を一と抱へも採つてきてくれたりしたこと、又そのとき田舍道を下駄のまま自轉車を乘廻して罰金五圓を取られたりしたことなども、いまになると可笑しく思ひ出された。一門郎黨のうちに例令一たん出て行つたものにしても、そんなカフエなぞへ出てゐることを聞くといい氣はしなかつた。

坂下で見たときとちがひ、前に立つと急拵へらしい建物であつた。わたしは硝子戸を開け内部へはひるときに、入口の卓に三人の客が飲み食ひをしてゐるところに、うす紅い着付の女がうつむいてビールの酌をしてゐるのをちらと見た。お仲であつた。向うもすぐ氣づいたがしづかに酌をしたまま挨拶もしなかつた。わたしは背後の卓を前にして別の女にサイダーを命じたときに、お仲は突然ばたばたと二階へ上つてしまつた。そんな庭鷄の羽ばたきのやうな音を階段の方にきい

てから、わたしはサイダーを一杯のんで扨てこ始末のをどうしようと思つた。すぐカフエを出るのは變だ。それに三人の客がお仲があまり突然に二階へ上つたときから、わたしの顏をじろじろ眺めた。他のふたりの女給もわたしの樣子を窺うてゐる——。

「なにか召し上りになりますか？——。」

「いや。」

わたくしはあたまを振つた。

勘定場の四角な窓から白いコック帽の、三角な奴がこちらを見てゐた。わたくしは金を置くと外へ出ようとしかかると、漸つと二階からこつそりと下りてくるらしい先刻の、いやに紅ぼい着物とエプロンの端が上から二段目くらゐを下りてくるのを見た。が、わたしはそのとき軌りのわるい硝子戸を半分ばかり開けたあとであつた。

坂を下りかかりながら先刻二階へ馳け上つたのは、あまり突然だつたので物言ふこともできずにああやつたのかも知れないと思ふとその氣持が判つた。車やへ又寄つてこの譯を話して若しお仲が國のところを聞いたら知らしてもいいと左う言つて別れた。

曇天つづきの朝ぞらに最う夕方の光景がありさうで、坐つてゐると誰を訪ねる氣にもならず、いち早く夏の朝起の瀟い氣もちに囚はれた。となりが小學校になつてゐるので、オルガンに合せた兒童の唄が同じことを幾度も繰り返してはゐる。聞いてゐると幼稚な弱々しい氣もちになる。ひとりが唄ひ終ると何かの練習であらう、唄はない子供らがばちばち拍手をしてゐる。童女らがオルガンを取り圍んでゐる有樣が、坐つてゐるわたしの目の前にならび出してくる……沈んだ弱々しい氣もちと、清い可憐な心とになぐさめられてゐるやうな思ひである。最う何も用事はない。會ひたい友だちはあるが會ひにゆくのが大儀である。それよりかう思ひながらこつそりと黃昏の上野から田舍へ歸つてしまはう。少しくらゐ心殘りになるのはよい、そのくらゐが却つていい……。

或女の一日

電話の聲は意外にも織田からであつた。
「十時十分にそちらへ着くんだが出てくれるかどうか？」
「きつとまゐりますわ。お一人？」
「いや、れいのつれがあるんだ。一度會つて置いてくれるといいんだがね、何んにも言ひはしないよ。」
「でも、わたくしはそれだけは？……」
加代子はてつきり一緒だと思つた壺が當り、この前話のあつたことだし、これまでのいきさつを知られてゐる上に、二人ならべて逢ふのは辛かつた。
「結局一度は逢つてくれないと困るから、あつさりと逢つてくれ、平氣でゐてくれればいいぢやないか。」
「平氣ですて……」
「氣をらくに持つてゐたらいいんだ。」
「けれどもそりや矢張り分るわ、いくらしろうとだつて女ですものこまるわ。わたくしこんなことは初めなんですもの。」
加代子はいくら圖々しくても、何んにも知らない娘あがりの織田の妻の前に、いまさら出られた義理ではなかつた。しかし織田はあと一時間で着くとすれば出掛けない譯にもゆかなかつた。
「あとは僕が引受ける、わるいやうにしないよ。」
「ええ、そりや分つてゐますけれど……いま、何處にゐらつしやいますの。」
「粟津のわだやにゐるんだ、この間手紙を出した翌日から來てゐる。」
「ぢや、もうすぐお立ちね、ええと、いまかつきり八時半ですから。」
加代子は柱時計を見たが、主婦が髪をなほしながら、誰方、と尋ねた。織田さんですとこたへた。
「飯にしてすぐ出かけるんだ、ぢや、出てくれるね。」
「え、まゐります。けれどわたくし逢つても話のできないやうな方だとこまるわ。」
「そんなことはないよ、ぢあ、又。」
加代子は電話室を出ると長火鉢のそばへ來たが、まだ寢足りない頭腦が茫然りとひどく草臥れを感じた。此間一緒にな

るといふ話は聞かされてゐたが、それから一月も經たない内に話を纏めたものらしく、こんどの旅行も加代子にはほぼ見當がつくほど、自分にあはせる織田の心組みらしかつた。一緒になつたら他の女を引合せることの迂愚を言つたものの、織田は聞き入れなかつた。
「逢はないで考へさせて置くよりも、ちやんと逢はせて置いた方がこちらも氣がらくだし、女の方でも段々に得心するものだ。」
織田はさう言つて親戚同様に睦じくしてくれれば、どちらも波風立たずに暮らすことができるぢやないかと高を括つたが、加代子はそんな話は頭から可笑しかつた。
「まだあなたは子供ね、そんなことが永い間に破れないでそつとお互ひがしてゐられると思つてゐらつしやるの。」
「よく解り合つてゐたらいいぢやないか。僕はあれにはすつかりお前のことを話して置くつもりだよ、置してゐたらあとで困るがあけすけ話して置くことは、一番でいいことだと思つてゐるんだ。」
「そりや初めのうちは默つてゐらつしやるかも知れないが、月日が經つたら奥さんだつて默つてゐらつしやりはしませんよ。それよりか何處までもわたくしといふ女が表面にはゐないことにして、あなたは清い顔さへしてゐて下すつたら、一年持つものは二年持つわけだわ。無理に逢はせるなんて子供らしい初心よ。」
加代子は織田が自分を妻に引合せる底には、何となく無邪氣らしい見せびらかしをする人の善いところを知つたが、反對に織田らしい獨合點なところもあつた。お加代はそんな乳くさい遊び事は莫迦らしくもあつた。若し萬々折合ひよくなるとは思へなかつたが、さういふ望みもちらりと覗き見るのも惡い氣はしなかつた。
「けれどもおれは默つて逢ひ引めいたことをすることがいやなんだ。おれだつて獨身でゐた時分にお前のやうな友だちがゐたことも知らしたいやうな氣がするぢやないか。」
「友だちぢやないわ。あなたの考へてゐらつしやるほど女は單純にしてゐられないものよ、わけてこれから生涯を一緒にする男ですもの、その男にまつはつてゐる女ときちや憎んでも憎みきれないほどだわ。若しわたくしだつたら逢つてやらないわ。あたまからお斷りするわ。」
「そりやお前はくろうとだからさ。しろうとは却つてそんな場合に好意をもつものだよ。」
「いいえ、しろうとは猶更らむきになるものよ、わたくしだちだつたら男の心の中がほゞ見當がつくからいいやうなものの、しろうとの人は見當がつかなくて、ただ、かつと一本氣になつてしまふんですもの。おさへることも出來ないものよ、だからわたくし本當はそつとして置きたいの。その方がおれ

だけ罪をつくらないだけでも、いいことだか知れない。」

加代子は今度の話が出てから自分で身を引かうと言ひ出したが、織田はその事には觸れないで矢張り仲を續けようとした。一つにはやつと身のまはりの落着いた時分に織田と切れることは、元どほりの稼ぎに追はれるばかりだつたので、身勝手に捨身になるには年も食ひ込んでゐたからであつた。

織田も何か考へ當てたのか、その日は穏やかに、

「ぢや、そつとして置いてもいいよ、何もお前次第のことだからお前の都合のよいやうにするよ。」

と言つたが、しかし何時逢ふことがあるかも知れないから、それくらゐの腹は決めて置いてくれと仄めかして言つたりした。

「そりやおあひすりやわたくしより目上の方ですから、ちやんとしてご挨拶しますわ。」

加代子は綺麗にさう引受けたが、織田から女の生れや育ち學校關係のことなどを聞きながら、自分との隔たりの大きい女のやうに思はれ、その擧句、織田がどんなに言つても逢ふまいと獨りで心できめをしてゐたのだつたが、けふの突然の電話では斷りやうもなく、せかせかと胸急がしい思ひがしてならなかつた。

勝手でうす化粧をすまし、取水を庭先きへ棄てると北窓のある老梅のつぼみが玉をつづつてゐるのを眼に入れた。そとは晴れてゐたが肌寒い風は朝飯を入れない腹を吹きぬいて、電車に乘り合した人々の息が白く鮮やかにまだ寒げに見えた。

織田の話では遠縁の或る絹糸問屋の二番娘と聞いてゐたが、その父親も紅巷に出入りしてゐたりして、織田はその娘もさういふ空氣は知つてゐる筈だと言つたが、いまさらそんな事も氣安めにならなかつた。

「あなたも奥さんがゐらつしつちや自然わたくしに遠くなるわけね、わたくしそれも當り前なことだと思つてゐるんですけれど…」

加代子はさう心から言つて見たことがあつたが、織田は僕はさういふ人間に見えるかな、などと織田らしく辯解したが結婚後はあんな子供らしい織田でなくなることなどが、お加代には眼に歴々と見えてくるのだつた。そして此麼に朝早く出かけたことがないので、知り合ひの人に見咎められることが心がかりで、ショールで鼻のあたりまで覆うてゐたが、幸ひ停車場ゆきの人づれで知り合ひの乘客もゐなかつた。

大時計は十時に二十分前だつた。加代子はあちこち歩かないで掲示板の下に蹈んでゐたが、學生らしい男が來て掲示板に白墨で何か譯の分らぬ英語を書き殘して、加代子の顔をち

らりと見て構内を出て行つた。粟津のわだやへはお加代も織田と出遊びに行つたことのあつたが、廣い苔のある庭と潟近いかいつぶりの聲の聞える離れで、食べては寢て、起きては溫かい湯壺に入浴つたりしたが、いまは潟の見える浴室に織田が妻と入浴してゐるさままで思ひ描かれて、自分にもなく赧らむ氣もちになつて、人込みに誰かゞ見てゐないかと心窺かに恥かんだ。溫泉の湧き方の豐かなところだけに、潟水が增えると溝づたひに湯のながれが直ぐ浴室の前まで來て、しかも流しから浴室に冷たい潟水がさして來たりして驚いたことがあつた。

織田と二人ですることに飽いて寢そべつてゐると、秋のことで日あしが座敷一杯にさし込んで、溫泉どころらしく暖かく睡たい日がつづいたりした。それに鷄卵を溫泉の中へ入れて置くと、頃よいほどに茹つたりして味も甘美く樂しかつた。加代子はただ二年ばかりうかうかと織田と暮したが、かうして停車場に蹈んでゐる自分に不意に行手を塞ぐやうな事柄が湧いて來さうで 待つてよいのか惡いのか解らなかつた。いつそ一ト思ひに家へ歸つて機會を外してしまへば それでいつも何事も起らなくていいのぢやないかと、構内の窓から廣場の柳のこころもち青く染つてゐるのを見て、平常はまだ床の中にゐる筈の自分のことを思ひ遣つたりした。

汽車が着くと加代子は人込みの中に降り立つた織田の姿をすぐ見立てたが、織田の後にきりつとした痞ぎすの冴えた白粉氣のある顔を感じ、あの女だなと思うた。その感じは烈しい惑亂をもたらした。加代子はきふに慌立しくそはそはした氣分を感じたのだつた。

織田はすぐ眼の前に來たが、加代子は挨拶をしていいかも分らず、ひとりで泪ぼくなり睫毛がにじんで氣遲れが先立つた。それでも頭を下げた。

「大へん込んでしまつてね。」

加代子はまた眼の前に冴えた織田の妻を見た。

「はじめまして…」

あとに何か言はうとしたが思ひつかなかつた。

「お迎へくだすつておそれ入ります。」

織田の妻はさう言つて細面のひとのする笑ひ顔をうかべた。

織田の顔は硬張つて昂ぶつて見えたが、これも咄嗟の間にどう落着いていいか分らない風であつた。加代子は織田の妻の手から荷物を取らうとしたが、妻はきふに渡さうとしなかつた。

「わたくし、手が空いてゐるんですからどうぞ。」

「では、すみませんが…」

加代子は小さいトランクを持ち、くだものの籠を提げた。

「どこかで休まう、どこがいいか知ら？」

織田は先きに立つて俥を呼んだ。そして町外れにある山の方の旅館を兼ねてゐる料理屋へ走らせた。織田と妻君と、あとに加代子が乘つた。加代子は何か心に冴えたものを織田の妻君から感じた。冴えた感じはさびしさをも含んでゐた。加代子はこれからけふ一日どうして送るのか、自分がゐていいのか外して惡いのかさへ、考へやうがなかつた。唯、何か宙にゐるやうな思ひで腰の搖れる俥の上にゐた。

山の中腹の旗亭の庭さきに引いた筧の滴たりが、町の中央を越えて來た三人の眼にまだ春寒の音ではあつたが引き締つた粗い新鮮な感じをあたへた。織田は妻に洋杖(ステッキ)で筧を差して見せたが、妻は若やいだ聲音で、

「こちらはおしづかでございますわね。」

と、加代子と織田とを半々に顧みて言つたが、加代子は自分でも分らぬ上調子で何か返辭をした。いつか織田と來たときは夏で棚にはふさふさと葡萄が垂れ累つて、金ぶんぶんが涼みながら山頂の松林の中を歩いたこと、薄い月夜の中に二人の姿がいまも眼の前を掠めてゆくほど、記憶に鮮やかであつた。

座敷は離れの一段小高いところで、萩の刈株にまだ芽立ちはなかつたが、山ぎぼしの鋭いナイフのやうな芽が角ぐんで見え、ほかほかした朝日があたつてゐた。新婚早々東京へ出てゐたので、織田の妻の日傘は短かい柄と派手な形の、田舍ではまだ眼新しいものだつた。加代子は妙なたぢろ氣を覺えた。

加代子はぐずぐず立つてゐたが、「どうぞお上りくださいまし。」と妻君がいふので、何となく恐る恐る坐つたが、きまりの惡さは一倍した。

「湯は立つてゐますか。」

織田は女中に尋ねたが、いま涌かしてゐる最中で、もう暫らくおまちくださいと言つて、この三人づれの何となく不思議な客を見つめ返した。

「お湯もあるんでございますか。」

「すぐ涌くさうだよ。」

「まあ、ほんとに佳いところでございますのね。」

加代子は何か言はなければならぬやうな氣もちで、

「夏は涼しくてほんとにようございますの。風がありますので……」

「よく入らつしやいまして？　こちらへは？」

何氣なく織田の妻の言ふのに、加代子はすこしあからんで

「いいえ、先年の夏まゐつたばかりです。」

と言つた。

織田はきふに、「この人は俊子といふんだよ。」と言つて、「こちらは加代子といふんだ。」と紹介した。

二人は默つてあいさつを交した。

「どうぞよろしく……」と、加代子が言つた。

「わたくしこそ？」

と、織田の妻がこたへた。

女中が來て湯を知らせたが、織田は先きに入りに出かけ、二人は差し對ひになつた。松の植込みを透いた湯殿で湯をつかふ音がきこえた。加代子は何を言つていいか解らず息づまる氣もちが深まり、頭腦のうしろが輕くなつてゆく氣うとさを感じた。

「こちらは初めてでございまして？」と言つた。

「ええ、もう京都の外は一歩も出たことがございませんの。」

加代子は自分とは二つくらゐ歳下で、きめの細かい處女(おとめ)々々してゐるところが物珍らしかつた。あまりきやしや過ぎてゐたが、ふと織田はこんな女のひとが好きだつたのかと、いま初めて織田の好みを見ぬいたやうな氣がした。

「それから申遲れましたが織田がよくお世話になりましたさうで、お逢ひしたらよくおれいを言つてくれと言はれてゐましたの。つい御あいさつも申しませんで――。」

「いいえ、わたくしこそ――。」

加代子はあまり眞摯に出られたので赧くなつた。

「ずつと以前からお知り合ひでございまして？　失禮なことをおたづねいたすやうでございますけれど。」

「いえ、つい昨年からでございます。わたくしこそ奥さまにいろいろおれいを申し上げなければなりません。」

加代子は眞正面に切れ出され、それが腹に一物もないスラリとした素直な言葉だつたので、思はず赧くなつた。織田が自分をどういふふうに紹介してあるかが不安であつた。斯う開いたばかりの、まだ何も解らない時分らしかつた。加代子は自分にもこんな初々しい氣のあつた時分があつたらうかと思うたが、何故か自分なぞは元から氣性に粗いところが雜つてゐたやうな氣がしてならなかつた。それだのに澄し返つてゐる自分を隙見したら、どんなに可笑しからうと考へて見たが、一方心の隅ではボロを出さないやうな緊つたきりつとしたた氣もちにもなつた。加代子はしばらく默つたあとで、ふと、

「こちらには暫らくゐらつしやいまして？」

「まだ分りませんけれど織田は二三日ゐるやうに申してゐますの。それに宿もここにするかどうか分りません。」

「此處になさいまし、ほんとにおしづかでよございます。」

俊子は枯れ芒に立つかげろふのちらちらする彼方に、白く撥いてゐる梅を見やりながら、もう梅もそろそろですねと言つて、

「わたくしも此麼ところなら一週間くらゐゐたうございますわ。それにあなたも時々ゐらしつていただけばさびしいこと

もございません……」
「わたくしまゐりますわ、お邪魔ぢやございませんでしたら。」
「いえ、おまちしてゐますわ。」
さう言つて織田の妻は赤くなつた。加代子は自分の言ひ方がよくなかつたことに氣づいた。織田の妻の顎から胸へかけて優しい白い、しかし少ない可憐な肉つきが加代子の眼を刺戟した。こんな子供らしいひとが人の妻になるのかと思ふと自分なぞ心にも身にも年を取つてゐることを證據立てられてゐるやうでならなかつた。
湯殿の方で織田の呼ぶ聲がして、加代子はいそいもの手で立たうとしたが、氣がついて腰を下ろした。そして、
「おタオルでございませう。」
と、我知らず言つた。
織田の妻はトランクから淺い藍縞のタオルを抱へると、ではごめんなさいましと、あわてて湯殿の方へ行つた。加代子はあとを見送つてゐたが、二人は永い間出て來なかつた。加代子はしばらくして立つて見ては、にわかに坐つたりして見た。佗びしい篭の音がしたたつて聞えた。
織田が出てくるあとに俊子は乾いたタオルを濕らせて、それを抱へて出て來た。織田はぶつきら棒に言つた。
「君、はひらないかね。」
加代子は織田の顏をちらりと見て、すぐ俊子に對つて言つた。
「わたくし、おあとでいただきますからあなたからどうぞ。」
「いいえ、わたくしこそあとでようございますわ。」
と、俊子は聞かなかつた。加代子は不圖思ひついて、
「ではご一緒にまゐりませう。」
「それがいい。」
織田が賛成した。新しく木の香のする湯殿から、向ひの山の松林が湯にひたりながら蒼黑く固まつて眺められた。加代子は水の栓をひねり熱い湯をうめた。
「この水は谷から引いてあるんださうです。」
加代子は水の落ち口に手を遣りながら、さり氣なく濡れて白い俊子のからだに鋭どく視線をはしらせた。
「ではいい水でございませうね。」
「たいさう柔らかいんです。すぐに飲めさうでございますわ。」
「まあ、きれいですね。」
俊子も落ち口に手をあてて水をなぶつた。加代子は細脆いがこつちりと緊つた脂肪の白い皮づきを俊子に見たが、自分のからだが湯に赤黑く染つてゆくのが汚なく、加代子は引身を感じ湯の中にからだを沈めた。
二人が湯から出ると、市街の方で午砲が鳴り、屋根瓦がき

らきら日のあたる水のように光つて見えた。三人はお膳を圍んだが織田の妻はほんの一口しか食べなかつた。加代子も腹はすいてゐたが箸を置いてお茶をのんだ。その間ぢう誰も口を利くものがなく、今朝から壓し詰められた氣もちが凝り固まつたやうな息苦しさであつた。女中が來て手のつけてない膳の上のものを見て、おあがりになりましてと問ねてから下げて行つた。
俊子は緣へ出て市街の方ばかり見てゐたが、それに氣を奪られてゐる織田は菓子や果物などを命じたが、俊子は手にふれようとしなかつた。何となく今朝とは變つた心持ちが鋭く加代子を抉つて來たが、織田もそれを感じそはそはしてゐた。いい時分を見計つて加代子は歸らうとしたが、織田の妻は念入りに押し止め、織田もゐてくれるように言ひ、居辛いは中に加代子は又た茫遣りと坐つてゐた。やはりけふは來るのではなかつたと、自分にもなくどぢを踏んだものだと後悔された。停車場ですぐ別れてしまつてゐたら此麼氣もちにならなくとも濟んだのだと思うた。
夕方近くになり町の方へ散歩に出掛けることになり、それで加代子は息を吹き返した思ひがした。三人が山腹の旅館から坂道を下りかけると、この町をつらぬく磧の白い川すぢにある松並木の頭に、やつと夕日が掠めてゐるくらゐの薄暮れであつた。松並木は古い幾抱へもある樹立からなり、瀨のなかれがすぐ石垣の際へまで簾ながしに砥がれてゐた。加代子は自然に織田夫婦を前の方に見て、自分だけあとに尾いて歩いてゐたが、見る人の眼にどう映るだらうと心さもしかつた。それに織田も俊子もゆつくり歩いてゆくので、加代子も二三間あとからその歩みにならうてゐるだけ、なほ通りの人の眼に立つた。織田は時々うしろを向いて離れて歩いてゐる加代子を呼んだが、ふしぎに小娘のやうに僻んだ氣もちになり、わざと寛くりとスネて歩いたりした。俊子も二三度は呼んだがあきらめて最う振りかへらうともしなかつた。
料理店の多いこの川添ひの土手の上へ不意に加代子の眼にうつつた男があつた。料理屋から出て來たのであつたが、加代子はすぐその男に挨拶をした。
「いまごろ變なところを歩いてゐるね。」
加代子は此の村本がまたどうして今頃ここを散歩してゐるかが、不思議だつた。
「あなたこそ何をしてゐらつしやいますの。」
「けふ會があつてね、まだ始まらないので歩いてゐるのさ。」
さう村本は小意氣な料理店を指差して見せ、前にゆくのがお伴侶なんだね、そして君だけあとでゆくのは變に見える、いつか話した人はあれかいと言つたが、加代子はいい加減に笑つて見せた。昨日も一昨夜も會つてゐながら何時も素氣なくしてゐる此の村本が、けふは別人のやうな元氣さと實直さ

うな男に見えた。

「この通りはいいところね。」

加代子は石垣のへりへ出て、松並木の裏にあたるところに鳥渡しやがんで見た。どうせ織田に知られたつて闘ふものかと、ふいに氣の荒さが手傳つた。

「つれがあるなら惡いぜ、そんなに蹋み込んだりしてさ。」

加代子は立ちあがると何日になく村本の言葉に溫かさがこもつてゐるやうで、慌てて通りへ出て見ると、半町ほど先きの公設市場の前に織田夫妻がこちら向きになり、加代子を待つてゐるらしく見えた。

「またそのうちにね。」

「さよなら。」

加代子は織田夫妻に近づいたが、別に何も言はなかつた。やはりあとに尾いてのろのろと歩いた。大通りで土產物を整へたり菓子の包を註文したりしたが、そのたびに加代子はそれらの包を提げなければならなかつた。織田の妻もはじめは固く辭退してゐたが、しまひに慣れて何とも言はなかつた。加代子は重い包を持ち換へるごとに夜氣の冷たさに指さきが痺れるのを知つた。

三人は明るい西洋料理店で夕食をしたためたが、俊子はどういふものか一皿くらゐ食べると、あとは紅茶を命じた。加代子は織田まで變に默り込んでゐるので、食事もそこそこに濟した。給仕女は加代子と俊子とを交る交る見較べながら、こちらの氣のつかないやうに喋り合つてゐる樣子が、加代子になほ落着かない粗い氣もちを誘うた。

俊子が小用に立つたあとで、加代子は紅茶を喫むようにして故意とかがみ込んで織田にささやいた。

「こまるわ、わたくし……」

織田も誰かを憚るやうな聲音で、おさへるやうに、がまんしてくれ、と言つた。

「ほんとにかへして下さいな。」

加代子は口前でうまく自分の都合のよいやうに言つても、いざとなると存外氣の弱い織田をもどかしがつた。けふ一日の織田の樣子を見ては何となく腰の弱さや、まだまだ女一人を背負うて氣もちを晦ますことのできないことなどを、微細なところまで嗅ぎつけてがらではないと思うた。快活な時があつても直ぐ悄氣る氣のたるみや、わざとらしい付元氣も頼無く淺はかであつた。

「先刻並木の通りで會つたのは誰れ？」

織田は眞面目な顏貌で尋ねた。加代子はやはりこの人には氣がついてゐたんだと思ふと可笑しかつた。

「わたくしにだつていい人があるわ。」

加代子はけさから初めて樂な口を利いて、くすつと笑つて見た。すぐ眼の前の鏡に映つた見馴れた自分の顏容ではあり

ながら、夜氣に觸れて頰照つたためか冴えた色艶が美しく映つて見えた。加代子はもう一遍皓い齒なみをあらはして織田に笑つて見せた。

織田はふしぎに默つて睨んで見せ、そして何も隔れて歩かなくともいいぢやないか、離れてぶらぶら歩いてゐるから人が眼をつけるんだと言つた。

「でもお二人の仲へ割つて入るわけにゆかないんですもの。」

加代子が斯う言つたときに化粧室のドアがあいて、新らしい顏つきになつた俊子が紙白粉の匂ひをさせながら椅子に腰をおろした。女給が茶碗を引いて行き、織田は勘定をすましてみんなはそとへ出た。しぜん加代子は買物の包を抱へて出なければならなかつた。織田も俊子も依然ゆるい歩調であちこちの裝飾店（ショウヰンド）を覗き見したりした。加代子はそのたびに野暮な買物を興もなく眺めてゐたが、三人がもとの並木の通りへ出ると、川水の音ばかりで暗い松並木のかげに人通りもすくなかつた。三人が中程まで歩いてゆくと、とある料理屋から出て來た一群れの客の中に、若しやと思つたが直ぐ先刻の歸りらしい村本の姿を見出したので、加代子はわざと叮嚀にあいさつをした。村本はいま歸へるのかと氣取らずに聲をかけて行つたが、さういふ通りすがりの仄かな心もちも、加代子には何か氣安い念ひがした。

村本と或る朝、一緒に食事をしたことがあつたが、程近い溫泉の朝でまだ日が町の遠くの屋根の上にあつた。溫泉から上つて膳についたときでも、村本はきちんと膝を折つて行儀よく食べた。そのとき障子を一枚明けてあつたので、山蜂の大きな金と黑との縞のある奴が立ち込んで、いままで靜かだつた部屋に羽音の唸りを立てた。村本は新聞をくるくると棒切れのやうに卷いて、それで山蜂を叩き落してしまつた。いままで會つて見たことのない怖ろしい大蜂であつた。

「こいつ、なかなか强いね。」

火箸で胴をおさへた村本は、羽鳴りの烈しい山蜂の火箸をコヂ起すちからを感じ、疊の目の上にがりがり搔きむしる細いねばり强い足を押へた。

「どうなさるの。」

「僕だから放すかな、それとも一ト思ひに遣るか。」

「お放しなさいな。」

加代子は立つて廊下の硝子戸を開け、村本が火箸の先きにはさむ山蜂を見てゐたが、庭石の上にばたりと落ちて、羽根を起すちからがないのか立てなかつた。可哀さうに立てないわと加代子は村本を叱るやうな氣もちで言つて見たが、

「いまに立つよ。」

村本はさう言つて又膳についた。

加代子は村本といふ男をその朝もどういふ性分の男か分りかねてゐた。その朝ばかりでなく何か得體が判らなかつた。

別に冗談を言ふでもなくまた巫山戯ることもなかつた。何か知らまじまじと眺めてゐる眼付だけを感じる男だつた。會つてゐると詰らないが別れてゐると思ひ出すやうな味をもつて代子は時々變りだねのある自分の暮しに何時の間にか村本も普通の男にしてしまふと、まるで變つたところのない男であつた。

坂を上り切ると旅館だつたが、その部屋へかへつても別に何も言ふことが無く、三人は疲れて默つて音をたてながら、出流れの冷たい茶を啜り飲んだ。宵淺い山腹に松の鳴るひゞきが谷を越え、この部屋の障子にこもつて聽えた。加代子は歸へらうと言ひ出したが織田は別に止めようともしないで、

「俥を呼ばう。」

と言つた。

「いえ、歩いた方が勝手ですから。」

と、加代子は織田の妻とあいさつを交した。織田は坂下まで送らうと言つて一緒に出て來た。加代子は坂道を默つて下りた。織田は寒くないかとたづねたが、加代子はただ頭をふつただけだつた。

「けふは色々お前にいやな思ひをさせたが、もう少し何時もるやうに仕向けるのは、角があつていけないよ、途中だつてのやうに平氣でゐてくれればいいのに、僕ら二人きりにさせなるべく隔れてあるくなんてお前もあまり苦勞をしなさすぎるぢやないか。」

加代子は意外な織田の言草に心がいら立つた。

「でもわたくしとしてはあするより外仕方がないんですものの。わたくしが出しやばつては奥さまの立場がなくなるぢやございませんか。わたくしは初めから此麼ふうになることは判つてゐましたの。それだのにあなたが無理に呼び出したりなぞなさるんですもの。わたくしが小言をきく筈はありませんわ。」

「けれどもお前は妙に心に僻みをもつてゐることは分るよ。」

「わたくし僻みなんてもつてゐませんわ。それだからお買物だつてみんなわたくしが携つてあげたぢやありませんか。」

加代子は女二人まで連れて歩いてゐる織田の心根を小憎らしく感じ、それを口へ出して言はうとしたが止めた。歸りぎはに織田の妻が明らかな厭な表情を見せたことが思ひ出された。

「おれが二人の中にゐて絶えず氣をつかつてゐたのは、お前には分らなかつたかね、お前にならその氣もちは判りさうなものに思へるがね。」

「そりや無理よ、女が二人もゐるんですもの、兩方で考へることが表べへ出さなくても、心の内でカチ合ふことくらゐは當り前ですわ。あなたひとりでいい子にならうたつてそりや

無理ですわ。」

加代子は苛立つてさう言つたが、織田はそれにはふれないで、それでお前はこれから逢つてはやらないのかねと言つた。

「逢ふも逢はないのつてもうわたくし今日でこりこりよ、奥さんだつてわたくしといふ女がしげしげ訪ねて行つたら、いい顔をしようとしたつて義理にもできないぢやありません か。わたくしの方で遠慮するのがあたり前だわ。あなたが何とおつしやつたつて女にも考へがあるものよ、だからわたくしといふものが奥さんの手前ないものにして、清い顔をしてゐてくださいと此間もおねがひしたぢやございませんか。それをあなたはまるで子供のやうにたうとう逢はせてしまふんですもの。」

「しかしおれは悪意があつてした譯ぢやないんだよ、兩方がうまく行つたらと思つてしたことなんだ。」

加代子はじれじれして織田が齒がゆくてならなかつた。

「あなたはまだ子供よ、カフエへ行つたときだつて奥さんは何も召し上らなかつたぢやありませんか、あの時だつてわたくしどんなにつらい思ひがしたか分らない……。」

加代子は坂の下へくると、「もういいから歸つて頂戴。」と言つて織田の歩調をさへぎるやうにした。加代子はぽつねんと坐つてゐる織田の妻を眼に入れた。

「もうすこし送るよ。」

「もう澤山。」

加代子はさきに歩いて橋を渡り出した。織田は立つたままでゐたが、癪て思ひ返して坂道を上つて行つたらしく既う姿もなかつた。加代子は肌寒い河風に吹きさらされながら、何となく織田との縁も切れ目に近づいたやうな氣がした。今朝出かける前までそんな氣はしなかつたが、いまは疑ひもないどんづまりへ來てゐることに氣がついて、溜息をついた。足を洗はうとしながら何時も半分まで進んで不意の出來事のために、もとの洗ひざらしの身になるのだつた。それさへ又明日はどうにかなるだらうと頼めないことを頼みにするより外によい考へも浮ばなかつた。

大通りへ出ると今から家へ歸へる氣にもならず、また行くところも思ひ當らなかつたので、知らず識らず村本の旅館のある町裏へ出たが、不意にいま訪ねて行つたら驚くだらうと思つた。女中の眼に見咎られながら村本の部屋へ這入ると、村本は机の上で何かを讀んでゐたが吃驚りして此方を向いた。別に不意の訪問を喜んだ樣子もなく、れいの、まじまじと見戍るばかりであつた。

「けふの君のつれには以前電車の中でよく會つたことがあるが、このごろになつて少しも見かけないね、それにあの女はあの男の妻君かね。」

「奥さんに見えて？——」

「さうとしか見えないね、妙に素人らしいところもあるが、京都あたりの女らしいやうだね。」
「よく當つたわ、京都にうまれたんですよ。それにあの人も京都へ行つてしまつたんですよ。」
「道理で會はないと思つた。しかし妻君をつれてまで君を呼び出すなんて、よほどの間抜けでなければ氣の善い男だね、それにのろのろと尾いて廻る君も君だが、女も女さ。」
村本は吐き出すやうに言つて一體あの男は何をしてゐるんだとも尋ねた。加代子は村本がぐんぐん遣つつけるので、胸のうちが爽ばりと蟲醋が透く思ひがした。
「あの奥さんはきれいに見えて?」
と、加代子はすこし甘えて言つた。
「さうだね、どこか品があつていいね、しかしあの男には過ぎものだよ。」
「わたくしにくらべて品があるつておつしやるの。」
「それはどちらでもいいがね。」
村本は微笑つたが加代子は妙にその品にこだはつた。この人の眼にも左う見えてゐたのなら、あちこちの商店を歩いてゐる内に感じた人々の眼つかひが、いまやつと計るようで心悲しかつた。別に他の女だちのやうな猾いことをしないで、人に言はれるままに暮して來た自分が、理由もなく品を落してゐるのかと思ふと、村本の宿まで訪ねたことが口惜しいやうな氣がした。それに冷たい歸れがしのやうな村本の口振りが犇々と身にしみた。いつか溫泉で蜂をおさへた村本の苛酷に近い手つきまでが、或ひは本統のこの男の本性かも知れないと思つた。
「あなたはあゝいふ女のひとが好きになれるの。」
「よく見なかつたが餘りひ弱すぎるやうだね、しかしあの女の弱々しいのは唯その標緻がさう見せかけるだけで、實は小肥りのいい女だよ。」
素氣もなく左う言つたが、「それにしても今まで君はあの連中と一しよにゐたのか、ゐたのなら悧巧ぢやないな。」
「わたくしとしちやどうしてもこれまでの關係上、ゐなければならなかつたの。さうでなかつたら誰が尾いて歩いて、仲のよいところを見せびらかされるもんですか?」
加代子は何か急に悲しくなつて左う言つたが、村本はふふと笑つて、「とにかくあの男にしろ皆馬鹿ぞろひだよ。君があやうにおれを睨んで行つた。が僕は可笑しくなつて笑つて遣つたよ。」と言つた。
「歸へりのときでせう。」
「さうさ、包なんか持たされていい面の皮さ。」
「たんと仰有い。」
加代子はびしびしした村本の言葉に今朝からの草臥れた氣

もちを、もう一度挫がれてがつかりしてしまつた。さうでなかつたら村本に話を聞いてもらふ心算だつたが、そんな氣の些もない村本を見損つてゐたのも、業腹であつた。いつも微笑をふくんでゐる顏付もけふは何故か皮肉めいて、唇にとがりが感じられた。
「君が女ならけふの遠出は斷るのが人情だよ、それだのに從いておるいて見ともよくない眞似をするなんて、あんな男をそんなに大切にしなくともいいよ。」
と、まるで加代子自身が金で縛られてゐることまで、遣つつけられさうで冷々してならなかつた。加代子は何か慍つてゐるやうな村本の表情が油繪のやうに動かないでゐるのを氣味わるく見詰め乍ら、この人はとても慘忍なことをする人間に思はれた。そして早く歸らうと思うた。
「わたくし最うかへるわ。」
加代子は膝を立てて見たが、村本は別に止めようともしなかつた。
「君はどうして僕の宿へたづねて來る氣になつたのかね。」
半ば冷評かすやうに央ば心から聞いてゐるやうな口調だつた。
「寄り道しただけよ、意味なんてないわ。」
加代子は鋭く左う言ひ棄てて、下冷えのした餘寒の電車道へ出たが、襟もとにぞくぞくした寒さを感じ、ぐつたりと疲れてしまつてゐた。村本風情の宿をたづねたことも心咎めがされた。
その翌日は山腹の旅館から電話でもかかると、呼鈴が鳴るごとに心慕えながら耳を澄して心待ちにしてゐたが、夜になつても電話はかかつて來なかつた。そと座敷をすまして歸つて來て電話のことを尋ねても、やはりかかつてゐなかつた。その翌日もかからなかつたが、何度も自分で電話室の前へ行き、番號帳の頁まで繰つて見て、氣づいて、室を出るのだつた。そして何も手がつかないで搔卷をかぶつて寢て見たりしたが、夕刻から齒が疼き出して氣もちが苛立ち、齒醫者へ出かけて幾らかさつぱりして歸つてくると、れいの旅館から電話がかかり今夜すぐに遊びに來てくれと言ふのだつたが、加代子はわざと出かけなかつた。靜かな夜は眞黑な松の音ばかりの山腹に、織田が自分と一緒に夜を送つたやうな曾つてのことがらを繰り返してゐるのかと思ふと、行つてやるものかと淺猿しい貪婪な男心を憤つて見た。そして差しづめ仕送りの途切れた後始末や何か考へると、すつかり沈み込んで了つた。
腹のあるおかみも、そりや此方から出かけた方が無事でよくないかと當らず觸らずに言つて呉れたが、さう言はれるほど意地强く出かける氣にならなかつた。三十分ほどして最う一度電話のかかつて來てた時にも、加代子は自分で出ないで

他出を口實に斷らしてしまつたあとで、氣短かに斷つたことを悔いるやうな氣もちになつた。夜はおちおち眠れないで明けて、顏を洗ひに下りると昨日の梅が霰のやうにはじいて空の色も蒼みがかつて見えたが、朝の身じまひをする氣にならずにゐた。

遲い朝飯の茶を喫んでゐるところへちりちりと電話の鈴が神經にひびいて鳴つたが、加代子は立たないで女中を出した。そして息ぐるしい思ひで聞耳を立ててゐたが、すぐ自分のところへかかつて來たことが分つた。

「ゐないことにして頂戴。」

と言つたが、でもゐらつしやると言つてしまつたんですものと女中は言つた。加代子はぶりぶりし乍らも、胸をどきつかせ、受話器を握つた。織田からだつた。

「わたくしけふは約束があるんですもの。」

加代子はいきなり斷つたが織田は笑ひごゑで言つた。

「けふは晴れて山はいいんだから來たらどうだい。」

「山はよくても行きたくないんです。あなたの方から入らつしやればいいのに。」

「だつてそんな譯にゆかないよ昨日も一日待つてゐたんだ。あれもお前のくるのを待つてゐるんだ。坂下へ車が通るごとに見に出てゐたんだよ。」

「うそおつしやい。」

「とにかく今からすぐ出かけることにしてくれ、待つてゐるから。」

さう言つて此方の返辭もきかないで、電話を切つてしまつた。加代子は電話室を出ると不思議に心が柔らかく弛んで、障子外の冴々した春らしい日ざしを窺うた。

「出かけた方がいいよ、何もごたごたが起きてゐるわけぢやなし、世間によくあることが起きてゐるくらゐだよ。」

おかみはただ左う言つて加代子を押し出さうとする下心が見えすいて腹立たしかつた。着換へをして二日ぶりで明るいそとへ出て見ると、ほかほかした日ざしの中に縞のやうなあからみを感じた。電車の中で親子づれの晝門附の汚ない女が乘り合してゐるのを見ると、加代子は織田のところに行くの身のことを考へるからに過ぎないと何時ものちよつとした淺は織田に氣があるのか知らと思ふと腹立しくなり、やはり一猿しさを感じたが、ふと門附が下りたのであわてて乘換への切符を切らせた。

山の上は一層すがすがしく晴れ渡つて、頂のお宮に赤い旗がひらめき祭のあることを思はせた。坂の中途へのぼると、もう織田夫妻が出てゐて、手をふつてゐるのが見えた。加代子も手をふつて答へたが、すぐ憂欝になつてしまひ、けふも一日、興もない無駄ごとに遊びつかれるのかと、息をついて坂みちを上つて行つた。

「ちやうど今ごろ着く時分だと思つてゐたんだよ。」

織田は機嫌よく左う言つた。加代子はくるしく息切れがして胸を敲いた。

「歩いてゐらつしやいまして？」

「ええ、息切れがして？」

加代子は一昨日よりも織田の妻の女振りがよくなつてゐるやうな、つやつやしさを眼に入れた。そして何處かマセたところが際立つて見えた。

「けふはお祭らしいんだよ、曉け方から鐘が鳴つてずゐぶん早起きしてしまつた。」

織田は頂の方の赤い旗を指さして、あとでみんなで行つてもよいと言つた。部屋へ這入るとトランクや鞄がすつかり片づいて、石鹸箱の石鹸まで日のあたる縁側へ出して乾かしてあつた。加代子はそれを見ると急に胸を小突かれるやうな氣がした。鐵瓶の湯氣が靜かに上つてゐた。

「けふお發ちになりますの。」

加代子は自分ながら筋のあるやうな聲音に變つたことに氣づいた。

「午後の二時でかへらうと思ふんだよ。あちらから電報も來てゐるし…」

織田は白ばくれてゐるやうな調子で、何んでもないことのやうに澄し返つて言つたが、加代子は唇を嚙むやうな烈しい怒りを感じた。それでも我慢して俊子に對つて言つた。

「こちらはお氣に入りまして？」

「ええ、もうわたくし何時までもゐたいと思つてゐるんでございますけれど、急に用事ができたりしたものですから。」

何も知らない振りをしても女は女の心もち、それで對つてゐることが加代子にはずきずき感じられた。織田にしても自分が發ちぎはに呼びよせるなどといふ仕打ちは、あまり人をないがしろに仕過ぎると加代子は口惜しく心肉を打ち震へるやうな氣がした。

「君もそのうち京都へ一度來るといい。」

織田は澄してさう言つたが、すつかり妻と心を合してゐるやうな言分だつた。加代子は氣も弱くすぐ返辭ができなかつた。

「わたくしそんな遠くへ行くよりかこちらにゐてのうのうしてゐた方が氣輕でようございますわ。」

加代子は織田の顏を見流し、よそよそしくさういふと、織田との關係もけふが切れ目であることを、一昨日よりも瞭然と慘酷にこころに感じた。自分がいつもうまうまとついロぐるまに乘せられてゐることが判り、憎しみに濁つて楯づくやうな氣もちになつた。

「たまに田舍の足をぬくのもいいものだよ。」

織田はさう言つたが、「わたくし田舍でくらす方が氣がらく

でいいんです。」

加代子はまともに織田の顔をみつめながら、口惜しさで太股の肉がぴりぴり震へることを感じた。

忘春述懐

或る日わたしは裏町を歩きながら町角をまがらうとするときに、一人の老人が四五間さきから歩いてくるのを見た。白い毛糸の防寒帽をかぶり手に杖を曳いてゐる。わたしはその人が通りすぎるときにあやうく、

「あゝ、もし……。」

と左う口にまで出して呼ばうとした。しかし老人はそんなことは少しも知らないで、乾いた故郷によくある土の塀に添うてとぼとぼと歩いて行くのである。塀ぎしには四月といふのに漸と梅が虻のやうなうすい花びらを撥きかけてゐるばかりだ。――わたしの掠れた聲でそのあゝ、もし……と呼ばうとしたころは或ひはいくらか感傷的であつたかも知れぬ。あるひは普通の聲であつたかも知れないが、ともあれわたしはその人のあまりに老い込んだのに、平靜であつたわたしの心がやや少し搖れたと言つていいのである。わたしが半年もこちらにゐる間にいろいろな人に出逢つたが、むかし四十五六の人はたいがい達者で、そしてわたしに會つてもみんな忘れてしまつてゐるらしかつた。かれらは六十七八くらゐになり奥深いむかしの家に住んでゐるのである。――わたしは再たふりかへつてその老人が白い坂の上を登つてゆくのを眺めたあまりに明るい春晝の中にも拘らず老人のあゆみは途昏れて歩いてゐるやうにのろのろとしてゐる。

「あゝ、もし……。」

わたしの心はすなほにもう一度呼びかけたいくらゐに、その姿を佇ちながら見送つてゐたのである。そしてゐる間にわたしはわたしの傳記の中に自ら恥ぢてゐた小僧のとしごろが心に浮んでゐた。傳記といふものを書くときにさへわたしは名譽がほしかつた。まつたく見るかげもない人物にさへ名譽がいるものである。わたしはその名譽を重んじるためにわたしの傳記の中から、かなしい小僧だつたわたしをそつくり表面からぬき取つて知らん顔をしてゐたかつた。それになかば成效してゐるやうな形になつてゐたが、このごろわたしは名譽といふものは他人が勝手につけたものであるために、それを奪つてゆくものも他人であることを知り、そんなものの果敢なさが次第わたしをさとらせてくれた。あいつを一つはな

して見よう。たつたわたし一つの名譽のためにと、そんな氣がいま道ばたに佇つてゐるわたしに考へ浮んだのである。その心はやはりあんな老人でむかしのわたしを知つてゐる心に向つて、

「あゝ、もし……。」

と呼びかける聲音に外ならない——。

かれは一種のへんな人物であると言つてもよい。何かのまぎれにわたしの手をとつて、手のひらを見てからふんと一つ鼻さきで言つてから、

「おまへは非常に惡黨になるかも知れない。どうもわたしには左う見える。用心せんといかん。」

かれは裁判所書記の制服を上からかむり、黑い垂れのあるかんむりを冠つてから、すぐ民事法廷へ判事と一しよに硯箱をもつて出て行つた。わたしにはその言葉が氣になり一たいどういふ惡黨になるのだらうと思つた。四谷書記のさういふいかめしい法服姿が廊下に見えるごとに、心でその言葉をくり返して考へて見た。たんに手のすぢで人間の一生のことがわかるものかと思つてみたが半分は信じないとわるい氣がしたといふのは、四谷書記はさういふ手相を見ることにくわしかつたからである。

四谷書記とわたしは二つしかないはばかりで、ひよつこり小便をしながら、おたがひに四角な窓さきから瓦屋根にうつる蒼ぞらを見てゐた。わたしはふと口をすべらして尋ねた。

「あくたうといふのはどう言ふんです。」

四谷書記はみんなまで訊かずに、「わるくなれば酷く惡くなるし、よければうんとよくなるんだよ。」と、でたらめらしく言ひ、手も洗はずに出て行つた。わたしの心はなほ半ば不安であつた。が、でたらめであることはわたしに明瞭と判つてゐた。——四谷書記は當時の所長がつれて來た男であるために、それゆゑに羽振りがよかつた。何となく同役からもすこしづつ敬遠されてゐたが、わたしにはその事がかれを輕く考へさせたことがあつた。

わたしは半紙を持ちながら閑暇な畫下りには、すこしくらゐ書ける人に畫をかいてもらふ癖があつた。たのんで見ると大概の人はうるさいと小言はいふが、きつと何か描いてくれた。四谷書記はきまつて櫻の花をかき、幹を曲げて書いてから自分のらくがんをした。

「四谷書記かい、あれは櫻の花しかかけないんだよ。」

わたしはしまひにこんな風なことを言つた。さう言ひながらやはり幾枚もかいて貰つた。三四年すると四谷書記は辯護士試驗に及第して、上京した。

はじめて役所のゐろりに立つてゐるときに、同年輩の小僧

たちがじろじろと新參のわたしを覗き込むごとに、かれらを何か憐れむやうな氣がした。自分もそれの仲間に投じなければならないものか、さういふ氣がしたのはいまでも不思議だつた。娼賣人もこんな氣がするものではなからうか？——わたしの眼の前に湯のたぎつた大釜があり、それから土瓶に湯をくみ込む小僧たちが、あまりに小さいために濛々たる湯氣の中からやつと顏が見えるくらゐである。わたしはじごくごくらくの繪を思ひ出しながら、早く辭令が下りぬかとそればかり氣になつた。

「一たん拜命したらしくじりのないようにせんければいかん。どんな物品でもみんなお上のものだから。」

天井のがらんとした室に七八人の人がゐる。わたしの眼の前の少しいすかの目をしたのがかういふと、雁び紙の辭令をうやうやしく手渡しした。そのとき拜命といふ言葉が分らなかつたが、そのままさまざまの室々を同じ年ころのものにつれられ、ぐるぐる廻り梯子段を下りたり上つたりしてゐる間に、わたしは人間の顏といふものの區別がつかぬほど、べこべこ人前におじぎをした。

「ちよいとお見せ。なるほど！」

かれらは一々辭令を手にとつて見て、それとわたしとの顏を見くらべ、一ととほりの合點ゆくとやつとおじぎをわたしの三の分一くらゐの程度でかへした。わたしは結局二度も三度も同じいことをやつてゐる間に、ふしぎにみんなの人が一やうにきせるでたばこを吸つてゐることに氣がついた。しまひに硯箱のわきに必らずわたしは汚れたきせるを見出すことによつて、當座のなぐさめとした。なかに胡蝶を吸つてゐる人があつたが、このごろ考へると胡蝶といふたばこはよほど古いたばこだなと思つた。あるひは胡蝶でないかも知れない。——ともかくわたしは生れてはじめてあれだけのおじぎを、あんな短かい時間のあひだにしたのだつた。

窓ぎはに小さいうしろのない椅子と机とがわたしにあたへられ、硯箱の中にたつた一本だけ穗の白い筆が這入つてゐた。そのあたらしい白い筆がよごれた硯箱の中に寂然として置かれてゐた。わたしはそれを手にとり又もとの位置にかへし、これから何をしたらいいのだらうと考へ、わたしを世話をしてくれた岩上といふ人をじろじろ見てゐたが、きふにその人がよけいな世話をしてくれたものだと、腹立しく高い鼻をながめた。

「君、君はひるめしを持つて來たかい。」

同じ年ごろの、まるで女のやうに美しい少年が、——池田とか言つた、のが、活潑に君とちからを入れて言つた。

「持つて來ん。」

わたしはきみわるく此の美しい少年を見かへした。かすりの、わたしより上等のきものを着てゐた。

「ぢや宿直室へ行つて食はう、僕も一しよに食はう、べんとうやへ言ひ附けてもいいだらう。」

わたしはうなづいて見せた。

宿直室に疊が敷かれてあつたのが、わづか半時間ああして椅子の上にゐたわたしに、たいへん嬉しくもあり珍らしくもあつた。心がへいぜいの自分にかへて來たやうな氣がした。

墨塗りの箱の中に三重になつたうつはものに、ごはんとおつゆらしいものと、酸い香の走る香のものがあつた。芹がべつとりと柔らかく箸の兩側に垂れさうなのを、かれは口さきへ持つて行つて、

「これは七錢だぜ。」と言つた。

かれは十分とたたないうちに食べ終つて、ぱたんと蓋をしてしまひ、よこになると、家はどこだいと言つた。さうか、とわたしの答へをきくと左う言ひ、小僧仲間は二階と下とは別々なことや、二階は上品だとか、べんたうは十錢ののもあると言つた。わたしはうんうんとこたへてゐるきりだつた。

鍵の音がしてスリッパを引く音が廊下でした。池田は硝子戸から素早く覗いて見て、あいつは？　と言つた。

「あいつは山瀨といふのだ。會計にゐるんだ。なかなかのやつだよ。」

あいつといふことばがわたしには異樣にきこえた、わたしに先刻辭令をわたした男だつた。

「こんなところに居るのもあいつに見つけられたら叱られるぜ。だがけふは君がゐるから關はない。」

こんな女のやうな顏をして口のわるい男だと思つた。かれは間もなくたばこをふかした。けむりの中から、君はどうかと言つた。のめないとこたへると、たばこなぞ飲むのはすぐ覺えられるものだと敎へた。

「君も喫みたまへ。」

さういふと立ち上つた。わしはあとに尾いた。何度も注意されて呼ばれてゐることに氣がついた。書類をあちこちゆきして持つて行つたりした。

窓ぎはから殘雪の山々と、小使室の入口とが見え、そこに犬がいつもねてゐた　犬といふものは氣樂なものだと窓の上から初めて氣がついたやうに思うた。きつちり四時近くなると今まで靜かだつた室が、きふに元氣さうな聲がしてみんな机の上のものを片づけ始めた。そして梯子段を下りて裏立關から歸つて行つた。わたしは人氣のない草臥れたやうな室の中で、さつきから窒めてゐたやうな呼吸を一息吐いて、默つてならんでゐる机をみるとやつと悲しいやうな氣がした。

寒さうな拘留處分を受ける人だちが被告人溜の兩側に腰をかけ、まんなかに卓子があつて加藤といふ巡査が坐つてゐた。そこへ拘引狀とか拘留狀をもつて行かされるわたしは、

或る日加藤からさんざん揄揶はれた末に、

「これを知つてゐるか。」と言つた。

加藤は右の手でふしぎな眞似をしてみせたが、わたしには分りかねた。が、ひよつとするとあれではないかと思ひ、羞かんであかくなつた。かはいさうにといまでもわたしはその時の、わたしの羞かんだことをあはれんでゐるのだ。――――にも拘はらず加藤はしつこく同じことをくり返した。どろぼうやばくちうちがわたしの顏をみて、たいくつざましに嗤つた。加藤はそのことを知つてゐるにかかはらずなほ面白さうに言つた。

「そんなこと知るものか？」

そんな口を叩いてもいい人物に、加藤といふ老巡査が見えたので、かまはずわたしはさう言つた。

「だんだん覺えるよ、敎へてやつてもいい。」

用事をすますとわたしは階段を上りしなに旣うそのことは忘れてゐたが、あれのことだとは氣がついてゐた。あくる日も加藤は同じことを言つた。あんなことはああいふ老人でも知つてゐるのかと、笑ふと眼尻にめがねの度のやうな皺のたくさん寄る老巡査の、さるのやうな顏をわたしはあのことを考へたりするときに思ひうかべた。――いまから見ればあのことも、ああいふ年ごろでは可哀想に神聖なことではないか。ひとりで、そしてつみのない悲しい氣もちで、あじけない陰地のあそびであるあのことをあんなに露骨に言ふなんぞは、おとなの恥かしさを知らない言分だ。不道德といふことばは加藤のやうな人物に向つていふべきではないか？――――はづかしがつてゐるわたしの魂をあいつはしばらくおもちやにした。あいつの前でわたしともあらうものがさんざんな目にあうたと言つてよい。わたしはあの手つきを思ひ出すと慄ひたくなるほどだ。――何かのものかげにゐるわたしに添うて加藤がよく笑つてゐるゆゑ、何度も悲しい目であたりを見まはさなければならなかつた。

ぎん猫、――――誰がさう言ひ始めたか分らないが、なりの高いこの小使はまだ若かつたが、いつもわたしの兩方の頰へ平手をあてて、そのまま空にぐいぐい引つ立てた。わたしの足は床をはなれて苦しかつたが、ぎん猫はやめようとしなかつた。かれはわたしが憎かつたのであらう。わたしを見たが最後かならずわたしの目になみだの出るほど空につるしあげておいて、

「ほい！」

と床におろして、顏のまるい奴だと輕蔑し切つたやうに言つた。わたしは兩手を兩方のこめがみにあて、しびれの切れた間を忍び泣きをして、急につるし上げられたときの身の輕さから、床におろされたときのどんときた感じの交錯になや

んで、うつ向き加減になつてゐたのだ。さういふときの小使室はひまで皆が使や掃除のあひまにゐたから、おもしろさうに手を叩いて笑つたりした。たまごの殻のやうな笑ひごゑがぱちぱちはぢと痛さに沈んでゐるわたしの耳にひびいた。あいつはひどい奴だ。が、わたしにはその男が、いぢめるのが宿命としか思へなかつた。當然受けるものを受けてゐるとしか思へないほどの、卑怯のどんづまりに氣の毒なわたしはふるへてゐた。が、次ぎの瞬間にわたしの頬にうかぶものは何であるか？　みにくい反抗らしい冷笑でなければ、子供に一番憎むべきふてぶてしい笑ひ顔だつた。さうすることに依つてわたしはそんなに參つてゐないと言ふことを示したかつたのだ。みんなの顔をずらりとならべてゐるなかで、

「ぎん猫――。」

とさう呼びすてなければならなかつた。さうしたらこのつぎに又遣られることは分つてゐたが、だが、ぎん猫よ、吊しあげることだけはよしてくれ。あれはこたへ過ぎるとわたしはお腹でつぶやいたことが何度あるかも知れない。――かげでならわたしはあの男のおもふ存分の憎しみを受けることは平氣だつたが、人前ではこまつた。若しかげであの男がえたいの分らない憎惡をわたしに持つてゐたのなら、わたしは默つてうけてゐたのである。――人間同士では故なく憎み合ふくらゐのことはあり得よう。單に容貌とか物の言ひ方などにもそれがあらう。ぎん猫の場合はわたしの指一本までにくにくしかつたに違ひない。わたしはそれが役所へ這入るなり感じたことだつた。ぎん猫は桑の木の枝の中へ燒いた火箸をさし込み、そのころ流行りかけたパイプをこさへてゐたが、火箸がうまく小枝のずいに通らなくて、よこへずれて徒らに木口を燒くばかりだつた。何氣なくそれを見てゐたわたしをかれは焦れた氣もちの遣り場がなくて、ちよつと睨まへたが、そのときにわたしはお愛想のつもりで頬笑んで見せたのが、かれには腹立たしかつたらしく、何か吃やくとそれを板の間へ叩きつけ、火箸を火鉢にさし込んだ。――生木の削がれた小枝は間もなく爐の中へくべられた。

「何か？　ここへつとめることになつてゐるのか。」

「はあ。」

わたしは左う傲嚴なかれにこたへ、かれのなりの高い顔をみあげた。そのときに何かわたしはこの男を好かぬ氣がした。生優しいその顔立ちからも癇癪もちらしい苛立たしさが窺ひ見られた。

いつかわたしは用紙備品の本箱のそばで、掃除しながらゐたぎん猫が鍵の外れた本箱の中から、新しい半紙の幾帖かを拔き出し、それを反古籠のなかへたてに入れたことを茶碗をあつめながら見た。夕方はかれらの茶碗をあつめる役目があつたからである。ぎん猫はたしかにわたしが見たことを知つ

たらしく、すぐその半紙をもとの本箱に入れてしまつた。そしてわたしが卓のかげにゐるのを追ひ廻した。たんにそれだけの理由のためにわたしはわたしの宿命であるかれに、椅子と椅子と卓子と卓子とのあひだをねずみのやうに趁ひ廻されたが、うしろの窓から廊下へ出たときに、あくまは趁ふことを斷念したらしく箒を手に取つて立つてゐた。

だが何時ころとなくぎん猫はわたしを追ふことをしなくなり、たまに、全くたまにしかわたしのからだに手をふれることがなかつた。どんなことから左うなつたのか覺えない。わたしの宿命はやや手ぬるくなつたが、わたしの心の奥の方にはいまでもぎん猫が兩方のこめがみをねらつてゐるやうな、遠い遠い記憶がある。そのたびにそれがぎん猫でなくともそれは名前のちがつた別のぎん猫のやうに思へるやうである。――わたしを疲らせる仕事、それを倦きずにあくせくしなければならないこの世のぎん猫は、びやうびやうと吠えくさるのだ。

「ぎん猫よ、どうかもそつと手をゆるめてくれ。」

さういふ腹のなかで叫んだごゑは、あれきり絶えたのではなく又次ぎにえたいの知れないぎん猫がやつてきてゐるのだ。それゆゑわたしの考へることは一生ぎん猫にたたられ通しのやうなものだ。人間は子供のときに一番恐ろしかつたものに、もう一度姿をかへたそいつに出會すものらしく思はれた。――椅子と椅子の間に恐ろしいぎん猫がわたしをねらつてゐる。わたしはすずめのやうに震へてゐる。――――が、その吠えくさるぎん猫はいまはすつかりああいふ廷丁服のそれではなく、又、べつにこれといふ姿のあるものではない、ただ何かわたしを疲らせるこの世のさまざまな責任のやうな漠然としたものである。わたしはわたしの名譽にさへ値段をつけそれを賣らなければならないそれである。わたしの恥かしいことだらけを克明にできるだけてぎはよく、あんなにまでいとしかつたところを最一度ふりかへつて見ることであるさうしてゐるうちにわたしの頭腦のなかに吠えてゐるぎん猫がしづまるやうな氣がするのである。

わたしの仕事といふのは、十幾人かのお茶を飲む茶碗を洗ふことが朝の仕事の一つであつた。わるい藍呉須の瀬戸ものをくるくる水のなかで洗ひ、それをかれらの出勤前の卓上にならべておくことと、土瓶に熱いお湯を二人前に一個づつを配つておくことであつた。わたしが始めてゐろりの前に立ち、大釜の湯氣のなかから汲み出す小僧たちの姿をじごくごくらくの繪にくらべて憐れんでゐたのが、もうその繪圖のなかの人物になりながらゐたのである。そしてわたしの考へたことは、どうしてかれら十幾人かのひとびとにうまい茶を飲ましてあげるかといふことだつた。その他にわたしは何も考へな

かつた。そしてわたし自身もかれらに出したあとで、その一杯をいつも心樂しくのんでゐたのである。さういふ僅かなゆとりが毎朝わたしの接する半老人のかれらの傳染るゆとりで後年わたしを早老にせしめた一因にならないとも限らないのである。

悲哀とは何であるか？——正しく悲哀といふものは、わたしに取つて恐らくこれが最初のものであつたらう。——わたしはどうかすると茶碗を洗つてゐるうちに、茶碗と茶碗と打ち合つて缺かしたり、あるひは床の上に取落して二つに割れたりしたときに、わたしのいつも考へたことは片町の瀨戸もの屋へゆけば、それと同じい茶碗を賣つてゐることや、それを默つて償うておけばいいといふ考であつた。決して自分の過失をくやんだりする心でなく、過失の代償がたやすく行はれるから、それをわたしは默つて買つて來てつぐなうてゐた。ただおそれるのは役人たちが自分の茶碗の香臺に自分の頭文字をかいておいたり、あるひは藍呉須の文樣の濃淡によつて自分の茶碗が他人の分とかはつてゐるのを知つたときに、わたしはこまつたのである。

「君、これはちがつてゐる。もつとうすい文樣ぢやなかつたか？」

「いいえ、けふあたらしく會計からもらつてお上げしたのです。」

「さうか。」

それきりでかれらは昨日までの自分の茶碗にたいして愛情をもたなかつた。どんなものでも自分のものでさへあればよかつたらしかつた。そしてわたしは過失の悲哀をこんな工合に遠退いた。

が、三度に一度は會計へ印章を持ち、れいの、いすか目の山瀨の前に立たなければならなかつた。かれはどういふ忙しいときでも、仕事の句切りのつくまではわたしを立たせておいたきり、自分の仕事をいそいでゐたのである。わたしはかれの仕事振りをみてゐるうちに何度も心を幾色にも代へるほど、どういふふうに山瀨に茶碗の言ひわけをすべきかを思ひ惑うた。

「何んぢや。」

「お茶碗をそそうしたのです。」

山瀨はこちらへ向くと疲れた目つきでわたしをぢろりと眺めた。そんなときにわたしはならはしのやうに憎まれてゐるといふことを感じた。茶碗のことではない、たゞ憎まれてゐると思うた。

「お上のものだといふことはお前にはよく分つてゐるね、そのお上のものを自分のあやまちで壞したことはわるいことではないかな。」

「ええ。」

「でこのつぎにはどうする。」

「この次ぎには割らしたりしません。」

わたしは蓮畑のゴミ棄場へ捨てた茶碗のかけらが、自ら蒼白い光線をつくりながらひつそりと、しかもなまなましく眼に射てつく思ひがした。山瀨はもの憂げに傳票に印を捺してからもう一度、

「このつぎには辨償しなければならぬぞ。」と言づて傳票をわたした。その間は二十分くらゐかかつた。役人たちはみなわたしに眼をそゝいでゐる。わたしは何故自分で買つてきておかなかつたかを悔いた。——その傳票は小使の取締の机の上にもつて行き、そこで帳面にわたしの印章を捺さなければ渡さなかつた。

「またか——。」

取締はかう言つてわたしの顏を見た。仕方なくわたしは腹の中で、又だよとこたへた。取締は藏から新らしい茶碗をもつてくるとわたしに渡した。わたしはそれをていねいに洗つて、役人の卓上に置いた。

「何かい又割つたのかい！」

「ええ。」

わたしは三度目にやつと頰笑んで見せた。悲哀はすりへらされ頭腦にはあとかたもなかつた。却つてわたしが小僧の役目をひいてからそんな色の茶碗をみると、何か考へ込んでしまつた。そして生新しい瀨戸物のすさまじい光線が永い間わたしを不愉快にもし、曇天のそれのやうにわたしの心に何かかげを落した。それはわたしが一人の小僧としての從順な氣質のなかつたことを厭ふ感情らしい。なぜわたしは夕方の片町の瀨戸物屋に同じい茶碗を買つたかといふことを、くやしく思ひ出すのであつた。

「お前にたび〳〵言つたが、しかしなぜお前にわたしの言ふことが分らない、——お上のものはお前のものではなくお上がお前にあづけたものだ。」

山瀨はいつもふだんにかう言つて、わたしのうつ向いた襟元を見つめた、わたしはたんじゆんに憎まれてゐるとしか思へなかつたのである。

或朝、所長の室の卓の上にはたきをかけてゐたとき、そのはたきの先がすこし重いなと思ふ間もなく、はねたはずみに壁のところへ一文字に墨汁をひつかけた。筆洗ひのなかにはたきをつき込んだものらしい。——そのときわたしは頭腦が輕すぎるくらゐ呆氣に奪られ、いち早くその墨汁をふきとらうとした。とりの子紙だつたせゐで、紙質がむしられるばかりで墨の痕ははげなかつた。しまつたと思つた。次ぎの感じはこりや一たいどうしたらいゝだらうと考へた。はたきのさきから墨汁がぽとり〳〵と落ちてゐる…。椅子の上にわたしは腰をおろして見て、そのはね墨が點々として二尺あまり天

井へ向うて、だん〳〵その點が小さくなり二つ三つ飛んで止んでゐるのを眺めた。

わたしは思ひきれなくてこんどは墨汁をうすくするために、紙をすこしづつ剝いで行き、自分の指さきをちよつと眺めた。だいぶうすくはなつたが、なほ見にくゝなつたやうな氣がした。時計は所長の出るまでにたつぷり一時間はあつた。會計の人々はあと二十分で出揃うてしまふだらう。山瀨はどんなに驚くだらうと思うた。肥つた所長がぎしぎし階段を上つてくる、帽子をぬいで帽子かけにかける、そして自分の卓の方へゆくときにこれが目にはひる。目がうすいのでゆつくり近づいて眺めるだらう。

「そしてこのベルを一つ押すにちがひない、……。」

わたしは死んだやうに無表情な笑ひをして、テエブルの緋羅紗の上をすうすうとなでさすり溜息をついた。あたりに人のけはひがない。いまの内にどうにかならないものかと、そればかり考へ込んでゐた。わたしは所長室を出たがまだ誰も出てゐない。靜かである。何も起らないでゐる。時計は八時に十五分前をさしてゐる。

山瀨が出勤した。わたしはかれの前と横とへ二度行き、二度ともからもどりをした。わたしのからだの中は何も彼も留守だらけのやうな、浮ついた輕さであるけた。あるけたと言ふよりうしろから押されでもしてゐるやうに、すこしづつ行つては歩き停つた。しまひに熱病やみのようになつて山瀨のよこへ、そつと身をかたむけた。わたしはかれの汚ない老人らしい耳へ食ひつきでもするやうに近寄つて何かささやいた。あたまの中はぐらぐらしてゐた。山瀨は自分で自分を疑つて自分の耳を手のひらのやうに差し出した。わたしはそこで、

「け、け、けさのことです。」

と舌のさきを鋏まれてゐるやうなもどかしさで言つた。山瀨はそのとき一尺ばかり飛び上つたかと思ふくらゐ、すつかり顏色をかへて椅子をうしろへはね、わたの顏を見つめたが、

「ど、ど、どうしてそんなことをして呉れたのだ。」

「け、け、けさのことです。」

山瀨のあとへついて所長室へ這入つたときは、あらためてその飛び墨を眼に入れたときには、わたしは山瀨のうしろ姿ばかり見てゐて、山瀨がきふに飛びかかつて來はしないかと、そんなことが考へられた、すくなくとも頭をがんと一つくらはされはしないかと思つた。山瀨は墨のあとへ指をふれてみてから、

「はたきだな。」

さう言つて袴の間から時計を出してみてから、それが止つてゐたのか、きふにあはて上つて、

「何時だか見てこい。」

わたしは時間をかれに告げると、あと三十分で所長が出てくるとさう思つた。取締を呼んで來いと又言つた。わたしは慌てて取締を呼びに行つた。取締は朝茶をのんで小倉の仕きせの膝を二つに折り、のんきさうに坐つてゐた。

「朝から何の用事があるんだ。」

かれは不機嫌にひとり言をいふとわたしの先になつて行つた。山瀨はすぐこのあとへ墨だけ目にとまらぬように紙を張り、所長がひけたころに經師屋を呼べ。そして一時のがれをしておくのだと言つた。山瀨はその他に何も小言らしいことを言はなかつた。あるひはかれ自身あはててゐたのかも知れない。とにかくいいあんばいだとわたしは自分の椅子の上に腰をおろした。あまり血の氣をなくしたやうなわたしの驚きはだいぶ經つてから頭を催ほした。――廊下がぎしぎし鳴ると所長が出勤した。呼鈴が鳴つた。わたしは所長室へ行つた。

「お茶！」

かれはかんたんに左う言つた。わたしはせいぜいうまいお茶をかれの前に置き、墨のあとに張られた紙をみた。そして引き下がらうとしたときに、わたしはきふにドアを半分あけしなに、

「はあ」

と立止つて再た室へはひらうとした。が、かれはいや呼ばないといふふうに頭をふつて見せた。所長は何も氣づかずにゐたらしかつた。

その日は山瀨をわたしは何となく監視するやうな氣になつてゐたが、珍らしく監督書記の上坂のところへ行き、何かおじぎ交りの話をしてゐたが、どうやらわたしの身の上らしく思はれてならなかつた、そしてわたしを二度ばかり見た。上坂監督書記！わたしはかれが色の白いやさ男であると言はれてゐるそれとは反對に、唯一のにが手に見えた。わたしだちの進退もかれの一了見になるからだつた。わたしはかれの眦に紅みをもつた眼つきが折々そそがれるのを知り、けさの事件がかなり大きいものであることを、空恐ろしく感じた。人間にはどういふときに災難がくるものか分らない。それがわたしの氣質とは反對にあらはれてくるものらしいのを、わたしは午後過ぎになつてやつと悲しく思うた。

わたしと同じい年ごろのかれらの中には、何か勉強してゐるものもゐたし、またわたしのやうにしくじりをしたものがゐなかつた。わたしはかれらを羨やむような氣になつてゐたのである。美少年の池田のいふのには、山瀨がああして默つてゐるのはよくない。あいつが默り出したら碌なことがないと、かれは先輩らしい口をきいた。

「多分、君は受持ちを代へられるのだらう。」

「それで僕はどこへやられるのか？」

「階下だね。所長づきではない。」

その方がよほど安心だと思うた。わたしは山瀨や上坂のそばから隔れた方がよいと思つた。

わたしの毎日通ふ道は公園の土手でそこの茶店の前を通つてゆくのである。夕方、三味線をひいてゐる家があつた。松の多い古い公園に三味線はかん高くいまもわたしの耳に不調和にきこえてゐる。わたしはこの間そこをあるいて見て三味線をひいてゐた娘がもうおかみさんになつてゐるのを知つたが、それよりもわたしの毎日あるいた道路に、なぜに白い一本道が悲しかつたか？——さくらの垂れた枝の觸る冬帽のわたしが、悄然とむかしのそれと少しも變つてない姿であるいてゐるのを、わたしは家にゐればよかつたと思つたくらゐに考へ出した。

「演說なんかできるものか。おれはそんなことはきらひだ。うちにゐた方がよほど氣もちが樂だ。」

わたしの演說きらひはできないから嫌ひなのでなく、する氣がないからきらひだつた。さう言つて或る學校のそれを斷り、わたしのやうな人間の演說などを聞かうとする人々に、内々わたしの考へてゐることなど話をするのは、全くのわたしが奪られるやうな氣がしたからである。わたしの考へてゐることは詰らないことのきれぎれで、それを紙の上にならべて見ないとわたし自身にさへ分らない思想である。ばらばらに話してしまつては聞く人も面白くはなからう。紙にまとまつたものがわたしだと言つていい。それを紙にではなくばらばらな人間に話しかけたつて駄目だ。それゆゑわたしはその話をことわつて、いまこの道路を通つてゐる。道路は白い一本の通りになり悲しく明るい日の中にある。

わたしは道づれであるかれに、かれとはわたしの幼いかれだ。——それにいま、わたしは人間は過去を貧ふべきものであるかどうかと云ふこと、このわたしに飛んでもない一かどの名士か何かのやうに演說をしてくれなどといふ馬鹿者のゐること、そんな馬鹿者におだてられて演說をしてみる氣になる人がゐること、ドストエフスキイだつて演說したことがあるではないかと云ふ事、人間は一人前になつたら一人前で通すことが當り前だかどうかといふ事、世間と一しよに圖に乘ることが普通だかといふことなど、つべこべとわたしは喋舌つた。

「それでこの話はお前のこの傳記の中に何の必要があつたのか。」

「あることはあるのだ。大有りだ。この白い道にはお前の姿がみえてならないから、わたしはお前の名譽のために演說の話をもち込んだのだ。あんまり時々お前が可哀さうでならないから。」

「それだからおまへはまだ俗物だといふのだ。お前のへんにへり下つたやうな心には少しくらゐ病的があるのだ。それが何よりお前のしろものをよくするのだよ。お前はお前で勝手にあたまの惡さの程度のよさで考へてゐて、あんな演說をことわつたことはいいんだよ。だがそれをつべこべ喋舌るのは俗物だといふのだ。内々うれしさうでそれでゐてその演說のできないお前が斷るのはあたりまへだ。」

わたしの冬帽に櫻が枝垂れてゐる。先刻もそれを書いた。だがこんなに櫻の枝が低くなかつた筈だ。わたしのあたまの上にずつと高いところに曾てこの枝があつた。わたしはそれを見い見いあるいてゐた。冬帽の上にどうかするとぽろぽろとこぼれる……。

「ねえお前、この木はふとつたらしいんだね。」

かれはひくい背丈を悲しさうに伸び上らせながら、やや考へながら幹にもちよつとふれて見た。

「いや、すこしは大きくなつたが元々とほりぢやないか？——。」

「お前が低いから左う見えるのではないか？」

かれはかれらしく笑つた。「どつちも太つてゐるんだがよく分らないのだ。」かれはざんぎり頭に學帽のやうなものをかむつてゐるが、ある筈の徽章が見當らない。徽章のない學帽といふのは寂しいものである。さういふものは學帽のうちへはひらないものだ。かれは手をやつて、これかと言つた。

「徽章はもとからないのだよ。つけたくともね。」

では何故あんな學帽を擇らんだのだらう。その他にいろいろな帽子がたくさんにあるではないか？——わたしはさう思ひながらも、れいの、羞かしい氣もちがまたかげのやうにさしてくるのを感じた。かれは何かのはずみにかれの經驗したことのない學生らしいそれらしい姿でゐたかつたらしかつた。すくなくともかれのやうな年ごろには必要らしかつた。

わたしは小さいかれの肩を叩きながら言つた。

「お前はせいぜいさうして學生のやうな格構をしてゐたいのだらう。だがどう見たつてお前は學生でもなければ何んでもない普通の小僧だよ。」

「小僧でたくさんだよ。その他のものでないから。」

かれはさう言ふと哀しげにうつ向いた。全く學生とは別な風俗をしてゐる。風俗といふものはいつはれないものだ。

「ふむ。」

と、わたしは考へた。可哀さうに、いくら思つてみても可哀想だ。わたしはあんな澤山の人の前で演說をすることなど、思ひ切つて了はう！　途方もないことだ、わたしの幼いかれをもつと可愛がつてやらう。それがわたしに最も適いてゐる。こんなに明るい春晝のなかを既にかれはつかれ切つてゐるやうにとぼついて歩いてゐるではないか？かれの素足の

甲には灰ばんだ白い砂ほこりが溜つてゐる。——

「もつとお寄り！小さいの。」

わたしは言葉を繼いて、扨て、「お前に一つ徽章をやりたいのだ。劍をさげてゐない軍人がゐないやうに、徽章のない學帽といふものがないからね。ほうら、この徽章はどうだい。——。」わたしは手近いところの花を一つ千斷つて見て、それをかれの學帽の穴に挿し込んでやらうとしたが、いや、それならと言つてかれはその花をぱんとわたしに投げ返し、よけいなことをすると言ふやうな顏貌をして見返した。

「氣に入らないと見えるな。それならいいぢやないか。」

「花なんか帽子にさす奴はゐなかつぺいだよ。」

「それなら勝手にするさ。だが可哀さうにおまへそんな丸腰のぼうしを冠つたりしてさ！」

坂にからたちの深海色をした垣根があり、それには白いヒヤシンスのやうな花が一杯に着いてゐて、香はあまいものを食べたあとの、鼻さきにかんじる匂ひで一杯だつた。そのかげでわたしはかれを力一杯に抱きしめてやり、ねんぱりしたきすをしたらかれはおいおい聲をあげて泣き出した。わたしは膝の上にかれを寄せながら、ほんたうに彼の演說を斷つてしまはう！　そんなところかい、そんな氣になぞなれるかい！　わたしは立てつづけに同じことをつぶやいて、かれを抱きしめた。

「泣くな、小さいの！」

わたしはすこし自分にもなくおろおろ聲でさう言ひ、からたちの垣根を背中にかんじながら、漸らく白い眩しい一本の道路が町へつづいてゐるのを見渡した。

平島忠一はまだ平雇であつたが、かれは會計部の、いろいろな部課から集まる書狀に切手を添貼する役目だつた。かれは若かつたせゐか法律書を勉强してゐるらしかつた。そしてかれは珍らしくわたしを好愛した。わたしは他の人人から叱られたりするときに何となくかれの傍へゆくやうになつた。かれは役所がへりにあをやぎといふ席貸へ二度ばかりわたしをつれてゆき、靑と黃の紛つぽい菓子を食べさした。平島は親切なひとだとわたしは考へた。

かれは川べりに夕方どきによく散步をしてゐた。かれの口くせは散步といふほど、散步好きだつた。散步といふことばが今のやうに流行らないころに、新しい言葉にちがひなかつた。なぜにわたしがかれと一しよに公園の櫻の下を步いたりしたか！　わたしには分らなかつたが、わたしはかれと一しよにゐることを好いてゐたからだつた。

證據物件の這入つてゐる土藏の二階に、檢事局の犯罪人名簿や第一審判決錄や、その他の記錄が本棚の小路ができるほど一杯につまつてゐて、紙魚の匂ひがしてゐた。それに濕つた紙質のひいやりしたのが空氣を重くしてゐた。窓は三つあ

つた。空地に茫々とした土筆が簇生してそこだけ茜らんでゐるほどだつた。わたしはそこで平島を待つてゐたがかれは或日三錢切手を二百枚わたしにわたした。それをわたしの町の郵便局で金に換へることをわたしに言ひつけた。わたしの町に知合ひの局があつたので、とにかく百枚だけはよそから送つて來たのだと言つて、買つてもらひたまへと言つた。かれは書生流の何々したまへといふことばを好んでつかつた。東京辯をまねることは言ふまでもない——。

「百枚だけだよ。あとの百枚は君の方にしまつて置いてくれるとよい。本か何かの間に入れておくんだな。」

「もし局でかへないと言つたらどうしませう。」

「賣手がわかつて居れば大丈夫だ。つまり保證するひとがあればね」

二百枚の三錢切手は窓から忍び込む乾いた風にひそつて、硬ばつた。眼もくらやむ赤色の燎爛たる切手の模樣は、わたしの心の下の方にその色を沈ませた。わたしは何も訊ねようとはしないで、あごの長いかれの善い顏をまじまじながめた。へいぜいとは少しくらゐこそこそした樣子が窺ひ知られたが、その他にはかはりがなかつた。「實は僕もよそから爲替のかはりに送られたが、どうにも仕方がないから君にたのむのだ。」と言つた。わたしは局のおやぢを知つてゐるが、これはわたしの家の向ひの指物屋のをばさんに托んで見たらどうだらうと思つた。をばさんは局へよく行くらしいからとさうかれに言つた。かれはしばらく考へて、よからうと言つた。

平島はわたしとは一と足さきに土藏から出て行つた。窓さきで切手をもう一度調べたが、ふところで千乾つてざわざわした。わたしは平島に向つて、

「どうしてこんなに澤山切手があるんですか。」

などと尋ねる氣にはなれなかつた。それよりも、

「うまく賣れるかなあ？——。」

といふ心が先立つた。そして平島の卓上の小簞笥に三錢二錢一錢とかかれた小抽出しがあり、そこに一杯の切手がしまはれてゐるのがわたしの眼にあつた。平島は切手の切取線のない方に食つついてゐる餘白を手紙に貼るときに、その一分ばかりの餘白におまけとかいたりして、わたしを笑はせ投函させた。まつたくあの餘白はおまけだとわたしはおもしろく思つてゐた。わたしは平島がお上の切手をちよろまかすのだらうと考へたが、かれが切手の番人であるためにそんな事くらゐはどうでもよいのだらうと思つた。公園の小鳥の番人が一晩だけ小鳥を自分の家へもつて歸つて鳴かせるくらゐのことに考へた。——だが、わたしにはそれよりも何か他人に話されぬものが隱されてゐるやうで、これは小鳥の番人とは少し違ふぞと思はれた。

わたしは机の抽出しに切手をしまひ、抽出しの中で手早く

本のなかにはさんだ。平島は誰にも話をするなとは言はなかつたのは、わたしにそんな事がないと思つたのだらう。――いつか公園の坂で、何かの拍子に何かの花に手をふれたわたしに、平島はそりや國事犯だよと言つた。

「屋外窃盗ぢやないんですか？」

わたしは聞き覺えのそれを利用して言つたが、かれはいや國事犯だと言つた。その區別がわたしには分らなかつた。――わたしはそれを今思ひ出した、が、ふしぎに自分の好いてゐる人からたのまれたことと云ふものは、その善し惡しの正體をはつきり見定めることをしないもののように思はれた。わたしはどういふふうに指物屋のをばさんに賴んで、局へ行つて貰はうかといふことを、殆ど終日考へてゐた。それといつしよに燎爛たる切手の同じい模樣がうづ卷いて、机の抽出しにあることを、やや恐怖に近い氣もちになつて感じてゐた。それが時間が經つに從つて深くなつて行つた。

かへりにわたしは平島があごさきで、たのむと言つて室を出てゆく姿を何時になく一種の親密以上の、わたしと同等の人物のやうな氣で見守つた。その日の歸途は不愉快であつた。町の景色の中にも何か變りかけてゐるやうな、それと言つて名づけがたい異常をかんじた。

翌日、わたしは同じ場所で平島に金をわたしたときに初めてほつとした。平島はだまつて受けとるとそれなりに藏を出てゆくときに斯う言つた。

「この次ぎにあの分を賴む。あの分――の、百枚はまだわたしの机の中にあつた。」

「ええ、でもしかしどうだか？」

わたしはこれだけ言つて、指物屋のをばさんから印形を捺さされたこと、よそから送つて來たのに相違ないかといふことなど、切手を賣る人からくわしく聞かされたことを思ひ出した。そしてわたしの受取つた額のいくらかは切手賣捌人がはねたことなどを話した。わたしは最後にをばさんからの金をこつそり握つて、家へかへつたことを思ひ出した。をばさんは何かの事情が判つてゐるらしく、うそうそと秘密めいた口ぶりで亭主の仕事場の、蠟引をしてゐた煙草盆を積んだかげで、低いこゑで言つた。

「どんなお友だちなんです。ただ役所ではわからない――。」

「おとなですよ。」

「ふう！　しかしあんなことは二度とたのまれるものではない。」

をばさんはこれだけしか言はなかつたが、何か解つてゐるとしか思へなかつた。その金を握つたときは、わたしは漸つとどきついたくらゐの、あさましいものをこの事件の内からかんじた。――で、わたしは平島さんと呼びかけておいて、

「あとの分はかへしておきますから、取つておいてくださ

い。」

さう言つたが、どちらが持つてゐても同じことではないか。

「だから君があづかつておいて吳れるといい。折をみて貰つてくれたまへ。」

平島は藏から出てゆき、わたしは氣味のわるい土筆の簇生した空地の、あからんだ日南をながめてゐるうち、さむ氣がした。しかし金は平島にわたしてしまつたら、わたしに何もかゝはりのあらう筈がない。わたしは仲に入つてゐただけだ。しかしやはり不愉快だつた。わたしは犯罪人名簿のならんだ行列をみたが、別に何とも思はなかつた。あれとわたしとはちがふ！

「しかし何を書いてあるのだらう。」

わたしは脚つぎの上から、その四冊くらゐある一冊をおろした。印刷紙で姓名とか年月日とか犯罪の種類とか、再犯か初犯かまたはその生國とかを書いてあるにすぎなかつた。いろは分けに書いてあつて何年何月にはどれだけの刑を受けたことまで詳しくかいてあつた。わたしは又脚つぎに上つてそれを元の棚の上に返した。「犯罪人名簿とはあれのことか？――。」わたしは見ない前よりも見たあとがさつぱりした。そしてあんな中へわたしや平島が書き込まれることなぞがあらう筈がないと思はれた。しかもこんな帳面のそばにゐるわたしに、そんなことがあるものかと思つた。も一つ、わたしの空想したことはあの中に平島の名前のある一枚があつたら、いま、わたしはそれを切り取ることさへ出來るのだ。そしたら若し平島が、わるい人間だとしても、永久にそれが分らなくなるぢやないか？　わたしの親戚のものの名前があつてもわたしはその一枚を拔き取るかも知れない。――わたしはいまなら何んでもできる。さう思つてわたしは藏をみしみし下りた。

被告人溜りで身がらのしらべがあつた。はだかになつた男のこまごましたものまで、みな書き立ててあつた。れいの加藤が目金の下で罫紙に何かかいてゐた。わたしはぼんやり眺めた。わたしはいつでも此の警察から引かれてくる人人の中に、わたしの見知顏がないかといふことに注意をもつた。それは選擧違犯で來た片町の雜貨店の主人を見てから、一種のもの好き以外の、こんないやなところにゐる人を樂々とながめたい氣もちから、わたしはいつも見てゐたのである。だが、知り合ひはいつ見てもなかつた。近在の人人のやうに色のくろい人が多かつた。加藤はやはり何か書いてゐる。そして釣竿が一本、壁きしに立てかけてあるのを場所柄に見ることのできないものを見た面白さで、わたしはその前に坐つてゐる男よりもゆつくり眺めた。釣竿のさきに鉛の鈴が下つてゐてそこから細い糸が弓なりにひかれてゐるのが、よごれた硝子戸越しのあかりに仄かに浮いて見えた。もちろん尾籠もつい

てゐた。底が濡れてゐるから或ひは魚がはひつてゐるかも知れない、――ただ、さう直覺的にかんがへて見た。這入つてゐるとするとどんな魚であらうとわたしは考へた。いづれ禁魚區で釣をしてゐたのか。それも無鑑札だつたのか分らなかつたが、わたしにはその尾籠に何か魚がゐるとしたら何がゐるだらうと、半分優しい氣もちでながめてゐた。

「あの尾籠に何かさかなが這つてゐるんですか。」

加藤はいつもより氣むづかしさうに目金の上からわたしをちよいと見て、その目つきをわたしの言ふところの尾籠の上に、じろりと目路をたどらした。そしてあたりまへの調子でいかにも被告人になれてゐるものらしい安易さで、

「石斑魚だつたね？――」

と、こんどは尾籠の上をさしのぞくやうにして言つた。

「はあ。石斑魚です。」

「石斑魚ださうだよ、おい、なかをちよいとお見せ。」

「はあ」かれはさう答へると、その古い尾籠をすこし傾けわたしの方から見えるやうな位置にした。わたしは小さい石斑魚が五つ六つかわいて、小さい鰯のやうに反つてゐるのを見た。かれらは石斑魚だと言つた。石斑魚にしてはすこし感じがちがつてゐたと思つた。

「石斑魚ぢやないね。加藤さん。」

「石斑魚だよ。」

加藤はまた目金を紙の上にさらした。「鮎ですよ。坊ちやん。」と、さきの男はやさしい聲で言つた。わたしはさうかなあと溫良しさうな男だと思つた。

坊ちやん、――と、さうかれのいつた言葉がうれしかつた。わたしは階段をあがりながらふふとひとりで微笑つて、どうだい坊ちやんと言つてみた。

その日わたしはをりをり平島の顏をぬすみ見て、何となく心配がかさなつてゆくやうな氣がした。平島は平氣だつた。その平氣さはわたしをやや安堵させながらも、なほ不安がちだつた。美少年の池田が來て君の窓はいいとこにあるぜと、窓の下をのぞきながら言つた。

「何故？」

わたしは下をみたが其處にからべんたうを取りにくる役人たちの女中が、午前十一時ころには七八人も來たし、午後にも來たのである。あれを池田がいふのだなと思つた。で、わたしは何ごころなく、

「あれかい！」と言つた。

あれだよとかれは答へた。それよりお前の方がよほどきれいぢやないかと言つたら、何言つてやがるときつい調子で言つた。かれはそんな機嫌をすぐ直して、

「山瀨に娘がゐるぜ。」と言つた。

「袴をはいてくる娘がゐるだらう。あいつだ。」

わたしも時々それを見たが大してきれいではなかつた。しかし池田はちよいときれいだと言つてきかなかつた。所長に三人の姉妹がゐる。中のやつはきれいだと言つたが、わたしは見たことがなかつた。池田はそんなことには詳しかつた。

「袴に時計なんぞ卷いてなかなかハイカラだよ。」

「どこで見た……。」

「朝よく道で出會すぢやないか？三人づれの。」

「ははア、あれか？」

それはわたしもよく見かけた美しい姉姉だつた。が、わたしにはそんなひとに適かないことが分り、目をつけても叶ぬやうな氣がしてゐた。池田は白い前齒を小指の爪で叩いて見せ、微笑つて言つた。

「これだよ、中の妹は？」

何だか分らなかつたが、ものになるといふのだらうかとわたしは思うた。池田はみんなに可愛がられてゐるのは、顏がきれいなせゐだとわたしは考へ、顏のきれいでないわたしが憎まれるのはあたり前だといふふうに、わたしはあきらめてゐたのである。が、顏がきれいでないわたしにぎん猫並みの憎まれ方がしばしばあつたが、顏のきれいな池田にはぎん猫さへ慘たらしい手を下すことをしなかつた。ぎん猫にもあまりに美しい顏にたいしては自分のむごたらしい性質のままにうごくことができなかつたらしかつた。わたしの鼻のしたにはうす青い、かすかな、震へるひげさへ仄見えてゐたのを、わたしはしばしば珍らしく覗き込んだりしてゐたのである。それはなにやら悲しい氣もちだつた。

「給仕！」

そのころはわたしのはらわたに沁みつき、凍てて顏をそむけさせてきたのも、このごろから感じるくやしさであつた。何がくやしいと言つてわたしにはこの言葉ほど、はらわたにぐりぐり抉られることばはなかつた。――わたしは或時、或る雜誌社に原稿をとどけ金を受けとり、階段を下りしなに素足の、びんばふたらしい給仕が上つてくるのに一度出會した。何とも思はずにわたしは埃まみれの靴をいまいましく思ふ前に、東京の道路のわるいのにかんしやくを起しながら、エナメルの光る靴のさきを柔らかい紙で拭いて、そとへ出た。ぽけつとに貰ひ立ての金が幾らかあつた。それさへわたしには氣にならなかつたが、ふいに全く、何といふざまをしてわたしはそこの門の前で佇立をしたことだらう。わたしはわたしのうしろの窓で、わたしのいやないやな呼方が、臆面もなくもう二十年も經つてゐるわたしに、まんまと、正面から叩きつけられて來た！

「給仕！」

あゝ、あれだ。わたしはなるべく早足でその雜誌社の門前を隔れた。もう少しでやられるところだつた。わたしはあた

りの人氣のないのを幸ひ、あぶない！　と、さう呟いた。わたしは額にじりじりあぶら汗のにじむのを決して氣候のせゐではない、あれのせゐだと思つた。わたしは不機嫌にじりついて、

「あれだ、あれが珍らしくだしぬけに、まんまと一杯くはせやがつたのだ。ちくしやう。どろぼう。膽取り。」

わたしはできるだけ喚いて、間もなくしんとして、扨て、やはりくやしさうに唇をかんだ。その道路に電車も自動車もうごいてゐたが、わたしの頭腦はぐらぐらと旋廻しはじめ、はづかしさで一杯だつた。なぜにこんなに恥ぢなければならないか？いまは何でもないではないか。悠然として歩け！わたしはさう呟いてゐるにかかはらず卑屈に蹋まつた心は、さうはゆかない。あれだ、あれが呼び立てるのだ。埃ばんだ汚れた空氣の中に白い顏がわたしを眺め、笑ひ立ててゐるからだ。雜誌社などへ行くのは止さう。素足でひたひたと床を走り使はれてゐて、自分の健康など少しも考へられてゐない可哀さうな奴、――そいつが一人前になつたつてやはり飛び上るくらゐ吃驚りして、あれを聞かなければならないのだ。

上坂監督書記は古いモオニングのやうな服の塵を拂ひながら、わけは別にないが、とにかく言つて、

「お前は階下の方へ行つて貰はう。登記所の方だ。あそこはお前に適當だらうと山瀨さんとも御相談をしたのだ。」

「はあ。」

わたしはおめかしやで、氣障なほど氣取り屋のこの男にも威權があるのを、内々恐れてゐた。

「あちらへ行つたら最つと失敗をすくなくして貰はねばならん。」

「はあ――。」

わたしはまだ何か言ふのだらうと思つて立つてゐたが、かれはもういいと言つた。椅子にかへると山瀨がおいおい些つとと言つて呼んだ。

「上坂さんから聞いたかね。」

「ええ。」

「上坂さんともお話したがこんどあんなことをして貰うと、此處を止めて貰はねばならないからね。よく自分で考へて何んでもした方がいいね。」

「はあ。」

此間の曇を飛ばした一件をいふのだ。わたしはかれの前を引き下つて登記所の方へ行つた。そこは埃ばんでゴミ箱のやうに帳面が卓上に散らかつて居り、階上より人間がすこし下等なやうな氣がした。わたし自身もそのゴミ箱のなかに坐らなければならなかつた。そこでは人間なみよりも犬ころなみに使はれた。激しい呼ごゑがわたしの眼の前を十文字にゆき

きした。あちからも此方からも呼び立てられた。わたしは自分で自分の耳をあつちイ立て、こつちイ立てした。としより も若いのも皆そこではまるでやけくそに働いてゐるといふより、役人の屑だらけがゐるやうな氣がした。實際、かれらは成績のわるい頭腦をしてゐたために、どんどん此風塵の登記所へ追はれたらしかつた。かれらはたばこ一服喫むのにさへがんがん烟管をはたき、登記簿を卓上に叩きつけた。

ここへ代書人といふひとびとが登記簿の閲覽にきたが、かれらは甲羅のある虫のやうに終日卓上にかがみ込んで、老眼鏡でをりをり疲れたらしい眼をやすめてゐた。かれらの古いかび臭い羽織にみるみるうちに白い埃がたまつた程だつた。抵當權や賃借權乃至は家屋賣買の記錄であるこれらの帳簿に、個人個人の財産が明記されてあつた。しかも古いものには何時の間にか名義人がちがつて人のものになつてゐるのなどあつた。お上の仕事にもそさうがあつたが、書いてゐる一人づつではそさうがなかつたらしかつた。とにかく、役人の屑であるかれらの中に、屑の中の屑であるわたしの卓の上で、わたしは終日申請書の收入印紙を叩き破ることが仕事であつた。虹いろの百圓印紙や青つぽい五圓印紙など二度とつかへない程度にいちいち叩き破つた。消印とかいた鐵槌の四角な輪廓に、鋸の齒のやうなぎざぎざがあつてそれが消印にびつたり食つつき、破りぬいでしまふ程叩かねばならなかつた。わたしはわたしのうしろに最う一人、そんな消印の槌を振つてゐる奴がゐるやうに思はれるほど、めまひに近い惑亂をかんじながらえいえい……と、叩きつぶした。そしてわたしを憎むぎん猫や、上坂や山瀨のあたまをわたしはここで思ふさま、全く思ふさまちからを込めながら、えたいの分らない憤りの淺猿しさにかられ、片つ端からなさけなく、

「あいつの分だ、こいつの分だ。――」

と、槌を揮ひあげながらやけくそにつかれて了ふのだ。そしてよごれ黄ばんだ硝子戸にあつい頬べたをあて、……と、がらにもなく吐息をついた。疲れで耳の底がひりひり痛かつた。

主任に葛卷といふのがゐて、かれは一かどの紳士だつた。かれは日曜ごとには獵に行き黑塗りの立派な箱べんたうをかかへ、必らず服を着て山高をかむりちやんとして歩いては出勤した。その姿整はどこか軍隊式ではあつたが月に三百圓くらゐの月給をもらつてゐる人のやうに見えた。だが滅多に卷いた煙草を吸はなかつた。長ぎせるで頬一杯をけむりでふくらがし、ぱつと水道のやうに吐き出す癖があつた。なぜか桂花といふ號をもつてゐたのである。そしてかれの言ふことは主として獵のことだつた。

「それでつぐみなぞがきりきり舞ひをして落ちてくるのは、なかなかいいものでしてな。」

といふ調子で、次席としやべつてゐる。かれは鳥渡したひまにも獵のことを、又かと思はれるくらゐに話した。

「だが鴉といふ奴は鐵砲のさきが見えても、つうゐと逃げを張る奴でしてな　やつてごらんなさい、洋杖だつてかう身がまへしたら逃げてしまひますよ。」

わたしはかんかん叩きながら鴉といふものはそんなものかなあ、こんだ杖でやつてみるかなあ、ちくしやう、かんかんと終日叩いてゐた。かれは犬をもつてゐたのか、よく獵犬がついて來て又かへつて行つた。そしてかれは藏（そこにも登記簿を入れる藏があつた。）へ這入つて帳簿をしらべるときには、書類の讀み合せをするときのやうな拍子で、よく、

「行く川のながれは盡きずして……。」

と、何かの文句を諳記してうたつた。それゆゑわたしはかれに桂花といふ號のある由來がおぼろに知られた。わたし自身もその行く川のながれはつきずしてを能く口の上にのぼらせた。

土藤には長谷川といふ老小使が終日默つて書類の製本をしてゐた。誰とも話をしないで一日同じことを繰り返し、おひるには、何かの干物を燒いてたべてゐた。その臭をかぐと老小使が土藏にゐることをやつと思ひ出すくらゐで、それほど誰にも知られてゐなかつた。かれの小倉の服はボロだけであると言ふより、かれ自身のからだが矢張りボロだらけのやうに見えた。わたしはかれが製本に妙を得てゐることと、紙をそろへるときに手ぎはよく小指をはねては、そろはぬ紙のつらを合せるのを眺めてゐたが、何か感心するやうな氣になつた。糊も自分で煮たし砥にうす刃を自分であてて磨いでゐた。役人の前へ出て製本のことについて何か言ひ付けられるときには、膝を床の上に折り土下座をして神妙に聞いてゐた。やさしい老犬のもぢやもぢやな毛なみを撫でるやうな氣もちを、わたしはこの人のひとがらに眺めた。

「又、そんなことをしてゐる。」

かれはわたしを見ては笑つた。わたしは用事があつて藏へはひるごとに兩眼を閉ぢ、めくらの眞似をして歩いてみたり、帳簿の棚へまで行つてみたりした。そんな癖がついてしまつたのだ。藏へはひるとめくらの眞似がおもしろく、さうすることが心を柔らげた、と言ふときざだが、よく子供といふものはそんな眞似をするものぢやないか？——。眼をあけることと閉ぢることとの比較が、しつかりと心に區別できるのが面白かつたのであらう。——長谷川の耳はよほど遠かつたからかれの傍へ寄つて行つても、鳥渡分らないときがあつた。さういふに時はわたしはかれの耳を引いてやつた。かれの耳は大きくよごれた見醜い、憎げな姿をもつてゐたのである。わたしがその耳を引くのが小氣味よかつた。そして大して叱りもしなかつたから、よい氣になつたりした。

「これ、これ、よさんか。」

物憂さうに左ういふだけであつた。わたしはこの老人がさうされるのを厭がりながらあきらめてゐるのを知り、圖に乘るわたしをきつく咎めないことを知つてゐたから、ときどきその耳をひつぱつてやつた。木茸のように硬い齒がゆい耳だつた。わたしの本當の心はそれを捩ぢ切つてやりたいくらゐ、しやりしやりと小憎らしい氣になつてゐた。ただ、ものの音に遠い耳——幽遠な耳をわたしはわたしの精一杯の仕返しに、ふいに發作的に忍び寄つては引つぱつてやつた。しまひには少しづつそれが悲哀を帶びて感じられた。長谷川さん、わたしにはそれがいまから思うと樂しみの一つで、欝晴らしのおもなもので、そして何と悲しげな忌々しいめくら遊びのひまひまにやつたところの、つみ深いいたづらであつたらう、その耳はまだ指さきに震へてみえる。——默つて煙草をのみながら誰ともつきあひをしないで、自分は自分だけの仕事をやつて居ればいいといふ考へではなく、ただ、自分の氣質のまま沈湎してゐる老小使、——べつに話すこともなくそこに茫乎と十分くらゐの時間をつぶしてゐるわたしに、老人の暮しかたが靜かでいいといふことを、あんなに幼ない頭腦をもつてさへも考へた。さういふ鈍い生命に對する潑剌としたわたしの生命が齒がゆがるのは、無理のないことに思はれた。

わたしの役目である申請人の呼出しがわたしには恥かしかつた。それは登記申請人の控所にゆき、その一人づつの名前を呼ぶことであつた。わたしの町の人でわたしを知つてゐる人などが微笑んで顏をみるとき、わたしは職業を恥ぢる氣になつた。何の某さん、——と呼ぶわたしは控所の硝子戸の半分にからだを置しながら、なるべく人々から見られまいとする切ない努力をもつてゐたのである。にも拘はらず澤山の人の眼はすぐわたしに蝟集した。短袴をはいた素足のわたしがそこの曇り硝子戸に立つてゐた。羞かしさを嚙みしめてゐる變な顏立ちが、かれらには何と言つても明瞭と見えたに違ひない——。」

「婆め、また來てゐる——。」

廣見のばばあめ。わたしはそのばあさんが抵當貸しの金をあちこちに貸しながら、期限がくると直ぐ流してしまひ、その登記をしにくるのを一と月のうちに一度か二度はかならず見た。色の白い美しいごけではあつたが、何かわたしの嫌ひなものを顏の中に交へてゐたから、それを見るたびにばばあが來てゐると思つた。小さい信玄袋を下げ髪を隱居風に小さく結んで、遊山でもするやうに樂しげに控所のべんたうを食つてゐたりした。すこしづつ貸してゐる金に利が胎んでゆき、その利が他人の家をいつも二三番の抵當後にはかれの手に握らせた。「あのばばあが又家を一軒手に入れた！」役人た

ちはいまいましげに左う言ひ、その名義人書き換へを已れ自らの手で登記濟にしながら、舌打ちをした。みんな憎んでゐたがおばあさんは反對に朗らかで、且つ年にも似ないで肥つてつくりは小綺麗ではあり美しくもあつた。おばあさんには自分の家がこの町のあちこちにあることや、その數の殖えてゆくのが、子供が河原で拾ふ紅い小石の殖える程度で嬉しかつたのであらう、いつもにこにこして、快活さうで、そして何も彼も愉快さうであつた。だから他人から憎まれてもそれをそれとする氣もちを別に持ち合せてゐたのであらうとわたしには思はれた。

「廣見ゆき――。」

わたしはかう呼んで、かれの白い顏がさらに樂しげに受附の窓へ向いてくるのを能くいまいましく眺めた。

わたしがゴミ箱を糞る犬のやうにくらしてゐる埃ぽい登記所に、或日、平島が辭令を持つて掛りの人々に挨拶をして廻るのを見て、たうとう平島がこのゴミ箱に追ひ詰められたのではないかと思つた。――あれから間もなく平島は切手のあと百枚をわたしが返したときに、自分で始末したらしかつた。賣つたか或ひは自分の擔任の切手箱へ返したかどうかは知らない、――ただ、あの事以來わたしは何となく近づかなくなり、平島も滅多にわたしに口を利くことがなかつた。要事さへあまりわたしに言ひ付けないやうにしてゐるのが、故意とのやうに感じられた。が、けふかれが辭令を持つて廻つてゐるのは、必らず掛りがちがつたからだと思へた。かかりの違つたときは左うやつて廻つて挨拶をするのが例になつてゐたからだつた。

平島はやはりこの登記の方へ追ひつめられたのだつた。かれは窓ぎはの一席に椅子を置いて、なれない仕事をその日の午後から始めた。わたしは眼と眼で微笑つたきり別にものも言はなかつたが、あのことが祟つてゐるのではないか？――なぜか、そんな氣がして、淋しさうに仕事をならつてゐるのが餘計にさびしく見えた。みんなの忙しく筆を動かしてゐるなかで平島は手持無沙汰な姿で、煙草をふかしながらゐるのを見ると、あのことがかれをこんな役人の肩の方へ追ひ込んだやうに思はれてならなかつた。

午後には大概監督判事の行正といふ男が、のつそりと背丈の高い姿でみんなの事務を執つてゐる間を歩いて、一々登記簿を覗いて歩いた。うしろ手を組んでゆつくりと散歩でもする歩調だつた。かれの靴音がするとみんな靜肅になつた。黃塵が夕づいた日の中に舞うてゐる中に、二十人くらゐの人間がみな踢み込んで、できるだけ忠實さうに筆をうごかしてゐた。行正判事は不意に仕事中の登記簿を役人の卓上から取つて、ばらばらと頁を繰つてながめ、やや靜かではあつたがばたりともとの卓上に返した。そのたびに蒼白い顏をした役人

は一揖をした。判事はつぎつぎへとさうして廻ると、まだ時間がいくらも潰れてゐないときには、わたしの卓の傍へ來て消印をながめた。わたしは判事の背丈が天井裏にまでとどくほど高いこと、川漁が好きで色が眞黑であること、それから決して直接に小言をいはない男であること、たとへばかれの小言は監督書記へつたはり主任書記を經て役人に聞かされることとを考へ、あひかはらず槌をふるひかんかんやつてゐたわたしはそんな時によく印紙の上にではなく、書類の上へ消印を打ちそこなつたりしたために汗をかいた。かれはゆつくりと煙草を喫みながらゐることもあるし、消印された分を手に取つてながめることもあつた。とにかくかれは默つて來て默つて去る氣味のわるい男であつた。乾いたこゑで一二度笑ふほかは滅多に笑つたことがなかつた。

かれが去るとみんなは吻として、帳簿から頭を擡げ或は一服したり話ししはじめたりした。かれのさういふ散歩的な事務監督は二時半か三時ころかにされるところから見ると、退廳前のどうにもならない時間つぶしのやうに思はれた。

「あいつは閑暇だからな。だからああして廻つて來るのだ。」

わたし初めみんなそんな心でゐたらしく思はれた。

階下の監督書記の内藤は一日ぶつぶつつぶやき、ちよこちよこ歩きをしてゐた。かれは老人などにはしよつちう小言をいつた。そのくせ行正判事の前では氣の毒なほどぺこぺこしてゐた。何となく卑劣めかしいかれはうすい髭をなでながら行正判事と同じい歩調と勿體振りとで、しばしば登記所に姿をあらはした、そしてれいの登記簿をしらべたりする外、その細字の書き込みに對して字が不鮮明であること、朱肉が硬くなつてゐること、調印がよごれてゐることなどを言つた。そんなとき葛卷主任はわたしにさつそく洗滌を命じたのみならず、特に業々しく叱るやうなこゑで、

「かねがね洗つておけと言つたぢやないか――。」と言つた。

わたしは默つてそのとほりにした。

内藤はまたよく藏の中まで這入つて帳薄の背中ががたがたになつてゐる小言を言ひ、散在された帳簿をながめると、「このざまはなんだ。」と言つた。

わたしはそれを一つ一つ拾ひあつめた。はげしい帳簿の出し入れはそんな一々きちんと整理しておく暇をあたへないほど、忙しかつたからである。かれはふきげんにあたり散らして、こんどは老小使の長谷川にまで當つて聲を尖らせた。

「土藏で火をつかつてはいけないことになつてゐる。」

「實は鏝手を燒くために少し要るのでございます。」

長谷川はかしこまつてさういふと、内藤はすぐ、「土藏のそとで燒くといい。」と言つた。そして一々それを取りに行つてゐたら仕事ができるものではない、――しかし長谷川は唯へいへいと聞いてやたらに頭を下げて恐れ入つてゐるやうだつ

た。内藤にはさういふ蟲けらのやうな對手を見るのが、さう惡い氣がしないのであつたらう。かれは藏の二階までも見てたりした。主任は又老小使をいびり立てた。「ああいふ人だから氣をつけてな。」かれはさう言つて長谷川を少しづつ叱つた。わたしは矢張り階下が階上とちがつて役人くさいとげがさされてゐると思つた。——老人たちはここには多かつた。かれは老眼鏡でやつと見えるくらゐの、五號活字くらゐの文字を登記簿にかいてゐるのさへ、やつと見えるやうな人々だつた。暗い咳をしたり喉を卷いたり懷爐を入れたりするのが多かつた。かれらの煙管はやにで詰つて風邪ひいた鼻のやうだつた。それをこくめいに隔日置きくらゐに掃除をしてゐるが、へんにわたしの氣になつた。毎日そんなやにのけぶる匂ひのしないことがなかつた。しまひには老人たちの顏の皺や手や足などまでに、深々とやにが溜つてゐるやうに思はれてならなかつた。その證據には硝子戸に煙草のけぶりがこびりついてゐたから、——かれらは煙管がまるで命のやうに見えたほど好きだつた。かれらはどれもこれも釣りきちがひであつたために、よくその話をした。葛卷は自分とは年上のこの人たちの前へ行き、頭を搔きながら幾らか氣の毒さうに、「釣の方はあと廻しにしてこちらの方を一つ願ひたいものですなあ。——」

と言つた。申請人は受附の窓口に群れ、まだ自分の分は濟まないかと急かしてゐたから、釣の方はあと廻しにしなければならなかつた。老人たちは氣がつくと、れいの老眼鏡の下からたどたどしい遲日の筆をはこんだ。そして漸つと書ける野村、中野といふ老人、みんな髭を生やし娘や息子をもつた老人——。

「あいつらは煙草をすひに出てくるやうなものさ！」

美少年の池田はさう言つたが、かれは相渝らずあちこちで皆に可愛がられた。その反對に虱か蚤をつぶすためにゐる老人とか、法廷に行く判事だちを蝙蝠のお化けなどと罵ることが、數多くなつた。そのかはりかれはその美しい顏を卓と卓の間に、いつも輕々しく飛んであるいた。

判事光用は或日こんなことをわたしの顏を見て言つた。

「變な顏をしてゐる小僧だなア。」

光用は陪席判事であつた。かれは茶をのんでから退屈でしかたなささうに、大審院決錄の表紙の上で爪を剪りながら、人間のうちの最下等なものをゆつくりと充分な輕蔑を以つて言つた。

「川鱚みたいな顏だな。」

わたしはあいそよく笑つてみせた。こんなと級のひとがわ

たしにこんな戯談を言ふことも、卑劣なわたしの心に不愉快より先立つた。或る親密さがあつた。わたしは再度のあいそ笑ひをしながらそこから引き下つた。そして自分の卓のところへくるとわたしが果して川鱚の顏に似てゐるかどうかを、ほんの、ちよつとの間考へたがそれも急ぐに忘れてしまつた。が、光用判事はそれからあとにはわたしなぞに口もきかなかつた。かれは所長のところへ折々判決例をもつて行き、何かしやべつてゐた。わたしはかれの親密を致したことばを實際は親密ではなく、でき心の、たいくつから左う言つたもので あることを、何となくおぼろげに感じ出した。ちやうど、わたしどもが三つか四つくらゐの子供の顏を何とか批評したくらゐであつたらう。

——だが、わたしはそれから後に、この判事の顏をみるたびに、變な顏だなアと左う言はれてゐる氣もちを否めなかつた。どういふときでも、それから後にわたしはわたしの顏を氣にした。誰か初見の人とか、會合とかではきつと顏のことを思ひ出した。或ひは人と交際ことが嫌になつたのも、こんなところから次第にその思ひが重なつたのかも知れない。自分の好きであるための女にでもつい默つて引つ込み思案になるのは、氣質もあるが自分で自分の顏を氣にしたからであつたらう。

「全く變な顏だなア——。」

わたし自身にさへ左う思へた。一つとして美しくないがいこつ、この世ながらあらゆる點で叩きのめされた歪んだ表情、それを人前にさらげ出したくない。自分だけの世間での み適用する顏で通つてゆきたい。尊敬とか遠慮を交へた友情などではわたしはわたしの顏をひと前にさらしたくなかつた。何たる貧乏たらしい季節遲れの神經病みであつたらう。

——顏でとくをする世の中ではもうなからうが、顏でそんをする世の中でもあるぢやないか？——わたしはわたしの四十一になる義兄とならんだときに、そばにゐる人が言つた。

「お兄さんよりか老けておみえになりますのね。」

わたしは笑つて答へなかつた。全く老けて見えたからである。このごろ老けて見えると言はれると、輕い、極く輕い、ちくりとした不愉快を感じた。三十六になると左うかなと思はれた。若くは見てはほしくないが、四十一の人とは老けてみえては叶はない氣がした。色戀に飽きはして居るが色戀を慕ふ心は青年の時より倍したやうだ。慕ふ心はそのまま己れのこころで蒸れて咲く、やつれであらう。精力や肉體に少しばかりさして來たやつれであらうと思はれた。

光用判事は言つた。

「變な顏をしてゐる小僧だなア。」

それは全くかれの心から發した言葉のやうに、このごろになつて漸と氣づいた。

わたしは土の塀にそうて曲らうとしたが、そして、あゝ、もし…と呼ばうとしたときに、もう老人の影は坂の上を登り切らうとして、樹の深い陰に坂が曲つてゐるので隱れようとした。あれは山瀨さんではないかと思つた。わたしはそのあとへ、すたすた歩く自分のかげを眼にゐがいたが、なほ哀憐をかんじてならなかつた。同時にあの人に會つて何かゆつくり話したいやうな氣がした。詫びなければならぬこと、聞いて貰ひたいことなどがどつさりあるやうな氣がした。切ない笛を吹く子供のやうに、わたしは塀をまがり、春のまひるの寂しい明りのなかを矢張りあの人のかげを趁ひながら歩いた。だが、わたしはもうあの人に會ふことはなからう。どうか達者でゐて下さい。——何も彼も人間同士では忘られてしまふことが多いからと、平凡を慕ふわたしの心は左うひとり言をして、花樹の多い裏町を片かげを落しながら歩いた。

露及の手記

一

正月三日は朝から荒れて雪になつた。永い間ゐた川岸町の家ともお別れだから、今夜は知り合ひの人を招んで旗源平の遊びをしようといふのだつたが、そとは雪交りの烈風で傘さへ差せなかつた。とにかく小西やその他の友だちへ使を出し、中越のお孃さん、紺屋の姉妹、林の奥さんと坊ちやん、おとなりの清水の奥さんと孃さんなどへ、電話の架るところへは最う一度かけて見ることにした。そしてみんなお伺ひするといふので、露及は町へ出て折詰になる菓子を二十人前注文して、夕方までにとどけてくれるやうに賴んだ。

「毎年正月三日にはこんな遊びをするんだが、そのたびに想ひ出すことがあるんだ。」

露及は女の方をちよつと眺め、同じ炬燵にあたつてゐる大學生の新六の方を見た。

「すこし厭な想ひ出だがね。」

露及はその日も根岸の奥さんに、十五になる文子とあい子の姉妹を招んで、國の遊びの旗源平をしてゐたが、既う宵の程過ぎてから、おすしをつまんでこれから遊びをしようとしてゐたときに、玄關先きへ駈け込んで來た使があつた。

「あのときは全くびつくりしましたね、ふうちやんはさすがに泣かなかつたけれど、あいちやんと坊やとが一時に泣き出してしまふし…。」

女はさう言つて露及の顏を見た。全くあの不吉な使が來たときにみんなの、これから色々遊びをしようとしてゐる顏色を數秒の間に硬張らしてしまつた。おすしの皿がなまなましく靜まつた部屋の中で、電燈を眞上にして冴え返つてゐた。あぶらぎつた鮪のおすしがぼたんの一瓣(ひら)のやうに露及の、吃驚りした指さきから垂れてゐることも知らなかつた。

「奥さん、僕も行きます。」

「ええ、どうぞ。まあどうしたらようございませう。」

おろおろになつた奥さんは、なぜか裾をからげ四十過ぎのつやのないふくら脛を見せ、おぼつかない足もとで暗い通りへ飛びだした。主人は三年前に亡くなり何故かほつとしたま

うなこのごろだつた奥さんに、頑な主人の顔が目にみえたにちがひないと、露及は坂上へ出たときにさう思つた。

「だからあれ以來、正月には遊んでも人を招んだりしない人だけれど、今年はあんなことも起りはしないと思つてね。」

露及が根岸へ行つたときは奥さんの家は暗い闇の中で、既う蜘蛛の巣のやうに燒け落ちてゐた。ぽんぷの水があたりの道路を泥にごりにさせ、何一つ殘らず燒いてしまつた。家を出るとき行火の火をよく埋めて出たのだつたが、火は疊づたひに床の間の天井を拔いて二階へ擴がつた。そこにあつたか金絲雀の籠がへし潰れながら殘つてゐた。露及はそのとき奥さんがじつくり自家の燒け落ちた姿を見凝め、惡いことをしましたと獨りごとを呟いたのを耳づらく物悲しく聞き入れた。「その奥さんの主人といふのはむづかしい人でね。もうなくなつたがね…。」

飼猫のために障子を一と棧だけ簾風に切り、そこから庭からくる猫の出入口にしてあつたが、泥足でたたみを汚すからと言つて、いつも勝手へまで新聞紙を敷いて猫の通り路にしてあつた。猫もしまひには狃れてしまつてかさこそと新聞紙の上を歩いてゐたが、そんな癖づけることにも主人のひとは頑固にやり通させた程だつた。だから奥さんも何も彼もかたがついて、やつと自分の思ひどほりに、娘たちをそだてようとしてゐる矢先きだつたので、露及は苦しいまでに奥さんの悄げるのを手痛くかんじた。

「その話はもう止しませう。こはくなつて來ますから。」

女はさう言つて、みかんを一箱、菓子の手分け、火鉢の數などを合せた。露及は夕方近くなつてから益々降りしきる雪を硝子戸越しに眺めたが、どうやら風は落ちたらしく思はれ、いい鹽梅だと思つた。

「この家で人があつまるのもおしまひだから、賑やかな方がいいね。」

男の客がさきに來て立闕で雪を拂つたが、次いで近くの紺屋の姉むすめが日本髪で、厚いラシヤのコートを脱いでゐるときに、その妹さんも來た。だんなさまが米國へ行つてゐるので淋しさうにしてゐたが、けふは元氣で美しいつやのある瞳で座敷へ這入つた。

「おひなさまの荷づくりだけわたしにさせて下さいな。」

さう言つて家の女と話してゐる容子には、ひとの奥さんらしくもない娘らしさがあつた。結婚して三月にもならない間に夫なるひとが米國に行つたのだつたが、うちの女はそれを荐りにふんがいしてゐた。

「ではおひなさまの方はおねがひしますからよろしく。」

と、女がいふと、「ええ。」とこたへた。

甥の小西はその妻君が子供を生みに田舍へ行つてゐるので、もの忘れしたやうに淋しがつてゐたが、いい奥さんだね

と言つた。しばらくして中越のお島さんが來たが、年も若くまだ娘さんだけに一番うつくしかつた。けふだつたのかしつかり覺えてゐなかつたんですよ、夕方のおでんはですつかりびつくりしてしまひましたの、左う言つてお島さんはいかにも綺倆のいいことを知つてゐる利發さうな口をきいた。が、念入りな化粧はそんな忘れてはなぞゐさうもないことを露及にほほ笑ませた。

「おとうさまがね、すこしでございますけれどもと言つて、お好きかどうかわかりませんが、これをもつてまゐりましたの。おきらひだつたらわたしどうしませう。」

茶の間でお島さんは小さい紙包みを露及の前へ置いて、うちでもあまえて育つたらしい口調で、とても大きな瞳で微笑ひながら言つた。

「大の好物です。先生によろしく言つてください。」

「あら、これがおわかりになりまして？」

お島さんは吃驚りしたやうな顔貌で言つた。

「これ、からすみでせう。」

「まあ、よくおわかりになりますのね。えらいわ。」

仰山にさう言つたが、露及は包みが小さいからさう思つたのですと答へた。お父さんがお醫者だつたしへいぜいから子供がお世話になつてゐたから、ときどきお島さんまで見舞ひに來てくれた。まだお島さんが尋常四年のときに或日體操の時間に、校長が見巡りに來て上肢運動の手をななめに擧げてゐるお島さんのそばへ來て、もつと眞直ぐに手を上げなければいけないと言つて、その手つきをなほしたが、その時間が濟んでからお島さんはわざわざ校長室へ行つて、先刻先生になほしていただいたのは、こんな風に手をあげればいいんですかと、一二三と言つて手をあげて見せたさうだつた。それには三十幾人の先生がたも呆氣に取られてゐた。校長の爺さんはあそれようごす、ようごすと言つたきり茫乎とお島さんの顔を見戍るだけだつた。

「うちではからすみをお茶受けにいたしますの、おいしいものですからみんなが好きなんでございます。」

お島さんはさういうと、みんな集まつてゐる座敷の方をながめて、わたし一番遲うございましたのねと言ひ、淑やかに男だちにあいさつをした、中學校教師をしてゐるAがどうも別品だねと、甥にささやいてゐた。おとなりの清水さんの六つになるお孃さんが、へいぜいから默んまりやだつたものだから、てれて一人で笑ひもせずに窮屈さうに坐つてゐるのを見ると、女の子といふものはあんな六つくらゐの時分から氣質が出てゐるものらしく思はれた。

「そろそろ始めますかね。」

旗源平といふのは、源平の紋のある大旗や小旗をさいの目を振つて取りつこするので、東京地方にはない遊びだつた。さ

いの目を二つ合せ、片一方が●が出て、もう一方に⁝⁝が出るのや、同じく⁝⁝が出るのが、最も秀れた目であつた。そのかはり⁝⁝が出ると勝つた旗數を小旗で十本引かれることになつてゐた。北國地方に生れたものは誰でも知つてゐるが、東京地方の人には分らないらしかつた。それ故、林の奥さんなどわたし、どうしても分りませんのと言つた。だが分らぬなりでやつてゐるうちに、ひとりでに解るやうなところもあつた。これにはずるをするのが面白かつた。六人づつ別れた敵と味方とが、おたがひの目を掠め旗やさいの目を胡魔化した。さうするのが公けに許され、それを巧みにやつてのけるのが面白かつた。

お島さんは大膽にそのずるをしたが、あくまで眞面目でみんながそれを言つても、知らん顔をして微笑ひもしないで遣つてのけるところが鮮やかだつた。

「そら、やつた、見てゐた。」

大學生の新六がさう叫んでも、上氣した美しいふくれた片頰を新六の方へ見せたきり、振り向きもしないで。いいえ、いいえ、を續けさまに言つた。そして低いこゑで、先生、先生もすこしおやりなさいましと言つて、いたずらしくぷつと微笑つて見せた。いまやらうと考へてゐるんですと左ういふと、やあ、相談してゐるぞと誰かが叫んだ。二つの骨牌が明るい電燈の光の上でしやりかうべのやうに跳つては、ぱつたり止つて目をあらはし、その上を男と女の手がひらいたり搾んだり、ゆびわの紅い玉がざくろの實のやうにこぼれては、また森としたりした。そのたびに女れんは叫んだり呼んだり、また錐のやうな聲が裂かれたりした。六十度近い溫度をもつたこの部屋のそとで、雪が南天の上を辷り落ちても誰も知るものがゐなかつた。露及は雨戸越しに白々しい内庭の雪をながめたが、障子一重の賑かな遊びを外に凍える寒國の冬が一層さむざむと心に映じた。

夜が更けみんなが歸つたあと、門の内は足駄の齒が立たない雪になつてゐた。女中が座敷を掃くために雨戸をあけると、荒砥のやうな硬い刺々しい空氣が、いままで溫かくなつてゐた部屋を縱横に逆卷いて流れるのを、その雪の吹き込むのと一しよに眺めた。何か大きな氷柱のやうな風だつた。部屋にはすぐに冷えが訪れた。そこに今までの一人もゐなくて、露及が國にゐる間だけ怠らない日記をつける姿だけが、痞せた肩を立てゝゐるくらゐだつた。

女中があとで床にはひらうとしたときに、こんなことを言つた。

「はんかちが二枚忘れてありました。」

露及はただそれだけの言葉であつたが、妙な物寂しさにおそはれた。誰のにしてもそんな物が忘られてゐるのが氣がかりであつた。

二

途中でとある空地に茶の花が咲いてゐたので、二三本折りながらそれを提げ、盲腸炎で寢てゐるおみよの家へ寄つたが、日あたりのわるい二階の間で仰向きになりやや痞せたおみよは、まあよういらしてくだされたと言つて起きなほらうとした。

「そのままでゐてくれたまへ。いくらかいい方かね。」

「いたみはなほつたがやけれど、くすりが利きすぎてぼろぼろができたがや。」

と言つて横向きになつた。そしてこのぼろぼろさへなほつて了へば、もとのとほりなんですと言つた。面窶れしたので二重瞼がひとえぐり平常からみると深くなり、行火のほてりで皮膚が輕くあぶらぐんだ上、赧らみが顏ぢゆうを冴えて走つてゐた。

「それ何んです。」

帽子の下からハミ出してゐる硬い寒々とした枝を指さした。露及は默つて帽子の下から枝を取出して見せた。

「お茶の木の花やね。」

今まで氣がつかなかつたが鐵瓶が低い音を立てて、炭火は白々と消えかかかつてゐる

「いまお茶をいれますから。」

おみよは起上つたが寢衣が肩の方へ綟れ、病みついて艶の失せた腕に元のまま寢衣をかぶせた。そして炭をついで乏しい火種をその上に乘せた。先刻から明るい通りからこのうす暗い部屋へ這入つたので、よく分らなかつたが床の間に凍てた椿が挿され、梅室の掛物がかかつてゐた。全く障子だけが白い部屋だつた。

「この間うちのお母さんがあなたのお母さんに町で會つたがや。そんときあんたがもうこちらをお引上げだとききましたの。」

「もう知れたのか――。」

「ええ、ふるさとに身もとあらはるさむさかなや。」

おみよは鳴り出した鐵瓶の湯をきうすに注いで、溫かい仄かな湯氣を立てた。露及はその消えやすい湯氣を眺めてゐると、何かは知らない果敢ない弱々しい氣になつた。東京からの客をあつせんするために紹介されたが、そのたびによく勤めてくれたりしたこの女は、古い觀音と言つても鎌倉時代のものによく似た顏をしてゐた。或る呉服屋を旦那に持つてゐたが、そんなことよりか人懷こい、誰とでも昵懇になる氣質をもつてゐて、一夕の宴の知人もこころよく飲むことができた。

「お正月前にやすんでゐるのはいいけれど、どうかしてお正月になほりたいもんやと思ひましてね。この容子だと間に合

ひさうに思ひますのや。」
「しばらくは動かないで靜養してゐるんだね。」
「あと日がないけど、ぼろぼろさへなほつて了へばいいがや。」
おみよのあせり氣に誘はれ、よく見ると顏のむくみも引いてゐるやうで、四五日經てば快くなるだらうと思へた。何か持つて來やうと思つたが、そんなしらじらしいことは嫌ひだから…それに何がお腹にいいか分らないから食べられさうなものを言つてくれれば、あとで到けてもいいと言ふと、いまのところではカステラくらゐならお腹にいいんですと言つたが、
「いえ、そのお茶の木でたくさんや。」
と、微笑つて言つた。
「こんなものが何になるものか。」
「生けておきます。」
と、やはり微笑つて言つたが、べつにつけたらしくもなく、心で左う思つたから言ふのだといふ意味に受取れた。お茶の木なら置いて行つてもよい、さう言つて帽下の下の枝をたたみの上に置きかへたが、白い霰のやうな冷たいつぼみが、葉がくれに五つ六つ膨れ凍えてうす青かつた。おみよは感心して見てゐたが、生れてからこんな花をこんなにもじつくり見たことはなかからうと思つた。

「お立ちになるまでにわたいらして、何かおわかれのしるしに御馳走したいがやけれど、あんた何がお好きでせう。たとへば卵卷とか、燒とりとか、そんなもののうちで一つ二つ言うてたい、そしたらお好きなものばかりをあげたいがや、このあひだ、しん子さんなどとそのお話を決めておいて、つがうのいい日をきいておくことにあたいが言ひつかつたのや。」
「そんなことをして貰はなくともいいよ、何日の間にか消えてなくなればいいんだから、それに業々しいことは僕はきらひなんだ。」
「ではほんの一つ二つ言うてたい、たまご卷はどう。」
「たまご卷きをくふやうな奴はきらひでさ。」
「ぢや、くるみのきんとん。」
「そんならいい。」
うなぎは、うなぎもいい、露及はをかしいので笑つたが、おみよはちよつと待つてたいと言つて、忘れるといかんからと一々卷紙にかきつけた。そして最後にたまご卷とかいて墨で棒を引いた。一體このかねはみんなで拂ふのだらうと思ふと、どれだけも招びもしないでご馳走になるのは氣が引け、腹ではをかしかつた。ゐなかものの實直さがこもつてゐるが、感情にこたへては居づらかつた。
とうふ屋の鈴の音がすると、電燈が何時の間にか來てゐた、それと氣がつくと雪が中庭へふり込んで、丹塗のえん側

を白く染めては、はかなく消え失せた。物干場へとどいた梅の木に、つぼみの萠ざしがにがみ走つて先尖りに冴えてゐるのを、露及はしばらく佇つて眺めてゐた。ふるさとに身もと洗はるさむさかな、いろいろな事から露及が生ひ立ちのことまで、人人は知つてゐたからうつかりしたことはできなかつた。品行を清く持してゐるものの快よさはあつたが、味氣なく何ごとも物佗しかつた。
「いつころご都合がいいがや。日を決めておかんとこまりますから。」
「いまのところでは分りかねるね。それはそのときのことにしておいて呉れんか、約束しておいても都合がわるかつたりするとこまるし…。」
「それもさうね。」
「なるべくならそんな事をしない方がいいんだよ、こちらもらくだから。」
「けれども折角みなさんできめたのやから、いらしてくださいね。」
暫らくしてすこし寒くなつたぢやないですかと言ひ、おみよは半玉が夜さむの道をあるくやうに、瘠せた肩をすぼめた。寢てゐたまへ、だいぶつもつたやうだからと一寸とばかり障子をあけたが、まあ、と、おみよは隙間もないわた雪を夕近い中庭の塀の上に見て、襟足をすぼめて見せた。

「ぢや、ごめんなさい、すこし横になりますさかえ。」
それでも重さうなからだを腰のところをどんよりと病しげに折つて、そつと横向きになりふとんをかむつた。所在ないつやのない手が天鵞絨の襟のところに置かれたが、見るからに物憂さうであつた。露及は少時默つてゐるうちに或る陰氣なたいくつめいた氣分をかんじた。それは凡て病人の枕頭にゐる共通の陰欝さであつた。この狹い部屋にあるものは何か、ちりや埃にひとしい忘れはてる人と人との日常だつた。何の莊嚴もまた價値永い詩でもなかつた。が、露及はふたたび鐵瓶の湯氣がすこしづつのぼりかけ、また消えるに早い音に耳を澄したが、それはやはり徹頭徹尾ものの果敢なさをそつくりささやいてゐるものに過ぎなかつた。
「盲腸といふものは人間のからだの中でいらんもんやさうですね。どうしてそんないらんものがあるのやら。」
「字でかいてもめくらの腸とかくんだからね、手術をして取つた方がいいと醫者は言つてゐるよ。」
「おなかを切るんですか。」
「さうさ。」
「おそろしや。」
露及はしまひに息づまる退屈を感じ出し、折角大切にしたまへと言つて、丹塗のえん側から雪の通りへ出た。出發は明日ではあつたが關係のない隣り近所へそれを知らせないよう

に、露及は默つて話さなかつた。

雪の塀ぎは梅もどきの枝が覗き出てゐるのに足をとどめ、傘のとんぼでその枝の雪をはたはたと落して美しいと思つた。その塀ぎはに小さい川がながれ家鴨ががあがあと啼いて、雪と水の中を震へながら泳いでゐた。家鴨の脊中にふうわりと綿雪がかぶつてゐたが、ときどき羽搏いてはそれを落した。露及はふしぎな珍らしいものを眺め込んでゐるやうな顏貌で目をさらしてゐたが、これは十年前にもこんな風景を見たことがあると思つた。

「あの時やはり家鴨がゐたらうか」

露及は若い時分の冬景色にも、やはり若さが潑剌として跳つてゐさうに思はれた。眺めてゐる露及自身の中にも、その時分は寒風をつんざくやうな氣概があつた。その時の眼の前にも心にも今あらためて思ひ出すことがない。たゞ、ぽんやりと一群れの家鴨ががあがあと啼いて、青い葱が流れ去つて漫然と潑剌の中に一味の哀愁を感じたものであつたが、それが十年の後には何といふ妙な成長をつゞけて來たものであらう。諦らめ切つた、むしろおすましさんのやうなさとり方をしたものであらう。露及はみづから冷笑ふ思ひで、うそ寒い音のする小川のそばを離れた。そして人家には灯の色がやうやうに染つてゆくのを、しんしんとして聲なき雪の中に眺めた。あんな薄暗い丹塗りの二階の間で、おみよは凡ての女がさうあるやうに老け衰へてゆくであらうと思つたが、さういふ人世の些事も冬ざれの一日の過ぎ去るごとく、あとかたもなくなるだらうと思つた。

三

セルロイド製の鳥籠の中の一羽の鳥が、いつの間にか柵を拔け出して列車の床の上に落ちてゐるのを、まんじりともしない子供が紅い顏つきで昂奮し通して、あゝあゝと言つて指差した。黃ろい親指くらゐのおもちやの小鳥だつた。どうして柵から拔け落ちたのかと露及はそれを拾ひ上げ、また鳥籠の中へすつぽりと入れてやつた。

「これでいゝね。」

「あ、あ、――」

いつも靜かな田舍の家の部屋に慣れてゐた女の子は、車中のひとびとに目を走らせ絕えず吃驚りしたやうな眼付でゐて、すこしも睡付かうとしなかつた。あんまり睡らないとあとで熱でも出したらこまると思つても、やはり馳る列車の中では睡らうとしなかつた。寢臺を取つてあつたが向側に印度人がふたりまで寢てゐて、その顏を珍らしがり怕がつて落着がないので、また二等室へ取つてかへしたりした。夜明け近く信州の山奥へ這入つてもやはり睡らうとしなかつた。露及は身もからだも疲れてゐたが、それでも恥や外聞を忘れて子供

を抱いて寢つかせようとしたものの、いつもの手には乘らないで四邊へまんまるい瞳を走らせ異常な興奮をつゞけてゐた。露及は子供をねむらせるために毎晩のやうに抱いてやつたが、ふしぎに子供は瘠せたかれの胸の上ですやすやと美しいひとみを閉ぢたりした。寢つくとやゝ重いからだが一そうしみじみと重りかゝつてくるのが樂しみであつた。それ故、露及は前に亡くした子とは反對に、あるひはお湯をつかはせ、毎日檢溫をしまたとぼけた子守唄をうたつて寢つかせた。それが露及にはえも言はれぬ身に沁みた仕事だつた。

向ひの席にゐた十二三の女の子が、夜明けごろになつて目をさましハモニカを吹き出した。目のみえぬ子だつたがハモニカをうまく吹いた。山狹からしぼり出された朝日が窓硝子を透し、露及の方の窓からまた外へぬけ出て、螢のやうに暗い列車のかげに添うて走つてゐた。が、やつとそのころに子供はうとうとと一とねむり短かい睡りをしただけで、ぽつかりと朝日の沁みた山の方をながめたりした。

田端の旅籠屋の二階で一家五人が朝飯を食べてゐると、或る日水つぽい雪がなゝめに人家の屋根へ吹きつけ白く埋めた寒さも烈しかつたが、旅籠屋の箱火鉢を抱いて家をさがしてゐる氣もちとは反對に、どこかのうのうした心もちだつた。お茶を飲んだりして、永年住み馴れた東京の地に、こんなに佗びしい暮しをするも却つて嬉しかつた。子供はべつに熱も出さないで平常のやうに睡りつづけた。以前ゐた家があかないのでその空くのを待つために、手ごろな家をさがして見たが、八幡さまの欅の並木の見える二階家へ越すことにした。

「前の家の門の前へ出て、はつと氣がついて引き返したくらゐだよ。やはりあそこが自分の家のやうな氣がしてね。」

露及はこんな話をした。すると甥もやはりあそこの前を通ると變な氣がすると云つた。

二階家の二軒長屋ゆゑ隣りで剝く蜜柑の匂ひまでが、壁のすき間から酸ばく走つて來たりした。大方となりの家のこほろぎが時にはこちらへも來て秋は啼くだらうと、風流がれば風流でもないでもなかつた。大龍寺墓畔の欅原がすくすく細かい枯れ枝を立てて、ときたま迅いひよどりが高啼きをしたりした。日かげが毎日さすので、さういふもの、珍らしい田舍でそだつた子供は、溫かい日かげの中で毎日二階で遊ばせることにした。露及自身にもよく陽氣の勝手は知つてゐるもの、、毎日天氣つづきの溫かい日かげだけでも、からだに利くやうな氣がした。

「國の人が冬の間に出て來たら、默つて日和へ座蒲團を出してさあどうぞ何もないけれどと言ふんだね。こんな日かげなんて國の方ぢやまろで無いんだからね。」

露及はさう言つて日光を珍らしがつた。

追々客があるやうになつてから或日カフエへ出てゐる、も

と女中をしてゐたのが訪ねて來て、こんな姿でお目にかかれないんですけれどと詫びるやうに言ひながらも、その腕に金時計を卷きつけてゐた。かれは女中をしてゐたときからも腕時計がほしいと言ひ暮してゐたが、もう光るものを指の間にも挿んでゐた。露及はその女があとで、默つた客には默つてかかるし、ふざける客にはこちらからもふざけてかかるんですと言つたときに、女といふものは置くところ次第でどうにでも變質するものだと思つた。足を洗はうと思つても自分が身をひくとカフエの客が減つたりするので、主人へも氣の毒だからと滿更うそでもないらしい口調だつた。

荷物がつかないので、さきの家の隣りや近所からいろいろなものを搬んで來てくれたり、霜島先生から机をかりたりしたが、さういふ人情の間にもだんだん住みなれたむかしの心にかへつて、電車にもこころ靜かに乘れるやうになつた。唯、煤煙でよごれて生色のない樹や草をみるごとに、國の美しい松のみどりに心が惹れた。そればかりではない。子供の鼻の穴からも煤ばんだはなが出てくるのには、物佗びしい以上のつらさが感じられ、はじめはどうして何時までも汽車のすすが出るのだらうと思つたのは、この煤煙だつた。露及はいまさらにこの都會によい空氣のないことが空恐ろしく感じられたが、それはみんなが同じい目にあつてゐるのだと思ふと、氣もちがらくだつた。

或晩、ゆるく搖れたので、露及は子供と二人きりゐたので慌てて外へ飛び出したが、近所に二三人出てゐるきりでしんとしてゐた。子供を抱いたまま星ぞらを見上げ、足袋素足で出た自分はよほど田舍者のやうに思はれ、なぜか恥かしい氣がして、ねづみぢや、ねづみぢやと言つて、子供をあやしながら皆の前で足袋素足のことは默つて話さなかつた。全く露及は一年ぶりでこのえたいの分らぬものに襲はれたのだつた。

國にゐるころからのくせだつたが、妙になまの花を生けることをしないで、木槿の實や桐の實、あるひは虎杖の枯れ穗。野いばらの黑ずんだ實などを川原へ出て剪つて來ては、床の間の壺に挿したが、こちらへ來てから花屋へ使を出して買はせても、水仙とか寒菊くらゐで派手な花ばかりで氣もちに添はなかつた。それに古備前や南蠻ものには生色の烈しい花などよりも、木の實草の穗がよく壺の色をさまたげなかつた。べつに風流がるわけではないが自然にさういふ心づかひになつてゆくのが、わたし自身にはふしぎではなかつた。それ故、仕方なしに自身で花屋に出かけてみると、なまなましい花ばかりで、椿の花を三束ほぐして見せて貰つても、生花もののたけの伸びたものばかりで、枝振りのおもしろいのなぞなかつた。親切な花屋のあるじは最後に一枚を取り出してこれを貰ひませうと言つたわたしに、厭な顏もしないでそれ

は五錢ですと、三束もときほぐさせたのを別に苦にもしないで、當節そんな一本の花をあなたのやうに選つて買つてゐらつしやる方はたくさんありませんからね、いえ、どうぞご遠慮なくとハツキリした東京辯で言つた。わたしは五錢の椿と猫柳とを提げ、

「どうも氣の毒です。」

と言つたきり寒い通りへ出たが、花屋のあるじの心に身も溫まるやうな氣がした。國の方だともつとしやれた垢ぬけのした花があるんだが、フリイヂヤやじや香撫子の流行る東京では、つるもどきさへ求むるにむづかしいと思つた。

田端の八幡さまの坂の上り口で、冬木のまゝの枝のさきにもくげの實のはぜたあとのような實が、枝の先きに褐色に日からびて着いてゐるのを見ると、見たやうな枝だと思つたが、すぐ備前の平たい鍔口を目にゑがき、あれに生けたらちやうどよからうと思つた。なほよく氣をつけると、その木に絡みついた美男かつらの、實はくろずみ乾びてしまつてはゐたが、霜枯の葉裏に茜の強い葉なみが何とも言へず好ましかつた。しかもその葉なみが蔓になつて垂れてゐるのが、二枚目から五寸くらゐ離れて一枚殘つてゐる。その姿は全くたとへやうもなく雅びてゐた。あれを一つもらつてやらう。

そこはもと植木屋でいまはおばあさん一人きり住んでゐて、植木は賣り滅らしにしてゐたし、これまで色々買つたからわけなく頒けてくれるだらうと思つた。いつ來ても寒竹の多い家だ。

「あれは蜂の巣といふんださうです。どうぞいくらでもおもちくださいまし。」

さう言つておばあさんは鋏を手渡ししてくれた。褐色の實は蜂の巣、——さう言へば蜂の巣によく似てゐた。わたしは美男かづらの一枝と、蜂の巣とを剪つて家へもどると、それを床の間に生けて見た。壺の色とよく落着いたしつとりした澁さを、やゝ暗みのある床の間に象眼のやうにはまり込んで、それを眺めてゐると初めて心が落着いてくることを感じた。

妻が里

出迎への人もなくこつそりと停車場に降り立つて見たが、ぬか雨に濡れた電車や、砂利道の隙間にたまる水溜りにも故郷の七月の色が深かつた。前の晩萩生の家で二人寢そべりながら東京の住居が窮屈でゆつくりのうのうした氣もちにならないことや、近く萩生も利根川の實家へ行つて四五日ねそべつて來る氣だと言つたが、それまで決心のにぶりかけてゐた秋本も、急に母の用件かたがた東京から足を退く心固めが出來かかつた。

「僕が四五日遊んでかへると妹が四五日行き、その次ぎには家内も行くことにしてあるんだ。僕は倦きるまでゐるつもりなんだがね。」

「君が行くといふんで僕も行きたくなつた。何か土產はいらないか。」

「河豚の鹽漬をくれたまへ。」

萩生はこの春久しぶりで上京して借家してゐたが、三十八年も父母兄妹と暮したせゐか事々に故郷の食物を懷しがつた。文學的異常な才分も故郷では印刷小僧にまで輕蔑されて、萩生が通ると指差してのらくら息子のやうに言ひそやした。今も少なからぬ仕送りを父から受けてゐたが、自家の座敷でのうのうする氣持は秋本のやうに故郷に家のないものよりも深かつた。一家のものが二タ月目くらゐには利根川へ氣休めにでかけた。

その前の晩いつになく萩生の妹までが行つてゐらつしやいましと言つたことや、萩生も旅行に出てゐるだらうと俥の中で搖られながら思ひ出した。長町川岸の用水の古い石垣べりに故郷らしい巴旦杏の熟れた下枝が水面にすれすれに垂れかかつてゐるのを見て、いまが果物の季節らしいと思うた。

宿につくと松の枝を透いた糖雨に音もなく、古い池の半ばを繁つた河骨の陰でぽつかりと浮いた雨蛙が、程よい時間を置いては友呼ぶらしく啼き立つてゐた。やつぱり來てよかつたと思うた。馴染のある宿だつたが女中は出代つてゐた。

「僕は離れをかりたいんですがね。明いてないのか。」

「唯今はラヂオの方がゐらつしやいますのですが、すぐおあけするやうにいたします。」

秋本は草深かるべき此處へもラヂオが來たのかと思ふと、何氣ない不機嫌を覺めたやうな氣がした。が、間もなく離れが明いて引き移つた時には、ラヂオきらひな秋本の機嫌はなほつた。誰にも會はないでこつそりと四五日寢そべつてゐたい秋本は、ともあれ母だけには逢はねばならないので、俥やを呼んで迎へにやつたが、外出をして留守だつたと空車を引いて歸つて來た。あとで俥で母を迎へに遣るなんて生意氣のやうな氣がして、これはこちらから出掛けるべきものだと考へ直した。長途の疲れもあつたので音もない糖雨の松の葉なみを眺め入つてゐたが、わけもなく人間の行末といふやうなことまで思ひ出された。

午後に高臺の寺の多い町に母の借りてゐる二階をたづねると、ちやうど今から行かうと思つてゐたところだと言つた。

「とにかくお前からも一應あいさつをして貰ひたいと思つてね。二階の上りくだりにも骨が折れるし、水一杯にも大へんな廻り路だから。」

「妻の里でもそれは入らつしやいと言つて手紙は來たんですがね。あちらにも年寄夫婦もゐることだから、どういふことから氣拙い思ひをしなければならないかも知れない。若し話が纏つてもなるべく控へ目にしてほしいんですね。」

「そりや解つてゐる、年も取つたから仲たがひするやうなことはない。」

母は口前ではさういふものの、あちこちを越して歩いて何處でも落着けなかつた。みんな結局は氣拙い往來で會つても口を聞かないやうな具合で越したりしてゐた。

「人の家へ行つたらそこの暮しをかれこれと口を出すのはよくないことですよ。あなたにはそんな癖があるから何處でも折合が良くないんです。」

「いやこんどはそんな事もなからう、あそこなら死水も取つて貰へるし、他人とちがふから。」

妻の實家は年寄夫婦に妻の姉とがゐたが、その姉さんの手紙では面倒は見てあげてもいい、幸ひ離れが明いてゐるから彼處へ這入つてもらへばいいのだが、何時どういふことから若しも氣拙いやうなことになりはしないかといふことが心配だと書いて、そんなことから妹——秋本の妻に餘勢を引いたりして困るから、一應あなたからお母さんにとつくとお話くださつた上にしていただけないかと、二十七から後家で通して花のお師匠さんをして來た人らしい、明快な事理を盡した手紙だつた。秋本は老いて益々頑固な母親も知らぬ他人の二階借りをしてゐるより、妻の里にゐた方が萬一のことがあつても母親自身も安堵であるし、秋本も氣が安まると思つた。母には特に言つて置くやうにするから是非離れに母を置いてくれるやうに書き、秋本はいづれ歸國のせつお話すると返辭をした。

第一かういふ田舍で年寄りが一年に一度くらゐづつ、宿を越してあるくといふことが世間體もわるく、本人も落着きのない、うら悲しい暮しであらうと秋木は考へ今度は一つ話をまとめたいと思つた。こまごました事は拔いて、

「自分だけのことをして人のことは氣にかけぬことです。」

「わたしもそのつもりでゐる。」

母はさう答へた。

窓越しに美ごとな杏が枝一杯に撓みついて、濡れた消炭いろの板屋根の上にかげを映してゐた。秋木はその美事なのに驚いたが母は色はいいが酸ばいと言つた。よく見ると杏にはそばかすが附いて成程酸ばさうであつた。こんどは誰にも會はぬつもりであるから、秋木の來たことは誰にも話をしてくれぬように母に話をした。

階下のよめさんが枝葉のある杏を盆に盛り、暗い段梯子の上り口でお客さまにあげてくださるようにと、母を呼んで言つた。やさしい女學校から卒たばかりのよめさんだつた。人の花はうつくしいものに見えるものだが、しかしそればかりではないと好意をもつて杏に齒をあてて見たが、よめさんは美しかつたが杏はひどく酸ばかつた。

「明日にでも里の方へ行つて話をすることにしませう。」

秋木は段梯子のくらいのを手さぐりに降りながら言つた。

「盆が濟んだらすぐに越したいと思ひますから。」

涼しい寺領のある町には早や蟬の聲が秋木の耳に親しかつた。秋木はその聲を油ぜみではなく灰色の小紋のある小蟬であると思つた。うら盆の近い町に切子燈籠を下げて墓詣りらしい人の連れが、電車から幾組となく降りた、秋木は歩いて行つても電車に乘つても、人に會ひさうに思はれ、一そ電車の方が誰にもあひさうに思はれなかつたので、濡れた昇降口にこつそりと後見たい氣もちで足をかけた。

母ははじめ川べりの洗濯屋に居たが、それも一年と續かないで或る寺の座敷を借りて住んだ。が又何時の間にか下町の道具屋の離れに越して、こんどこそ落着くだらうと思つたが、間もなくもとの寺の座敷へ借り戻つてゐた。どの家でも物も言はないやうな別れやうをして、荷車を指揮する母の疲れた顏を東京で手紙をよみながら考へると、人事でないやうな氣もしたが一體どうする氣だらうと思うた。その寺も去年の秋の末には又引越して今の二階を借りたのだつたが、こんどこそ落着いて妻の里へ行かうといふ氣らしかつたが、うまく先方の老夫婦との折合が付いて行けばいいがと考へると、秋木は大きな家を二軒まで賣り拂ひ、むかしからあるがらくた道具を車に七臺まで積み込んで搬んで歩く母親の、珍らしく他人と容れない意估地な性質を鳥渡頬笑んで勇ましくも思うたが、それよりも何かうら悲しさが身に沁みた。

朝眠がさめると雨は濛々と庭を覆うて、松の幹に生えた苔ばかりが蒼々と目についた。そのくせ遠くからの蟬のこゑが沈んで來て、洗面所の窓さきから射す明りにも暗さがつきまとふやうな日だつた。秋木は離れの縁側の冷たいのにべつたりと坐り込んで、こんな日がらが親しく肌に馴れてゐるやうな思ひで、池の面をたたく森々たる雨を聽いてゐた。舊藩の時にこの庭をつくつた男は窮かに兼六園の急所を三ケ處ばかり抉り取つたものらしく、そのため何百石かを領してゐた此處のあるじは百日の閉門を仰付けられたとの事だつた。それが明治になり荒れたまま今の宿屋の庭になつてゐた。この庭作りは餘程變な男らしく兼六園の諸々の景色の中でも詰らない龍のゐる井戸と言はれたところを眞似て、石彫りの拙い鯱のやうな二頭の龍を池のへりの石の上に置いてあつた。それが蒼い水苔がつき風雨にさらされ、雅致のある風貌を苔の上にそなへてゐたが、昨夜も蛙のこゑに睡り込まされて不圖目をさますと、漏電のやうなひかりが斜めに蚊帳を掠めたので驚いて寢呆けて見入るとそれは螢だつた。

「螢ならたくさんに居ります。」

と、けさ女中は言つてゐたが、この二頭の拙い石の龍も濛濛たる雨の中をきつと池の中へ入つて、河骨や水芭蕉の間を泳いでゐたにちがひない、——雨戸を繰つた時には淺い水の面はけぶつて濁りを交へて見えた。不恰好な石の龍が泳ぎながらゐるありさまが、秋木の描く蕭條たる百年の庭に中にあつた。全くこんなとぼけた子供らしい庭作りがゐたとの面白さが、秋木の心を太平にした。市の中にこんな古い庭をもつてゐる宿やは最うなからう、それでゐてどうやら二流くらゐの格の宿やらしかつた。秋木はどうして一流とか二流とかいふのか、腹立たしくも思はれた。秋木はここは一流だとは思はねばならなかつた。石といふ石の間には、品の變つた能く四季を見渡した下草の用意がしてあつた。秋の乾いた石の間から誰が曼珠沙華の獅子がしらが上る用意ができるものか、まして小型の一番すぐれた石燈籠が離れのうら庭にあることを、こんなにもひつそりと内所に据ゑられるものぞ、——秋木は市井の一流の旅館の縁板を白くする埃を嗤うた。そして世にいふ人事一般の一流もけだしこの類ではないかと、ひそかに薄濁りした水のおもてに辷るが如くして如らざる水すましの、あくこともない條長の姿を見とれてゐた。

が、秋木はそのとき昨日のお晝にふと手紙を入れに出て、小路の角で、擦れちがひに會つた痩せぎすな見覺えのある男がひよつこりと頭を下げて挨拶したのに慌てて頭を下げたが、その男は大きな鮑貝を右の手に一枚づつ大切さうに抓んでゐた。手紙を入れてかへると帳場に先刻の男がきつちりと疊の上に坐り、花の稽古をしてゐるらしく、磯馴に鋏を入れてゐた。あれが主人だつたかと初めて氣がついたが、女中が

お晝の膳をはこんで來たのをちらりとて、鮑のさしみがついてゐるのを眺めると、物悲しい賴みにならぬ人生をぬすみ見たような氣がした。大方、小路の角で間にあはせに取つて來た鮑であらうが、秋本の信ずるごとき一流の此の宿のために味氣ない氣がした。しかしそれも田舍めいて愛嬌があるではないかと思うたが、此の主人はあまり庭のことは關はないと聞いて鮑もあさましく感じた。八十五になる隱居がゐて色色草木の面倒を見てやつてゐると女中は言つたが、その女隱居はあたまを圓めて一部屋に寢起きして、膳も自分の部屋で食べてゐた。女中など手のつけぬ客のものをその部屋の闇の上に置くと、隱居はそれを嬉しがつて食べてゐた。氣が向くと庭へ出て來て永い間かかつて不時萠えの枝葉を拔いて圓ものの植木の世話をしてゐた。頑固な、寺詣りと植木の世話より外に人生の些事にはなれぬ人らしかつた。

「でも君はよく氣がつくね。」といふと、

「何時の間にかさうして上げるくせがついたのです。」と言つた。

秋本は殊勝な女中の心づかひに敬意を拂ひながら、退屈な濛々たる雨をながめてゐるうちに、にはかに手を叩いた、そして俥を呼で外出の用意をしたが、その思ひついた考へは秋本自身にも懷しげな、よろこばしい思ひつきであつた。

秋本は裏町の李や巴旦杏や唐林檎の色づいた築地の塀を送迎する幌の内で、やれやれ樂しみなといふ寛ろいだ氣もちで小さい用水を渡り、あをくさ屋や魚やのある町へ出ると、大川べりへ出てくれと俥やに聲をかけた。川べりの向う土手につづいた河原は陰森と繁つた草のあたまに、白い穗を翳してゐるなどあつた。

「こちらに入らしつたときによくお乘り下すつたことがありますよ。」

「へえ。」

秋本は幌の内から俥やのうしろ姿を見て、見覺えがあるように思つた。俥やさんは能くおぼえてゐてくれたものだと、些細なことにも人情のほつれが感じられて興深く染々するのだつた。

橋の袂から土手をゆつくり行つてくれるように言ひ附け、幌の埃を拭きながら、前に一年を暮したことのある川岸町の家を見ようといふ氣だつた。黑塀を過ぎ玄關前の庭先きを覗き込むと、秋本が植ゑて置いて來た芭蕉が四五尺にも伸び擴がり、水々しい玉卷が幾本となくつッ立つてゐた。秋本は感慨に幸福な感涙さへ漂はせながら、いろいろな仕事をした二階を見上げると、青すだれが斜に屋根の上に食み出て、すぐ露虫の夜這ふ景色を思ひ出した。俥は過ぎた。芭蕉は何本生えてゐたのかと考へながら、俥は茫々たる河原つづきの土手の上を駛つた。そして不圖目についたのは屠牛所前の石垣に

今年も釣をしてゐるらしい子供の一人を、煙る雨の中に眺めたのだつた。

去年からあの子供は釣りつづけてゐるやうなものだと秋本は思つた。さつきの二階にゐたころ、毎日子供の釣を垂れてゐるのを見てゐたが、あんなにも好きなものかと秋本は呆れて毎日見てゐたのだつた。それだのに今年も同じところに去年の子供らしいのが糸を垂れてゐる——秋本は忍ばずの池のほとりで、蓮の葉と葉と茂る水面の隙間にやつと糸を入れて、數限りある弱々しい鮒か鯉かを釣つてゐる東京の子供のことを思ひ出して、何やら物悲しかつた。といふより此の子供が去年も今年も暇さへあれば釣糸を垂れてゐるのが、宿緣のごとく秋本には數奇に目に映つてくるのであた。

次ぎの橋へまで行くと秋本は俥を捨てて、對岸の人通りのない土手をぶらぶら歩く考へであつた。雨はやはり濛々と罩めてゐたが、よく散歩した土手のことて、一草一石にも親密の思ひが增つた。例の釣をしてゐる子供のそばへ行くと、何處かの長屋者の小汚ない子供のやうで、こちらで何か釣つてゐるのかねと言つても、こちらを向くには向いたきり無愛想にぶつつりした子供であつた。小さい尾鰭は流れに浸してあり石垣を緣取つた草のわきに、うしろの滅つた下駄がならんでゐた。合羽のやうなものを着てゐる、——秋本は話してもも返事をしないので仕方なしに歩き出した。よつぽど、變な子供だな……。

秋本はちやうど元ゐた家の眞正面の土手の上で、煙草をふかしながら考へ事に耽つてゐると、下流から空の魚籠を擔いださかなやらしい素足の男の來るのが見えた。近づくと毎日自家にやつて來た男であつた。

「や、どうもお久しぶりで……。」

「しばらく、もうかへりかね。」

「こいつを片づけようと思ひまして、しかし珍らしいところでお目にかかりますね。」

空籠の中には賣れ殘りの鰺を三本ばかり持つてゐた。秋本は二三日前こちらへ來たのであるが、すこし所用で忙しいからこんどは近隣へは挨拶に寄らない心算だから、君も僕が三日ばかりして歸つたあとで話すなら話してくれたまへ、それまではなるべく默つてゐてくれるようにと秋本は笑ひながら言つた。「それから河豚の鹽漬をすこし宿までとどけてくれたまへ。」と何も注文しないわけにゆかないので、左う言つて別れた。しかしあの男と話してゐると、去年のやうな新しいひやかしの口をも利けない、どうもこれは異鄕の感じだと思つた。親しさはあつても元ゐた家を眺めるやうな、東京を離して考へられなくなつた異鄕の感じだ。やはり人に會はないでこつそりと歸つた方がよいと思ひ、橋詰で人目を忍ぶやうな思ひで俥に乘つた。宮本さんの前で雨の中を遊んでゐる子供

を呼びに出た聲の低い美しい奥さんが、前幌のはだけた秋本の顏にちらりと目をくれ、いぶかしさうに見送つてゐたが分るまいと秋本は思うた。宮本君とは親しくしてゐたが、結婚前に宮本君はその日記の三四年分を見せて求婚したのださうであるが、すぐ話は纏つたとかれ自身言つてゐた。すげなくその前を通りながら寄らないのにも、何か濟まぬやうな氣はしたが、却つて餘情があるやうに思はれたからであつた。

妻の里は樹の多い裏町にあつた。築城當時に故意と紆曲した町なみに作つたもので、何處の家も二階は禁められて六十坪に決つてゐた。古めかしい木や足輕長屋が續いてゐるうちの一軒、――白い粉を吹いた李の實の垂れた格子戸をあけると、妻の姉さんが出て來て何處にゐらつしやるのか分らないので、東京から知らせはあつたものの、いづれお出でになるだらうと心持ちにしてゐたと言つた。秋本はすぐ用件を話し出した。

「母は非常に來たがつてゐるんです。やはり年取つて一人暮しをしてゐるのが段々にさびしくなるのでせう。」

「わたくしも來ていただくのに決めてゐるんです、けれどうちにも年寄りがゐることですし……」

「だから僕からも色々說敎して置いたんです。なるべく人のことは氣にかけないでゐるようにとね。」

「大概大丈夫だと思ふんでございますけれど、それに家の母はなるべく控へ目にしてゐるでせうし、父のことはああして終日臥たきりなもんですから、まるきり關係がないやうなものでございますから。」

「お父さんはどんなあんばいです。」

「年弱りでございませうね。この間もをかしなことがあるんですよ。」

姉さんは笑つて心臟で臥てゐる病人がどうも天井から塵が落ちて來ていけないと言ひ、眼鏡を掛けねばならぬと頑張り出したりして困ると言つた。それに全きり見えない眼をしてゐて、時々大學目藥をさして、どうも目藥をさすと見えるやうな氣がすると言つて、藥が切れると八釜しく叱りましてね、實際はぼおとくらゐ白いものなら白いものが見えるらしいとも言つた。

「眼鏡だけはおよしなさいましと言ふんですけれど、中々やめないんでございます。臥てゐて塵が這入るわけがございませんぢやないんですか。」姉さんは又言葉を繼いで、

「お母さんはだいぶもうろくの方でしてね。今言つたことを最う忘れてしまふんですよ、二三日前もあなたが入らつしやるかも知れないから、そしたら出先へ知らすやうに言つて置きますと、あなたをお母さんと間違へて知らせるんですもの。」

半身不隨の父親と耄碌してゐる母とに挾まれてゐる姉さん

は、始終日生花の出稽古に町の端れから郊れまで歩いて、夜は近隣の娘だちに鋏の入れ方、枝のため方などを敎へ、半日の間も手足を伸す閑暇さへなかつた。そこへ秋本の母が離れを借りたら、まるでこれは年寄りどもに取り馮かれて、溺れかかるやうなものだと思うた。ただ勝氣なだけに遣り通せるが大概のものなら參つてしまふだらうと考へた。

「子供などならどんなに澤山ゐてもよござんすが、默つてじりじりと來る年寄りは餘計に氣苦勞なもんですよ。しかしあなたのお母さんはまだお達者ですから、年寄り連には却つて話對手になるかも知れません。」

「しかし三人の面倒を見るのは大變なことですね。」

「いえ、同じことでございますよ。そのうち片づくようにもなりますから、今ンところ誰が先きに片づきますことか、そんなことを考へるんでございますよ、それに三人揃つて見ますと……」

「そりやさうですね、誰かが一人まゐるとあとを引いて、つぎの一人がまゐつてしまふ例がありますからね。」

老年といふものは妻の方が倒れると、半年足らずに夫も死ぬことがあるものだ。妻の父が最初になくなるとすれば、つぎには秋本の母親か、妻の母かの孰方かでなければならなかつた。見て悲しんでぽつきりと折れてしまふ、一人が手本を示すようなものだ、何のことはない、三人巴になり生き競ふようなものであるが、また亡くなるのに競爭をするようもないものだと思つた。さしづめ妻の父は八十二だがこの順序で始まるのだらうか、秋本は變な考へを持つやうになつた。これはなるべく一人でも先きへやつてはならない、若しさうしたらあとは一と耐りもなくばたり、ばたりと倒れてしまふだらうと不安であつた。

「生きてゐられるうちはどうかして行きますが、片がつきましたら家をも片をつけたいと思ひましてね。」

「賣るんですか。」

「仕方がないんでございます。なかなか細腕ではやり通せませんからね。」

この町の人の家を失ふのは何時でも人が死んでからであつた。秋本の母もさうだつた。二軒とも賣り拂つて金のあるうちに小ぢんまりした家を見つけるやうにしながら、段々に金が減つてゆく、そして焦り出す時分には足りなくなつてしまふ。そのうちにといふ氣持で何かの機會をねらひながらつい一文なしになる、吝々しながらじりじりと人生の波が嚙み碎いて、何も彼も持つて行つてしまふ、氣がついたころは老軀を投げ出されてゐるだけだ。秋本はこれは家を賣る前にその二分の一くらゐの家を見つけ、何時でも買へるやうにして置いたらいいのだと思つた。有金を攫んで散歩でもするやうな悠々した氣もちで、小ぢんまりした家を見つけようとしたら

既う遲いやうに考へられた。樹や草や晴天までが今はせち辛く壓しよせてゐる瀬戸際で、こんな考へは飴を舐めてゐるやうな甘い考へだと思つた。

「しかしその話は考へものですね、あとで後悔したりなんかするやうでは…」

「ええ、いくら考へても同じことでございますから。」

姉さんは瞭然と左う言つて未練のないやうな顔付をした。この人なら下手なことはしないだらうと思つたが、それさへ當てになるものかと考へた。

「離れをご覽になりますの。けさ綺麗に掃除して置きました。」

「では見せてください。どうもいろいろお世話さまです。」

「狹いんですけれど家のものと離れてゐられるからいいんですよ。」

離れは六疊で緣側づたひに行けるやうになり、李と老梅の繁つた狹いけれど蒼々した庭が腰高の窓ぎしにあつて、母ひとりだけなら靜かに暮せさうに思はれた。中々小ぢんまりとしたいい部屋ですね、秋本はさう言つて老梅の根元に蒸しついた苔や川石らしい棄石などを眺めた。

「荷物は八疊の方に入れるように明けときました。」

「それはどうも——。」

秋本は八疊の方も見廻りながら、「これで落ち着いて貰つたらわたくしも安心ですよ。知らない他人同士の二階などで、夜中にぼつつりと死んでゐたりすると困りますからね。よくそんなことを考へることもあつたんですよ。」

「充分にはできませんけれど、まあお互樣でございますわ。」

秋本は小さい泉水に入れてある生花用の、磯馴の一束に目を觸れた。弱々しい金魚の二三尾が痛い針のある磯馴に肌ふれぬように泳いでゐた。緣側、天井、柱、さういふものが古く蝕んで見えた。

「ではなるべくわたくしの居るうちに越させるようにしますから。」

「そのときはお手傳ひしますよ。」

姉さんは前庭、——玄關わきの庭へ秋本をあんないして、

「あなたのお庭だと言つて朝から葉一枚散らぬやうに掃除してゐるんです。」

國の方を引上げるときに、手洗石や唐棕梠、石、しの竹、寒竹などを妻の里の庭へ移し、植木やに指圖をしながら、幸ひ老梅があつたのでそれを中心にして些やかな庭を作り、妻の母のために置いて來たのだつたが、老いた彼女は秋本の庭だと言つて暇さへあれば掃いたり雜草を拔いたりして、今かうして見ても一塵を交へない澄んだ打水さへしてあつた。秋本が故郷にゐる間にあつめた安ものの石や縞蘆など、元氣よく根を張つて守られてゐた。

「お老母さんらしく綺麗にしてありますね。」

秋本は自分の殘したものがかうも叮嚀に守られ敬まれてゐることに、羞恥を越えた心嬉しさを感じた。秋本夫婦がゐたころの老母は、妻に叱られながら色々なお菜になるものを年寄りらしく搬んで、老い朽ちた一片の好意を示した。

その老母は來るごとに財布を忘れて行つたので、おばあさんの財布といへば、いつも秋本ら夫婦の寂しい暮しの笑ひの種だつた。こつそりとその中へ小遣を入れて置いてあげても氣がつかないらしかつたが、あのころから少しボケてゐるらしかつた。姉さんと話をしてゐるので勝手に何か働いてゐたが、ひよつこりと立關へ出て來て、どうも手がとゞきませんと言つた。その顏の老けたことよ、秋本はそんな思ひで、あいさつを交した。

「梅がだいぶ實つてゐますね。」

「家の分なら餘るくらゐです。干して送りませう。」

話すこともないのでおばあさんは勝手へ引き上げた。そのうしろ姿を秋本は見戍つた。

宿やに悠長に坐り込んでゐると、漸と晴れた空から蟬の穉ない聲が落ちて、疊の上に何かかげを映すやうだつた。秋本は何か書かうと思つた。からだの何處にも疲れがなかつた。机の上に短册が置かれ墨が磨られてあつた。秋本は緣側から机の前に坐ると短册を物色して、俳句を一つ考へふけつた。が先刻から机のまはりを離れない羽蟻のやうな羽蟲が、ふと机のまはりでぶむぶむ言つてゐるのでなく、どうも硯のわきに舞うてでもゐるらしかつた。かれは硯を見たが居ない、が羽音がしてゐた。秋本は耳を持つて行つた。かれは最後に一本の筆の穗のさきの中から 靜かにすり拔けて出た一匹のほそ長い羽蟲を見て、これは面白いと能く簾の竹などにもぐる蟲だらうと思つた。

時を經てまた羽蟲は來た。女中が最う短册が書けたらうかと、それとなく覗きに來て、あたりの散らばつたものを片づけ去らうとした。

「短册かけはあるのかね。」

「ございます。」

女中の顏はあからんだ。先刻も古いのならあると云つたが、直覺的にあれは嘘をついたのだなと思つた。行末は下宿屋を始めようとして三年の間に千圓つくつたといふこの女は、事々に悲しく秋本の目に映じた。ただ悲しく、わけなく秋本自らに引きくらべても悲しく…。

流れ藻や雲りてあつき水すまし、秋本は筆を置いて、揮毫を托まれたときのがらにもない自身への羞恥をほんのりと感じた。對手が物の分らない人のときはなほその感じが深かつた。自分から進んで何か書きたいと思ふことがある、さうい

ふときには書かなくともいいことが染々とさせた。

秋本は庭へ出て芝草の間にこほろぎの子を見つけた。胡麻粒くらゐの啼かないこほろぎの子であつた。時既に至れりわが神なんぞ我をためすや、秋本はひとりでこんな戯談を言つて滿庭の秋風をせめぐ氣概をもつた。こほろぎの子を見る芝のちぢれかな。——風の向きで勝手から鮎を燒く匂がして來た。ふと飽を思ひ出して苦笑した。見ると女中が部屋に立つてゐる。

「古くていけないと思ひまして新しいのを買つてまゐりました。」

天に雲の文樣が拔かれ、地に菊水の流れを透かした短冊掛けであつた。そんなものをわざわざ自分で買つたのかといふと、ええ、と氣まりわるさうに答へた。秋本は憂欝になつた。

「大したことをしてくれたものだ。」

秋本は默つて短冊を女にやり、女がこのごろは一品づつ世帶を持つまでに揃へるのだといふのを耳に入れた。女中が去つてから秋本は輕蔑できない漠然たる人生を感じた。

秋本は母の引越しに間にあふやうに出かけた。母は人夫らの間にうろうろ歩き迷ひ、一つの荷物のあとに尾いては表通りへ出た。サイダーのビラ札までくるくる卷いて、荷物の間に入れようとした。

「そんな廣告繪をどうするんです。棄てておしまひなさい。」

「折角階下のねえさんが下すつたものだから。」

秋本は無學文盲を憐れむやうな氣がして、生々しい女の肉顏を描いた廣告繪を手に取つた。

「一文にもならない繪ですよ、つまらないものだ。」

「そんなら棄てようか。」

秋本はその廣告繪を引裂いた。むかし子供の時分に見馴れた品物が追々に見えた。がらくた物でも叮嚀に持ち廻つてゐて、虧けたり壞れたり皹が入つたりして皆不具になつてゐた。漆塗りの古い木地の出た母の鏡臺、——今どき何處の道具屋でも對手にしない鏡臺があつた。秋本はその蓋を取つて剝げ落ちた水銀に醜い木地の出たのに、自分の顏をうつして見て眉青い母の記憶に打つかつた。秋本は母を哀れむよりも、自分のことを考へた。

「要らぬものはこの際だから少し處分するといいね。」

「要らぬものなんて一つもないものぢや。」

母は古暦まで戸棚の中に入れた。去年の暦が何になるものか、秋本はそれを裂いてあれは去年のだからといふと、それは知つてゐると言つた。知つてゐて何にするんだといふと、また要ることがあるかも知れないと平氣で答へた。

荷物は坂を下り元住んだ町を左に見て橋を渡り、樹のある妻の里へとどいた。秋本は荷車のあとに尾いてゆく母の姿を一人で目にゐがいて、何となく歎息をした。氣もちがひどく

疲れて離れへ運ぶ荷物を茫然と眺めたきりであつた。母は昨夜あたり考へてゐたのだらう、一つ一つの置場所を區劃つてきちんと指圖をした。一つも亂れてゐなかつた。秋本は母が引越しになれてゐるといふより、秋本自身の荷物のやうに五年や六年の歴史を持つたものと違つて、みんな四五十年くらゐづつ年代を經てゐるためだと思つた。それゆゑ何處に何を置くかといふことが既うむかしから決つてゐるやうなものだ。

秋本は自分の荷物といふものに幾らの年代の經つてないことに或る嫌厭を感じた。水桶につかふ唐金の大きな水入れに秋本は目はふれ、これは中々いいものだと思うた。生水といふものを四五年飲んだことのない秋本は、不衞生な、投げ遣りな子供時分の暮しを考へて慄然とした。あのころ病氣にそんな恐ろしいものがなかつたかしらと思つたくらゐだつた。

夕方ごろに漸と片づいたが、有繋の母も疲れ、秋本もぐつたりしてゐた。妻の姉も草臥れてゐた。秋本は宿へかへらうとすると、母はこんなことを言つた。

「お里のお母さんと今夜一しよに寢てもらふことにしました。一人で寢にくいだらうからと言はれるので……。」

「そりやいいですね、おばあさん大丈夫ですか。」

秋本は妻の母が秋本の母と一しよに寢てやると言つた年寄りらしい好意を心嬉しく感じた。年寄つても女同士には何か變つた吾々男に取つては物珍らしい感情が殘つてゐるものだと思つた。

「初めて寢る部屋といふものは連れがあつた方がいいんですからね。」

おばあさんは左う言つて、早寢の枕を搬んだりした。この樣子ならみんな仲が善くていいあんばいだぞと思つた。が、姉さんは玄關前で、まああれならいい工合ですと、すこし皮肉に笑つて言つた。

「長續きしてくれればいいんですがね。」

「若し工合が惡いやうなことがあつてもそれはその時のことですよ。」

「ええ、さう思つていただけば樂でございます。」

「ではいろいろどうも——。」

「いいえ、おつかれさまでしたらうに。」

姉さんに別れたが母はいつものとほりに、半町ばかり見送りながら尾いて來た。

「ご飯も別に焚かうと思つての。」

「その方がいいんです。そして成るべく人の家のことはしやべらないようになさい。」

「そりや分つとる。」

「ぢや、また明日。」

「いろいろ心配をかけてすまん。」

「どういたしまして。一杯飲んで早く寢るようになさい。」

秋本は何處で夕食を取らうかと迷ひながら、通りへ出た。いろいろ食べたいものがあつた。公園の坂を登りながら薄暗い料理屋に入り、そこの離れにある崖からの、絶え間もない落ち水に聽入つた。まだ宵の程の棚から垂れる青々しい藤の實を眺め、茶をのみ煙草を喫んだ。秋本は默々として飯を食つた。落ち水の音はしたしたと滾れてゐて、秋本の考へをともすれば母とか妻子とかへ誘ひ、漫然とした薄い月夜のやうな稀薄な間色的な考へにふけらした。何か面白いことがないかと心さぐりをして見たが、それも急には思ひ立たなかつた。

勘定を拂うたときに、次の間に山百合の生けてあるのを見たが、先刻からの烈しい匂ひはあれだなと思つた。二度ばかり行つたことのあるお茶屋ではあるが、女たちは顏を見忘れてしまつたのか、普通のふりの客のやうに取りあしらつて、少しも愛嬌らしい言葉もかけてくれなかつた。折角笑ひかけた顏を硬く納めてしまひ、秋本は他鄕の思ひが日々に募つてゆくことを感じた。

朝、妻の姉さんがぎぼしの花の二三本と、蔦の蔓とを提げ床の間の掛花瓶に生けに來た。秋本は茶人風の投入れを好いてゐたので、姉さんは蔦の葉を垂らしぎぼしの花を拔いて生けてくれた。

「わたくしのご馳走はこのくらゐのところですわ。」

姉さんは何か實のあるものがないかと思つて搜したが、見當らなかつたと言つた。秋本はこれはなかなか能く生かりましたと言ひ、野趣のあるぎぼしの花を眺めた。

「けさはまるで子供同士のやうに何かしてゐましたよ、あれならもう心配なんかしなくともようございます。」

「さうですか。」

妻の母と秋本の母とが二疋の蟲のやうに睦じく、とまで考へたが蟲はあんまりひどいと思ひ、口へ出しては言はなかつた。が何か黑ずんだ蟲の感じがあつた。

「わたくしも少し風流がつて家で生花を敎へたいんですけれど、さうもまゐりませんしね、やはり暑くても出かけなければなりません。」

晩は十一時ころまで出先きが遲くなることなどを言つて歸つた。秋本は今日は歸京しようと思つて宿の女中に荷物などを托んだ。ほんの四五日ではあつたが安閑たる氣もちになつたゞけでも、來てよかつたと思つた。

松の枝のかげが置石の上に落ち、やはり遠蟬の啼く聲がした。秋本は氣の遠くなるやうな心で、ささ濁りをさせる池の中の小さい生きものなどを見てゐたが、その微かないのちを守る境まで考へを伸ばしてゐると、言はゞ幽寂といふものであらう、秋本は煙草に醉うたやうな茫然たる氣もちになつたが、そのとき不意に池のまん中からいきなり六本の噴水が劉劉と上つて、騷々しい水音が手痛く秋本のあたまを搔き亂し

た。秋本はすぐ自分へ對する御馳走のつもりで今まで忘れてゐた噴水を上げたものに違ひないと思つたが、その突然の仕業が腹立たしかつた。秋本は手を叩いて女中を呼んだ。

「あれを止めてくれたまへ。」

「おきらひなんですか。」

「早く止めてくれ止めてくれ。」

秋本は怒つたやうな顏付をしてゐたので、女中は勝手へ行つてスキッチをひねつたと見え、噴水ははじめ弱々しく間もなくはたりと歇んでしまつた。しばらくするとまた別な女中がかけたと見え、噴水はふたゝび上りはじめた。秋本はまた頭がかつとしたが先刻ほどでもなかつた。直ぐまた歇んだ。秋本は自分で自分の怒りを噴水のやうに感じ出し、庭の上にまなこを曝して睨んだ。その妙な人爲的な靜かさがなんだか悲しかつた。噴水の落ち絕えるときの弱々しさが秋本の頭を掠めて殘つた。

妹

家のものが留守だつたので玄關に出た靜川は、母と拉れだつた妹のおけいを見て、すこし驚いてやあと言つたきり直ぐに言葉が出なかつた。

「おけいがね」母は機嫌のよい顏貌で、妹の方を見返り、「一べん逢ひたいと言ふものだから今日は日和もいいし、拉れて來たのさ。」

「それはどうも……。」

靜川は七つくらゐの男の子を見て、くりくりした銀杏眼を母親から受け繼いだものらしいと思つた。

「お仕事をしてゐらつしやるんぢやないんですか、それだとお氣の毒ですから……」

「關はない……」

母は「いつも忙しがつてゐるんだけれど今日はいいさ。」と、自分で引受けたやうに言つた。

「ほんとにお仕事ぢやなかつたんですか。」

おけいは遠慮深く靜川の顏色を讀んで、子供にあたまを下げさせた。子供は溫和しく何遍も頭を下げた。

「あひにくみんな留守なもんだから。」

靜川はお茶も淹れないでさういふと、おけいは手土產の包を机のわきへ押し遣つた。そして漸つと、

「兄さんもまるで見違へるやうになつたのね。まだ近ごろのやうに思へるけれど。」

おけいは小ましやくれた口を利いたが、何かこの女にはこんな口の利きやうが能く當て篏つて聞えるのも、母親になつてゐる故だと思つた。

「お前だつてそんな大きいのがあるぢやないか?」

靜川はまじまじと自分の顏を物稀らしげに見入つてゐる子供を見たが、ふと妹が微笑ふごとに鼻のところに皺の縺れるのを見ると、一寸不愉快になつた。

「去年こちらにゐらしつた時もお訪ねしようと思ひながらついお伺ひできませんでした。」

おけいはさういふと、母親に向ひ、「お母さんにしよつちうお話はきいてゐたんです」と言つた。

おけいがね、そりや能くしてくれるものだから、お前から

もお禮を言つてください。珍らしいものは持つて來て吳れるし……」

母はおけいの前でおけいを賞めそやしたが、靜川はそりやどうもと言つたきり、別に頭は下げなかつた。

「どうかしてあげたいんだけれど、店の方が忙しいものですから思ふ十分の一もできないんでございます。」

おけいは嫁入さきが小間物店を開いてゐるので、いつも店の間の小机のそばに坐つてゐたが、母親はそこの亭主には會はないで、店の小火鉢に手をあぶりながら小半日くらゐづつ話して行くらしかつた。一寸小綺麗に飾付をして女の小間物ばかり賣つてゐる店であつた。

いつか靜川が前を通りすがりに見ると、おけいは小机にうつ向いて何か書いてゐるやうだつたが、そろそろ小型が肖合ふ髷の峯ばかりが表通りから見え、仕合せらしい暮し向きらしく、兄の吉衞なぞと一緒になつてゐるより、こちらが波風もなく溫げに想ひ像かれるのだつた。歸つてそのことを妻に話をすると、すぐ近くの町内に住んでゐた妻は思ひ出して、

「あの方ならよく知つてゐますよ。色は白いひとだけれど、齒がわるいのね。」

「店ははやるかね。」

「あそこらでは一軒きりだからはやるやうです。わたくしなぞあそこで買物をしたものですが、あなたの妹さんだとは知らなかつた。」

妻は平常からさういふ親類筋のことを話さない靜川を知つてゐたが、こんどお會ひしたら向うでも知つてゐらつしやるから吃驚りなさるだらうと言つた。それに商賣上手といふのか、客を逸らさない早口で相應に遣つて行けさうだと妻は言つたが、子供の時からお饒舌でちよこちよこしてゐる質だつたので、却つて小間物屋が適いてゐるやうに思はれた。

「いつか兄さんの書いたものを讀みましたよ。何といふんだつたか忘れたけれど……」

おけいは默つてゐる靜川にさう言つて見たが、靜川はおけいの口から仕事に觸れられると勢ひ氣難しくなり、返辭もしなかつた。おけいはその氣難しい靜川の氣を和らげるために、ありありと胸狹い智惠を絞つて色々努めるのが見えた。この子供が生れた年にお目にかかつたきりだとか、自分の亭主も一度逢ひたがつてゐることや、閑暇があつたら今は賣つて了つた人の家ではあるが、その町へ行つて元の自分達の家を見たいことなどを話したが、靜川は不常考へてゐることを晒け出されたために、なほ氣づまりで鼻であしらつて、庭さきばかり眺めてゐた。秋晴れの故郷の廢園の丈高い雜草を隔てた垣根のあたりに、くりくりした眼のおけいの子守をさせられた靜川が、妹のゐるばかりに充分遊び廻れない腹立しさから、心にもなく邪慳に妹に當り散らしては泣かしたものだつた

が、その氣はひが何となく空氣や氣候の中にある鄕里の人情と一しよに、いま、ふと思ひ出されてなほ氣むづかしくなる一方だつた。裾の短かい田舍絣を着た幼少の自分の見窄らしい姿までが、灰ばみ乾いた古竹の垣根に食つついて見え、泣くと中々しつこく泣き歇まない妹をあるだけ叱り飛ばしながら、まだそれで足りないで瘠せた肩さきを小突いたりして忌々しがつた。

「みんな言うてやる。」

おけいは泣きじやくりの中からさう怨めしげに言つたが、かれはなほ腹立たしく頰打ちなぞを啖はしながら、告ふなら曰ふがよい、そんな事、怖いもんかと毒口を叩いて見たものの、告はれることはその毒口をつく腹の底へ既う弱りかかつた自分を感じさせてゐた。それゆゑになほ當り散らすことを廢めるわけにゆかなかつた。泪と鼻汁と怨めしげな眼付の妹の顏を汚ならしくも憎んだが、歸つて母に告げくちをされ、母からの小言を考へると慴えた氣もちを誘うた。

「告うてやる。何ぼうでもいぢめや。」

おけいはさういふと一層頑固にかれに衝きかかるのだつた。かれは昂奮の割合に對手を折檻できない如な戾かしさから、聲ばかり荒々しく上げるのだつた。

「おのれ、おのれ。」

しまひに彼は妹の耳を撲つた。妹は破裂するやうに泣いて疼がりそこらぢうの草をむしつては辛がつた。これまでの容子と異つた或る痛さを訴へ、暫くすると默つて左の耳をおさへたまま、眞面目な顏つきで靜川を茫乎と見成つた。あまり眞面目過ぎるいかつい、自分でも何かに吃驚りしてゐる表情だつた。

「耳か……」

「耳がいたい……」

かれは靈芝のやうに緣のあかくなつた耳を覗き込み、奧の方か緣の方かとたづねた。

「奧の方ぢや。」

暫くすると又突然泣き出した。それでも彼はなるべく家へおそく歸るように仕向け、夕方近くかへつたのだつたが、妹はすぐ病院へ入つた。彼の兄の吉衞も彼に負けないくらゐ妹嫌ひであつた。兄の嫁にするために育ててゐる母の氣もちを知つてゐた吉衞は、何かのはづみにおけいに辛く當つた。

「おけい、これ食べい。」

吉衞は食ひ殘りの菓子などおけいに投げ遣り、唯ごとでない目付をして見せた。おけいはふしぎに兄には反抗しないで從順だつた。それが靜川の癪を淚らせることの原因にもなつたが……ともあれ、おけいはそんな菓子でも手に取らねばならなかつたが、すぐは口にはしなかつた。

「いやかい。」

吉衞は突きかかつて言つた。

「いやといふことはない。いやなものなら手に取りはせん。」

「ぢや食べい。」

妹は悲しさうに菓子をむしやむしや食べ、兄の機嫌をそこなふことをしなかつた。兄はその口もとをいやらしく尻目にかけて凝視めてゐたが、犬みたいな奴ぢやと言つた。おけいは毎度のことであきらめた顏つきをしてゐたが、さういふとき當らずに、

「何んとでも言ふがいい。」

と言ふだけだつた。

兄が去つてしまふと、彼は彼で約束事のやうに、妹に當つた。恥かしくないか、ああいふものを食べ居つて女が……しかしおけいはうす笑ひを殘して行つてしまふのだつたが、妹をにくむ心は深くなるばかりであつた。兄の言ふことに從ふことを置いても顏つきが氣に食はなかつた。

「お前はこれ嫌ひだらう。」

兄は妹の膳から魚の皿を自分の膳の上に乘せた。妹は別に何とも言ずにゐたが、かれもそれを遣つてよく二人前食べるのだつた。妹は承知しなかつたがかれは平氣だつた。兄はさういふ時に言うた。

「勝手なことをするな。」

「兄さんもするぢやないか？」

「わしのことは關ふな、人の眞似をする法があるか、なアおけい。」

「ええ。」

と、おけいは最負にされて喜んだ。靜川は何故か兄とおけいとの間に、自分よりも懇しみがあることを感じそれには勝てないやうな氣がした。唯、おけいを睨んでやるばかりであつた。さういふ時のおけいはいそいそとした氣もちを顏に現はしてゐるのも、かれには業腹であつた。

毎年初夏にはおけいの里から何かの土產を持ち、白山連峯に圍まれた山の町からおけいの父親が來ないときは、兄が出て來るのだつた。その日はきまつておけいはそれらの父や兄の姿が見えると、靜川の母は手早くおけいに不斷着より少し上の着ものをきせた。おけいも慣れてゐるため里の父や母にあふときには左うせねばならぬものと思つてゐたらしかつた。

里の母親などが來ると、おけいは却つてよその人のやうに珍しく自分の生みの母をながめ、別に懷しさうに仕向けることがなかつた。生れるとすぐ町へ來たおけいには、里の人だちには馴れない餘處々々しい氣ぶりをして見せた。それでも母親たちはたまにおけいを呼び出して、町へ行つて何か買つて遣らうと言つても、おけいは半分泣くやうな顏貌をして、

「いや、いや。」

と言つて行かなかつた。

里からは矢竹の筍や、わらび、くろもぢの木、片栗粉など珍しいものを搬んで來たが、そのたびに靜川は荒い山里へ一度行つて見たい氣もちになつた。兄はさういふ里のものなどには振向きもしなかつたが、里のものは兄には土下座せぬばかり叮嚀な挨拶をして、敬まうてゐた。兄はつとめて尊大に平常よりも威張つてゐる容子さへ窺はれた。そして里のものは夕方にならぬ間に引き上げるのであるが、おけいは決つて門口まで習慣的に見送りするのだつた。おけいは別に無表情だつたし誰も此事には兄さへも口へは出さなかつた。最も吉衛は里のものの來たときには特別に機嫌がわるかつた。母さへ竦むやうなところがあつた。

「山、さめ。」

兄は夕方おけいが例の着物を脱いで、ふだん着にきかへて茶の間へ出てくると、きつと恁う言つて何となくおけいのせいでもあるやうにぶりぶりして言つた。

「山、さめ。來なければいい！

おけいはそんな日は遠慮といふ程でもない、何かおぼろげな考へごとをしてゐるやうで、へいぜいとは茫乎としてゐるやうに見え、れいの着ものを脱いだあとはあつさりと悲しさうであつた。靜川はそのときだけおけいのもの忘れをしたやうな氣はいを可哀さうに思つた。そして矢竹の細い筍の皮を剝いてゐるのを見ると、何か言ひたい氣になつた。

「皮剝いてやらうか？」

「いらん。」

おけいは決つて優しく言うとつけ上り、反對に壓しつけて言つた。いらんなら止せ、人がしんせつ言うてやればいい氣になり居ると言ふと、

「へいぜいからそんなあんたぢやないもの、ゆだん出來ん。」

さういふませた口を利いて、うす笑ひを漏らすのだつたが、靜川は筍を蹶散してしまはねばならなかつた。

母は兄とおけいとの間をどう見てゐたのか、おけいが十三の春、山の町の方へ暫く歸すことになつた。その朝早く山の方から見慣れぬ男が迎へに來たが、おけいは歸ることを厭がり、うしろの庭へ馳け出して中々迎への男のそばへ行かなかつた。母はなだめたりしながら、一寸の間行くんだからと言つたが、おけいは柿の木にしがみついて離れようとしなかつた。

「うらぢやから歸らんのぢやによつてお母あをつれて來お。」

迎への男はさう言つて山の方へかへつて行つたが、その姿と聲とがなくなると、漸つとおけいは柿の木を離れた。兄はむやみに怒つてゐた。

「たまに山へ行つて見い。山もいいところぢやぞ。」

「山が何がいいことがあるもんか？山はいやなこつた。」

兄はさういふおけいを睨んだが、おけいは彼方向きになつて泣き出した。

「お母あが來たらおとなしく歸るといいよ。」

「かへるもんか。」

「お母あがこまるぞ、だだを捏ねたら……」

兄は妹を置いて家の中へ這入つて行つた。おけいは一人言をしながら庭からきふに家へは這入らなかつた。

翌日、山の方から母親が來ておけいを連れて行つた。きのふと違つてけろりとして拉れ立つたが、兄にも靜川にも默つて車に乘つた。車が動くと大聲を上げて泣き出した。靜川は古いがりがりと鳴る輪のついた人力が町角に消えると、可哀想な氣になつた。

「山、さめ！」

兄は相渝らずさう言つて爽ぱりしたやうな顏つきをした。

靜川は何か知らもう昂奮してゐた。

「何が山、さだ、おけいは町で育つたのぢやないか？」

靜川は勢ひ兄に食つてかかり其昂奮の捌け口を見つけた。

「山、さだから山、さだといふのだ。」

兄は負けてゐなかつた。

夕食のときに母がさりげなく言つた。

「いまごろ漸つと村へ着いたくらゐぢやらうて。」

兄弟は默つて箸をうごかしてゐたが、靜川は一人分の膳のないところが空いてゐるので、妹のゐなくなつたことを確かめることができたやうな氣がした。

「山のきはの悪い路ぢやから存外ひまをとるのぢや。」

母はひとり言のやうにいひ、兄の顏をちらりと見た。兄は箸を擱くとすぐ部屋へ行き、何か大きな欠伸をした。靜川は晩になり對手になるおけいがゐないので、早く睡氣がさしてならなかつた。寢床もおけいのところだけ空いてゐて、うすら寒い風筋が通りぬけてゐるやうだつた。

おけいが居なくなつてから別段氣になる程のこともなかつたが、矢張り妙に家の中に沈んだ氣色があつた。兄の吉衛はおけいのことは口へ出さなかつたけれど、對手がゐないので靜川と口諍ひをする機會が多かつた。秋になつて靜川は四五人連れでおけいのゐる町へ遠足に出掛け、古い宿屋で泊ることになつたが、夕寒むのする町の中を歩いてゐて、すぐ頭の上に山嶽がそそり立ち眞黑な帽子のやうに冠さつてゐるのに氣味わるい荒涼な氣を感じた。その山裾をめぐる古い山驛の蔀の隙間から見る灯のありさまが、哀れといふよりも餘りに小寂しい景色であつた。靜川は何んでも前に小川のある廂物問屋と聞いてゐたおけいの家をそれとなく尋ねて見たが鳥渡分りさうもなかつた。

「村田といふのです。」

靜川はその町の端れで漸つとおけいの家を見つけたが、まだ宵の口であるのに店は半蔀を卸して、半分開いた店の間に麻束を吊した天井裏ばかりが見えた。靜川は店さきにゐた見覺えのあるおけいの母親を見て、聲をかけると向うでも遽かに驚いて、おけい、おけいと慌てて暖簾の下つてゐる奥の間へ向つて呼んだが、灯にすかして見てから、やつと思ひなほして言つた。

「何んや、ちひさい兄さんか？」

あんまりよう宵とるもんやから、もう兄さんにちがひないと思つたんやと言ひ譯らしく言つた。

おけいは家にゐるときとは却つて小爽ぱりした着もので、田舍らしい赤い絣めいた前掛を前で蝶のやうに結んで締めてゐた。

「どうして來たんや。なんで家へ泊りなさらん。」

「遠足で來たんや、――」

靜川はなんとなくおけいを眺めて、家にゐたころから見ると可憐らしくなつたぞと、あぶらのついた髪を眺めた。

「家はみんな達者かいの。お母さんもそれから兄さんも。」

「みんな達者だよ、もう大ぶになるなお前がこつちへ來てから。」

「うん、だいぶになる、兄さんは毎日どないにしてや。」

「菓子ばかり食つてゐるよ。」

靜川は腰をおろして天井に吊してある埃だらけの冬の雪道具を見上げた。

「あれは何んや。」

「あれは橇や。町へ出てゆくときはあれでないと冬は出られん。」

おけいの母親は色々な食べものを駢べ、あれも食べよ、これも食べよと、彼岸の餅の固いやつまで炭火で炙つて出した。靜川はその硬い餅に齒をあてて嚙り出したが、嚙る程あまい汁の出る餅だつた。母親は草餅の固いのまで取り出してこれも食べよとしつこく言つた。

「一どきにそないに食べられはせぬがお母さん。」

おけいは大人らしい口を利いて、明日山の上のお社へあんないしようかと言つた。お社はけふ見たといふと、川はまだぢやらうと言つた。

「先刻から聞えるあの川かい。」

「あの川や、吊橋もある。」

おけいは細いゆびわを欲めてゐたが、ませませとして家にゐるときとは別人のやうな氣がした。とにかく今夜はここで泊れと言うてきかなかつたが、自家へ知れるとこまると思うた。母親は氣をきかして、

「家へはだまつて居れば何にわかるものかね、誰も言ひはせぬし……」

靜川はまだ心を決めかねてゐたものの、何故か泊つて見たい氣がした。誰も言はんなら泊るといふと、誰が物好きにそんなことを告げ口して歩くもんかと、母親は靜川を押し上げた。靜川は土藏の前の土間を通り、狹い着物や行李など累ねてある部屋でおけいと寢ることにした。豆ランプの細い灯が二人の頭の上に置いてあり、夜中から風が出たのか山の方が鳴つてゐた。

「川の音で寢られんかい。」

おけいはまぶしい眼つきで靜川にさう言つたが、しばしばした澁いやうな眼付をするおけいを可憐らしく思うた。

「もう家へは來ぬ氣か、こちらがいいかな。」

「町へゆきたいのだけれど　兄さんが嫌ふから行かれん。」

「そんなことはなからう。」

「兄さんはわたしがきらひさ、わたしはそりや知つてゐる。」

おけいの此麼ませた言葉を聞いたのは、靜川には初めてではなかつたが、さういへば兄はおけいを厭うてゐると思うた。近近のうちに母親がもう一遍話をつけにゆくと言つてをるとおけいは言つて、それで大がい決まるのだらうと言ふおけいの心根をさぐると、やはり町へ出たいらしく思はれた。

「兄さんはお天氣もんや。」

靜川はおけいが歸つたはうがよいと考へ、なるだけかへるやうにすすめると、おけいは歸りたいと低いこゑで言ひ、しくしく鼻をすするのだつた。

翌朝、おけいはうしろの掘拔井戸で洗面の水を汲んでくれたが、すぐ屋根の上にまで氣重く山の峯がつづいて、半ば枯れた雜林に絶えず風がざわめいてゐた。山鴉の多いところと見え、群れをつくりながら朝の間から赤い口を開け啼き立つてゐた。

家へ歸つてからも靜川はおけいの家へ寄つたことは話しなかつた。おけいの母は中三日を隔いて山から出て來て、何か母親と談し合うてゐたので、わざと靜川は茶の間へ出て行かないやうにした。

「おけいのお母さんは何しに來たのや。」

靜川は何氣なく母親にたづねて見たが、母親はつとめて平氣をよそうた。

「おけいがまたかへつて來るのや。いさかひをしてはこまるぞ。」

一週間ほどしておけいは例の古い輪のがたがたの車に乘り櫻の造花のかんざしを挿して歸つて來たが、靜川は櫻のかんざしが田舍娘らしくて厭だつた。しばらくの間に大人めいてゐることが際立つて見え、居にくい落着かない容子で二三日ゐたが、間もなく慣れてもとどほりのおけいらしくなつた。けれども何時かの遠足のときのことは、どちらからも言ひ出さないで全でああいふことが無かつたやうな樣子であつた。

しかし、何となく以前のやうなおけいではなく、兄に對ふときは分けて落着いてゐるやうで、靜川には何となくをかしかつた。兄が箸をとらない前にはおけいは決して箸を取らないことなども、さきにゐた頃のおけいとは變つて見え、故意と誰かに敎へられたやうにも思はれ、それを片いぢに守つてゐるやうな實直なところがあつた。

兄はおけいが歸つてから當り散らすことは以前とはすこしも變らなかつた。變つたところは何となくむつつりと腹でふくれてゐるやうな不機嫌らしい振舞ひをするだけであつた。何を言つても默りこくつてしんねりとねばり强かつた。そして氣に入らぬことがあると、ぷいと座を立つて何處へか行つてしまふのだつた。

「兄はどうしてあんなぶつきら棒になつたのや。」

母は屈托さうな溜息をついて、さて、好きな煙草ばかりをふかし苦い舌を齒のうらで締め、どう腹を立てていいのか分らない風であつた。勤め先からかへると兄は膳の前で坐り、ひとりで食事をすますと、自分の部屋へ引き上げた。靜川は靜川で理由もなくおけいに當ることが、殆ど以前とは變らなかつたが、手で撲つことがないかはりすぐにおけいに山の方へかへれといふやうなことを、つい口走しるのだつた。それは靜川に取つても思はず知らず言ふことが多かつた。

「兄さんがかへれと言はなきや、わたしはかへらなくともいいわ、あんたが何べん同じことを言うてもすこしも怖いことなんか無いぞ。」

「きらはれてゐるより歸つた方がいいよ。甲斐性のない女やから邪魔にされてもそしてゐるのや。」

「どうせわたしは何も知らん女やからええ、はしかい女ならこんな家へなぞ來はせんのや。」

おけいは憎らしく口達者にさういふと、時々やけなやうなことを言つた。

「しまひに兄さんも何か言ふよ、そしたら行かにやならん。」

「そんなことをあんたに關うて貰はんでもええ。わたしのことはお母さんが心配してくれるさかえ。」

おけいは氣强くさう言つて靜川と諍ふことを避けるやうな悧巧くさいところを眞似るのが、靜川には負けるやうな氣がしてならなかつた。

「そのお母さんかてあてになるものか？　お母さんかて兄さんがあてで暮してゐるのだもの。お前なんぞやはりそとから來たものとしか思はん。」

「そんなことがあるもんか。いまになつて話をこはさうたつて、そりや出來んことがあるぞ。」

「何がある。……」

「わたしのお母さんと、ここのお母さんとの間の話は、兄さんなんぞは少しも知らないわ。わたしはそれは知つてゐるか

らいいけれど……」

「そんな話が何になるものかね、お前はまだ子供だし……」

「子供、——そんな子供をどうしてあんたはいぢめるの。」

靜川の氣のついたのは、これまでおけいの泣き方とちがひこのごろは妙に小さい聲で變つた泣きやうをすると思うた。いまも左ういふとすぐ鼻をすすり赤らめるのだつたが、含みごゑでねこのやうな引くような聲音をするのだつた。靜川はいじめる氣ではないがと言はうとしたけれど、むやみに對手にあたりたい氣を苛つかせるだけだつた。

「お前みたいにしつこいやつは誰でもきらひさ。」

「しつこい、——」

「しつこいとも。このごろ分けてもしつこくなつた。」

靜川自身でもなぜしつこいと言ふのか分らなかつたけれどただ、さういふ氣がしたのだつた。

おけいは兄弟とはなるべく口をきかないで、母親のそばにばかり從いて、兄にも靜川にも對手にならぬようにしてゐた。しかし氣むづかしい母親にも何か言はれると何處へ行つていいか分らない顏付で、勝手のよごれた手鏡を覗いては立つてゐた。

「この子はをかしな、わたしのあとばかり尾いてゐる。」

母親のさう言ふこゑに尖りを帶びるやうになつた。妙に人好きのしないやうなところを兄や靜川ばかりではなく、母親も感じてゐるらしかつた。おけいが勝手のポンプのところに立ち竦んでゐるのを見ると、靜川は鳥渡した言葉をかけたくなるのが常だつた。そして何日かの里でたべた甘い汁の出るやうな餅の味を思ひ出すのだつたが、あのときのおけいのしほらしさはあれきり無くなつたやうにも思はれた。

「あしたね、いいことを敎へてやらうか。」

靜川は母親の枕もとにはいつでも入齒が脫いである。あれをあした起きがけに齒みがき楊子で磨いておくと、きつと機嫌買ひだからなほるよと言つた。母親はそれを毎朝みがいてゐたがおけいがまだ一度もそれを洗つてやらなかつた。

「楊子でこすればわけはないから、あしたの朝にね。」

「こはれないかしら。」

おけいは眼にもろい入齒の形と色とを思ひ浮べ、どこか心配げに言つた。

「そつとしたら大丈夫だよ。」

靜川はいつか母親が子供はたくさんゐるけれど、これをみがいて吳れるものさへ居ないと、ふきげんな朝起きの小言の始まりに言ひ出したことを思ひ出した。母親はきまつて不機嫌なときは朝のはじまりに何か知ら小言を考へ出すようであつた。靜川も兄もそれを飲み込んでゐたけれど、おけいはそこまでは心を配つてゐなくて、唯小言が出るとうろうろするくらゐであつた。

「毎朝みがいてあげてもいいわ。」
おけいは嬉しいことにでもありついた容子で言つた。
「毎朝ぢやだめだよ、たまにしないと利き目がない・・・」
靜川は何となく苦笑ひをしたが、おけいも可笑かつたと見えて笑つた。初冬のさむい勝手でおけいは久しぶりで笑つたのであつた。靜川は屋根裏の明り取りから乾いた空の色を何氣なく見上げた。
「兄さんはどうしたら機嫌がようなるのや、わたし分らんようつて。」
おけいは突然にさう誠らしく言ひ出した。
「兄さんかあ、――」靜川自身でも分らない兄の氣もちであつた。「さあ、兄さんはどう言つたらいいのかな。ちよつと分らんところがある。」靜川は困つた。
「このごろわたしなぞに物言うてくれたことがない。」
「お前ばかりぢやないよ。みんなに默りこくつてゐるのや、何が氣に入らんのか分らん男だ。」
靜川も兄を煙たく思ふより何か嫌ひな氣がした。兄がでかける時にどこへ行くのかとたづねると、何處へゆけば何んぢやといふ邪慳な答であつた。それゆゑ靜川さへもあまり話をしなかつた。
「あんな男はうつちやつとけ。」
靜川はさう言つてみたものの、おけいは何やら物問ねたさうに口をもぐもぐさせてゐるのを見ると、こんどは焦立つてくるのだつた。ああして置けばなほる時分にはなほるよとも言つた。それに以前のやうに言葉の上からはおけいを嫌うてゐる風をしないし、里へかへれといふやうなことも、まだ一度も口にしなかつた。それが却つておけいの氣を鬱々させるらしかつた。
「そのうちお母さんから何か言うて貰ふといい。」
靜川は優しくおけいを宥め賺すと、たまにしか言はれないその優しさ故に、泪迅くなつておけいはしくしく始めた。山の町の方に居れば小爽ぱりと身ぎれいになつて居れるのにと思ふといぢらしくないでもなかつた。
翌朝おけいは入齒を磨いたのであらう、母は機嫌よい顏つきでおけいに小用を言ひつけてゐる調子が、いかにも穩やかであつた。靜川は藥が利いたのだらうと可笑しい氣がしたがおけいもいつもよりいそいそと立働いてゐた。何かのはずみに靜川は、「何かい、あれを磨いて置いたのか？」と言ふと、おけいは、
「今朝早くに洗いて置いたわ。えらい、汚なうて・・・」
と笑つて言つた。
「それできげんがいいんだよ。」
「何んでもないことやからこれから磨いてあげることに定めた。」

おけいは本統に定めたやうな顏つきで言つた。
「さうするといい。」
靜川は心のうちでうまくおけいが皆から憎まれなければよいと思うた。
「こないな靴の磨き樣があるか、まるきり光らん。」
兄の吉衞は或朝、出勤前にいつもおけいの磨く靴を見て叱つた。
「わたしはよう磨いて置いたのぢやけれどな・・・」
「穿かれはせん。」
兄は靴を自分で布で拭きながら云つた。「何をさせても埒あかん。――」
おけいは默つて吉衞の白い顏を見て、泪ぐんで、どうせわたしにできませんと、鼻ごゑで云つた。
兄は怫々言ひながら荒い戸の軋りを殘して出て行つた。
「ありや肺病やないか、まるで顏色は蒼うなつて見る氣がせんぞ。あのまま置いといたらしまひに皆にうつつてしまふぜ。」
兄の吉衞は母の前で厭らしさうに早く歸してしまつた方がよいとも言つた。全くおけいは少女らしい顏色を失くして、いつも腫れた光らない蒼い皮膚の色をしてゐた。時々にする咳もうたがへば疑へるほど、ちからなく聞えた。
「そんなことは無からう。」
母はその話から逸れるように言つたが、吉衞は、おけいの兄の顏色を見よ、母親のどすぐろい顏いろを見よ、父親にしても何時もあぶらのない顏色をしてゐるのを考へて見よと數へ立ててあれの一家に顏色のよいものが居はせんぞと、並ならぬ見幕で聲に震へを帶びてまで言つた。
「わしはあの病氣はちやんと一ト目見ると判るんだ、いまが肝心なときだぞ、油斷してゐると酷い目にあふぞ、――」
「山のものはみなああいふ土色をしとるもんや、別にあれの一家にかぎつたわけではない、お前の氣のせゐさ。」
「氣のせゐなもんか、もとはおけいでも最つと顏色がよかつた。このごろになつて惡くなつたのぢや。」
「それなら別に心配はいらん筈ぢやないか。」
「それだから心配ぢや・・・」兄は昂奮し息を喘せて言つた。
「このごろになつて出て來たものとしか思へん。なほ性の不良い事ぢやないか？」
「そないに出たりすつこんだりするものかい、蛙ぢやあるまいし・・・」
母は冷淡に笑つて對手にならない樣子だつたが、心に雲りを感じてゐることは矢張り同樣であつた。何となく元氣のないおけいの容子は誰の眼にもそれらしく考へさせた。靜川にしても、――すこし變だと思ふ節々が見えないではなかつた。

顔色のわるさより開いてゐる瞳孔に張りがなげに弱々しく見えた。

「それでお前はあれをどうしようと言ふのぞ。」

「あれかア、――」吉衛は苦もなく、むしろ非人情な調子で云つた。「あれはやはり里へ歸して了うた方がよいと思ふんです。病氣のものと一緒にゐるのは術ないこつちやから。」

母はにがい顔つきをして言つた。

「そんな普段のことのやうな譯には行かん。それもさきに一度かへしたこともあり、いま又そんな薄情なことは人間としてもできんわい。」

吉衛は默つて母の顔を見つめてゐたが、れいの癇癖者の、つッ立つたきりに喚くやうに言つた。

「それならそれでわしにも考へがあるだけだ。」

「考へつてどんな：」

「見て見い、そしたら分る。」

吉衛は自分の部屋へ行つた。

おけいは庭さきで頻りに唾を吐いてゐたが、靜川はそんな汚ないことをするなと言ひ、夕景の、明るいコップの中にゐるやうなおけいの顔色を、なるほど惡い色艶だと思ひながらじつとしてゐよ、お前の顔は妙にふるへて見えると言つた。たてに圓いあごがふるへて年老者のやうであつた。寒さでもするのではないかと尋ねると、

「なも、さむくはないけど、胸がわるいんや。」

と胸をさして見せた。

「嘔きたいのかい。」

「うん、さうや。」

おけいはラムネの泡のやうな唾をべべと吐きつけた。柔らかい土は冬になりかけてゐるのに、みみずの糞が盛りあがり虹色の長い虫の肌がぬらつき透いて見えた。

「祭にどうして行かなんだ。」

「うつかり祭に里へかへらうものなら、それこそ町へかへれぬと思うたから故意と行かなんだ。」

「そんなことはないぞ。」

「いや、ある、わたしは内々で話はきいてをる。祭にかこつけてかへつたら、それきり里に居らせるようにするほか手段はないとお母さんと兄さんとが言うて居つたから、欺されまいと思つて行つてやらなんだのや。」

靜川は何時おけいがこの話を聞いたのか、なんだか空恐ろしい心構へを隙見したやうな氣がして、その顔を呆氣に奪られながら見戍つてゐたが、考へ深いやうになつた眼付の底に油斷のならぬものが差し窺いてゐるやうに思はれた。立聞きしたこともないのであつたが、氣味わるかつた。

「そんなに町がいいか。」

「町の方がいい、わたしは里はきらひなもん。」

おけいはがたがた車に乘るだけでも厭だと言うたが、靜川も彼の車の音だけは陰氣くさくていやであつた。

「それにわたしのことを肺病やと言ふが、肺病なもんかい、わたしはそないなことを言はれたことは初めてや、外のことと違うて兄さんはいやなことを觸れてあるく人ぢやないか。」おけいは怒つた顔色をした。「兄さんこそあないに惡い顔いろやないか。自分ぢや白いというて自慢げであるが、あれこそ肺病かも知れん。あれは白いのでなくて蒼じろいのや。」

自分のことは棚へ上げ人のことを言ふのは間違うてゐる。あんたもあの顔色に氣がつかんかいと、靜川に念を押すやうに言つた。さう言へば兄の吉衛の顔色は惡かつた。白いばかりでなくおけいの言ふやうな蒼じろさも交つて見えた。どちらがどうだか解らないが靜川はしかしおけいの方が、兄より餘計にわるいことを思較べられるのだつた。兄ののは地の白さがあり冴えもあつたが、おけいののはその二つとも無かつた。

「わしもお前は里へかへつて居た方がいいと思ふがな。兄さんも一日怒つてばかりゐるし、お前が居つても仕樣がないやないか。それも兄さんが親切ものならいいけれど、あの通だしな。」

靜川は賺めるやうに言うて見るのだつた。しかしおけいは頭をふつて聞かうともしなかつた。

「わたしに惡いところがないのに歸るわけがないよつて、もう、もう歸らんことに決めた。」

「さうか、それなら仕樣はないが：：」

「里のお母さんも言うた、辛抱するところはせにやならんとな。」

翌けて春になり里の母親が訪ねて來たときに、どう話がついたのか、おけいはまた山の方へかへることになつた。あれだけの强情を言つてゐても何時も歸るときには、素直に運のように諦らめ、平氣で車に乘るのだつた。そしてがたがた車が町角に消えてしまふと、靜川は變に氣が塞いでならなかつた。わたしを欺して里へかへさうとしても、子供でないから欺されはせぬと云ひ張つたおけいだけに、靜川の心に殘ることが多かつた。

「また山の方へ來たらいつかのやうに寄りなされ。」

おけいはあれ以來初めて靜川にさう言つたが、靜川はあちらへ行つたら寄るといふ約束をした。しかし二年三年といふうちに便りもなく、おけいの居ないのに慣れた家の中で誰もその噂をするものが無かつた。

それから幾年經つたかは知らないが、おけいが同じ町の方へ出て結婚をして、ちひさい小間物屋をひらいてゐることを母親が言つてゐたが、靜川は旅先きにゐて知らなかつた。兄の吉衛は三度結婚したがみな不緣であつた。一度は教員だつ

たがうまく行かず、次の女は病院勤めであつたそれも不縁であつた。三度目に或る女を受け出して落着いたが、兄はその間に年を老つて若づくりの割合に、ふけて見えた。

或る夏に久しぶりに靜川は歸省すると、母親と話してゐる女をすぐおけいだと思ふほど似てゐたが、また、それほどどこか見異ふやうな女振りになり、赤ん幼を抱いて乳房をうろたへて靜川の眼から隱してしまつた。色もつやが出て白く、小皷のよる鼻も元のままであつた。

「兄さん、しばらくでございました。こんなうまい恰好をしてごめんなさいね。」

と、言葉も町なまりだつた。

「ほんとに暫くだつたね、町へ來てゐたことは聞いてゐたんだけれど…」

「時々こつそりとお母さんだけに逢ひに來るくらゐなんですから、お知らせもしませんでしたの。」

「それにしても見違へてしまつた、何年になるかね。」

おけいは數へて見て、驚いて「もう七年になるんですもの。」と言つた。

「そんなもんぢや、お前が十三の時やつたからそんなもんぢや。」

母は別に驚きもしないで、當り前の顏つきで言つた。「もうこんな子もあるんだものお前！」

靜川は赤ん坊の顏を覗いて見たが、おけいに似てゐるやうでもあり肖てゐないやうにも見えた。小型な、きりきりと締つた肥りやうをして、下町つくりも能く似合うて見えた。「でもよく忘れずに來たんだね。」と、靜川は笑ひながら言つた。

「忘れられるものですか？　自分の育つたところですもの。里の方よりかこちらで主に育つたものですから。」

「さうとも、その心でゐてくれなければいかん。」

と、母親は赤ん坊を抱き取り、あやし乍ら言つた。靜川はいつかおけいがべべと吐いた白い唾のことを思ひ出したが、いまは血色もよくああいふ病氣なぞ氣ぶりにもなかつた。暮しがうまく行き亙つてゐるのか、表情に陰のない明るさが何より靜川には快よく思はれた。

「兄さんも奥さん仕合せのわるい方ね、どうしてでせう。」

と、おけいは少しも心の動きやコダハリを見せないで、恬淡にさう兄のことを言つたが、靜川にはこの女は離れるとさういふ氣質になり、馴染むと中々忠實な女だといふふうに考へた。兄のことでも平氣だつた。これなら會つても一寸くらゐ顏を赧めるくらゐの動きであらうと、氣もちよく思うた。

「つまり運がわるいんだ。一度しくじると二度といふふうでね。しかしお前は落着いてゐられて何よりいいね。」

「仕方がないからゐるんですよ。それにこんなものまで生れてはさうさう我ままもできませんしね。」

口ほどでもなく快活に笑つたが、それだけ仕合せさが沁み出てゐるやうにも考へられた。

「かうして度々お母さんのところへ訪ねて來て見ると、子供の時のことが思ひ出されて何となくやはり自分の家のやうな氣がしますの。けふも燒鯛を吊した天井を見ると、お母さんにあれ食べたいと言うて笑はれてしまうたがや。」

さういふ口を利くおけいにどこか邪氣のない明さ素直さがあつた。母親もつい吊り込まれて、ああいふ子供みたいなことを言ふから、鯛を食べさせたが、子供の時分に食べた方が餘程うまかつたと、ほんの箸をつけたばかりで止してしまつたが、いまでは世帶持ちだからさうあらうぞと、笑ひながら何か樂しさうに言つた。

「でも子供のときに食べたものは、何でもみんなおいしかつたけれど、自分で煮たり燒いたりするようになると、何を食べても格別においしいとは思ひません。」

と、品ものに變りはないが年を取つたせゐですねと言つた。靜川自身でもさう言へば矢張り何を食べてもうまくないこと子供のときが一等うまかつたことなどを話したが、おけいは不圖思ひ出して、母親の入齒のことを言ひ出した。

「このごろでは最う入齒も毀れてしまつて、齒齦で何んでも食べられるやうになつた。入齒なんて何の用にも立たんもんや。」

靜川も心の内で、入齒も本統の老年には何の用に立たぬことを面白く思うた。

夕方近くまでゐたおけいは、かへりがけに是非一度尋ねて來てくれと言つて、時々夫婦きりの暮しなもんですから、お母さんの顏が見たくなると近くではあり一ト走りにやつて來るんですと言つた。

「わたしも時々おけいが來てくれるのが樂しみでね。」

と、母親はおけいを見送りながら言つた。

それから今日まで六七年もおけいに會はなかつたが、靜川は以前に逢つたときのやうに話をすることができなくて、そのかはり考へ事ばかりが先きに立つやうな氣がした。おけいをいぢめたことの不愉快さを思うてみても、おけいはそんなことは疾くに忘れてしまつてゐるのも、却つて手懸りのないことのやうに思はれた。

「とにかく兄さんと一緒にならなかつたことも、今になるとよかつたかも知れない――、」

靜川は突然さう眞面目に言つたが、おけいは笑ひに紛らして了つた。

「どうなればよかつたのか一寸分りませんのね。」

「やはり今のやうな暮しが一番いいんだ。お前なんぞ運のいい方だよ。」

靜川は久しぶりだからお茶でも入れて遣りたいと思ひなが

ら、立つのが面倒になつて矢張り坐つたまま、默つて向き合つてゐたが、根が心からでない兄妹ゆゑか別に深い親しみも感じられずに、却つて訪ねて來てくれなければよいくらゐに思ふたものの櫻のかんざしを挿した少女がもうこれほどになつたかと思ふと、人の成人するのも存外早いもののやうに不思議にも思はれた。

暫くするとおけいは歸りかかつたので、靜川はあまり無愛想に仕過ぎた輕い心咎めを感じた。

「切角來てくれたけれど皆が留守で、僕ではどうにも御馳走の仕樣がなくてな、わるく思はんで呉れ。」

さう言つてよくよくおけいには何時でも冷淡に當るやうにおれはできてゐると思うた。

「わたし唯ちよつと顏だけ見ればよかつたんですから、わるくなんて思つたりしませんわ。」

と、門口へまで見送る靜川に言つた。靜川は母と三人づれの姿が町角に消えるのを見てゐると、むかし見た古い輪のある車の音を何處か遠くの方に聞えるやうな氣がした。

彼女

家族を東京へ歸して島木一人居殘つた山莊は、日增しに寒くなり每日日向へ椅子を持ち出して、脊中に暖かい日あしを受けて溫まつてゐた。

近くの町からお捨といふ女の人が、通つて來ては三度の食事の世話を見て夕方まで居て歸つた。每朝お捨さんの來るまでには起きて居て勝手口の鍵を明けて置かねばならなかつた。

「山の上の人は殆ど歸つてしまひましたよ。」

お捨さんは今日は誰々さん、明日は誰々さんが歸へると言つては、これから輕井澤もさびしくなりますと言つた。愛宕山の林も透いて明るくなり、晩は島木の家だけに灯がついて一と夏の豪奢な暮しをしてゐた外人達も始ど數へるくらゐしか居なくなつた。島木は夏二ヶ月も家族と一緒に暮してゐたので、急に皆がかへると急に無聊を感じてゐたものゝ一人で野菜ばかりの料理を食べてゐるのも、益々秋めいて澄んで來る空氣とよく調和した暮しで　體軀に藥なやうで元氣がよかつた。

唯、女の子供をかへしたあとだつたので、友子のことばかり思ひ出された。朝、晝、夕方には友子を連れては、人並の父親らしく散步をしてゐたが、話對手の要らない島木には對手の感情などを推し計る必要のない友だちとしては子供が一番よかつた。先きに亡くした子供への愛情が友子が生れると自分でも不思議な程烈しく加はつて行き、亡兒の嘆きを忘れようとするのであつた。子供は能のない人間にも藝術の現はれだと島木は心窃かに思うてゐた位で、此の夏も汗疣で醜く痒がある友子を見棄てられないで此の山間の土地へ假住居をすることになつたのだが、汗疣はすぐ癒つて何時ものやうに美しい顏になつたのであつた。

友子は島木にも島木の妻にも肖ない程、鳥渡綺麗な女の子供であつた。友人の薄原なぞは雀が鷹を生んだやうなものだと云ふ惡ざまな言葉も、島木に心安だてに却つて得意な氣もちで聞かれた。

「君と散步してゐると子供の物ばかり買ふが、あんなに買つてどうする氣だね。僕のところの末の子の服が恰度似合ひさ

うだから、こんどはあれを着せて見たまへ。」

薄原は無頓着にさう言つたが、此間も行つた時に見た泥や斑點だらけの服を寄越す氣だらうといふと、洗濯をしたらきれいになるよと平氣で薄原らしく無雜作に言つたが、その薄原も君のところは着榮がするからねと言つてくれたりすると親心とは別な作品でも褒めて呉れたやうで愉快であつた。ぶつきらであるが子供をあやすことの旨い薄原は、寫眞機を持つてくると、

「じつとしてお出で・・・・」

さう言つて寫眞を撮つたりしたので、友子は馴染んで薄原の寫眞を撮る眞似をして見せて、じつとしておいでを能く繰り返して言つて皆を笑はせた。

島木は友子に繪葉書などを書いたりしたが、お捨さんに投函させないで自分でよく入れに町へ出た。町の通りも一夏の終つた寂れが閉した店や、荷作りの藁屑の亂れた運送屋のあたりに際立ち、サーヂンの鑵詰さへ賣り盡されて品切れになつてゐた。

懇意な旅館の客間の椅子もがらんとしてゐて、人の善い若主人が茫乎と往來を眺めて腰掛けてゐた。

「こゝの客間に坐つてゐた人のことも、いまになると去年か一昨年のやうな氣がするね。」

島木はお茶を喫んで夏の混雜を思ひ出したが、主人も客の來ない此頃では拍子抜けがした顏付であつた。

「夏の間は夢中で經つてしまひますが、秋になると我に返るんです。」

「いま客はあるんですか。」

「お一人きりです。」

島木はどういふ親懇な間柄でも、友人同士は話合はなくともお互の話は解つてゐるものだといふ心持ちで平常から居るので、却つて知らない人間とほんの二言三言くらゐ話をするのが好きだつた。それも五分經つと飽きるのだが、——さういふ氣もちで此處の客間に坐つてゐるのが面白かつた。それも秋になると椅子の脚までとどく日あしを見て、變な寂れを深く感じた。往來を行く人々も華美な避暑客が稀れで、夏の間は氣附かなかつた近在の村人の粗末な姿が見え初め、これから來年の五月までの長い冬に閉ぢ籠る鬱陶しさが、この宿屋の深い軒廂の陰にもそれと豫感されるのであつた。

「今年は女客が多かつたやうですね。」

「さうでしたかね、別にさうとも思はなかつたのですが」

島木は足かけ七年間この旅館に夏になると暑を避けて來たのだが、令年は美しい女客がうす暗い廊下や客間にあちこちしてゐるのを、通りがかりに氣附いたのであつた。それも八月終りになると足早やに發つてしまつて行つた。

島木は旅館を出て、假住居の小さい別莊へかへるとお捨さ

んが南瓜畑の物干で、島木の手巾や汚物を洗濯してゐるのが見えた。「こちらへ來てから三年にもなるのでございますが、どういふものか子種がございません。」と昨夜お捨さんは島木の肌襦袢を縫ひ乍ら言つたが、この人の顏を見るたびに妙に鬱積した氣もちを感じるのと、矢張り子種の無い女の人は陰鬱なところがあると思うた。克明な働き人で、氣性にねばりのあるやうなお捨さんは、どこか張りの工合が鳥餅のやうな强さがあつた。すぐ町裏の胡瓜や人蔘の畑を有つた八百屋の若主人の妻君だつたが、島木の妻が何時の間にか懇意になり、恁うして働いてくれることに話が纏いたのであつた。亭主の人は勤めてゐて晝間暇だからと云ふのであつた。

前も後もそのまた後も西洋人の別莊の續いたこの通りは最う往き來の人も稀れに絶えて、避暑客の置いてき堀の犬が唐松の間を小寂しく通り過ぎる外、いたづらに薄の穗が日增しに光茫を引くだけの眺めだつた。島木は東京にゐる妻の腹が何時お產になるかも知れないのを時々氣にかけたが、そのお產に立ち合はない工合に行けばいいと思うた。しかし日を繰つて見ても十月の初めだから、まだ仲々だと考へた。

汽車では坐つてゐるやうに醫師から言附けられてゐたが、生み月の前の月だから大事が無ければいゝと案じてゐたのに、妻は平氣で着いたらしかつた。さういふ家庭の一光景が、秋めいたうすれ日中のに、妻の聲音まで聽えて來る程心に描かれたが、何だか今日は一層瞭らかに映し出されるのであつた。

「毎日鳥かげがしますが誰かお客さまが入らつしやりはしませんか。」

「もう誰も來はしませんよ。こんなに寒くなつて誰が來るものですか。」

お捨さんは平凡な占めいた小鳥の影のことを口に出したが、島木はふと思ひ立つて野澤組の別莊のある方にゐる白鳥さんを訪ねて見ようかと思うた。一度きり會つたのだが、能面のやうな澁みをもつたところや、ずかずかと思うたことを書生流に言ふこの老大家と話を交はすのも、心の足しになると思うたからであつた。文壇に知己朋友の少數い彼れは、このごろ漸つと人と會ふことが好きになり、白鳥さんもこんな機會がいいと思ふのであつた。

一里くらゐある野原を風に吹れて歩いてゆくと、分りにくい白鳥さんの別莊は、せり上り群り伸びた硬い尾花の林や森めいて立つ四邊に、すぐ見つかりさうもなかつた。どの別莊にも人かげのない彼處此處を探しぬいて、漸つと見つけると表戸は閉められ、昨日あたり出發したらしい慌しく取り亂したけはひであつた。野澤組の事務所へ引返して尋ねると、昨日お發ちになつたと云ふことだつた。島木は尾花にかこまれた道を落膽して歩きながら疲れて額に汗を搔いた。そして今

まで氣附かないでゐた歸京の心が少しづゝ島木の隙をねらうて募り出した。

野澤組の水泳場（プール）へ行つてみると、こんな寒いのに三十歳くらゐの西洋婦人が、あたりの閑かさを物穏やかに拔手を切つて年増女らしい肉つきで泳いでゐた。あたりに人かげは絶えて無かつた。

家へ歸ると電報が來てゐた。こどもうまれた（コドモウマレタ）、みなぶじと（ミナブジ）書いてあつた。お捨さんが心配さうな面持ちで立つてゐた。

「いま來たばかりなんですか。」

「まだ十分も經ちません、何か起つたのでございませう。」

「子供が生れたんです。」

「それはどうも——ではお歸りにならなければなりませんね。」

「でもけふはとても駄目ですね、荷物も片附けなければならないし、——」

短くなつた日ざしは既う林の中だけに著早く暮れ始めてゐた。「明日の朝早くにしませう。けふは疲れてゐますから。」島木は庭の椅子に腰かけると、産婆や助手やで狹い家の中が混雜してゐる有樣が感じられたが、折よく左ういふ頭の惱む騒ぎの中を餘處目にしてゐる氣安さがした。

「わたくしはまた何か大變なことでも起きたのぢやないかと心配してゐたんです。」

正直な物事の起らない田舍に暮してゐるお捨さんは、幾らか蒼じろい憂慮（しんぱい）さうな顏容（かほ）をしてゐた。

「來年はお捨さんも一人こさへるといいね。」

「ええ、わたくしも家のお父さんもほしがつてゐるのでございますけれど、このことだけは何んですから。」

笑ひ乍ら併し眞面目に子供がほしさうであつた。

島木は翌朝、こまこました勝手の道具はお捨さんに委して片付けて貰ひ、お捨さんや永い間ゐた町に別れたが、彼女は畑から新鮮な名物の三寸人蔘や南瓜などを島木の妻へおみやげだと言ひ、籠に入れて搬んで來た。その日の夕方、まだ殘暑のきびしい東京へ久濶りで島木は歸つた。

二

島木の妻のお梅は、島木が着くと恁う言うた。

「夜明けにお腹が痛んで朝になつて產れたんですが、友子がお母さま大丈夫と言つて泣くのには弱りました。」厦の中のものを吐き出した爽乎（さはやか）した顏付で云つた。「あなたは立ち合はないでうまいことを爲さつた。」とも云つた。ねえやはその夜明けごろに友子を連れて、寢靜つた町を徨（うろ）つかねばならなかつた。「どうしても家へおかへりにならなくてこまりました。」

「子供が生れることが怖いのでせうかね。」お梅はそばにゐる友子を顧みて、「赤ちやんがコワイのあなたは？」と言つたが、友子は頭を振り、久しぶりで見た父親に妙な羞かみを感じてゐるらしかつた。急ぐ島木の傍へ來なかつた。やはり女の子だと思うた。とにかく島木は左ういふ騒ぎの中にゐても役立たないし、居なかつたことを別な意味でよいことにしたと思うた。

產婆や助手や看護婦、赤兒の腸が不良（わる）いといふので小兒科の先生、見舞の人、島木は島木で夏中の郵便物の山のやうな始末、庭には秋の手入れで植木屋が入つてゐた。その騒忙しい最中に友子の神經が妙に昂ぶつて行つた。產婆が湯をつかはせに來ると、泣くのだつた。譯も判らずに泣いた。產婆が赤兒をいじるのを嫌がつた。母親が友子を抱いて寢なくなつたので、それだけでも泣くだけの理由はあつた。

「お脊中に寄りなさい。」

お梅は仕方なしに左ういうたが、友子は諦らめて母親の脊中に抱き着いて寢るのだつた。島木は昨日に變化る友子の愛情の激變に割つて入り憫れんだ。

看護婦が夕方、電話をかけに行き、急な用事が出來たと言つて暇を取つたが、それにも拘はらず厚化粧で引取つて行つた。また別の看護婦が來たが翌日の夕方、何故か烈しく井戸端で嘔いた。

「わたくし何處もわるくないのですが……」

綺倆の惡い看護婦は、頰を赤黑く染め食事もしないで、横に臥て息窮（いきづま）しさうにしてゐた。お勝手のお煮物の匂ひを嗅いでも嘔氣がいたしますと云つた。

「困りましたわたくし。」

看護婦は自分でも嘔氣の原因が解らないで氣の毒がつた。

產婆の來る時間には、島木は友子を家から外して散歩しなければならなかつた。赤兒が泣くと、赤ちやん大丈夫といふ言葉を十分置きくらゐに立續きに神經的に言つては、母親の枕元へ行くのだつた。その苛立つた神經的な樣子は見てゐられなかつた。それ故醫者や產婆の時間には、そとへ拉れ出すことにした。島木は日に二度づつ、醫者へは廻診の時間を電話で聽き合せ、產婆は預め時間を決めて置いた。友子も左ういふ事情を怜しく知つてゐて島木と一緒に外を歩いてゐながら、「もうお醫者さんはかへつたでせうかね。」といふのだつた。

「もう少し。」

島木は時計を出して時間を見た。

八幡神社の境内へ出かけたが、物呆じたやうな顏貌で島木は腰掛けに坐り、群る椿の濃綠を頭に重く感じるのだつた。かういふ毎日の散歩は酷く島木の神經を疲らせ、夏の間の養生も何の效無くいじめられて行くのだつた。

此處へは子守や小僧などが來ては、居睡つたりしてゐた

が、島木は一處にばかり居られなくて、また歩き出すのだつた。「おれは子供にばかり疲れて駄目になるのぢやないか。」島木はそんな考へを有つても見た。

近所に夜の畫ばかり書く西洋畫家があて、はじめ鸚鵡を飼うてゐたが、この頃、驢馬を飼うて四つになる息子を乘せて散歩してゐた。それが妙に氣障なやうに見えたが、島木は子供を愛する情を感じて、笑つて挨拶するのだつた。あの人にはあの子供は王子だらう。

「わたしにも驢馬を買つて頂戴。」

友子は島木にさうねだるのだつた。

「白い驢馬でないとこまるわ、色がそまるから。」

と、彼女は訂正した。

何處かに白い驢馬はゐないか？——島木は家へかへると、産婆は歸つて家の中は靜かだつた。ただ、看護婦が寢て蒼い顏をしてゐた。

「友子の泣くのは家の中が騷々しいからだね。子供にも靜かなことが必要らしい。」

「さうでせうか。」

妻の梅子は低い聲音で、「あの看護婦さんはつはりらしいのです、それを彼の人は知らないでゐるんです。」

どうも不思議だと思うてゐたと、梅子は惡戲者らしい何處かしん刺な目付をして言ふのだつた。

「成程ね。」

「そこでとにかく歸つてもらふことにしました。」

看護婦は晩に車でかへつた。誰がああいふ女に係つたものだらう、島木は笑へず腹が立つやうな氣もちだつた。三度目の看護婦はてきぱきと立働いて綺倆も勝れてよかつた。大阪者だが美しい聲を有ち合せてゐて、子守唄を拍子を取つてうたつた。晝間の散歩と氣疲れで早寢して目の醒めかかるころ、隣室で子守唄がきこえると、島木は快い心もちになり再た寢込むのだつたが、そのたびに莫迦々々しく苦笑された。

子供は腸を惡くして小兒科の先生に毎日往診して貰うてゐたが、友子はさういふ時うまく晝寢をしてゐても、醫者の匂ひでも嗅ぎ當てる樣に眼を覺まして、先生が來たあと泣き出すのだつた。

「餘程、神經が昂ぶつてゐるね。」

母親を赤兒に奪られた友子は、氣の故ばかりではない、妙に氣むづかしく寂しい容子をしてゐた。島木は又連れ出して雨の中を出歩かなければならなかつた。誰でも父親といふものは恁麼風に子供をそだててゐるものだらうか、島木は誰かに尋ねて聽きたい氣もちであつた。

下田端の通りで急に大雨になり、米屋の軒さきに雨を避けてゐたが、その軒下へ濁つた水が漲れ込んで、履物が浮くほどだつた。島木は米屋の疊の上にあげて貰ひ、友子を抱きな

がら雨あしの益々ひどくなるのを見詰めた。烈しい雨を熟視してゐると、催眠術にでもかかつたやうに氣が遠くなるものらしく、島木は自失した氣疎い氣もちだつた。泥濁りが低い方へ流れ、木の端や落葉が浮いて行く、それへ氣もちが乘りうつり木の端や落葉が見えなくなると、初めて氣がつくのだ。島木はさう氣もちをそれからそれと續けてゐるうちに、泥濁りが土間の半分へ少しづつ新しい泡を疊上げてくることに氣附いた。

島木はその泥濁りの泡を見てゐるうちに不圖、此の間庭の毛蟲を一と固めにして埋めて置いたのを、あとで掘り返すと毛蟲はまだ土の中で寄り集つて蛆々として生きてゐたことを思ひ出した。島木は奇異と物凄さに打驚いたのだつた。いま濁り水を見てゐると、その水の動きに、その生きものの動き樣が同じやうに似てゐると思うた。膝の上で友子は雨を怖がり島木に取り縋つてゐるのであつた。何處かで警鐘が鳴り、下田端の藍染川の上流が氾濫したのであつた。往來は一帶の濁り水の瀨になつた。

雨が小降りになつた時、島木は友子を背中に負うて洗足になつた。米屋の疊はとくに上げられ、床の下に暗い水がひたひたに押し寄せてゐた。

「どうも色々・・・」

「すぐ山の方へお上りなさいましよ。下通りは危うございますから。」

「ええ。」

友子は震災の日は漸つと生れて四日目だつた。神田の病院で生れたのだつたが、燒け落ちて上野の通りを梅子と火に追はれて、煙の中に一夜を公園で明したのであつた。この小さい生きものは煙で咳をして、乏しい母親の乳房をくはへてゐたが、さういふ病院で生れた赤兒を抱いた母親だちが都合六人、上野の露ぼい立樹の下で假寢したのであつた。彼の時の赤兒だちはどうしただらうと言ひ合うたこともあつた。友子は時々人に問はれると、それが何事でもないやうに云つた。

「わたし、地震で生れたのよ。」

島木夫婦には妙な記念である友子は、勢ひ地震などゝいふ感傷的な結合があるために難を避けて鄕里にゐるときなども、屢々人々から云はれたものであつた。「あの時のお子さんでございますか？——」そして寒い北國の一と冬を雪の中で暮したが、健康な友子は風邪も冒かずに育つたのだつた。

「彼の時のことを考へると此の子が丈夫に育つてゐるのが不思議のやうですね。」

先きに亡兒の痛手を負うた島木の妻と島木は、時々さう言うて丈夫な子供の發育を喜ぶのであつたが、全く喜びといふものの內容は島木夫妻に取つては、子供の健康以外に無いと言つてよいくらゐ、平凡な喜びをよろこび合うてゐるのであ

つた。

島木が友子を連れ出す醫師の時間は、ときとすると夜のことがあり、或夜は月夜のこともあつた。妙に島木は妻のない人が子供をつれて歩く氣もちを移し植ゑて見て、物哀しげな氣もした。

「お父さまの影は大きいし、友子の影は小さいし……」

彼は上機嫌で、こんな風に唄ふやうに言つて歩いた。彼はこんな人生が自分の生活の上にあることを、月夜の晩のせゐか事新しく感じた。

或晩、島木は夜中に目をさますと、書齋の襖が一尺ばかり空いてゐて、次の間を隔てた中の間の壁ぎはに、洋服を着た男がすつくり立つてゐるのが見えたが、夜中にこんな筈がないと思ひ、なほ能く見るとワイシャツの胸が際立つて白く見えた。戸締を嚴重に言ひ付けたのにたうとう入つて來たかと思うた。妻の部屋には看護婦も寢込んでゐるらしく誰も知らずにゐる。――その男は動かずに立つてゐた。

「主人の部屋はこちらだから此方へ來たまへ。」

島木は襖の一尺ばかり空いたところから首を出して言つた。電燈を消してあつたが點けなかつた。

男は暗い立闕の間を勝手が判らないらしく足で疊を觸り乍ら來たが、のつそりと默つて立つてゐた。

「生れたばかりの子供がゐるのだから靜かにしてくれ。」

島木は十圓紙幣一枚と銀貨を三四枚掴み出すと、手を出したまへ之れで我慢をして早くかへりたまへ、騷ぐと子供が泣くからと早口に囁くと、男の方も急ぐ慌て出してどうも恐れ入りますと言つて、もとの中の間から勝手の方へ行つたが、物音は無かつた。島木は起きて出て見ると、風呂場の戸が半分空いてゐて、軒燈の明りが月蝕のやうに赭茶(あかもや)けて射し込んでゐた。彼は庭中を一廻りしたが、踏石の上を踏む音に妻の方で目をさました。

「どうしたんです。」

「ちよつと見廻つてゐるのさ。」

島木は恐くなると庭を一ト廻りするくせがあつた。どういふものか、床の中にゐると尙怖くなるので一度見廻れば心が靜まるのだつた。

部屋へかへると初めて今入つてゐた男が何者であるかといふことに、輕い恐怖を感じたが、家のものへは默つて寢てしまつた。そして島木自身は子供がゐるといふ事に、應待が素早く行つたことを面白く思うた。島木は床の中から先刻のやうに一尺ばかり襖を空けて見ると　壁ぎはにワイシャツの胸元が、白く浮いて見え、まだ男が默つたまま黑々と影を曳いて立つてゐる……。やうな氣がした。

三

八幡神社の境内へは露西亞人、アンドレイ・アントノウキッチが能く來て腰掛の上で本を讀んでゐた。島木の家へも遊びに來たりしてゐたが、帝政時代に日本へ師範學校の見學に來たのだつたが、船の中で革命の報を受け、日本の土を踏むと同時に政府の學費が絶えたのであつた。

子供が好きで、友子へ隔日くらゐに飴や花の贈物をして吳れ、朝と晩に郵便函へ投げ込んで行くのであつた。露西亞語の教授をしてゐて元より餘裕の有らう筈がない、――島木はキャラメルの小箱を郵便函から見出すごとに氣の毒な氣がした。家の友子ばかりではなく、アンドレイの小さい家には何時でも子供のお客さんが集まり、そのたびに師範學校時代の寫眞などを取り出して、子供等を遊ばせてゐた。

夏は涼しいのと、秋口は日あたりがいいのでアンドレイはこの境内へ來ては、本をよんでゐた。

「朝顏さん今日は？――」

アンドレイはどういふものか友子を朝顏と呼んでゐた。或ひは朝顏日記の朝顏から思ひ付いたのかも知れなかつた。

「今日は？――」島木は大きいアンドレイの手に握手した。

「此處は太陽さん溫かい。」

アンドレイは腰掛けるやうに席をゆずり、「何時でもわたし此處へ來ます、此處は廣くて空氣がよい。」と云つた。アンドレイと話をしてゐると決つて空氣や星や子供さんの話が出るのであつた。帝政時代の露西亞は好きだが、革命後の露西亞は嫌ひだと言ひ、日本に六年もゐるのだから歸りたくないと言つてゐた。歸つても氣もちに添はないのであらう、妙に宗教的で、硬すぎる感じで、(露西亞人の舊教はみな左うだが・・)ニコライへ是非島木に來てくれと普段から言つてゐた。

「朝顏さん可愛いあります。わたし子供さんと遊んでゐると一番よい。」

島木も困窮の時代には確かに子供と遊ぶことが好きであつた。自分の生活を知らないものを友に選ぶことは、餘儀ない悲しみを紛らすことが出來るからであつた。アンドレイの場合もさうではなからうか、或ひは異國に親しむには子供の方が餘計に氣安さを感じるのかも知れない。すこし大きい子供は中里驛上アンドレイ樣と書いて、郵便の到くことを知つてゐた。それ故アンドレイが町を歩いてゐると必つと子供が二三人づつ、その大きなからだにぶら下つて戯れてゐるのであつた。はじめ島木はまだアンドレイを知らない時分に、何處かの小學校の先生ではないかと思うたくらゐであつた。

アンドレイは或初夏の夕方島木の家へ遣つて來たが、紙包の中から花を三つ取り出して友子に手渡し乍ら言つた。

「朝顏さん、これあなたの名前の朝顏です。」

庭へ椅子を出して、島木夫妻、友子、その他の若い青年たちと葡萄の棚の下に涼んでゐると、荐りに何か考へてゐた

が、島木はアンドレイにこんな家族的な知合ひがすくないのであらうと思はれた。庭の竹を見て、あれは何んの木ですと尋ね、竹はロシアにはありませんと言つた。青い眼のお人善しな目付、絶えず對手の眼が何を言ひ何を考へてゐるかを覺らうとする外國人特有の表情、さういふ擧止の中に放浪者の狡るさなど微塵も交へてなかつた。貧しいが正直な家庭に育ち、人中に出て交際をした苦勞が自づと沁み出るやうな人品であつた。かういふ境遇にアメリカ人がゐたら、こんな朗らかな人品にはなれないだらうと思うた。

「あの蟲は露西亞にもゐます。」

夕方から葡萄の葉を食ひに出る矢のやうに迅い金ぶんぶんが、時々電燈に眼を射られ、アンドレイの足下に落ちた。島木は露西亞人の書いた文章の中の青い夜とか露臺とか、ネフリネカキヤ通りの散歩とか、何々家の庭園だとかを思ひ出すに適當な感じを受けた。不圖島木が古くに彈いたギターの話が出ると、アンドレイは急き込んで言つた。

「ギターがありますか？」

「あります。」

アンドレイは自己流のふしぎな指捌きでギターを彈いて見せたが、大摑みにも拘はらず顫律の細かい綺麗さが音いろにあつた。島木はそのギターをアンドレイに無期限で貸すことにした。國にゐるころは毎日彈いてゐたと言ひ、手離しがたい手つきだつた。島木は茶を喫んで喜ぶアンドレイに絶えず露西亞小說中の人物を思ひ浮べるのであつた。夏は露西亞でも庭へ出て遊ぶのです、あの石は何のために敷いてあるのですと踏石をふしぎさうに指差して言ふのであつた。

友子はアンドレイに馴染み大きな手で握られると、まじまじとアンドレイの顏を見つめるのであつた。輕井澤に多い外國人を友子は見て、男アンドレイ、女アンドレイといふふうに區別してゐた。アンドレイといふ言葉は彼女にとつては外國人の總稱のやうなものであつた。そしてまだ判明しないが何か異人種に對する氣もちが、幼ない友子の心にも瞭らかに區別されてゐるらしかつた。

いつかアンドレイの家庭の寫眞を見たことがあつたが、父のアンドレイと母と、外に姉のやうな女の人が白い服を着て、建物の石段の上にみな腰かけてゐる寫眞であつたが、建物は田舍家で蔦のやうな葉の密集したものが、窓の上を覆うてゐる古い寫眞であつた。

「これが皇帝です。」

アンドレイ・アントノウキッチは痛はしげに自國の帝王を寫眞の中に見出し憂愁の色を交ぜた表情をして見せた。いま歸國しても昔のやうな露西亞を見ることはできないだらう。そして自分も新しい革命の治下に働かなければならないことに、底知れぬ恐怖を竊かに感じてゐるらしかつた。不自由な

異國に住んで厭でも落着かねばならぬ泣きたいやうな辛い氣もちは、日本語や其風俗を知らうとする焦噪つた氣もちに表はれてゐるのだつた。島木はアンドレイを初めて紹介した露西亞通のK氏が、内々アンドレイが日本の女と結婚して落着きたい意響のあることを思ひ出した。

島木はアンドレイと八幡神社の境内を出て、坂の上で別れた。友子はアンドレイに何時もの癖になつてゐる握手の挨拶をしたが、馴れると自然な挨拶のやうな氣がした。

産婆が來なくなり看護婦が歸つてしまふと、平常のやうな靜かさに返つて友子の神經も次第に落着いて來た。やはり人の出入りが多かつた故であるやうに思うた。唯、母親が友子と一緒に寢ないので妙にさびしげな容子をして、島木と散歩することばかりねだつた。或日有樂町の電車道をよぎつてくる母親らしいのが、右に三人、左に三人の女の子供に取り圍まれてゐるのを見て、あの子供だちは皆この母親が生んだのだらうかと思うた。大きいのは十四くらゐで小さいのは七つくらゐだつた。みな黑と紺の服を着てお揃ひの青い毛糸の帽子をかむつてゐたが、痩せがたの四十ばかりの母親を先頭にして、斜に電車道をよぎつたのだつた。島木は一つなぎの花を見るやうな氣がして、暫らく歩みを停めた。これまで大勢の子供をもつ女の人を樂しむやうな氣のあつた島木は、全然反對に尊敬するやうな氣もちになつた。育て難いものを六人まであして育ていつくしんで、堂々と人生の本道を練り歩くのは立派な仕事だと思うた。美しい騎士だちに圍まれてゐるやうで、そのまま繪にも詩にも音樂にもその外のあらゆる藝術になると思うた。彼はいつか十二人の子供を持つた或る映畫の中の貧窮な母親の、その當時何氣なく見てゐた生活を思ひ出して、敬ふ氣になつた。

六人の子供は母親をあとにして乘合自動車の中へ入つて行つたが、自動車は急ぐうごき出した。島木はシンデイラ物語の夢の場面に、月の世界へ雲を搔き分けて上つてゆく馬車のことを思ひ出した。青い乘合自動車は數寄屋橋の上を駛り、その橋も車も兩側の建物も往來の人人も何時とは違うた光榮のある景色に見えた。かういふ朗らかな心持ちを持つことのできる自分を嬉しく感じた。

サエグサで友子の買物をした島木は、すぐ友子に新しい服を着せたが、不思議に田屋の前で六人の子供だちをつれてゐた夫人に、ゆくりなくめぐり合うたが、人生の仕事を半分してゐるこの母親は、おつとりと物靜かな眼付で島木や友子を見て、一番大きい娘に何か小聲に友子の顏を見て囁いた。島木は一寸挨拶をしたいやうな好意に充ちた氣もちだつた。

「青い帽子ね。」

友子はその青い帽子を珍らしがつた。島木はその帽子の生糸が悉く手編であること、型もよく整うてゐることに注意し

た。手編であることがなほ快よかつた。彼女が娘に囁いた言葉は聞えなかつたが、島木には自分の娘が賞められ囁かれることには、著早い直覺を感じるやうになつてゐたから、この夫人はきつと友子を可愛いとか何とか言つたのであらうと思うた。

島木は雜誌や新聞から子供の寫眞を求められると、必らず斷ることにした。婦人雜誌に年端のゆかない子供の寫眞を載せることは、子供を增長させるばかりでなく、下品な趣味だと思うた。文士の子供であるから雜誌に出るが、さうでない子供は雜誌に出ないといふ理窟はなかつた。妻の場合でもさうであつた。彼は妻の寫眞や談話も禁じてゐた。島木が市井の一書生だつたらそんなものを求められないだらうと思ふと、一書生として與へない方が當然であつた。

島木は歸りの電車で子供をつれてゐる母親を見るたびに、尊敬した。その困難の多かつた彼女の生涯としてではなく人生の一員として尊敬したのだつた。

野田山

小見澤さんのお孃さんが亡くなつた。

その報知を膝の上に置いた在田は喫驚してゐる妻に、ともかく國へ歸へる序でがあるから兩親の人にお悼みを言ひに上らう、しかし人間といふものゝ生死の程は全く解らんものだと今更らしく熟々敢果なく思うた。色艶の好い能く處女らしく優しい肥り方をしてゐたゆかりさんが死なうなどゝは、鳥渡信じられなかつた。

ゆかりさんは在田の妻の敎へ子で、滯鄕中の或る雪の午後過ぎに訪ねて來てゐたが、田舍では見られぬ美しい娘さんであつた。娘さんといふよりもお孃さんと言つた方がよい。娘さんとは何かもう一歩踏み出た所のある整うた美しさがあつた。在田と初對面だつたが別に氣取つたところもなく、易々と話す工合が氣が置けなくて好ましかつた。それから度々、二ヶ月に一度くらゐづゝ訪ねて來たが、若い娘さんの出入りしない在田の家では珍らしい客の中だつた。川べりの片側町にあつた二階家から或日青い土手の上を何氣なく見てゐると、パラソルを差した娘さんがこちら向きに歩いて來る姿を在田は二階から風景畫のやうに眺め入つてゐたが、それが自分の家の門の中へ這入るのを見て、初めてゆかりさんだと氣のついたこともあつた。

「わたくし眼が近いんぢやないんでせうか。」

「どうしてゞす。」

「でもあなたゞといふことが氣がつかなかつたんですもの。」

「僕もぼんやりしてゐてゆかりさんだといふことに氣がつかなかつたんです。」

ゆかりさんは少し話をすると眼が昂奮して處女らしい色になる。眼が大き過ぎるので少しは近くないかとも思うた。階下で子供と遊び、妻と話などをして何時も早めにかへつて行つたが、そのあとで眼の前にばら一輪をさしつけて、すぐその花を置してしまつた感じが殘つてゐた。

「どうも美人だな。」

在田はさう妻にいふと、妻は小學校時分からお父さまを自慢した子で、何日か體操の時間に腕の上げ方が足りなくて叱られると、その日の放課したあとで、體操の敎員の前へ行つ

て、
「先生、これでいゝんですか。」
と、腕を上げ下げして見せたさうだつた。
「あれで仲々きかない氣の子ですよ。」
妻はさう言つて呆氣に取られてゐる敎員だちを尻目にかけて室を出て行つたゆかりさんを、氣丈者だとも微笑ひながら言つた。
小見澤さんの一族は舊家で客の絶え間のない家らしかつたが、どの客からも可愛がられ、何時でも家族の中心になつてゐるらしかつた。結婚といふやうな話が出ると、
「わたくし一生尼さんで通すんですよ。」
在田一族が歸京することになると、停車場へも來て毎年おかへりなさいとも、妻や在田に言つた、歸京後も時々手紙が妻のところへ來て、子供が大きくおなりでせうとか、こんどは何時おかへりになりますかとか尋ねて來た。
「ゆかりさんはちやうどかね。」
「二十一ぢやございませんか。わたくしだちが國へ行つたときは十九だつたんですから。」
「まだ笑ひ聲が耳にある。」
「賑やかに笑ふ子ですからね。」
「來月歸つたらお墓でも詣つて上げよう。」
「わたくしの分もお詣りくださいまし。」

ゆかり事病養叶はず昇天致候間生前の御慈愛を深謝し不敢取お知らせ申上候也と書いた通知を在田夫婦は、何度も繰り返して讀んだ。
「クリスチヤンだね。」
「固い耶蘇敎ですよ。きつと敎會でお葬ひをなさいましたでせう。金澤では古い石浦町の敎會ですよ。」
わたくし一生尼さんで暮らすんですよと笑つて言つたゆかりさんの言葉が、不仕合にも當つたことを在田は思ひ返し、青葉若葉の金澤の城下にいまは白い骨になつた姿をどう考へて見ても信じかねるやうな氣がした。

納骨の日に是非來て呉れるやうにとのことだつたので、まだ一度も行つたことのない小見澤さんを訪ねたが、二階の床の間に白布に覆はれた骨壺があつた。別に線香立もなければ供物や祭壇のしつらへもなく、閑楚な床の間に白布の壺だけが置かれてあつた。傳統故事を愛する在田も、この清らかな有さまを見てこれも中々に好いと思うた。在田はその骨壺に禮拜した。
「すこし遠いところでお氣の毒でしたが、折角お詣りくださるので御案内いたしました。」
「どうしまして、どちらですか?」
「野田山が靜かでよからうと思ひまして墓地をえらんだので

す。」
「野田山ならようございますね。」
一山ことゞく古い墓所になつてゐる野田山の、翁然たる赤松の繁りを在田は思ひ描いて見た。城下の人々の祖先の骨はみな此の山に埋つてゐる。在田の父も生みの母も野田山に骨を埋めてあつた。
「お見舞下すつた手紙も病人に見せましてございます。」
「それはどうも・・・」
「わたくしとしてはどうも手の盡しやうがなかつたのです。博士だちにも來ていたゞきましたが・・・」
小見澤さんは醫師らしい明瞭な調子でさういふと、默つて了つた。在田は緣側から見える下庭の苔を不圖眼に入れた。
いつか、ゆかりさんがお父さまはそりや苔を大事になさるんですよ。履物の跡でもついたら弱りますわと言つたことのある、その苔の色は、春の雨季を終へ蒼々と冴えて、褐色のこぼれ松葉の三四點の程も好ましかつた。
「松もあるんですか?」
その時、在田はゆかりさんにさう尋ねた。
「松もございますわ。もう大變に大事にしてゐるんです。」
その松の頂が隣の屋根に伸び到いてゐた。
「好い松ですね。」
「この松には一寸面白い話があるんです。わたくしの病家に植木屋がありましてね。藥代のかはりに五本持つて來て植ゑて行つたのですが、もう三本しか殘つてゐません。」
「仲々好い話ぢやありませんか。」
「もう十年も前のことですがそのころで十五圓の藥代のかはりです。」
在田はその正直で殊勝な植木屋の心がけを興味深く思うた。盆の節季で留守の間に來て植ゑて行つたさうである。人德のある信仰の深い小見澤さんと此の挿話とに何か調和があるやうに思へた。
「妹がいろ〳〵お世話になりました。」
大學の正服を着てゐる長男と次男の人が挨拶をしに出たが、どちらも在田は初對面であつた。その立派な青年に挿まれた小見澤さんは、人生の父親として重い一種の据わりを有つて見えた。在田自身もかういふ息子さんだちから挨拶される、さういふ年齡に到いてゐることを自分ながら烏渡いぶかしく思うた。
牧師さん、野島敎授、その夫人、一族の人々、及び子供らが二臺の自動車に分乘した。在田は一束の花を持ちあぐんでゐると、
「僕がそれをいたゞいて置きます。」
小見澤さんの次男はさういふと花の束を手に受け取つた。長男の人は白布の上にもう一枚黑い布をかぶせた骨壺を膝の

上に抱いてゐた。

「ゆかりさんも死んだかな。」

在田はなぜか平凡にそんなことを思うて見たりして、古い家並を抜けては走る自動車の窓口で、町端れに近くなるほど群れてゐる燕のゆきゝする濃い影を見入つてゐた。

自動車は岡菖蒲の咲いてゐる山麓の茶店の前で停つた。一行は赤土の山道を松林の間に拾うたが、聲の爽しい春蟬が高い松の梢に啼いてゐる外、一山寂乎として人語を絶つてゐた。在田はこの山へ登つたことは殆ど十年振りであつた。山の上へ行くごとに何故か海の近づくやうな、空の曠い感じの深まる山であつた。

墓地は新しいみかげ石で築かれ、小者が二人居て、何時でも納骨の準備が出來てゐた。骨壺を臺石の上に置いて用意の墓蓆蓆を敷いて、パン、夏みかん、お茶が併べられると、自然それらの粗宴を故人と倶にしようといふ心がけであつたらしい。皆はパンや水を飲んで默々として四邊の風景を見入つてゐた。

納骨の時、讃美歌がうたはれた。

在田は小見澤さんとならんで、重い讃美歌の本を半分づゝ片手で持ち合つてゐたが、二十年振りで聞く讃美歌も世に移りて、在田にはかなり古風なものに思はれた。小見澤さんの聲は掠れて、うまく聲が出ないらしかつた。祈禱があつた。牧師や野鳥教授が交る〳〵故人を想ふの情を述べたが、ふと野鳥教授の言葉が耳に殘つた。

「その顏を見られずその聲を聞けず……」

在田はさういふ現實的な感じをあらはす此宗教を一寸好いと思うた。すこしも反感や可笑しみがなく、たゞ、あまりに善良な人々の集りのやうに思はれた。納骨が終つた。

「ところでこんどは私の番ですが……」

と、小見澤さんは笑つて言つた。奥さんが在田の花を供へながら、

「槻木さんの奥さんへも此花をお分けしませうか？」

「あゝ、それからBさんのお墓も此の近くぢやないか。」

「えゝ、さがして見ませう。」

小見澤夫妻は、先きに亡くなつた知人への墓へ花を頒けるために、あちこち松の木の間をさがした。在田は山齋朶の蘇鐵のやうな葉の姿のを一株掘つて、その根を草の葉で包んで、小見澤さんにお庭へ植ゑて置きなさいと言つて上げた。さういふことは後々で殘つて好ましいものである。

「どうしてお掘りになりました。」

奥さんは根の強い齋朶の株を見て、ふしぎさうに言はれた。

「手ですよ。」

在田は瘠せた手を出して見せた。

墓は泥のついたところを水で洗ひ清め、そして一行は下山した。山氣がやゝ粗く身に沁みて來て、子供だちは毛絲の帽子をかむつた。

自動車の中で小見澤さんは在田に言つた。

「何んにもございませんがこれから粗餐を差しあげたいと思ふんですが……」

「實はすこし疲れて居りますし他に約束した人もありますから。」

在田はお斷りをして旅舍の近くで自動車から下りた。では無理におすゝめいたしませんと奥さんが言はれた。二臺の自動車を見送つて庭木の多い裏町を在田は今日はお詣りをして好かつたと、久し振りで清淨な思ひを感じた。そして小見澤さんが言つたことを思ひ出した。

「あれが嫁にでも行つてゐて子供でも出來てゐたら、あとに殘つたものも困りますが、さういふこともなく亡くなつたのはまだ取得です。」

在田はゆかりさんが清い娘さんとしての生涯であつたことが、今になると思ひ出を淨める、――さういふ意味のことを言つた。小見澤さんもその話を喜ばれた。

「わたくしも家内とさう言つて喜んでゐるのです。」

だが、人生のことが分りかけるやうな生活をしてゐて亡くなつても損ではない。唯、在田は故人へは故人への清い想ひ出だけでよいと思うた。

暮笛庵の賣立

「何日に賣立があるのです。」
「明後日の朝ですから今晩にでもお發ちになつたら間にあひませう。」
「そんなに困つてゐたんですかね。」
「どれだけあつても足りないんですね。何しろ鑛山の人夫の金がもう拂へないさうですから……。」
暮笛庵は古い城下の南寄りの松に圍はれた庭であつた。竹と石とで作られたと言つていゝほど、竹林が疊まれ石が組合せられてあつた。竹は篠に限られ石は、くらまが苔を生やして、低めに土に沈み込んでゐた。篠竹のうしろは孟宗が町家を垣がはりに覆うて、その落葉だけでも美ごとな腐りであつた。予はそこへ杖を引いたときに池心から、一羽の灰ばんだ鳥が斜めに立つて、篠竹のむら立つたあたまから孟宗の高い茂みの間に消えた。なるほど古い庭だ、これなら雉子も啼くにちがひないと思つた。
「あれは五位鷺ですね。」
「この森の中にゐるんです。」

予は案内してくれた人と、竹林の中をもぞ〳〵歩いた。むかしはこの竹林も一群れづゝ植ゑたものにちがひない、一叢一石の趣が繼ぎ〳〵ではあつたが窺はれた。どこにも水鏡めく雨のたまる石があり、石の皺や襞にはていねいな苔がぎつしりと生えてゐた。初夏ではあるが何時の間にか扇をつこふことを忘れるくらゐ、ひえ〴〵した微風が湧いた。
「水の音がしますね。」
「えゝ、此處です、うへからは見えませんが……。」
竹林の中をつらぬいてゐる林泉は、そこへはわざと行けぬやうに茂つてゐて、とうてい其處に流れがあるとは思へないくらゐであつた。あるひは流れを段々に作りあげ、水音を間斷なく石と石との間へ落してゐるのかも知れないと思つた。
「これは先刻の池へぬけて出るのですね。」
「一度町の中へ合して又こちらへ這入つてくるのです。」
予は數歩の間に白薊の花が石をうしろに咲いてゐるのを齒朶の葉の間に眺めた。その他は青い幹ばかりの竹だつた。砥草の茂みに蛙があるいてゐたら予の今歩いてゐると同じやう

に考へるに違ひないと思つた。竹林の徑が盡きると高臺の崖ぎしになり、一山の松が陰森と庭のうしろを抱いてゐるやうな形になつてゐた。いゝん、いゝんと春蟬の高いこゑが頂の枝のあたりにあつた。聞き澄すとそれは一高一低といふ工合に波を打つていゝん、いゝんと聞えた。わずかに枝を透いて空の色が見えた。
予らはもとの池のほとりへ出たとき、また先刻と同じい灰ばんだ羽裏の鳥がはすかいに池に影を落して飛ぶのを見た。もうわたくしたちがゐないと思つて森から下りて來て、わたくしたちの居るのに驚いて飛んだのですとその人は言つた。予は青いどろんとした池の上を覆うた松が枝を透いて、白い水草の花が浮いてゐるのを目に入れた。
「どうもありがたうございました。」
予はむかしの門をくゞりぬけて、一揖して辭をのべた。その暮笛庵の賣立が國の方にあるのである。
「若しゐらつしやるやうだつたら、ご一緒にまゐつてもいゝんです。」
客はしかしこちらからだと大變だからとも言つたが、予は國の方に用もあるから行くことにしようと言つた。
「どうも庭をつくるといふことは貧乏することになりますね。」
「陰氣な仕事だからでせう。」

「いや、庭に凝ると何かゞありますね。」
客である老人は、國の方に何某の沒落や、またなにがしの衰頽を例に引いた。いろ〳〵な骨董を集めてもやはり賣立の時がくれば仕方がありませんからと言つた。
「暮笛庵の別莊を見たことがあるんですか。」
「いゝえ、まだです。」
予は高臺にある暮笛庵の別莊の前を通つたことはあるが、まだ中へ這入つたことがなかつた。
「いゝ庭ですか。」
「まだ新しいんですがいゝ庭です。あの庭をつくるときなんぞ、町の通りを毎日植木を積んだ車がつゞいたもんです。わたしはそのときにも何か陰氣くさい感じがしましたよ。」
生きた植木がゆら〳〵動いて荷車に積まれてゆくのが、幾臺となく白い道の上を續いてゆくのに、何かしら悲しい氣がある。わけて重い牛車で引かれる庭石がすこしづゝ行つては駐つたりするのは憂鬱なものですと言つた。予はいつか小石川臺で六疋の大きな黑牛が索く巨大な庭石を通りすがりに見たときに、何氣なく十幾人かの人夫の數まで讀んで氣が沈んでならなかつた。ひとりの人間の心を好きに遣るばかりに、あゝいふ騷々しい人々の動きはどうであらう、しかもあの大きな石の半分は地面に埋められ、ほんの面とか覗きくらゐしか眺めぬのに、いま牛車は坂の上へかゝらうとしてゐる、：

：人々は聲を嗄らして叫び立てゝゐる。黒牛はその大きな圖體をのし〳〵と歩きかゝるのだ。予はひとりの人間がさういふ騒々しいことをさせても、なほ己が好きに心を向けなければならぬのに壯烈な思ひがした。

「そして庭をつくつてしまつてから商ばいの方がうまく行かなかつたらしいのです。」

「そんなことがよくありますね。」

「別莊の中に池がありますが、水は用水から引いてあるんです。水の代でも三四百圓はかゝるでせうね。ちやうど高臺だから池と空とが近くなつて、中々いゝところですよ。こんどは一緒に行つて見ませんか。」

「ぜひおともをします。」

予はふと思ひ出して客に尋ねた。

「暮笛庵には夜見る庭があるといふんぢやないんですか。どの邊ですか。」

客はあのことですかと言つて、それは例の池からお亭の方へゆくところに、玉笄花ばかりを繁らした一廓があり、そこに高さ四尺くらゐの大玉笄花をまんなかにして、いろ〳〵な縞や緣銀や白葉の玉笄花が地面が見えぬほど陰々として繁つてゐて、その間を五六尺くらゐの石がところ〴〵に臥てゐるのです。もちろん、どつしりと落着いた石なんですがね、

「唯そのなかに一つだけ手洗の圓まるい穴のある石があるのです。それが晩なんぞ蒼々と層のあるぎぼしの間に月のやうに水がひかつて見えるのです。たいへん嫌味たらしく凝つてゐるやうだが、實際は中々その葉の色の深さや、夜の石の重みが落着いて見えます。きつとそれを夜見る庭と言ふのでせう。」

「しかしさういふ庭のまんなかに手洗を一つきり置いたのはおもしろいですね。」

「いつだつたかそこを見せて貰つたことがありますが、まつたく古い月のやうにいゝつくばひでしたよ。」

つくばひと古い月、かたちの圓いつくばひの水はさういへば水さへも古色のあるのが本來であつた。予は兼六園にある李白の手洗鉢を思ひ起した。

「李白の手洗鉢はあれはお取止めの石だつたさうですね。」

「むかしは石にまでお筆止めのやうなことをしたものです。しかしあの手洗には老椎が立ち覆うてゐなかつたらあんなに見榮えがしなかつたでせう。」

客はあなたも大變庭がお好きのやうですねと言つた。予は豪奢な庭は好かない、たゞ主人が愛してゐる庭なればいつでも尊敬できるのですと答へた。草や木の色と土との調和なぞ年經てしぜんに磨きがかゝつてゐるところが、庭の本來の味だらうと思つた。

「僕は子供のときに蝸牛を石の上や、木の葉の上に放して遊

んだことを覺えてゐますが、此間それを思ひ出して庭の蕗の葉の上に蝸牛を止らして眺めてゐたんですがね、まるで小鳥のやうな感じがしましたよ、それに何とも言へない靜かな氣もちですね。」

その一日ぢう自分は一疋のかたつむりを這はして、愚拙にして、高雅な風致を樂しんだ。しかも苔の生えてゐる石の上に這はせると、くろずんだ石の皺の中にとろけるやうな氣がした。角を張りからだをとりもちのやうにねばり強く曲げてゆくところや、雨色の甲羅が少しづゝ動いてゆく工合は、全く天品の姿だつた。

「そのかはり夜の間にだいぶ苔をたべられましたよ。」

「へえ、苔をたべるものですかね。」

「さうらしいんです、朝見るとどこへ行つたか見えませんでしたよ。」

夕方、客と予とは晩食をたべながら故郷へ行つて見ることにした。予は暮笛庵の賢立を見に行つたら必らず珍しいものが見られるだらうと思つた。それに何となく哀感が先き伏せにしてゐさうで不安だつたが、それも樂しいやうな氣がした。

「あなたのところも夜見る庭ぢやないんですか。」

「はゝゝ……」

予はさびしく微笑した。

「このごろ客があると障子を閉めたくなるんですよ。こんなボロ庭を庭として見ることはいやですからね。それにケチくさい庭をほこることは、全くたまらないことです。」

予は「庭はどうして作るか。」といふ本を書いたら、その原稿一枚分だけでも人後に落ちない構圖を持つてゐるが、しかしこの庭にはやつと二三行しか書かれてゐないと、いつも左う考へてゐた。第一、予のその「庭はどうして作るか。」といふ稿本は、まだ一枚もかいてなかつた。

「本統に庭の好きな人は自分で掃いても他人に掃かせないものですよ。」

老友はかう言つて、一つ〳〵の庭には主人の魂の宿がありその掟に從うてならされてゐる。夜露でもやはり心して置いてゐるやうなことがありませんか、つまり筍のさきのひげにはひげの夜露があり、芭蕉には荒い夜露があるわけですからね廢園には廢園の露があり、茶庭にはそれらしい夜露がある、それは主人の好みで自然のものも左うなるらしいんですと言つた。

「さう言へば主人が留守でも、庭のどこかにゐるやうなところがありますね。いつか國の方の茶人を尋ねたときに留守でしたが、やはり茶室か庭かのどこかにゐるやうな氣がしましたよ。」

それは打水の匂ひがまだ新らしかつたせゐもあらうが、植込の何處かのかげに佇んでゐるやうな氣がした。それほど庭

と主人の間に隔たりがなく、塵なければ主人の心にもそれがないわけだ。だから僕は庭のある人を訪ねたときに留守であつても庭を一とまはり眺めるだけでその人に會つたやうな氣がするんですと客へた。

「支那の詩人などよく其間のことをうたつてゐますね。人なく景あり景自ら語るといふところが……。」

予らは停車場の中にゐても、暮笛庵のことを語り合つた。

「それでは一石一木をみんなせり賣りにするんですね。」

「敷石はもとより殆ど全部賣るんでせう。もう池の水まで賣らなければならないんでせうて。」

「池の水ですか……。」

「それは戯談ですが、とにかくどんづまりまで行つてゐるらしいんです。」

「悲しいでせうな。」

「え、そりやもう……。」

暮笛庵の門の前の松の林の中に、秋晴れのつゞいた雨の朝柿色をした柴茸が美しい柴の間から差し覗いて、しつとりした露に濡れてゐた。予ら子供のころはその石垣の上にのぼつては摘んだものだつた。いまから考へると山土を搬び、松の下露を柴に受けさせて、あゝいふ可憐な茸を生やさしたものであらう、いまも初秋には生えるかも知れない——。

「暮笛庵の主人はいろ〳〵な女の世話をしてゐたさうですがそれもみんなこんどはお拂箱でせうな。」

予は夜行列車が東京を離れたころに、新聞を投げ出して老友にたづねた。

「いづれ左うでせうが、しかし女の方でも諦めてゐるでせうよ、とにかくあちこちに一人づゝあつたらしいんです。よくは知りませんが……。」

「艶菊といふのがゐたんですが、あれもやはり同様にこまるでせうね。」

「また誰かゞ世話をしませうよ。」

艶菊といふのは古い目拔の龍の帶止めをした、まだ水々しい女で、鮎をくひに行つた席で高價な指環を輝かしてゐたが、性質は素人女よりも内氣だつた。予はその女が再び泥土に枕することに哀れを感じた。浮き沈みの暮しではあれ、決つた男の扶持をはなれることは悲しからうと思つた。

朝の内に予は暮笛庵を指して、故郷の旅籠屋を出た。疲れてはゐたが暮笛庵近くの町つゞきへ出ると、賣立に行く人らしい茶がゝつた風采の人々に會つた。道具屋、植木屋、茶人などが殘暑のけはひのある庭園の入口に、白い扇をひらつかせて佇つてゐるのを目に入れると、予は先づ一味の哀感の流れることを感じた。

「羅つてゐるらしいですね。」

「えゝ。」

予と老友とは庭の廣場——座敷から下りる大きな踏石の羅られてゐる最中に出會した。二間くらゐある大踏石で陰つたところは全部の苔だつた。予は小石川高臺で牛車が引いた大きな棄石を想ひ起し、この踏石も牛七頭を要するだらうと思つた。入札は即座に開かれて、二千八百圓に賣れた。そしてその石の肌に無慘に八幡といふ張札がされた。三四十人の人人の間に感嘆のどよめきが流れた。

札元は池のそばにある茶庭燈籠を羅つた。たけのつまつた柔らかい作りは苔の亙るまゝにまかせ、まだ初秋の夜露を含んだまゝ蒼々として立つてゐた。作者は分らないが三百年位經つてゐるだらう、灯石もちやんとなれのよい石だつた。予はあれを一つ、予の庭の竹の中に置きたいと思ひ浮べた。朝々の打水、畫なほ冷たい如露の味を考へて身ぶるひしたが鉛筆をとる氣がしなかつた。

「拜領ものらしいんですね。」

老友はかすかに囁いた。

「あれは三百圓くらゐなら落ちはしないですかね。」

「さう、そのあたりが恰度つけどころですね。」

札がひらかれると三百二十圓で夢香山にゐる茶人の手に落ちた。尾上といふ張札がされた。

「あのひとですよ、むかしうまい料理を食はせた尾上の主人といふのは……。」

見ると七十くらゐだつたが、古い三島茶碗のやうな顔をして、昂奮しながら傍の四十くらゐの黑襟をした意氣な女に何か扇子をバちつかせて囁いてゐた。ふとりじゝの、まだ皮膚にねばつた張りを見せた垢ぬけのした女だつた。妻君ですか、いやおめかけさんですよ、あれで中々いゝ料理を食はせた人だが、氣に入つた料理人が見つからないと言つて四五年前に廢めたんです。料理の揃ひ物をすつかり賣立をして五萬圓くらゐあつたでせうね、それであんかんとして茶を立てゝ暮してゐるんですと老友は話した。

「あの燈籠が手に入つたのでまた茶を立てゝ人を招ぶんでせう。」

予は四十くらゐの女がかくしやくたる老人のうしろに控へてゐるのを見て、暢氣な暮しもあるものだと思つた。五重の塔、春の燈籠、雪見、それらはどん〳〵賣られた。棄石で千圓くらゐのものもあつたが、敷石が羅られると人々はあはてて敷石の上から、蒼い苔の上に下りた。

「みかげ石で八枚——。」

「百圓。」

「百二十圓。」

「百五十圓。」

で、けりがついた。

「くらまで十枚、外に拍子木が二本。」
「百圓。」
を、飛んで二百八十圓で落ちた。美しい苔のある敷石は土になじんで離れまいとしてゐるらしげに見えた。なかんづく予は踏分の石を見たときに、その深いなじみがこの庭にこもつてゐるのを今更のやうに感じた。予は心で嘆息した。
「手とか足とかをもぎ取るやうなものですね。」
「これから樹を糶るのでせう。」
息を入れて茶が出た。
予はあの竹林だけは賣ることはできまいと思うた。薪にも簾にも編むことはできないだらうと考へた。
「あの中の石はもう賣られてしまつたらしいんです。」
「藪の中ですよ。」
予は何となく敵意を以つて老友の顔を見た。虚心坦々たる老友の顔にあざけりの色がうかんだ。
「あの石を見逃せるものですかね、みんなで百くらゐ埋れてゐるんです。」
予は乾いた喉に茶をながし込んで、では、あれは今日よりさきに賣つたんですねと言つた。下賣が行はれてゐたらしんです、こまかいものなぞ・・・老友はかう言つて、かうなれば石一つ逃しつこはありませんよ、かれは左う言つて冷然と扇子を帶の間に挾んだ。二十年前にはこの人も富有と奢樂の暮しをつゞけたものだつた。弓張町の春木さんといへば、好き放題の暮しを東西の美妓の間に噂を流した人だつた。虚心坦坦たる中に一脈の非人情な心をもつてゐた。
札元はこの故郷に多い五葉松の根上りを糶つた。根元にきつしりと鐙のやうな熊笹が層をつくり、この庭から抜かれることを拒んだ風致だつた。人々はその松を圍んで暫らく默り合つて、中に入札の鉛筆を走らしてゐるものもゐた。予はこの五葉松といふものを嫌ひであつたが、けふは葉のこまかい白髪まじりの姿に、あらそへない悲哀の色が仄見え、その曲りくねつた枝々をしげ〳〵と眺めた。何たる古色ある悲哀に富んだ姿であらうぞ、――これは搬びに十人の手間で二日はかゝりませうな、傍の人が緣なき予にさう囁いた。予はさうでせうと答へた。開札されると落した人はすぐ生々しい紙札を張るために、松の梢に手をふれた。その人はパナマ帽をかむつてゐた。人々は楓の木の下に群れ、椎のかげに群れ、もつこくを覗き込み、もちの丸物を高々と仰いだ。そのたびに新しい所有主の名札が若緑の葉の間に、反物の値段づけのやうにひら〳〵動いた。
そのころから女の姿も人の群れの中に、小さい扇子を動かしながらつゞいた。いつか五位鷺の消え失せた藪の左手の松の林、――崖にそうた亭々たる萬緑の相貌が、ひどく予には歪んで悲しさうに見えた。けふに限つて鳥のすがたもなかつ

た。
「いよ〳〵蹲踞石も賣られますね。」
予はさう囁いて人々のあとについて、れいの、夜見ろ庭のつくばひの糶られるのを酷くつかれ乍ら、石に腰を下ろして聞いてゐた。人々は玉笄花の葉を踏みしだいて立つてゐた。予の心に一抹の人生がもはや過ぎ去つてしまつた。予は人力のはかなさよりも、宿命のどうどう廻りを仕方なく薄目をひらいて眺めるばかりであつた。耳の中で糶られる値ぶみがずんずん進んだ。予はもはや買ふ氣はなく、へとへとに疲れてゐたが其時ふしぎに視界をさへぎる或る月夜を思ひうかべた。
「五十圓！」
予は直立して叫んだ。人々の視線のまとの中に予は烈しく青ざめながら、馬を馳る人のやうな心もちを舐めしやぶつて叫んだ。扇子をつかふのが矢のやうに予の面をひしひし打つて來た。
「六十圓。」
と、反對にきたものがあつた。
「七十圓。」
「百圓。」
予はもはや青いたてがみに縋りついた馬の上に乘つてゐた予は予の鞭をうしろへはね、雲や霧の中を走る思ひがした。そして再度予は叫んだ。百十圓！　かれらはみんなぐつたりと疲れて予の顔を眺め、例によつて一と糶の濟んだあとのどよめきが流れた。予は予の古い月、夜見る石手洗の鏡を薄目に眺め入つた。何んたる古い月、予は馬から飛び下りて息をついた。
「それを何になさるんです。運びが大變でせうに。」
「ほしいんです。中々古くていいんですからね。」
予は老友の表情を仔細に見るいとまはなかつたが、矢張りあざけりが浮んで見えた。人々は再び玉笄花の葉を踏み築山をかこんで、そこの松と棄石とに聲をあげた。予は葉の倒れたあたりを無慘に眺めた。氣をつけると既う簪のやうな花がつぼんで葉の間から恥かしさうに覗いてゐるのを目に入れた。予は東京の庭のぎぼしも蕾んだらうかと仄かに考へ耽つた。
「これで四五萬圓くらゐにはなりませうね、まだ三分の一は濟みませんから。」
老友はさう言つて殆んど石だけの値段だとも言つた。日のあたつたうしろの崖で蟬が啼き出した。
「この齒朶に札を入れさせてくれませんか。」
札元へかう聲をかけたのは、下町に住む茶人だつた。まだ二十二三くらゐの女中とも妾ともつかない女がゐて黑いあぶら石を敷きつめた玄關前の草を拔いでゐるのを見たことがあるが、あとで人に訊ねるとこの茶人のおもひものだといふこ

とが分つた。年が三十くらゐ違つてゐて、親子としか見えない、——或時、通り合してこの女がぼんやり佇んで通りの遠方を眺めてゐるのを、予は何か知ら寂しく誘はれて見たいものを持つてゐる女だなと思つた。

「下草はまとめてやることにしてゐるんですが、ご希望なら始めますかな。」

札元は聲高々と齒朶を羅つた。柊の葉のやうな立派な羽根を擴げた美しい齒朶であつた。予も心はうごいたが茶人はいきり立つて自分で落して了つた。春早くこの齒朶が卷葉をひろげる朝があつたら、樂しからうと茶人の心を窺ふことができた。予はその時、竹林の方から歩いてくる二人づれの女が陰森とした景色の中に芙蓉を投じたやうに派手な姿をしてゐるのを目に入れた。ひとりは背丈が高く、一人は低かつた。

「あれが艶菊ですよ、なりの高い方なんです。」

予は老友に指さして見せた。が、老友の眼にはふしぎにあざけりの色が浮ばなかつた。かれは暫らく見詰めてゐたが、まるで嘆息でもするやうに、

「なるほど、きれいですね。」

と言つた。

かの女らは竹林の小徑へかくれ、その着物の白地の多いあかしの色が、累々たる竹の幹の間から透いて見えた。——入札の人々は茶室の方へ足をはこんで、燈籠にからむ美男かつらや、叡山苔の蒸しついた石などを取りかこんだ。かれらはかなり勞れてゐたので初めほどの呼聲が立たなかつた。金燈籠をのぞむものがゐたが、それは別なんだと言つて肇らなかつた。予はひそかにその金燈籠がどこかの寺院の外陣の檐に吊されたものであらうと思つた。

「ごらんなさい、もう札のつかない木なんてなくなりましたね。」

「あんなに濟んだのですか。」

木といふ木、石といふ石にはみな張り札がされ、おのおの持主が變化つてしまつてゐた。予は奮然として四睨した。そして寂然たる一陣の風はまた紙札を予の目前に白い蝶のやうにひるがへした。ドンが鳴つた。あちこちに欠伸のこゑがした。

「そろそろ歸りませうか。」

予は老友を促がした芝草のある小徑を歩いた。芝の間に敷島のカラが落ちてゐて風にうごいた。予はそれを見過してゆくうち、芳ぐはしい匂ひをかいだ。

「木犀でせうか。」

「木犀ではないでせう、あのとほりまだ花を着けませんから。」

予は再度匂ひをかいだときに、これはどこかで香料を焦がしてゐると思うた。風の向きが建物の方から來たのである。

「香を焚いてゐるんですね。」

「ええ、さうかも知れません。」

木母老人の顏にそのとき烈しい冷たいあざけりが再度あらはれた。予はこれがこの老人のくせであるとしても、これは少し烈しすぎると考へた。

「しかしいまになつて香を焚いたつてどうにもなりませんからね。」

老友はかれこれ夕方近く賣立がつづくだらう、道具などとちがつて對手が生きてゐる木だからと言ひ、その證據には普通の札元とちがつて既うあんなに勞れてゐると言つて微笑つた。

木母老人と予と清流を隔てた料理屋で夕飯を食べ、故郷の落鮎の肌をつツついてゐた。けふ、落札ものの引取りがあつたので、予と人夫とで石洗を掘りに行つたが、思ひの外、鉢が深く埋つてゐて美事なつくばひであつた。予はなるべく苔を落さないやうに注意して、車に積むのを見てかへつたが、その折、暮笛庵の門の前は荷車で一杯であつた。掘つたために枝葉のしほれた植木、なまなましい土をくツつけた踏石、それらがみな一樣に人夫にかつがれながら悲鳴をあげてゐるやうだつた。人夫らは勇敢に車に積み込んでゐたが、機械吊りをしてもなほ搬びの面倒な大きな石は、なぜか動くまいとしてゐるらしく、重たさが頭へひびいた。

庭の中はあちこちに穴があいて、石や植木のあとが慘たらしく踏みしだかれ眼に映じた。敷石など人夫らが棒を踏んでがりがりと蒼い苔を裂いた。予はまなこを覆ひたいやうな思ひで、昔日の暮笛庵を弔ふやうな氣になつた。門前で牛の啼くこゑが陰氣に起つた。

「ここの主人の身になつたら耐らないことですね。あれなんぞ見たらとても立つて見てはゐられませんね。」

築山の五葉松が地震の時のやうにゆらゆら動き始め、十二人の人夫の懸聲が陰々とうしろの崖にこだまを返した。五葉松の大樹は空へ兩手をあげ、何か縋るものがあつたらそれに縋らうとする、枝葉の、悶えがあつた。根は裂け或ひは伐られた。車が一臺、根本の穴へ潜り込んで、大樹をその上に負つてしまつた。懸聲が起つた。車はひかれ五葉松は永い年月の土を完全に離れた。

予は嘆息をした。

人夫らはそれを門の方へ引き出し、轍のあとがありあり地面に印せられた。どうも仕方がない、木母老人はさう言つたが、遺に陰氣な顏つきで、

「出ませう。」

と言つた。

門前の明るい日ざしの中に、牛車の、肥えた牛は寢そべつ

て赤い目をひらいて、涎を輪のやうに砂上に描いてゐた。通りにつづくは植木の車ばかりで、つかれた枝葉の青い木々が喘ぎながら、車上によこたはり面貌が一つづゝ悲しさうに歪んで見えた。誰でも一生のうちにはこれと同じやうなことがあるものですよ、と、木母老人は細長い影をひきながら言つた。

予は木母老人と食事しながら、それらの光景を心にゑがいてゐるうち、妓が來てゐて酌をした。

「艶菊は？――」

「すぐでございますて。」

「あの人もこんどは困るだらうな。」

「いいえ、どうにかなりますわ。」

老妓は微笑つて對手にしなかつた。

彼女はこんな話をした。

暮笛庵の主人は或年、この町はづれの川へ長良川の鵜を取り寄せ、それに鵜飼の人夫まで傭ひ入れて、舟を出したことがあつた。それをできるだけ人に知らさないで、ひつそりと一日の清遊をしたさうだつた。それが何時の間にか町の噂に上つたが、そのときは鵜は人夫と一しよに長良川のほとりへ歸つてゐた。又、冬になると鮭取りの藁小屋の中へ色々な食物を持つてゆき、外部は一見藁小屋ではあつたが、中は殆ど立派な小座敷になり、雪が河原を埋めてゐる中で主人はよく小酒莚をひらいたさうである。

「わたしも參りましたが藁の窓のそとは吹雪いてゐて、中に臘梅などを生けてあつたものでしたよ。あの方はふしぎにそんな人に隠れたことばかりをしてゐらしつたんです。行火をこしらへて鮒釣舟などもよく出した方です。」

木母老人はこの話には耳を貸さないで、予に何時おかへりになりますかと言つた。用事と言つては賣立を見る以外にはないのだから明日にでもかへると言つた。

「暮笛庵の別莊はどうしませう。ご覽になればお供をしませう。」

「では明日にでも行くことにしませう。」

予はあまり心が進まなかつた。陰慘な賣立の光景に心におびえを抱いてゐるので、別莊への氣も起らなかつた。かうしてゐても苔のある土や根の裂ける音がきこえて來るやうで心がいたんだ。

艶菊ともう一人の女とが來た。かの女はすぐ予を見て言つた。

「昨日はご苦勞さまでした。よくお見受けしましたよ。」

「どこで……。」

予はこの女の顔をまじまじと見た。

「賣立に入らしつたぢやありませんか、ちやんとわかつてゐましたわ。」

艶菊は竹林の中で坐つて池の向を眺めてゐるうち、木母老人を見て、すぐわきにゐる予を見出したと言つた。

「何かお買ひになりまして？――」

「つくばひ石一つ買ひました。君は何を落したんです。」

「そりやおもしろいもの、あててごらんなさい。」

木母老人は頑乎として、言ひなさない、何を落したのだと言つた。艶菊は微笑つて答へなかつた。しかし君はもと世話になつてゐた人の賣立に、よくずうずうしく出られたものだね、わたしなら行きませんよ、と、かたくなつて言つた。

「そりやわたくしもさう思つてゐたんですけれど、やはり行つて見たい方が勝ちましたのよ、わるかつたか知ら？　ごめんなさいね。」

艶菊はさう言つてわたくしも何か一點だけかたみに取つておきたいと思つて、とてもがまんできなくて行きましたの。それゆゑ竹林の中にゐて植木やさんの札が落ちるまで待つてゐました。ほんとに竹林のそとへ一歩も出せなかつたのですよ、と言つた、木母老人の色はやや柔らいだ。

「そして何を落した。」

「つげの木です。」

「つげの木、變なものを落したなあ。」

木母老人は笑ひながら言つた。予はすぐ思ひ起した。

「まるづくりで幾階になつた傘のやうな奴だね。」

「ええ、葉のこまかいの……」

「面白いものが好きだね。」

艶菊は微笑つてあれはうちのお庭に植ゑておいて貰ふのだと言つた。けれど昨日は折角ああして土についてゐるものを起すのを見てゐたら、わたしなども氣が變になつてしまつて着ものなぞもいらないやうな氣がしたと言つた。

「暮笛庵にあつたかね。」

「まるであひません。」

艶菊はきつぱりとさう木母老人にこたへ、そして、

「おあひになりまして？」

と言つた。

老友はにがい顔をして、「あはない……」と答へた。

予は初めて暮笛庵の主人と、木母老人とが知り合ひであることを端なく知つた。そのことが出てから木母老人はむんずりと氣難しげに押し默つてゐた。老友はいま少しの財で遊んで食つてゐる、――そして頑固一徹で通してゐるが底が弱々しかつた。

老友が立つて小用に行つたとき、予は艶菊に尋ねた。

「木母さんは暮笛庵と仲がよくないのぢやないか。」

「ええ、そりやもう古いころからですわ。お仕事のことで……」

「鑛山のこと？」

「ええ、暮笛庵さんのさかんなころに、木母さんが倒れたんですもの。お氣の毒のやうですわ。」
予は苦い非の葉を嚙み當てたやうに木母老人のあざけりの色が眼然に釋然としてきたやうだつた。
「木母さんはいい人ですわ。一本氣で、その上、情が深くて――。」
「そんなところがあるな、僕なども頑固なところが好きさ。」
木母老人は手を拭きながら、裏庭にとてもよい聲のこほろぎが一羽ゐる、まるで小鳥のこゑのやうですよと言つて座についた。わたくし聞きに行かうか知らといふと、お前にわかるかねと笑つて言つた。わからなくても聞くだけは聞いてもいいでせうと、艶菊はどうかすると女學生のやうな邪氣ない顏つきをして見せた。
「あの女は中々おもしろい女ですよ。」
木母老人は艶菊が立つたあとでさう言つた。予は苦笑を感じながら、人間なんてものはお互ひの考へが寫眞のやうに映り合ふものだと思つた。
その翌日予と木母老人とは、暮笛庵の別莊のある高臺の深い高麗芝の上を踏んでゐた。風通りがよいため芝は深く美事に青かつたが、まだ新庭の景色が處々に際立つて見えた。
「見るものはこの池くらゐですね。」
池は高臺であるため空に近く明るい水色をしてゐたが、石などはまだ苔が來てゐなかつた。平常誰も住んでゐないこの廣い庭に、動いてゐるものは水馬くらゐの、穩やか靜かさが罩められてあつた。
「山頂の池の感じがありますね、しかし古さはない。」
よく山頂などに樹の覆うてない池があるものだが、その明るさだけはこの池の表べにあつた。この穩やかさにくらべると昨日の庭の騷々しい人臭い有樣はどうだつたらう。予は坐り込んで加賀連峯を眺めた。
「ここに白鳥を飼つてあつたのですが、どうなつたことですか・・・」
木母老人は對岸の青い綠を見つめ、なかなか綺麗でしたよと言つた。予はなぜか鶴を思ひ起した。白い鶴とこの明るさとは調和するだらうにと思つた。――予らは崖を下り、そこにある小徑の中を歩いて見た。そこには遺に古い落葉がたまり清水の落ちる音がした。予の肩さきにふれ何か草の實の零れる音を草の間にきいた。
「ぬかごの實でせう。」
木母老人はその一粒を拾ひ上げ、ほらこれですよと言つた。このとき初めて木母老人の天眞の性質の善さ穩やかさが、予の眼に映つて見えた。反對の小徑から林をぬけ池の上へのぼらうとしながら、木母老人は息ぎれをさせ、
「わたしの妻はご存じのとほりあの通り病氣をしてゐますが、もしも駄目だつたらこちらを引拂つて日本ぢうを廻つて見たいと思つてゐるんです。」
木母老人の奥さんは永い間わづらつてゐて、老人はきつと先立たれると口癖のやうに言つてゐた。
「それもいいですね、それよりも庵室でも建ててこもつたらどうです。」
「ええ、さうも考へるんです。近江の國にいいところがあるんです。」
近江國とは遠いところを考へたものだと思つたが、そこにむかし芭蕉がゐたことのあるところがある、せめてそんな處でもあやかりたいものですと、老友は寂しさうに坂を上りつめて言つた。
「俗人は却つてそんなことを考へるものですよ、妻がゐなくなれば何も用はありませんからね。」
「さうですかね、僕にはまだよく分りませんが・・・・」
二人はまた池のそばに立つてぼんやり水の白光りする表を見詰めてゐた。
「それに子供はなし・・・樂な身分です。」
木母老人は獨り笑ひしてぽつりぽつりと歩き出した。
「この庭にしてもどんな庭でも、作つたほどのものは、きつと壞される時がありますね。」
「しかしそれは一概に言へませんが・・・・」

木母老人は依然として頑乎に予をささへて言つた。
「この庭だけについてもやはり昨日のやうな日がないとは言ひきれませんからな、庭にも相があるとむかしから言ふぢやないんですか。」
「ええ、よくさういふことを書いてありますね。」
木母老人はむしろ辛辣な顏付で、「わたしにはどうも昨日のやうなことがこの庭にもあると思へてならないんです。」
さう言つて池をふりかへつたときに、予は鬱然とした身すぼらしい人影を池のほとりに描いた。木母老人は烈しい疾風の中に息づくやうな荒々しさで、その人影を目に入れてゐるらしかつた。かれは何をこの老人の生涯に加へたか？――木母さんはなぜに夕雲の中の城を攻めるやうな卑怯な空想をするのか、予はそれをはもや明らかに分つてゐた。
「木母さん、それよりも一つ庵室を建てませんか。」
「ええ、それはしよつちう考へてゐることなんです。けれどもやはり壞される時があるやうな氣がして、どうも勇氣が起らないのです。」
予はそのとき弱々しい木母さんの疲れた表情を見た。
「そんな壞される時が來たら來たでいいぢやありませんか。」
「ええ、一つ建てますかな。」
「是非、お建てなさい。」
予はさう元氣づけながら別莊を出た。木母老人の默々とし

て歩きつづけてゐる足もとに、日短かさが追ひつめてゐるやうな氣がして予も默つてその影のあとに尾いて坂を下りかけた。

名園の燒跡

一

一年に春だけしか行けないのだから、その春も過ぎようとしてゐるのに、春木はまだ故郷へ發てないでゐた。去年地所を借り庭木を植ゑ込んだのであるが、寶歷以來の大雪で庭のある家は皆庭木を折られ、その大雪で梅や櫻の蕾を小鳥等に喪ひ荒されて、今年の春は花が見られないであらうと噂されてゐた。實際、春になつても毎年のやうに慌しく梅や李や櫻の一時に開くといふ、北國らしい美しい春は來なかつた。返り咲のやうな乏しい花を着けた樹々、枝や股を折られた樹々の無慘さは、雪害の大きかつたことを思はせるに充分だつた。春木は原稿で金を作ることの甚しい疲勞の中からも、何度も天龍寺墓畔の自分の庭を思ひ像いて嘆息するのだつた。

その内大火の報らせがあつて名園に數へられた昔の木屋藤右衞門の庭屋敷も燒け落ち、故郷の人だちの心は春寒い慴えと怖れの中にあつたので、單に庭を造るだけの云はば遊びのやうな事がらに、遠慮深い春木の心は出足を挫かれるのだつた。家を失うた郷里の人だちの前で假令土地は離れてゐるとは云へ、庭造りなぞして遊び暮せる義理ではなかつた。併も一方には春行かないでゐたら最う今年は行けないと考へると、氣は沈み生活に弛みを感じるのであつた。

東京の庭のものは田舍へ送つてあるので、庭はさびれる一方だつた。空の爽かに晴れた朝、見知らぬ紳士が二人訪ねて來たのであるが、庭の事で私の意見と構圖とに敎へを乞ひたいとのことだつた。私は堅く斷つたが一寸でもいいからお目に懸りたいと云ふので、仕方なしに洋服姿の紳士に會つたのであるが、彼らの一人は日本畫家で、一人は料理店を開くといふのであつた。

「あなたの好きに庭をつくつたらどうです。僕なぞは一人前の植木屋の知識も經驗もないものです。」

この珍らしい庭の好きな未知の紳士は、石のことや樹のことなどを話し込んで却々歸らうとしなかつた。妙な熱情で昂奮しながらゐる有樣は、何時の間にか私の心に乘り移らうとするのだつた。

「これまでは種々な仕事をして來ましたが、矢張り好きなことで人間は暮した方がよいと思ひましてね、子供の時分から私は魚を釣ることや料理を拵へることが好きだつたのです。それで父が最近に亡くなつたので宿年の望を達しようと思うてゐるのです。」

彼れの父は茶人で東北の一都會で古い茶料理で有名であつたが、よい料理人が見付からないのと、自分も年老つたので陶器の揃物を賣立てその金で自適の朝暮を送つたのであつた。大雪の時なぞ庭へ雪を下させないで、却つて其のために離れ一棟雪のために潰されたことなぞがあつた。さういふ父を持つこの紳士の心の底には、風流韻事の拒めない血すぢが流れ合うてゐて、年とる毎にさういふ氣持は萎えてゆくものだらうと考へてゐると、却つて年と倶にその勢ひを增すといふのであつた。

「私なぞは碌に物も分らない内に、世間が一かどの庭造りなどと言ふので、ごらんの通りの庭でお話になりません。第一庭は巨萬の黄金を積んでかかるのが順序ぢやないでせうか？千や二千の小使錢で何ができるものでせう。」

木屋藤右衛門は築庭の時に何艘となく京都あたりから引いた石の荷物船を湖の底に沈めたさうであつた。人の生命も失はれたことは再度ではなかつた。今では機械吊りにする石も、昔は何十人といふ勢子の肩に擔はれたものであつた。

「私のいま作りかけてゐる庭は、――」彼はさう云ひかけて故意と氣難しい顔をして見せた。「云はゞ一石一木のつもりで始めたのですけれど、遣りかけて見ると却々さうならないのです。一そ垣を少し見られるやうにして竹か何かを一面に植ゑ込んで、石を三つ四つ埋めようかと思ひます。」

春木は寧ろ手を振つて押しためるやうな氣もちだつた。彼はその庭を造つてゐる間、夜も眠られないと云ひ、何か助太刀をして下さいと言つた。

紳士はしつこく繰り返すのだつた。「自分一人ではどうも思はしくないのです。植木屋と言つても蔦職同樣な男ですから、信じることができないのですよ。」

「では相當の植木屋を見付けたらどうです。蔦職ではどうにもならないぢやありませんか。」

「ええ。」彼は言葉を濁しながら云つた。

「誰かいい植木屋はゐないでせうか。」

客が辭去した後、春木は妙な此のきつかけで烈しく國の方の庭のことを考へ、すぐにでも發ちたい氣持だつた。冬の大雪のまま埋れてゐたことを考へると、早くその手入をしたいと思ふのだつた。この氣持ちは上野の或西洋料理の椅子に坐り、そこの音樂を聽いてゐる間にも消え去らない考へであつた。ふしぎに音樂がなほ彼の心をそつくり優しく愛撫するのだつた。

「お出かけなさい。」

春木は上野の停車場へ行き、そこで明日の晩の寢臺の切符を求めて、その心を決めるのだつた。そして彼は彼の愛する庭の中に射す朝日の光を歩きながら目に描いた。朝の縞模樣の中を行く列車まで見えてくるやうな氣がした。

「先刻の紳士もこんな氣持ちでゐたのだらうか？」

二

春木が久濶りで故郷の庭に立つた時、取り入れてある小川の畔には、あやめの簇生したのに一面の紫の花が絞り出されてゐた。春木はそこに蹲んだまま不思議な愛情に似たものを感じた。去年植ゑたものは皆若葉を鎧うて、雪害はあつたけれど妻の姉や甥の心づくしで、植木屋が這入つて掃除したあとだつたので清々しい氣持だつた。

今年の仕事は去年の假植ゑのものの配置をすることで、春木は植木屋を對手に色々その構圖で苦心した。東京の庭から持つて行つた下草の荷を解くと、その中から蟻が一匹迷ひ出したのも、因緣めいて可笑しかつた。二百里も隔れた異土に迷うては蟻も困るだらうと思うた。

春木が毎日庭へ出て働いてゐる垣根の外に、午後から必らず一人の半翁ともいふべき、何處か役人上りの氣質のよささうな男が、空地の草を褥にして坐り込んで庭を眺めてゐるのだつた。春木と植木屋とが話しながら植木を植ゑ代へたりしてゐると、此の半翁は春木と植木屋の會話の間に挾まり、何か獨り言のやうに云ふのだつた。

この半翁は毎日遣つて來ると、垣根の竹につかまりながら脆座を搔き、唐子のやうな童顏に笑ひを浮べて春木や植木屋の仕事を眺めてゐた。春木は初め無禮者と思うたのであつたが、三日四日と續くうち別に邪魔になる譯でもなく、取り立てゝ不愉快でもなかつたので其儘にしてゐたが、何時の間にか孰方ともなく挨拶を交すやうになつてゐた。

「庭へおは入りになりませんか。」春木もその氣になり誘うて見たものの、半翁は人の善い笑ひ顏をして辭退するのであつた。

「此處はよく見えますので勝手です。」半翁は煙草を喫み、寛くりと春木の顏を見守つて云つた。「石の頭だけ見えるやうにして石をすつかり埋めたのはいいですね。よくあれだけの石を思ひ切つて埋めなさつた。」

それは春木の趣味で或る石はその三分の二を埋め、頭だけを松の根元に棄石として置いたのを褒めたものらしかつた。

春木は一體此の男は庭の事が解るのだらうかと思うたが、底氣味の惡い氣もしないではなかつた。

「却々したたかものらしいやうです、その證據には昨日も樹を植ゑてゐると樹の頭をあの人は見てゐたやうです。」

さう云へば半翁が時々鷲のやうな鋭い目付をしてゐることを春木は氣附くのだつた。

「何處の人だらう。」

唯の見物なら永く居ても二十分くらゐで去つてしまふが、彼れは初めから坐り込んでしまふのだ。併し着衣の粗末さからいへば矢張り役人の古手か何かであるらしかつた。唯、この半翁の樂みながら眺めてゐることが春木の注意深い氣もちに觸れてゐた。

午後の三時の憩みに春木はまだ家を建てゝないので、植木屋と枯枝を焚いて茶を沸したのであるが、垣根の外へも一杯の茶を振り舞はなければならなかつた。半翁は禮を述べながら甘美さうに茶を喫むのであつた。

「あなたも庭はお好きなやうですね。」

「わたしは暇さへあれば人の庭を覗いて歩いてゐるのです。自分ではさういふ事ができないものですから。」彼は目尻に皺を寄せて笑つた。「毎日遣つて來るのであなたも嘸煩さく思つてゐらつしやるでせうが。」春木は頭を振つてさうでない意味を示した。

「しかしあなたも恐らくこれまでに庭くらゐお造りになつたことがあるのでせう。お見受けしたところでは油斷のならない方だ。」

半翁は事も無げに笑つて見せた。

「さういふ事もありましたが、今では結局詰らないと考へてゐるくらゐです。庭なんて考へると恐ろしくなりますね。あなたもお若いのに庭なんかに凝つてゐられると頭が白くなりますよ。」

これは半翁の皮肉ではなかつた。先方の植木屋は後頭に若い自分から白髪を交へてゐることは爭へない證據であつた。庭に凝る人々も自然頭を年の割合に白くしてゐるのは、夜の寢ざめや仕事の暇々や又晝寢の夢の間にも、肝膽を碎くやうなことがあるからだつた。

「でも廢めることができないぢやありませんか。」

「それは業ですよ。その業に取り憑れてゐる間はやはり病人も同樣ぢやありませんか。あなたは東京から態々こんな田舍へ來て庭を造られるのも、わたしに云はせば業です。」

三

天龍寺の鐘樓が春木の庭の背景になり、高い松林の間に山門の丹塗りとその重なる景物の一つだつた。彼は或朝、そこの廢刹の鐘樓の上にのぼり、文政年間の梵鐘の下に立つたのであつた。此の梵鐘は百萬石の城下の町の偶々までに今も響いてゐるが、その鐘に手をふれて見るのが、初てだつた。

天龍寺は昔八十人の僧都を集めてゐたゞけ、今は廢れて見る影もなかつたが、松柏の間に長い廊下がつづき、鎧窓のあ

るあたりに何か昔の面影があつた。そして此の巨刹を背景に東に聳えるものは醫王山の連峰であつた。梵鐘の音色はこの醫王山の村里へまで聞えるのであつた。春木はこの醫王山に攀ぢ登つた昔の氣憶を冷たくするものに、山腹の美しい水の動かない池があつた。彼はその池を見たときに幼時になほ千古の池を感じたのであつたが、端なくも梵鐘の莊嚴蒼古に目を瞠つた彼は、たゞちに山頂の池を思ひ出したのであつた。

彼は久しぶりで莊嚴を感じた。この感じは彼の庭造りの一日を憂欝にし氣を沈ませ、何をしても面白いことがなかつたおれ自身が厭目なのではない、彼らは餘りに莊嚴であるだけだと思うても、春木は沈み勝ちになり一日漠然とした梵鐘の威力と戰ひ疲れるのであつた。

彼は次の朝も冷たい大梵鐘の下に立ち、梵鐘を仰いでは溜息をついてゐた。とても叶はない氣がした。彼は鑄物師になり大梵鐘を鑄上げる光景を描いたり、平手で叩いて見てその音と響にあこがれても見た。しまひに彼は彼の頰を梵鐘に觸れては、殆ど名狀すべからざる欷泣に似た不思議なものを己れの身内に感じた。春木は鐘樓の窓から何か急に叫びたい氣がするのであつた。何を叫ぶといふ氣もちではなかつたけれど春木の身内に搔き上る烈しいものが脈打つのであつた。

彼は蒼ざめて鐘樓を下りた時に、大梵鐘の下敷になり死をさへ空想したのであるが、廊下のはづれに墓參の人らしい若い女連れを見出して漸つとほつとしたのであつた。彼らは若く元氣のよい女だちだつた。春木は自分の庭にかへり默々として梵鐘を頭に感じてゐた。

春木は或暖かい春のころ、まだ歩いたことのない見知らない町で、この梵鐘の音をきいた記憶を殘してゐた。

天龍寺の梵鐘を見てから、彼は庭をつくることに興味を殺がれ、いくら焦つても壯重な梵鐘の心持を庭に出すことのできぬのを苛々しく思うた。さういふ考へは屢々おれは庭なぞ造つてゐてどうするのだらう、おれはさういふ悠々として暮していいのだらうかと、時々彼の悲觀説が彼を壓倒してくるのだつた。彼は昨日昔の木屋藤右衞門の庭の賣立を見て、敢果なさよりも無慘さを感じたのだつた。石、植木、燈籠、手洗、下草に至るまで値段を付けられ、それらの落札者は、門前に犇めいて、松を買うたものは松を掘り、石を落札したものは石を車に乘せ、燈籠を購うたものはそれを搬ぶのに車を仕立てゝ又何百年來植ゑかへたことのない三千圓に落ちた老松は、數十人の人夫の手によつて其根を掘られ運ばれるのであつた。昨日まで靜閑の境にゐて、苔の色も寂しかつた名園の姿も、最うけふは踏みしだかれ荒らされる儘だつた。一昨年暮笛庵の賣立があつてから、次第に名園が失はれる傾があつた。木藤の庭は土地株式會社に二十萬圓に賣られ、會社はそれの倍以上の額を賣立によつて成績づくる心算であつたら

しかつたが、しかも賣立に先立つ一週間前の或夜、市の中央から出た火の手は、故郷に曾つてなかつた大火に擴がつたのであつた。

火の手は烈風にあふられて、あらゆる小さい庭のある町家を燒き拂ひ、川を越え坂を上りそして木藤の庭と建物とを一ト舐めにして燒いてしまつたのであつた。六百餘軒を燒いた火は明け方の細ぼそした雨の中にしづまり、十二萬の町の人人は、不安な曾つて經驗しない一夜を軒下に火の手を眺め乍ら明したのであつた。冬は大雪で軍隊が出動したのはまだしも、京都方面の地震で胴ぶるひをした町の人々は、こんどの大火の恐怖をも取交ぜて災害の多い春をむかへたのであつた。

彼の甥の松宮貞三は手紙をよこして、燒け落ちた木藤の庭の有態を彼のもとへ報らせて來たが、東京で此の手紙をよみ乍ら何か天は人に利せずの感慨深いやうだつた。

松宮の手紙一。

昨夜の寶歷以來の大火が、不幸にも君が喜んでゐた木藤の庭や、結構な建築も殘らず燒いてしまつたのは電報で知つたことと思ふ。今朝彥三町あたりへ行くと、町家の見當がつかぬまでに燒け落ち、春早い山がすぐ眼の前に聳えて見えるので驚いた。平常感じなかつた人間の仕事は自然の山々の姿まで隱してゐるが、かうなると山の姿が第一に眼につくのに驚く。靜かさは我々の生活には無く本來はやはり山や河の中にあるといふ平凡な考へに還つて來る。木藤の建築は餘燼もなく燒け落ちてゐた。

庭へ火の廻つた時に風の方向が變つたのであらう、庭は奧の方の飛石や樹木、燈籠などが助かり有繋に煙の中にも、或る由緒ある「庭」の威嚴をもつて殘つてゐたのには、何かしら嬉しい氣がした。しかし誰の所有とも解らない垣根のない燒け野原に、この一廓だけは優に百年の閑境を騷がしい混雜の中に保つてゐたことは、やはり庭自身の正しい由緒が然らしむるのだと思うた。中には燒け黝ずんだ飛石や燈籠もあつたが、芽の吹いた石のかげの下草や、すくすくと立つた木蓮の美しい純白な蕾は、何か火災に楯向うて庭を守護してゐる鋒先のやうにも見えた。僕は此の庭木が一齊に火の手につゝまれた時にかれら草木が庭を守つてゐたことを疑はない、――その證據には建物に近い樹木はみんな燒けてゐるが、その次ぎの樹木は平常よりも一層青々と元氣よく見えてゐる。かれら名園の樹木らが手をあげ指をひろげ火の手に向うてゐたかと思うと、其壯烈さが心に應へてくるやうな氣がする。今日はさすがに煙の中に疲れて立つてはゐるものの、青い芽のあるものは一層きらきらと不意の暖かさに惑はされ、その芽をふくらがしてゐるやうである。僕は木の幹にさはり石に腰をおろして坐つてゐた。その時僕は誰の姿を見たと君は思ふ。

筒袖を着た棗屋の老人が杖を引いて庭へ這入つてくるではないか。

老人は何の屈托もなく遣つて來たのだ。君も知つてゐるだらうが棗屋は名園を惜みに來たらしいのだ。僕は眞二つに割れてゐる美事な白臘石の手洗鉢を指して見せた。火の手にあふられた古い石だつたが、彼自身ではじいて割れた名高い手洗だつた。

「これは兵庫の北風家の手水鉢ですよ。こんな傳來物が割れるといふことも不思議ですね。」

老人はその割れた新しい切口を眺め惜んでゐたが、石自身が憤然として自滅したやうな氣がした。

「わしはそつくり燒けたかと昨夜はまんじりともしなかつたのです。」

「飛石は助かると思うてゐたんです。飛石が燒けてゐたら、それこそ足も踏めないんです。」老人は飛石を懷しさうに踏みしめ乍ら云つた。「これもばらばらに羅賣にされるのだから、今のうちに揃つてゐるのを踏んで置かないと未來永劫踏めません。」

老人は此のくらゐ揃うた飛石は此の城下にはない事、これが離れ離れになることは親子がばらばらに別れて住むやうなものであることなどを話し、老人らしい重い情熱のこもつた眼付をするのだつた。棗屋は今でも東方の山麓に古い庭をもちそれと〻もに暮してゐる茶人だといふことは君も知つてゐるだらう。彼は一人で茶をたのしんで弟子は勿論雅友の誼みをも自ら斷つてゐるさうだ。

「わしも何か記念に賣立に買ひませうかね。」

彼は自嘲的な笑ひを漏らした。何故そんな笑ひ聲をするのか僕にはよく分らなかつた。しかし其調子には皮肉ばかりでない悲哀の情もこもつてゐた。

「これだけで賣立ができるでせうか。」

僕は燒け殘りの樹木や飛石やを見渡し乍らも、なるべく此の老人と永く話したい欲望を感じた。と云ふのは實はこの老人の顏の中にあふれてゐる烈しい頑固さが鑛鐵のやうに僕には珍らしく見られたからだ。

「五六萬圓はあるでせう、しかしそれは石ばかりの値段ですね。」

老人が去つてから僕もこの庭を引上げた。まだ餘煙は町の北方にながれてゐる。

松宮の手紙二。――

木藤の庭は明け方近くに燒け落ちたさうである。棗屋の老人に行き會うた翌日も僕は何氣なしに行つて見たが、それは別に君のやうな風流心からではない。(皮肉でなしに。)誰でも鳥渡行つて見たくなるものらしく、竹居氏や零雨氏などの俳人にも庭で逢うたが、彼らも均しく名園の失はれたことに深

い愛惜を持つてるらしく思はれる。僕や彼らは低徊しながら併も皆或蕭條たる心を打合はせてゐた。君がゐたら綿々の情をその原稿紙に抒べるであらうに、君のゐなかつたことは惜しいことだつた。

光琳扇面の地袋戸や、時代板戸や、有名な唐木の間なぞは跡方もないが、三十本もある燈籠はみな無事だつた。對月の銘のある手洗は底の方にすこしばかりの水を殘してゐた。君と此庭を見に行つたのは何年前だつたらう、秋も終りに近づいた卯辰おろしの薄ら寒い日だつた。僕はあの日のことを思ひ出して暫らくは凝乎としてゐた。

松宮の手紙の三。

愈々賣立の日が近づいたので「茂久ろく」を別送した。なるべくその日の間にあふやうに歸省を希望する。相應の人氣もあるから高値であらう。君は賣立を好まないやうだが僕も好きではない。何か廢墟に似た氣もちを經驗するだけでも餘り愉快なものではない。併し我々が愛惜した「木藤の庭」の最後を其の一石一木の上に、見るのも强ち無駄なことではなからう。

昨日内見に行つて見たが、燒跡も掃除されて昔の木藤の庭の面影を殘してゐる。棗屋の老人に出會うたが、老人は飛石の疊み方や其の面の美しさに見惚れて、僕がそばにゐることさへ忘れてゐるやうだつた。此間冷笑に似たものを浮べた彼は今日は明らかに昂奮してゐた。老人ばかりではない、此の町の庭好きの人々はみな相應しい昂奮で眼をいきらせ、樹木の前や飛石や燈籠の間を縫ひ乍ら感激してゐた。

「この庭で何か「木藤の庭」のかたみになるものがあるでせうかね。僕はそれを搜してゐるのです。」

「何んだつて木藤の記念になります。石にしろ燈籠にしろ餘處には無いものばかりです。」

老人は煩さげに僕と話しながらも、彼處此處歩きながら木の姿や石を眺めてゐた。

「石を見るのに年齢の必要がありますかね。誰が見ても面白くない石は最後まで詰らない石ぢやないんですか。」

僕は解り切つてゐることで、老人に衝きかかるのだつた。棗屋は吃驚りしたやうな顏に輕蔑と憐愍の情を交へながら僕の顏を熟視した。

「あなたには河原にある石も庭にある石も區別がつかないのでせう。苦さへ生えて居ればいいのでせうからね。いや失禮」

僕は罪なことゝ知りながら、最う一度棗屋を怒らしてやらうといふ欲望を感じたくらゐだ。老人は不機嫌な足どりでゐたが、そのうち不意に表へ出て行つて了つた。

四

「棗屋の庭を見に行かう」

過然に春木もその考へをもつてゐた。併し棗屋は庭を見せてはくれないであらう、何故かといへば貞三や春木に限らず棗屋は誰にも自分の庭は見せなかつたからである。或は人に庭を見られることは氣性に合はないのかも知れない、――いつか貞三がお庭拜見のことをいふと、老人は驚いた顏付をして、わしどもの庭なぞ見にお出になさるより公園の夕顏亭へでもお越しになつた方がいいでせうと、誰にでもいふやうに判然と斷るのだつた。

二人が北方に藪を負うた棗屋の門前へ出ると、すぐ筧から引いた手洗ひを零れる水の音を耳にしたのだつた。竹を疊んだ庭の中に折々古木の幹が覗き、棄石がその竹にはさまれて臥てゐるのだつた。前栽は既にこれ以外の風趣をもたない閑雅さで、竹の葉は落ち散つてゐて掃いてはなかつた。が、よく見ると、それらの竹の落葉は自ら何らかの箭目に依つて按配されてゐることが、春木には頷づかれる節々があつた。燈籠は奥の方に目立たない位置にあつたが、一つは織部の角なのと、一つは三月堂の型のあるのだつた。音は水だけだつた。

「成程。」

春木は貞三にこの靜かさはどう思ふと云ふのだつた。

貞三は藪の中に白い點々たる物體を見入りながら云つた。

「茵ぢやないか。」春木は遣つてゐるなと思うた。

物閑かさは一入深かつた。奥庭は塀があつて見られなかつたが、唯、深い繁りの層だけが若葉青葉に重なり合うて見えた。塀の石垣に地蜂が巢をつくり唸り聲が高くきこえた。

二人は再び前栽を眺めに行つたが、人がゐるのかゐないのか分らない位だつた。玄關へまでの飛石にも泥や下駄の跡が無く、雨に洗はれた儘だつた。赭みのある皮つきの御影石が靜境を得て眠りを深うしてゐる形であつた。

二人は門前を去つた。

あら磯

姉は小聲で、「好きなやうにさせて置けばいいんだからお前何も言はないでゐてくれ。」と耳近く囁いて、小用に立つた弓島のうしろに尾いて來た。廊下づたひに庭のへりに並べられた西洋草花の鉢が、古い苔の生えた庭と不釣合に半ば枯れ込んで眺められた。

「春に送つた分ですね。」

「何しろ潮風が荒いもんだから折角の花も枯れてしまつてね。」

姉は病人の慰さめにと此の春、弓島のゐる市街へ註文して送らせたベコニヤ、西洋葵などに、早や濱邊に立ちそめた秋風の色をそれとなく見つけた。

「いつでもああいふ調子ですか。」

「ええ、この頃はずつかり身體の方がいいもんだから、ああして飲みはじめてゐるんだけれど、しまひにぶり返さないかとそれが氣懸りになつてね。けれど矢張り好きにさせて置いた方がいいんです。」

去年の春から、ずつと二年、まるきり足腰が立たなくなつて、氣ばかり昂ぶつて今の商買の料理屋の方も疊まなければなるまいかと、能登の兄や、近隣の親づきなどと談合した上、やつと離れへ病室を移して醫科大學の博士やその他できるだけの治療をしたあげく、依然足腰は立たなかつたけれど、どうやら神經だけはやや鎭めることができた。しかしどうかすると急に何でもないことに昂奮して、もとどほりに狂れ出したのではないかと思はれるくらゐ、二階の客の聲が大きいとか内藝者がのらくら遊んでゐるとか言つて、大聲に怒鳴り出すことなどがあつた。

「けれど姉さんのやうに何んでも好きにさせてゐては、あとで困るやうなことができはしないかな。」

「さうしといた方がらくなんですよ。まる一日もちやんと坐らせてゐられちや耐らないからね。」

「まる一日といふと・・・」

「傍から離さないんですよ。用事はなし、同じことばかり聞かされるんだもの。」

「いい加減に立つてしまへばいいぢやないんですか。」

「そりや駄目、寢る外はちやんと坐らせて置くんだから。」

弓島は午后過ぎから又酒をはじめた姉の夫の神崎が、珍らしく内藝者を前に坐らせ、何か絶えず彈かせてゐるのを見たが、聞けばこんどの病氣が少し快くなつた時分から、絶えず誰かを坐らせて彈かせるらしかつた。つまりその間だけ姉はそばをすり抜けることができたが、反對に彈く方は先刻弓島がこの町へ着いてから、もう三時間あまりも經つのに傍に女の唇を濡して拙さうに酒を飲んでゐた。その間ぢう神崎はちび飲みを坐らせ三味線を彈かせてゐた。その間ぢう神崎はちび飲み

「だから彈きながらみんな居睡りなんかするの。」

「ただ彈いてゐては飽きるだらう。」

病氣前は料理屋稼業の主人らしい神崎が無駄口一つ利かないで、ただ飲酒に耽けつてゐるくらゐに考へてゐたが、足腰も立たなくなり生死の境を通り越したので、どこか心根がさびれて來てゐるのだらうと思つた。

「花がいるやうだつたら送つてもいい。」

弓島は部屋の中で眺める溫室物を頭で思ひ描いて、姉も好きなのなら搜して見てもいいと思つた。

「好きだか嫌ひだか分らないからそんな心配はしないでください。」

姉はさう言つてもうそんな事に興味を感じてゐないらしかつた。三年に近く看病やつれのした姉の顏は、永い間の寢不足のためにうだ腫れて張りもつやも失つてゐた。そればかりではない、家の經濟の遣り繰りさへも生優しい氣苦勞ではなかつた。四年前に神崎の兩親が續いて亡くなり、仰山な葬らひばかりでもかなり冗費であつた。内藝者が六人、女中と小女とで四人、ばあやと板前の三人、その間に頭を疲らせて切り廻しをしてゐる姉の髩容につやのないのも、何となく溜息を吐いて口說かれるよりも、默つてゐる姉だけに氣の毒に思はれた。

「とにかくお前が來てくれて姉さんもほつとしましたよ。」

廊下づたひの離れの席へもどると、まだ久龍といふ女が低い調子で爪彈きをつづけ、神崎はあぐらを搔いて物憂さうに脇息に凭れて杯を舐めてゐた。女の顏いろには明らかに倦き切つた表情が投げ出されてゐた。何代となく續いたこの湊の古い料理屋の、血統的なみだらな日本酒にひたつてゐる顏付が、弓島の顏をいつになく堅苦しくさせた。

「すこしおやすみなね。」

「ええ。」

しびれの切れた肥えた膝をずらした久龍は、そこそこで襖のそとへすべり出た。神崎はやはり物憂さうな眼づかひで眺めてゐたが、べつに何にも言はなかつた。こんな病人が飲酒することが弓島にはふしぎに思はれるほど衰へて見えた。

「いつ來たんです。」

神崎は先刻着いたときに挨拶したことを忘れてゐるのか知らと思つた。

「そこにあるお菓子をもらひましたの。先刻ゐらしつたぢやありませんか。」

姉は弓島の顔をちよつと見て、菓子折を夫の前へずらせて見せた。

「さうでしたな。」

神崎はさういふと菓子折を見て、そして一口どうかと言つた。このごろ飲まないといふとそれきり杯を手もとへ引いた。姉が默つて酌をした。ああいふときに注がないと機嫌が惡いのだなと弓島は思つた。姉はたえず神崎の表情に注意深く神經を注いで、眉の毛の動きにも何ものかを讀むことを怠らなかつた。醉ふと火箸でなぐるといふ神崎のことを思ひ出し、弓島は不安がちな氣もちだつた。

濱邊ゆゑ庭は松ばかりだつた。苔と石とがいい工合に古さがついて、初秋の波の音も穩やかに松が枝を潜りぬけては聞えてゐた。「折角見えたのだから何かごちさうをしたらいいだらう。」と神崎は言つて、

「からださへよければ船でも出すといいんだが……」

と、姉をかへり見た。

「何かとりものをしませうか。」

「ん、好きなものを言つてもらつて上げるとよい。」

姉はそんな話の間にも神經質に夫の顏いろをよみ込んでゐるのが、痛々しく弓島にはこたへた。これは姉の方がさきに氣苦勞であたまが變になるだらうと思つた。酒はよくないだらうといふと、

「赤玉ポートワインを始めましてね、それからまたむかしどほりに遣るやうになりましたよ。」

と言つた。

「久龍を呼べ。」

と神崎は突然に言つた。

「あの子はつかれてゐるでせうから、誰かほかの子にしませう。」

「いや、あいつを呼べ。」

姉は仕方なしに立つて襖の外へ出て行き、間もなく久龍といふ女をつれてきて坐つた。大柄な、どこかつンとしたところのある女だつたが、ふつくりと坐つた姿のよい女であつた。神崎は默つて久龍を見てゐたが杯を一息に干した。かの女は注がうとしなかつたので姉が注いだ。何か彈けと神崎は言つた。姉が色の强い西洋花をならべる心もちを、姉自身はほんとに知つてゐるのか知らと弓島は思つても見たりした。

久龍は默つて彈き出した。あらはな振舞ひの上に倦怠が見えてゐても神崎は無頓着らしく、姉もそんなことに氣をつかつてゐないやうであつた。弓島にはその女の態度がひしひし

と感じられた。何を彈いてゐるのか分らないが、汽車でゆすられて頭の疲れてゐる弓島には、なほ一そうがちがち腦がわるくなるやうな氣がしてならなかつた。だるい手つきの女の顏を露はな庭明りに透して見てゐたが、畫のらうそく火を見るやうな物佗びしい氣がして、白色で肥つてゐるに拘はらず寂しかつた。久龍は平凡な、何ものにも關係のない顏貌で機械のやうに彈いてゐた。そのそばに姉もまた置もののやうな單調さで坐り込み、神崎は杯を嘗めるほかは暇息に靠れたまま、むしろ嚮然として坐つてゐた。こんな日が毎日つづいてゐたのかと、一度姉のところを訪ねてくれと言つた母の言葉を眞に受けて出て來た自分を弓島はいまいましく思うた。姉もこの樣子だと病人よりもつらいことだらうと思つた。

この離れとはも一つ向うの離れに、よこに長い支那風な小鳥籠が吊してあつて、黃色の小鳥が籠の目の間をちイちイと鳴きながら透いて見え、消えるに迅い鳥かげを上や下の籠の目にとどめてゐた。ああいふ鳥籠がこんな田舍にもあるのか知らと不思議に思うた。退屈な三味線がいつまでも續いて頭は雷網をかぶせたやうにぼオとしてしまつた。

「それは番小屋町の石屋さんのことですよ。」

弓島は漸と思ひ出した。

「へえ、そして……。」

「墓石ばかりでも千倆はするんです。そいつを建てるんです。」

「それを番小屋町のをぢさんが建てるんですか。」

弓島はこの家の親戚にあたる番小屋町のをぢさんが石屋でそれに儲けさせるために父母の墓を建てるといふ神崎の言葉を注意深くきいた。この不景氣と物入りのつづいた姉の家に石材ばかり千圓もする墓は亂暴だと思つたが、わざと默つて聞き流してゐた。こんなことをしてゐる間に家の根石がゆるみはしないかと思はれ、氣のせゐか、種々な物入り續きのやけくそから、つい思ひ立つたやうに父祖の墓碑を築くらしく思はれた。六十三になつても子供一人ない番小屋町のをぢさんは、儲けの荒い墓石の文字彫りが巧く、少し金が手に這入ると未だに遊里通ひの止まぬ老人であつた。こんどの話も番小屋町に纏めた金を手に入らせ、いくらか身の廻りを小綺麗にさせようといふ姉の心づくしが加はつてゐたらしかつたが、結局は妾とも老妻ともつかない川端のいかさまな女に入れあげるに決つてゐると、弓島はいつも姉のすることが頓珍漢な結果になるのを抵牾かしがつた。さう言へば何時だつたか母のところへ來て　茶話をしたあとで、「電話一つかけさへすればすぐ纏まる金はあるんですがね。」

と、何時ものかれらしくもなく、氣の荒い調子で金をかりに來たが、これまでも度々酢を飲まさせられた弓島の母は、これも利かぬ氣性で、では七の電話をかけたらいいだらうと

言つて、いまは子息がかりで金も儘にならぬからと斷つた話を思ひ出し、あの時分からこの墓碑の話があつたのだなと思つた。年寄つても身よりもない放埒な暮しをつづけてゐる番小屋町のをぢさんも、まる六年ばかり芝に住んだことがありそこで二十も違つた妻に逃げられた苦い經驗を持つてゐるだけに、東京といふところが身震ひするくらゐ嫌ひであつた。弓島と東京の話をしてゐるときは、有繋に東京の風物を懷しがつた口吻を漏らしはしたものの、實際は全く夢にも見たくないにがにがしい土地らしかつた。

「それで今のところ明達寺の境内でわたしのうちの墓くらゐ立派なものはない筈ですよ。」

神崎は客のあるたびに言ひそやすらしい慣れた口調で言つて、何しろ一と箱だから、しかもそれの仕上りは二た箱になるだらうと言つた。弓島は何度もその話に聞き飽きが來て、何となく淺間しげな氣もちにさへなつたが、口前ではそれとなく

「立派なものですね。」

と相槌を打つてゐた。景氣のよい時分に儲けた金も大費りな病氣の費用や、兩親の葬式やで散じてしまつてこの頃では手元も豐かでないのではないかと、弓島はそんなことを考へた。先刻、藏の入口に積んであつた北海道物の乾鮭の買入れなどを見ても別にさういふ考へは湧かなかつたが、家の手入れも今年の夏はしてないらしく、離れのまはりの板がこひも雨風に傷んで朽ち落ちてゐた。

「濱の方へでも出て見たらどう？——」

姉はさう言つて退屈さうにしてゐる弓島を返り見た。

「それよりも裏の家へ行かう。」

裏の家といふのは、神崎の妹夫婦のゐるすぐ海べりの家だつた。弓島はそこで神崎の妹のおにいさんに會つた。一度嫁に行つて出て來たおにいさんは、町のものを養子に貰ひ、その男に嫁を取つてやり、今年二つになる赤ん坊が生れてゐたさういふ養子夫婦の面倒を見てやるには若過ぎた色の白いおにいさんであつたが、氣性が溫和で圓く納まつてゐた。

「僕はこちらの二階でねますよ。」

さういふと、あちらは騷々しいからこちらでおやすみと言つて、一枚だけ金歯を覗かしたおにいさんは屈托なささうに十燭光の來てゐる裁ち板の上で、養子夫婦が向ひ合せに坐つて仕立物をしてゐるのをのんびりと眺めた。赤ん坊はえんこをして何かセルロイドの玉を口でしやぶつてゐた。浪の音が裏戸に迫つてゐたが話しごゑは聞き取れた。

「兄さんにはこまりますよ。しかし靜らつたらまた氣でもふれはしないかと思ひましてね。」

「まあ、あのままにしておくんです、その方が無事ですよ。」

「ええ、あんな人のことで屈托するよりもかうして暢氣にし

てゐた方がいいと思つてゐましてね。」

「それ、それ、それに限ります。」

弓島はをかしさうに言つたので、若い養子夫婦はくつくつ笑つた。かれらはしかし一言もいはないで仕事に忙しかつた。靜まり返つた電燈の色にも田舍の穩やかな夜があつた。それほどよくない綺倆の女であつたが、何故か弓島は好意に滿ちた心もちで仕事にいそしんでゐるかれらを見た。

「しかしお溫和しくひとりで遊んでゐますね。」

「馴れてゐるんでございます。わたくしたちが宵つぱりなものですから。」

若い妻君はさう言つて島渡子供のあたまを弄つて見た。あるじは愛想笑ひを無口者らしく漏しながら、紙切れのやうなものをぽんと子供に投げ與へた。

「では二階にお床を取つておきますよ。」

おにいさんは立ち上つてさういふと、妻君はいいえわたくしがお取りしませうと言つて立つた。

「弓島さんはむづかしいんだから、——」

おにいさんは梯子段を上つて行つた。

若い夫婦は默つて仕事をしてゐて、弓島は所在なく時世後れのこの古い版畫を見つめてゐた。

「浪の音が耳につくかも知れませんよ。」

「さうですね。」

二階から下りて來たおにいさんの言葉で、なにげなく浪の音をまた耳に入れた。庭つづきの敷石に緣下駄の音がした。誰か來たなと思つた。

「弓島はこちらで寢るんですか。」

姉のこゑが暗い庭の中でした。

「ええ、こちらは靜かだから……。」

「その方がいいわ、たばこがなかつたら持たせてよこしますよ。」

「たばこはあるよ。」

「ではおやすみ。」

しばらくしてまた庭石の上に緣下駄の音がした。それが遠のいて默つてゐるみんなへ波の音が一と荐り續いて聞えた。おにいさんは茶を入れながらあの人もなかなか大變だと言つた。ええ、しかしそりや當り前なんですよと弓島は答へた。

「オーイ。」

といふ聲が裏戸の濱にきこえた。

「船が出るんです。」

「何の船です。」

「さあ、——」

「オーイ。」

法螺貝のやうな聲だつた。弓島は二階の寢床へ上つて行つた。障子と雨戸とのそとは荒海だつた。

弓島の眼を覺したころは海づらが瞼のやうに靜かで、何ものか巨大なものを蓋してゐるやうだつた。かれは二三町先きの松並木のある、漁船の着いた方へ歩き出した。濱の女らは笊を持つて漁船から魚の買ひ出しに群れてゐた。

漁夫は自分の家の前まで魚の這入つてゐる籠を搬んで、そこで女らに魚を分けてやつてゐたが、肌の赤い何といふ魚か知らないが、その魚を賣らないで、低い藁屋根の奥の間と言つても、すぐ見透かされる方を向いて、

「オイ、これはそつちへ持つて行くんだ。」

と言つた。

「乳の出る魚だよ。」

買入れに群れてゐる女のひとりが左ういふと、「ふくれてゐるべい——。」と、も一人の女がさう言つた。そこへ若い漁夫の妻が默つて笊を持つて出て來て、その肌の赤い魚を入れて無言で這入つて行つた。物憂さうな物腰ではあつたが、がつしりした肌組みが弓島の朝爽やかな眼に映じた。

「近い中に出るんぢやないか。」

「ん。」

漁夫は機嫌よくこたへた。

「乳の出る魚ばかり引いてゐちや商賣になるまい……。」

女どもはさういふと一齊に笑ひ出した。

弓島は活きてゐる鯛を見てゐるとほしくなつて來て二枚買つた。背中のひれが刺々しく色といふ色がさまざまに吐き出され、紅い肌に藍いろの斑點がうつくしかつた。まるで鐙のやうな頭の雜作がぎしぎし軌むやうで、手帕の中で思ひ出したやうに動いてハネテゐた。そのくせ鯛といふものは活きてゐるうちは、こんなに肌の柔らかいものかと、見たことのないだけに感心した。

歸へると若い女だちは此の活きてゐる鯛を珍らしがつた。姉も初めてだと見え、

「みんなが朝寢坊だから鯛の生きてゐるのなんぞ見られないんだよ。」

と言つた。

氣がつくと、どの女の顏も生白くだるげに鯛のはねるのを見戍つてゐた。時々、アスパラガスのやうな白い指先きが鯛の肌をつツついたが、二三度尾をハネルとそれつきり鯛はうごかなかつた。

「お起きなさいましたよ。」

ばあやの聲がさう注意すると、女だちは受持ちの掃除をするために散つてしまつた。神崎は離れの方で起きて不機嫌な生唾を吐きつけ、げえげえ喉の音をさせた。弓島は漁夫の擔に射しつけた朝日の色を目に描いた。姉は夫の方へ馳けつけた。この家のものは神崎の眼のとゞかぬところを隱れて歩いてゐるやうだつた。

昨日離れの方から見えたも一つの離れの方の鳥籠に、朝の餌をやつてゐるらしい女のうしろ姿が見えた。腕がなよらしく古い籠にうごいてゐた。

「何といふ鳥かね。」

「聞いたんですけれど忘れてしまひましたの。」

黄ろい羽根に朱の斑點をもつてゐたが、弓島にもよく分らなかつた。或る船員が籠とともに持つて置いて行つたのであるが、そればかりではない、何かあの子と約束事でもしたらしいんですよと、姉は久龍のゐないときに鳥籠の說明をした。

「君がその世話をしてゐるのかね。」

「ええ。」

無愛想なこの女は、水を汲みかへ、粟箱をあらたに入れかへてやつたり、まめまめしく手をうごかしてゐた。弓島は三角帆が風を切つてゆくのを屋根の上の方に描いて、この女のする事を熟々と見てゐた。小鳥は能く馴れてゐるが生意氣さうに女の方を見て、柔らかい糀のやうな糞を垂れた。

「中々手がかかるでせう。」

と言つても久龍はむつつりして大したことはないと、すぐ鳥籠から隔れた離れの掃除をはじめた。肥つた女の無愛想なのには、弓島は或る考へを挿しはさんでむしろ悲哀に似た同情を感じた。

しばらく小鳥を見てゐるうち、掃除しながら女も小鳥に眼をくれてゐるのに氣がついた。神崎の部屋へゆくとかれは冷淡な、むしろ豫期してゐないやうな顏付でまじまじと弓島の顏を見た。

「何時來たんです。」

「昨日……」

弓島は呆れて神崎を見凝めた。しかし故意と言つてゐるらしい樣子も見えなかつた。姉もそれとなく神崎を見た。

「春はいろいろ花をありがたう、何しろ潮風だからすぐ枯れてしまふ……。」

「まだ要るやうでしたら送りませう。」

「何しろ世話をするものがゐないし、手がないものですからね。」

弓島はこの樣子なら何んでもないと考へた。そこへ裏の家の養子がひよつこり這入つて來て、みんなに朝のおじぎをした。仕立職人らしく顏色は不良かつたが、角帶姿できりつとした容子だつた。

「この男はまだ半人前ですよ。」

神崎はにはかに話題を見付けたやうに飛びかかつてかういふと、昨夜灯の下で小さくなつてゐた男は、一そう縮こまつて頭を掻いてほくそ笑んだ。しかし食ふことだけは一人前なんですと言ふと、養子はきまり惡げに膝を浮かし、そこそこ

に離れを出て行つた。默つて電燈の下で仕事をしてゐるかれとかれの妻の暮しが、やはり神崎の方からの仕送りはあつたやうなものの、君、その蝸牛の殼をいづるなかれと弓島は心で吃き考へ、廊下から庭へ下りてゆくかれの姿を見てゐた。

弓島は時折神崎の眼を見てゐるうちに、これはやはり一度氣のふれた人だと思はれる、或る濁りを感じた。水の上に浮くぎらぎらを見るやうな濁りと曇りとを感じ、それがいかにも不安だつた。弓島はこの樣子で酒を飲んで行つたらきつと又もと通り暴れ出すことがあるかも知れないと思つた。

午后過ぎになると神崎は酒をはじめ、久龍が昨日と同じいやうに天井を見ながら、じやん、じやんと三味線を搔き鳴らしてゐたが、弓島はさういふ離れの光景を見るとこんなに退屈以上の退屈が在り得るかといふことに惘れ返つた。しかもそれらの有樣は版で刷つたやうに松が枝を透いて、黃ろい疊の上に映つて見えた。繰人形(あやつりにんぎう)のやうなかれらの姿がまるで動かないで靜乎としてゐるやうな瞬間に、弓島は恐怖に似た氣もちさへ感じた。女といふものの忍耐の强さ、辛抱づよいねばりこさにはほとほと見てゐるだけでも憶れてしまつた。かれらは唯あきらめてゐるやうで自分を不死身のやうに無感覺にしてゐた。

「ご飯はどちらになさいます。」

庭をあるいてゐる弓島に、養子の妻君が白い前垂れに赤い手をついて左う言つた。やはり裏の家にしよう、弓島はさう思つて、

「お宅でします。」

と言つた。

朝の鯛がうまかつた。若い妻君がこんなことを言つた。

「漁師が沖で自分だちだけ食べる沖煮といふものがございますの。網でとれたのをすぐ煮てたべるんですが、それはおいしうございます。」

弓島は俳句の季題に沖膾といふものがあるが、あれだなと思ひ、この妻君も漁家あたりの娘であつたらうと考へた。

「それはうまさうですね。」

とにかく裏の家には物の清さが目立つて感じられると思つた。養子は胸を折つて裁ち板の上へかゞみ込んでゐた。見れば女物ばかりで奈何にもそんなものを仕立てるに相應しい男らしかつた。

「けふもまた遣つてゐるらしいのね。いやな兄さんだ。」

おにいさんは遲漬の香のものを搬びながら、いやらしさうに眉をしかめた。そばかすの多い顏立ちだつたが、それが氣質のやさしさを小じんまりと現はしてゐるやうなところがあつた。

「おにいさんが少し言つてあげればいゝのに……。」

弓島は微笑ひながら言つた。

「わたしなぞ言つたつて何んになるものですか、寺島のお上人さんに來て貰つたつて駄目ですわ。」

おにいさんは笑つてあの飲む方さへよしてくれゝばいゝのにと言ひ、町端れの小さいうなぎ屋風情さへ一かどの料理屋になつたが、そんなところに氣のつく人でないと言ひ、はじめの内は齒がゆかつたが、このごろはどうでもなれといふ氣になつたと、氣樂さうに金齒をのぞかせて言つた。

「先刻もちよつと行つて半人前やられてしまつた。」

養子は思ひ出して皓い齒を出して笑つた。妻君もをかしさうにしてゐるのを見ると、しよつちう半人前をやられてゐるんだなと、さういへばどこか半人前らしく見えるこの男を見た。

「兄さんにかかつちや誰だつて頭から叱られるんですもの。」

おにいさんは併しこの前、飼犬に死なれてそれから氣鬱病になつたやうな田舍新聞の通信員だけには例外に同情して、せめて東京あたりの俳句の大家の悼句でも貰つたら慰めになるかも知れないと、一度自分の家の客となつた人を思ひ出して托んで見たりしたことがあつたと言つた。

「その悼句が來ましたか？——」

「それが面白いの、あたまから斷られてしまつたんです。あとで人の家でさんざん御馳走になつて俳句一つ書いてよこさないなんて怒つてゐましたよ。」

おにいさんは膳に坐つて食事をはじめた。「あのひとの怖いのは新聞社の人だけですよ。」おにいさんは可笑しさうに箸を口の端へ持つて行きながら言つた。養子夫婦も雜菜ではあるが甘美さうに食べてゐた。この人らはこんなにうまさうに飯を食つてゐると、飯の不味い弓島は羨しく感じた。

庭の敷石に音がして姉が裏の家へ來た。弓島を見るとすぐ

「たまには母屋(おもや)の方でご飯をたべてもいいぢやないの。まだ一度も食べてくれないんですもの。」

姉は微笑ひながら言つた。

「手が懸ると思つてね。」

「あんまり酷いわ。お前のやうぢや……。」

横合からおにいさんが「こちらがおいしいんだとさ。」と言つた。

「それなら仕方がないけれど、あちらだつて御馳走がありますよ。」

姉は微笑つて言つた。弓島は半ば辯解するやうに言つた。

「あちらは騷がしいから遠慮してゐるんだ。どちらだつて僕は關はないけれど……。」

「それもさうね。」

姉はさういふと、「こちらはお前の氣性に合つてゐるからね。」と言つた。

「あちらだと兄さんと一緒でせう、だから弓島さんは厭なん

ですよ、あんなしつこい兄さんと一緒に食べたらどんなおいしいものだつて不味くなる。」

おにいさんは開けすけにさう言つて、わたしにしたつてまつぴら御免だわと言つて微笑つた。弓島はひとりでくすくす微笑つた。

「わたしそれには氣がつかなかつた。」

姉は尤もらしい目をして一人だけ食べるやうにしてあげるからと言つた。

「それにしても少しからだを關はなすぎるのね、おのぶさんは？——」

おにいさんは身體の着つけなどに少しもめかさない姉を、も少しどうにかしたらどうかと言つた。髪の間にちりほこりの見えるのはともかく、女中同樣に扮裝に粗末なところがあつた。弓島にも氣がついてゐたものの、細かい用事が次から次へと追つてゐる家ゆゑ關つてゐられないのだらうと思つた。

「何しろああして引寄せて動かさないんですからね。そりや少しは髪も結ひたいんだけれど全くのところそんな暇なんてないんですよ。そんな事をしてゐたら用事の方が遲れてしまふし……」

姉は眞顏になり髪の根に指をつッ込んで、「この髪だつて何時上げたんだか分らないくらゐですもの。」と遺に寂しい顏をして見せた。

「さうね、やはり暇なんてないやうね。これはすこし言ひすぎたやうね、わたしのやうに暇がありすぎる人の言ひ分かも知れない——。」

「それにもう朝から寢るまでちよつとの間も身體を休めることだつて出來はしないんですからね。臺所の方だけでもお茶碗がならべられてゐるのを見るだけでも、お菜の心やりだけにしても頭がいたむくらゐなんですよ。」

姉は顏艶の惡い顏をすこし上氣させ、わたしなんかどうでもいいんだけれど、家の方がうまく切り廻しがついて呉れればいいと言つた。

「兄さんのお酒のせゐですよ、お母さんのゐる間にお酒を禁めるんだつてよく明達寺へ願をかけたりしたが、兄さんがああして飲むものだから、却つて神罰があたらないかと願を下ろしに出かけたりしたもんだが、お酒つてなほらないものね。」

「だからわたし好きなだけ上げてゐるの。その方が叱られないだけでも、よほど樂なんですもの。」

姉もおにいさんも匙を投げ出しゐるのが、弓島にはいかにも左うある事のやうに思はれた。どんなに智慧をめぐらしても對手が對手ゆゑ叶はないでゐるところが、いかにも暗欝な宿命的なものだつた。

「死んだお父さんだつてあのとほりだつたから何と言つたつて仕方がないんですよ。」

おにいさんは父のゐる間は、三度づつの酒が夜中まで續いて母自身さへその酒の香に浸つて、母の着物にもさういふ匂ひがしたと言つた。

「おのぶさんに子供がないのもやはりそのせゐですよ。」

「ええ、わたしもさう考へてゐるんだが、もう何を言つたつて仕方がないのね。もうこんな話はよしませう。」

姉は話に釣り込まれて身を悶くやうにしたが、弓島にはこれも因緣づくに定められたやうなもののやうに思はれた。

「こんなことにくさくさしてゐては、一日だつて面白く送れないわけですからね。」

おにいさんらしく左ういふと、茶菓子を持ち出した。姉は姉で、

「わたしなんか一日としてほつとしたことがない。」

と言つた。

「だからこちらへ來て少しはあぶらを賣るんですよ。」

「まさかね。」

快活なおにいさんに較べると、姉は暮しの垢やゴミに染み込んで、水蟲に尾や鰭を吸はれてゐる鯉のやうに元氣がなく泥やあぶくを吐いてゐるやうだつた。さうかと思へば番小屋町のをぢさんのやうな六十を出ても、まだ遊里に通ふ人もある、あの人なんか骨の髓まで達者なんだね、全くあの人の健康な顏を見てゐると腹が立つくらゐだよ、生きて恥多しといふことがあるが、あの人なんぞまつたく生き恥ぢをまざまざと若いものの前で晒してゐるやうなものだ……

「一體姉さんがあんなに人に仕事をさせるから惡いんだ、その金がいつでも惡い方にばかり使はれてしまふから耐らない……」

弓島はかう言つて何となく忌々しげに姉に打つかつた。そんな氣はなかつたけれど、なぜか左う自然な勢ひを感じた。

「姉さんだつて他人に仕事をあげるより增しだと思つて、番小屋町さんに賴んだんですよ、そりやあの人の道樂はわたしだつて厭だけれど、ご覽、他人よりかよほど增しぢやないか、あの人が樂になれば子息の方にかからなくていいし、まはりのものが皆らくになるわけだから——。」

「ところがそれが却つてわるくなるんですよ、こんどの墓の金が入らなかつたらちやんと家に坐つてゐる筈の人が、かいもく家にゐないさうです、子息の喜太郎は大澪しに言つてゐましたよ。喜太郎の妻君にしたつてあんな仕事がなかつたら落着いてゐたらうにと、まるで姉さんを陰から怨んでゐるやうな口吻だつたから、あまり癪にさはつたので今からでも仕事の話はコハせるんですと言つて遣つたんだ。」

「ぢや、まるでわたし一人が損をしてゐるわけね、折角いい

あんばいになるだらうと思つてしたことが、そんな風になつてはやりきれないのね。」

「とにかく姉さんは人がいいんだかどうだか分らないけれどあとでいつも莫迦を見る損な役廻りですよ。」

「それもこれも生れつきだから仕方がない。」姉は妙にさびしい顔をした。

「しかしこんどの事は弓島さんはああいふけれど、おのぶさんが肝煎をしてくれたんであの人も大助りなんですよ。でなかつたら隨分困つてゐたかも知れないの。いろいろな紛紜があつたやうだから…だからわたしはいい事だと思つてゐるんです。」

おにいさんのこの言葉に姉は元氣がついて、誰がわるいやうにと思ひますものかね、そのときの運次第なんだからと言つた。弓島はときどき腑拔けのやうになつてゐる姉を刺戟して見たものの、やはり利目がなかつた。人がいいのか、ぼんやりなのか見當のつかない女だつた。

「とにかく一家のものがそれぞれ旨くやつてゆくのはいいが一人でもしくじつてゐるとあとの者がこまりますからね。」

おにいさんは左う言つて姉の肩を持つやうにした。

「いまのところでは自家が一番金車ですよ。」

姉はさう言つて席を立つた。ひどく疲れて見えた。

「とにかくおのぶさんがしつかりしてゐてくれるから、わたしは何もしないで樂をしてゐるんです。」

「ええ、おにいさんはらくをしてゐらつしやい。」

姉は笑ひながら庭づたひに裏の家を出て行つた。弓島は年よりも老け、老けてゐるよりも暮しの垢の染みてゐる姉を氣の毒げに見送つた。

あとでおにいさんは、

「おのぶさんのゐる間はあそこの家も大丈夫ですよ。あれで中々の働き手だし、第一自分のものなぞ作らうといふ氣のない人だから、それだけでもよかつて行くわけですからね。」

さう言つて姉をねぎらうた。

「さうですかね。」

弓島は裏戸をあけ、夕方の荒磯へ出て、頭のつかれたのを吐き出さうとした。兄貴も不幸だが姉もあまり仕合せではない、弓島兄弟はみんな片いぢに暮してゐる、――かれは防波堤の上から、波に蝕はれたコンクリートの破片を慘めにまた空恐ろしく眺めた。これだもの、こんな堤も波に食はれてしまふ。弓島は感心したやうに秋風の沁みる堤の上を青年の意氣を髣髴しながら元氣にあるいた。かれは二三町ばかり歩いてゐるうちにあんなに銷沈してゐるやうな姉の姿が、次第に勇敢に目に映つてくることを不審に思はなかつた。あの女のちからで暮しを支へてゐる。あれはつツかい棒のやうなものだ。あれがなければあの家はぐつしやりと潰れてしまふに決

つてゐる。さうすると…姉をみじめに眺めることはよくない、それどころか何かと窃に戰つてゐるやうな所がある。

「どうして中々立派だぞ。」

弓島は一道のあかりを見つけたやうに、ほそぼそとした姉に勇ましい姿を見出した。つまり女はああいふ風に戰ひ、いつも下積みに踏みしだかれながら、不拔な仕事を築き上げてゐるやうなものだと弓島は考へながら歩いた。

夜になつて茶の間に、女らが集まりながら肌寒い長火鉢の前に坐つてゐた。姉も久龍もゐた。四五年前に來たときとは女の顔振が違つてゐたが、柱時計の下にゐる色の惡い女だけがどうも見覺えが殘つてゐるらしく向うも何となく左ういふ氣振りを見せた。

「いま時分螢がゐるなんて氣味がわるいやうね。」

松枝といふ女が前の小川のへりにゐたのだと言つて、瘠せた手のひらに、微かにひかる一匹の螢を乘せて見せた。衰へた小さい秋の螢であつた。

「それでも光るわね。」

震災後流れ込んだ大勢の女の、みんな田舍を打止め引上げたのに遲れた東京ものが、それを覗き込んで哀れがつた。

「ちよつとお見せ。」

煙管を投げ出した土地のものらしい色のくろい女が、これも手のひらに乘せながら、小さく明滅する蟲けらを譯なく哀れがつた。かれらは同樣にそれを見たが久龍は別にそれさへ珍らしさうにしないで、緣側へ持つて出でゝ手の平の上をふつと吹き飛ばし螢を草の間に落した。弓島はそれを心に殘し眺めた。そのうち松枝と久龍とが二階へ飯をくひに上つた方へ招ばれ、きうきう鳴る帶を姿見の上にさらした。弓島は秋冷をかんじながら女らが次から次へ茶の間から去つてゆくのを見てゐた。

「この前ゐらつしつたときとはお瘠せになりましたわね。」

「さうか知ら？」

柱時計の下の女は弓島にさう言ひかけた。しかもこの女だけ誰からも招ばれないで、もう九時だのに舌の上に苦い味のする煙草を服み飽きてゐるらしかつた。すると四五年前からこの女だけが殘つてゐるわけだと、榮えない顏立ちの女を弓島は無理もないことに感じた。友朋がみな出て行つたあとに徒らに更けてゆく時計を見上げ、

「あ、もう九時か？」

と言つて煙草を飲む女をにくむ氣にはなれなかつた。女といふものの損德繁榮が對き合つてゐるうち、無言のまま打つて來て弓島の心を憂欝にした。時計は進んで姉は計算的でない頭で何かを帳面に照し合せ、小机で算盤をはじいてゐた。その音だけが弓島のあたまにひびいた。女は讀むでもなしま

た考へ事をするでもなく、招かれぬこの世の的もない人間をぐずりぐずりと待ちくたびれてゐた。何といふ世のありさまであらう、弓島はこの女をどこへか連れて行つて一杯飲みたいやうな或る反抗さへ感じた。淺猿しいものに混み合ふ淺猿しさであつた。

「姉さん、あすの朝僕はかへりますよ。」

弓島は突然かう言つた。

「もつとゐる約束ぢやないの、一やつと昨日來たばかりなのに。」

「もう澤山……」

「どうして？」

姉は小机から伸び上つて弓島が抱膝をしてゐる、徒然な姿を目に入れた。

「何だか詰らない——。」

「こんな田舍でございますからね。」

女は横から口を入れたが弓島は返事をしなかつた。近間の溫泉へでも行つて見たらどうと姉は言つてくれたが、弓島は頭を振つて見せた。見るものが陰欝である、その柱時計の下にゐる奴だけでも、大した陰欝を吐き出してゐる。弓島は取り殘されてゐる女の面白がるやうなことを言つて見たい氣になつたが、そんなことは考へつきさうにも思はれなかつた。

「誰か居らんか。」

神崎の聲が廊下を隔てた離れの方にすると、姉はすぐ立つて行つた。そして又歸つて來て、

「お前にゐらつしやいと言つて待つてゐますよ。」

「僕に。」

「ええ。」

「厭だな。」

弓島は露骨な感情でさう言つて離れへ行つた。神崎はだいぶ廻つてゐるらしい醉を吹いて、退屈だから一杯つき合つてくれぬかと言つて杯をさした。弓島は頭をふつて飲けないとこたへた。鮓のものの匂ひが淡々しい夜の頭を刺戟した。

「わたしも今度は墓の方も建てることができるし、これで落着いたといふものですよ。」

神崎は墓石の圖面を取り出し、どういふ書體がいいだらうか一つ考へて下さいと言つた。僕には分りかねますがね、しかし今時にそんな大きいものなぞ建てたつて仕方がないといふやうな意味のことを言つて、

「僕なら小ぢんまりしたものを建てますね。僕らの祖先は大した人間でもなかつたのですからね。」

弓島はいくらか諷刺まぢりにさう言つて詰らなさうな顔をした。

「わたしはさうは思ひませんよ。われわれ子供は親の眠るところくらゐは立派にしてあげたいですよ。」

「しかし場所をひろびろした淸閑な土地に選んで、却つて墓石は小さくした方がおとなしくていいですよ。明達寺のやうな寺領で一坪いくらといふところに建てるのは、僕には不賛成ですね。あそこは却つて八釜しくてねむれませんよ。それよりか松の多い山なんかに建てるといいんですがね。」

「さうかね、しかしそんな山の中では寂しいでせう。」

どうせ彼のひと達は寂しいところが好きなんだらうと言ふと、神崎は大きなこゑを立てて笑つた。

「しかしあの人達でもやはり賑やかな人家に近いところが好きかも知れませんよ。」

「あなたなら左うかも知れないが、僕ならそんな人間のゐるところなんか御免の方ですね。」

「いや、わたしでも寂しいところは好きです。去年は全くダメだと思ひましたがね、しかし墓のことは考へませんでしたよ。」

弓島は神崎が死んだら墓のまはりで三味線を彈いてゐたらいいだらうと思つた。足腰の立たない神崎が時々こんな墓のことなぞ考へるのには、何か心の弱つてゐるものがあるに違ひないと思つた。

「わたしは發作中に何べんも色々な人をつかまへ、氣が變になつてゐるやうに見えるかと能く聞いたさうですよ、そのたびに誰一人あつて笑つてくれた人はなく、みんな眞面目な顏付を急によそほうてそんなことがあるもんですかと、叱りつけるやうに言つてゐましたが、しかしそれだけは何一つ覺えてゐない時にも、今だにちやんと覺えてゐるからふしぎですね。も一つはみんながわたしに匿れてはこそこそ囁いてゐたのが、うるさく忘れないんです。」

「僕はあなたの發作を見たことがないから分らないが、一體に非常に明確した意識が突然に針路を失ふやうな時に起るものが發作らしいんですね。たとへば中途で電話を切られたやうな氣のするときに起るものらしいんですね。」

「成程、電話を切られた時のやうな氣もちかも知れません。しかしわたしの經驗では頭がもやもやになつて了つたときにあはてて元どほりの事を考へやうと焦るほど頭が暈けてしまふときが、いまから考へると一番恐ろしいときだと思ひますね。わたしは何度も自分の考へてゐることの聯絡を取らうとしては失敗しましたよ。その失敗が看護婦の眼付にすぐ反射してしまつて、そこからも發作の誘惑を感じるんです。或時など看護婦の顏を見てゐるうちに氣がぼやけたことがあるんです。あんまり看護婦がわたしの眼付に注意をしすぎて息苦しくなりましてね。」

「そんな動機は澤山ありませう。しかしそれはあなたならあなたの病的なるものが、既う發作するまでに準備されてゐる時なんですよ。」

「人はさう言ひますが、醫者などもその筆法だが、しかしわたしは準備されてゐる病的なものはあるにはあつても、それを誘ひ出すことさへなかつたら、それきり出ずに終るやうな氣もするんです。」

神崎は蒼い皮膚にいらいらしい疲れを表はしながら、冷い杯をひとりでに飲みつづけた。弓島は例令それを誘ひ出すものがなくとも、病的なものはそれ自體の生活をやめないし、そのまゝ成長してゆくばかりだから、やはり準備されてゐるものだといふ意味のことを言つた。たとへばここに一人の男がゐて理由なく突然に狂氣したとすれば、誘致したものよりも貯蓄された病的なものが一時に破裂したといつていいでせう、この間もそんな例はありましたがね。

「十三人殺したといふんでせう。」

「もつとも二人だけは死にましたがね。」

弓島は姉が來てから、姉の顏に夥しい驚きの色があつたので、きふに控へ氣味に話を切りあげやうとした。しかし神崎にはその心持ちがすぐ見え透いたと見え、明らかに不快な表情をした。

「もつとその話をしてくれませんか。ここにはわたしの病氣に關はつたことを話してくれる人なんてゐないんですから、――」

「いや、だいぶ遲いやうですからそれに眠いんです。」

弓島は正直に眼をこすつて見せた。神崎は夜はあまり眠られないからわたしに遠慮してくれるなと云つて、姉に酒を取らせに座を立たせた。そしてあごで姉のうしろ姿をしやくつて見せ、

「いま妻がここへ這入つて來たときに、何かあなたに目で合圖をしたんでせうね、そしたらあなたは急に話の腰を折つておしまひなすつた。さういふ些かなことがわたしには葬々とこたへてくるんですよ。わたしはまだ充分でないだけではなく、何となく皆から危險がられてゐることが解つて來て耐らないのです。それをあなたまでが、ちやんと承知してお默んなすつた、それは罪なことですよ。」

「それは姉としては仕方なく左うやつたのでせうし、あなたから言へば不愉快なことです。しかしあなたはそんなことくらゐは氣にかけないでゐたらどうです。」

弓島は話が淵のやうな深さへ次第に追ひ込められて行き、そこを切り上げやうとしても猶落ち込む一方だつた。姉がそんな話は止めてくれるやうにと眼で合圖をする前から弓島はこの話を打切りたいと念つてゐた。しかも神崎自身が自分で話をしながら泳ぎの知らない男が、泥水を飲んであぶあぶしてゐるのが眼に見えて來てならなかつた。が、弓島は行きがかり上、どうにもならずにゐた、それに神崎は苛立たしい昂奮の中で、ひどく何か新しい自分の考へを押し建てようとし

てゐたからであつた。

「いや、わたしは何も彼も解つてゐるんですよ。わたしはまだ當り前並みの取り扱ひを受けてゐないことは無論ですが、何時どうなるか分らないといふ危險がられてゐるのが、いやはや心外なんですよ。愉快に、こだはりなく話してくれるものがゐないといふことは、すくなくとも今のわたしには氣もちを沈めるものです。腹臟なくといふ言葉がありますね。わたしはさういふ氣もちで話したいのです。」

「僕はあなたを危險視してゐたら最初から話なんかしませんよ。それだけは考へないでください。」

「それはさうですが僕としては疑はざるを得ないのです。昨日から考へてゐたことですが、あなたはつとめてわたしと二人きりでゐることや、またわたしと話をすることを避けてゐましたね。わたしはちやんとそれは見拔いてゐたんです。なぜ君がさういふことをなさるかといふことに、わたしはすぐ自分の立場、――自分の病氣のことを考へましたよ。そしたらなほあなたがわたしを避けてゐることがはつきりと分つて來たのです。」

「妙な誤解です。僕はそれほど意識的にはあなたを避けてなんかゐませんよ。それはつまり誤解です。」

「誤解かも知れないが併しその中にいくらかの本統のものがありますよ。わたしはあなたに會ふことが嬉しかつたのです。そしていろいろ話をして見たいといふ考へを持つてゐたのです。」

神崎は姉を見て、そして帳場の方へ行くやうにと言つたがもぢもぢしてゐた姉は、弓島の顏をちらりと見てやはり先刻と同じいやうに對手になつてくれるなといふ表情をして見せた。それに神崎は昨日からまだ見たことのない鋭い輪郭の顏立ちになつてゐた。

「あなたはかうしてわたしが毎日坐つてゐるのが、自業自得だといふふうにお思ひでせう。そしてあれ程苦しんだ酒をやめないどころか、朝も晩も飲んでゐることにさぞ因業な奴だと思つてゐるでせう。實際、わたし自身ですらがこんなに酒をのんでゐては、きつと病氣が盛り返してくるだらうといふ恐怖があるのです。しかしそれだからなほ飲むやうになるのです。一時わたしは病氣中酒を見ることもいやでした。これは全く不思議でしたね、臺所で客のあるたびに樽から拔く酒の音がしても、身ぶるひするくらゐ厭でした。それがこの頃になつて酒なしにはどうしても退屈でゐられないのです。こんなことになつてからまる二年と少しになります。わたしには永いと言つていいかさへはつきりしないくらゐなんです。まるで四十幾年も坐り込んでゐるやうな氣がするのです。」

神崎はこんな座行をしてから何人かの人死を聞き、そして世の中が不景氣になつたりしたことを言ひ、全くこの二年半

の間に世の中がすつかり變化つてしまつたことまで言つた。たとへばこの春大火があつてから町の様子がどんな風に變遷つたかも知らない。子供の時から毎朝見た汽船の姿なも二年間はまるで見ないと言つた。しかしわたしはもうそんな事を考へてゐる間だけでうんざりして、もう町や世の中はどうでもいいとさへ考へるやうになつたのです。わたし自身さへどう變るか明日にさへ分らない病氣なんですからね、さうですね、全く病氣をそとにしては何も考へることができないくらゐです。」

「これは是非おききして置きたいことですがね。わたしが女らに坐つて貰つて時々何か彈かしたりしてゐるのを、あなたは厭な顔をして見てゐましたね、すくなくともわたしの左ういふ詰らない道樂をあなたは見るに耐えない風をしてゐらしつた。わたしにはそれがよく分つてゐたんです。あなたばかりでなく家中のものが厭がり、あの女さへ時々居睡りをするくらゐ退屈してゐました。わたしは家中のものから厭がられてゐるほど、全く面當といつてもいいくらゐに誰でもそばに居てもらひたかつたのです。若しわたくしが默つておとなしくしてゐたら、手のかからない病人だとしたら誰一人としてわたしのそばに居てくれはしなからうと思ふんです。家の中は忙しいし全くわたしは何時でもここにぽかんとしてゐなければならなかつたのです。それゆゑわたしは誰でもできるだけ居て貰つてなるべく皆の仲間入りをしてゐたかつたのです。實際わたしはみんなから毛蟲のやうに嫌はれてゐますからね。」

弓島は神崎をさへぎつて、「あなたを嫌つてゐるといふことはないが、なるべくあなたを靜かにしておきたいといふつもりだつたのでせう。あなたがさうして坐つてゐる間にやはり考へが歪むことも考へなければなりませんね。」

「それは全くです。しかしわたしは自分ばかりが邪推してゐたりしてゐるものだとは思ひたくないのです。わたしはまだ何年もかうしてゐなければならないかも知れません。さう思ふと最う少しわたしはどうにかうまくこんな暮しを固めたいのです。」

弓島は次第に神崎が話し疲れて來て、言ふことが分らなくなることを感じた。これはよくない、成るべく早く此部屋か切り上げたいと思つた。それに神崎の目付が先刻ほどの鋭さが失はれて、にぶい、瞳孔のひらいたやうな茫やりしたことを感じたからである。もし此上あと二十分も話し込んでゐたら神崎自身はへとへとに疲れてしまつて或ひは變な風になるかも知れないと思つた。も一つは弓島自身もひどく草臥れてしまつて早く寢床に就きたいものだと思つた。何のためにこんなに話をずるずるに引摺つて行つたかといふことに後悔を感じた。姉は姉で一言もいはないで凝然と神崎の目色を覗き

込んで、慣れた調子でどういふふうに神崎が變化るかと、何氣ない風で注意を怠らなかつた。弓島は睡さうにして座を立つた。

「もつと話をして呉れませんか、ここで話をしてくれるのは君だけですから。」

「僕はすこし眠たくなつたものですから…」

弓島はやつと部屋を出て、ほつとした。姉があとから、

「大變機嫌がよかつたのですよ、けれどもそのあとがいけないの、何時だつて左うなの。」

「中々しつかりしてゐるね、あの様子なら大したことはないね。」

弓島は姉に別れ裏の家へかへると、おにいさんも手傳つて仕立物を急いでゐた。すぐ寢るには惜しい氣がして、濱の方へ出て見ようと思つた。

「でも兄さんとは話をしない方がいいんですよ。まだすつかり癒つたといふわけぢやないんですから、――どこか氣味のわるいところがあつたでせう。」

「いや、さうは思はなかつた。」

「わたし、兄さんの顔を見てゐると、これが兄妹かと思はれるくらゐ氣味の惡いことがあるんですよ。」

弓島は眉をしかめたおにいさんの顔をまじまじと見た。

「どうしてです。」

「あの眼で見られると、何とも言へないぞつとするものを感じるんです。兄妹だからひよつとしたらわたしにもあんな病氣が起りはしないかと思ひましたね。」

「そんなことがあるものですか。兄さんのは酒のせゐですよ。」

弓島はいつになく薄暗い眼付をするおにいさんに笑つて見せて、つまらないことを氣にしてゐますねと言つた。

「けれども氣になりますわ。わたし時々かつとするときなぞすぐ兄さんの顔を思ひ出してあれだなと寒くなつてしまふんです。」

「妙に神經質ですね。そんな風には見えないが…」

「わたしこれでゐて神經家よ。」

さう言つておにいさんは、後家によくある若い笑ひ聲で笑つて見せた。養子夫婦もそばで笑つた。しかし若しあぶないとしたら姉の方が氣もちの上で、變になつてもおにいさんは大丈夫ですよといふと、さうでせうかと安堵したやうに言つた。

「だから母屋へはよくよくの用事がなければ行かないんですよ。」

「その方がいいんですね。」

弓島は裏戸から濱へ出ようとすると、暗いから危なくないかと、小用に立つ若い妻君が裏戸から海の方を見て言つたが、

波がしらの明るみが星ぞらに透いてそんなに暗くもなかつた。

海へつき出た料理屋の二階の障子が開け放たれ、飲んでざれ唄をうたつてゐる客の姿があらはに見えた。あたりの穩な靜かさを打壞して、女のきいきいうたふ聲が波の上に落ちて沈んで行つた。弓島は海の上にひびくそのざれ唄がなぜか身に沁み、あらはな電燈の下にゐる男女の姿を見つめた。姉、神崎、おにいさん、養子夫婦、さういふ人々の顏が交る交る眼に浮んで、防波堤を行く闇の中に消えて行つた。白いコンクリートの上に暗い波が卷き返つてゐるのを、弓島はしやがんで氣の遠くなるまで眺めた。

翌朝、下枯れの胡瓜畑を弓島は姉に見送られながら、ふたりとも默つて歩いた。弓島は別に何も言ふことがなかつた。

「折角來てもらつて却つて厭な思ひをさせたくらゐね。」

姉はおみやげの煎餅を買ふんだからと言つて、停車場への町すぢへ曲つた。

「そんなことはない。まあ、大切にするんですね。」

「ええ、ちよつと待つてゐて下さい。……」

姉は名物の煎餅屋へ這入つて行つて、包みをいくつも拵へさせた。弓島は低い湊の町並みの家を見てゐると、向うから見覺えのある女の顏が浮いて見えた。晝のあかりでも色のいい久龍だつた。

「いまおかへりでございますか。」

久龍はまぶしく面をあからめて言つた。

「ええ、どうもいろいろ……」

「またどうぞ入らしつて。」

久龍はさういふと姉が店の中にゐることを知らないで、べつに愛想笑ひもしないで別れて行つた。弓島は何となく振りかへつて女のうしろ姿を眺めた。

遺稿「メリイ・ゴオランド」

一

「とにかく良子を國の方へ遣らうと思ひますの。良子も自分で行きたいと言つてるんですから。」

「それはいゝ考へですね。良子さんなら行雄君も樂みにして待つてゐるでせう。上京しても何時も良子さんに逢ふのを喜んでゐられるやうです。」

大谷行雄の父親と、良子の母とは兄妹だつた——行雄と良子とは從兄同士の間柄であつた。京大にゐた行雄は肺を病んでゐたが、冬に入ると床に就いたきり起きられなくなり、寒國人の常で降雪を見ると急に惡くなつたのである。昨夜おそく着いた電報を良子の母親が持つて來て、良子を故郷へ遣ることについて山上に意見を求めたのだつたが、山上は贊成して却つて若い良子が行つたら少しは持ち直すかも分らないと思うた。

「行雄君は若しものことがあつたら南枝さんは力を落されるでせうな。」

山上に取つては南枝さんは發句の方で先輩で、若年時分に教をも乞ひ厄介にもなつたのであるが、口數の寡い南枝は殆んどその生涯の仕事としては、故郷の墓碑のある山へ分け行つて昔の碑文や發見されない墳墓を査べることが痼疾に近い道樂であつた。道樂と云つては惡いが南枝に依つて發見された埋れた古儒の士や俳家の墳墓も決して少なくなかつた。松籟と、靜閑との間に樫の杖を曳いた南枝さんの後姿には、自ら古武士のやうな枯れた響があつた。墓石を蝕ふ蟲の事、碑文は日沒の片明りで讀むと讀み分けられる事、日中は水をかけ半ば乾いたところに文字が判る事、山里の人々は何時の間にか南枝と懇意になつてゐた事、埋れた墓を起して年號を讀み分けることの奇異な枯寂な喜び、さういふ種々の氣持ちは南枝を墓畔に立たせるのであつた。

山上は歸郷する毎に南枝を訪ね、俳談に時を遣るのだつたが、また行雄さんも訪ねて來るのであつた。「これまで可成小言を云つたものですが、もう今では餘り叱ることなんぞも無くなつたやうです。」父である南枝老人が殆んど一日も口を利

かずに默つて何か古寫本を讀み耽つてゐることなぞを行雄は話したりした。

「友人が訪ねてくると座敷をあけてくれましてね。こちらで話したらいいだらうなどゝ云つてくれるんです。」

一見無骨なやうでさうでない南枝の行き屆いた氣もちの一面がよく出てゐると思はれ、さういふ行雄も父親のその心を感じるに敏感であつた。行雄も熟方かと云へば口數の少ない落着いた方だつたが、何時も人のよい微笑みをうかべながらゐたが、それで話し合ふと鋭い近頃の青年の鋒先をも有つてゐた。

東京の良子の話が出ると、良子の性質が非常に穩當な、むしろ内氣であり過ぎることなぞも行雄は知つて居り、なるべく東京の學校へ行きたいと云つてゐた。それゆゑ良子が山上のところへ遊びに來ると、行雄へよせがきを送ることなぞがあつた。山上はこの良子と行雄の交際に好意を感じてゐるのだつた。

だから今度良子が國へ行くことには、それ自身に或る美しさが含まれてゐるやうに思はれた。

「行雄もあれだけになつてゐるのですから、兄もこんどは頭を痛めてゐるでせう。」

良子の母親は電報ではヤマヒ、アツシとだけで能く分らないが、ともあれ今夜發たすといふのだつた。あとで町へ買物のつひでに良子に寄らせるからと言ひ、すぐ近くにゐて化粧品の舗を出してゐるので取急いで歸つて行つた。山上はその後で行雄と同窓だつた連中の「驢馬」の同人だちへも此話を手紙にかいて出した。行雄は「驢馬」の同人だつたが、その詩を初めて見た時に餘りに切ない程の純な氣質の詩だつたので、山上も鳥渡驚いて見直したくらゐだつた。相當に詩の書ける やうな人達の詩は最初の作は皆相應にいゝものであるが、行雄は格段に初心でその詩に根ざすものは凡てすが〳〵しかつた。

午後に良子が來て、夜行で發つといふのであつた。化粧品を駢べてゐる店さきへ客が來ても、すこし難しい品物になると客と應對するのにきまりが惡くて、へどもどする程の良子だつた。

「何か用事がないんですか。わたし行かない前から心配になつて——」

「大丈夫、まだそんなに惡い方ぢやないんだよ。」

「けれど何だか……」

「良さんが行けば元氣がつくんだよ。」

「さう、さうか知ら?」

良子は一寸分り兼ねるやうな眩しいやうな眼の表情をして見せた。山上は自分で云つた言葉に或氣持の複雜さが對手に分らないことを感じ、それ以上云はなかつた。

「それにずゐぶん永い間お國へ行かないものですから、すつかりどんな町だつたか忘れましたの。」

「行雄君のお父さんが迎へに出てゐるだらう。」

「えゝ、出てゐて下さるでせうけれど、心配になつて仕樣がないんですもの。」

山上の妻が横合から「良さんも何時までも子供だわね。もういゝ加減に卒業したらどう。」と笑ひながら云つた。

「わたし子供で澤山だわ。」良子らしく邪氣なく云つた。「けれどをばさん、一ト晩汽車でゆすられて行くのですもの。それに行雄さんがわたしの着かない前にどうかなつたらわたしどうしたらいゝかしら、こまるわ、そんなことがあると……」

「大丈夫さ、そんなに呆氣ないことに人間は死ねるものぢやないよ。」

良子行くといふ電報を先刻打つたのだから、必と今ごろは行雄は讀んでゐるに違ひない、讀んでゐたらそれきりで死を逆にねぢ伏せることくらゐは、衰へやつれてゐても行雄の身體にまだ潜んでゐることが山上には信じられた。雪深い信越の國境へ急ぐ夜行車の灯のあかりが、病み疲れてもゐるが若い行雄さんの頭に描かれ感じられてゐることは疑へなかつた。

「お母さまが本統は行かなければならないんだけれど、わたし些つと行きたい氣がしたものですから。」

「良さんが行くのがいゝんだよ。」

「何故?」

「從兄妹の間ぢやないか。」

「えゝ、そりや。」

山上は又話を複雜にしようとしてゐることに氣がついて噤つた。「山上のをぢさんからもよろしく言つたつてね、そして來年の四月には行くからその時はまた犀川の上流の鑛泉へ入浴に行かうとね。」「そんなところがあるの。」「何時か行雄さんと入浴つたことがあるのさ、その時は僕よりずつと立派なからだをしてゐた。」山上は秋の末枯れ時の散歩のつかれを其處で行雄と入浴したことがあつたことを良子に話した。

「町からすぐ近いんですか。」

「五六町くらゐしかないのさ、季節がいゝと良さんも行くといゝんだけれど、今年は雪で大變だらうから。」

「えゝ、電報が十時間以上かゝつたの。」

良子は土産の風呂敷をかゝへると、ぢあ行つて來ます。」と眞面目な顔付で云つた。山上は良子が向うへ行き着くまでは病人の革まらないやうに、或る妙な信仰的な期待が有たれたのであつた。良子を失望させてはならぬ迫つた氣もちも雜つてゐるのだつた。

一

手紙の一

「今朝早く安着しました。停車場へは行雄兄さんのお父さまが出迎へに出てゐらしつて、わたしの顔を見ると、よう來て呉れたと言つてバスケットを持つて下さいました。わたしは直ぐ行雄さんの病氣のことをお尋ねしようと思つたのですけれど、何か言ひ出しにくいやうな氣持で默つて電車に乘りました。電車の中も履物や靴の泥雪で一杯でございました。町の樣子が雪が積つてゐる故か鳥渡見當がつき兼ねるやうで、漸と川を越えるときにあれが犀川だなと思うたくらゐでございました。

電車道からお家までへの途中で、わたしはやつとの思ひで行雄さんのお父さまにかうお訊ねしました。

「電報で吃驚りして參つたんですけれど兄さんはどんな風ですか。」

「少し持ち直した。お前が來るといふことが分つたのでね。叔父さんはお禮を言ふよ。」

恰度電報を打つた前後二三日といふものは、毎晩のやうに徹夜するほど危險だつたさうです。そこで東京の方へ電報を打つたら良子が來てくれると言つたら、その晩から目に見えて元氣がついたのだと叔父さんは言つてゐらつしやいました何もわたしが行くと言つたつてそんな元氣が出たのか怎うかわかりません。併し叔父さんは何度もわたしが來たことを喜んでお禮を言はれました。

お家へ着くと叔母さんが出て來られ、大きくなつてと言はれて、わたしも妙に泪ぐんでしまひました。「こんなにお寒いのに本統によく來てくれたのね。」叔母さんはわたしのコートを脱がせるやら、長火鉢の火を掻き起すやらして喜んでくれました。こんな間にも一と間隔てた座敷の方で行雄さんらしい咳込む苦しさうな氣はひがしました。叔父さんはすぐ座敷へ行き、わたしは叔母さんの没んでくだすつた熱いお湯で顔を洗ひ、行雄さんの臥てゐるお部屋へまゐりました。

「信越線の危險を冒して來てくれたんだ。」

叔父さんとわたしの顔を見くらべ、行雄さんは肯づいて弱弱しい笑顔をして見せました。そして寒くはないかと言はれたが、わたしは寒くないと答へました。學校はどうして來たのと言つたので、休暇前だつたけれど二三日前から休んだと答へました。

行雄兄さんは元の行雄兄さんではないほど痩せてゐましたけれど、やはりまじ〳〵と話對手の顔を見詰める癖のある兄さんでした。わたしは外に言ふことがないので、何かと言ふとすぐ、

「ぢきなほるわ。」

と言つて自分でも手頼りない氣持になりました。行雄兄さんは癒る事は信じてゐらつしやるらしく、今度癒つたら京都の學校は一年ばかり休むのだと云つてゐらつしやいました。併しわたしはなるべく話しかけないやうにして、行雄さんに話しかけられるやうにしてゐるのは、叔父さんからさういふ注意があつたからでございました。

晩は早く久振りでお母さまの生れた家で寢みましたが、氷を缺く音や、音のない雪の晩の靜かさに何度も眼を覺しました。

手紙の二

今朝目をさますと、寶曆以來の大雪だと言つて門の柱の頭だけが見える程の雪になりました。叔父さんは屋根の上で雪除人夫と一緒に雪を下ろしてゐられましたが、晝間も電燈なしで家の中が暗くて歩けません。叔母さんの話では町の通りへは軍隊が出て除雪してゐるとのことでしたが、電車も車も停つてしまひました。行雄さんは昨日から見ると餘程元氣になつて、わたしが部屋へ入るとお早うなどゝと微笑つて言ひました。

「大變な雪よ。」

わたしは驚いてさういふと、東京ではこんな雪は珍らしいだらうと言ひながら、みんなが雪のことで騒ぐから、僕も壓しつけられるやうで胸が苦しいやうだと半分戯談のやうに言ひ、半分は本統に苦しさうな容子でした。わたしも何かさう云へば頭髪が重いやうな氣になりました。氣持といふものは全く不思議なものですわね。

「良さんはいつころまで居てくれる。」

行雄兄さんは夕方誰もゐない時に、――何時でも看護婦か叔母さんかゞゐらつしやるのですから、――さういふ機會をねらつてゐたのかも知れません、――それが突然だつたのでございますから、わたし返辭に困つてしまひました。

「快くなるまで居たいんですけれど……」

「癒くなるかどうかも考へものだからね、それにこの雪では汽車が不通になるかも分らないから汽車のある間に歸るといい。」

叔父さんから汽車のことを心配され、通つてゐる間に歸つた方がいゝと昨夜も言はれたのです。行雄兄さんもそのことを氣にかけてゐるらしいのです。それほど今年の雪はみんなの頭にひどくひびいてゐるらしく、何か言ひ出しても雪のことばかりでございます。わたし自身にしても生れて以來こんな恐ろしい暗い雪を見たことがないのですもの。行雄兄さんの胸が壓されるやうだと言はれるのも、當り前のやうな氣がするんです。

先刻叔父さんのお友達から鯉の生血がとゞいて行雄兄さんは厭だと言ひながらそれをいたゞきましたが、わたしは見て

ゐてもあゝいふ鯉の血が人間に利くかどうか疑はしい氣もちになりました。あの血がみんな利いても行雄兄さんの瘠せたからだに、どれだけの足しになるかどうか分りません。わたしは病氣を憎む氣になつたことはございませんが、つく〳〵肺の病氣だけは憎んでも足りないやうな氣がしました。ひどく咳き込む時の容子は、そばで見てゐても辛くて居耐らないのです。一度はをかしな話ですけれど、わたし自分で咳の眞似をして見るほど苦しくなつて來たんです。

叔父さんはやはりあゝいふ方ですから、既う諦らめてゐるらしく、あなたの言はれるやうな古武士めいた坐り方をして、「お前が來てくれただけで盛りなほしてゐるんだから、歸つて貰ひたくないのだが、學校もあるからおかへり。」さう言はれると、わたしは却つて歸りたくないやうな氣になつてくるのですが、その氣もちも叔父さんは知つてゐらつしやるのです。

「行雄兄さんは一體どんなんですの。」

わたしは仕方なしに分りきつてゐることを尋ねて、本統に叔父さんが諦らめてゐらつしやるかどうか、知つて見たいやうな氣になりました。

「そりやだめさ、時間の問題だからね。」

叔父さんは判り切つてゐることのやうに言つて、あれも種種して見たいことがあるだらうが……とも言はれました。

手紙の三

あなたからのカステラが今日着きましたが、喉の水分を無くするといふので行雄兄さんの枕元に置いたきりでした。それでも行雄兄さんは大變によろこんでゐられました。そのカステラの名札を見ながら、

「これは山上さんの奥さんの手蹟だな。」

さうわたしに言つて名札を見せましたの。をばさんの手蹟はすぐわかるが、山上さんの手蹟はわからないとわたしは笑ひながら云ひました。

「山上さんのをばさんは僕のことをまだ大谷さんの坊ちやんがゐらつしやいましたなんて、山上さんに取次ぐんだから驚く。」

「でもをばさんは惡氣があつて言つてらしやるんぢやないわ。」

「そりやさうさ、しかし坊ちやんはをかしいよ。」

「大學へ行つたつて坊ちやんは坊ちやんだわ。」

では良さんはまだ少女世界の讀者かねと云つたから、それで澤山だわと言つて笑ひながらお話しましたの、元氣で氣は慥かで凝乎とわたしの顔を見詰めながら、一人で靜かににこにこしてゐられることがありますが、そんな時はいつも行雄兄さんは永く生きてゐられる人ぢやないと思はれますの。で

もあゝいふ靜かな微笑といふものが、病人以外の人がしたら氣味のわるいものでせうが、行雄兄さんの場合では何か靜か過ぎてゐるやうで、誰でもすぐに死といふことを思ひ浮べるほどです。

行雄兄さんはあなたへお送りした詩の原稿の外に、まだ創作もあるさうです。何んでも京大の或同人雜誌に揭つたことがあり、さういふ仕事の方でもまだ〳〵したい事があると言つてゐました。そんな仕事の話をする時に發熱するものですから、わたしは席を外してしまふのです。すると病人といふものは敏感なものでございますね。

「良さんまで病人あつかひにするのか。」

と言ひますから、

「そんなことはないわ。」と言ふと、

「では坐つてゐらつしやい。」

行雄兄さんはそんな風で神經が立つてゐるんです。併しもうわたしが來てから一週間になりますが、今日あたりからだいぶ弱つてゐられるやうで、自分から話を仕かけることがなくなり、默つて枕に頰をつけて時たま用もないのに「良さん。」とお呼びになることがあるのです。何あにとさう言ひますとお呼びになることがあるのです。何んでもないと言ふ振り頭を少し振るやうに動かして見て、何んでもないと言ふ振りをして、こんどは眼をとぢておしまひになりますが、行雄兄さんは何故かわたしと話をするのにも、わたし自身からも疲勞を感じてゐるのではないかと思はれます。

手紙の四

わたし明日の晩かへることになりました。學校も始まり雪もこの樣子だと汽車が不通になりさうでございますし、お醫者さんは何故かわたしばかりでなく、誰にも會はせないやうにお言ひになりましたから、ひと先發たうと思ひます。それにわたしには行雄兄さんを見ることが次第にツラクなりました。御自分で考へてゐらつしやることを判然と言へないやうな容子が、殊にわたしには見ヅラクなりました。

叔父さんも叔母さんもあきらめてゐながらも、やはり一生懸命になつて居られます。叔父さんは力一杯に手を引張つてゐらつしやりながら、それがずる〳〵に辷つて行きさうな危なさをわたしにさへ感じられるのでございます。

明日かへることを行雄兄さんに言ひましたら、背づいて見せてそれきり何もお言ひになりませんでした。しかし眼だけがわたしにはぢかに感じられるほど、露骨な悲しいものに見えました。いづれお會ひした上で色々おはなしいたします。

二

良子が歸京してから四日目の晩行雄は亡くなつた。山上はその電報を持つて來た良子とその母親の前で既う何も云ふこ

とがなかつた。良子を見送りに來た南枝老人は、良子が慇々見舞うてくれた禮を事新しく述べた。

「お母さんへはおれも思ひ切つてゐると言傳してくれ。」

それだけで叔父さんは汽車が動くまで默つてゐらしつた。

わたし叔父さんの悲しげな顏が眼に見えるやうだと良子は云つた。山上自身も以前の男の子供を失うた苦い經驗はあつたが、南枝の悲しみは山上に較べるほど手弛いものではなかつた。五十を出てゐる南枝に取つては人生の方角さへ暗澹として遽かに掻曇つて、さきが見えなくなつたやうなものだ。

「とにかく良さんが行つたのがよかつたですね。」

良子が席を外してゐる間に、山上は良子の母親にさう言つて見たが、母親はそれには氣がついてゐた。

「あれだけ持ちこたへたのも、良子が來てくれたからだと兄が手紙にかいてゐましたが、若い者の氣力は別ですね。」

それほど老けてない良子の母は、感心して何かに打たれてゐる容子だつた。山上もその氣力を感じてゐた。「死にながらも生きて行かうとするんですからね。」山上は行雄の睫毛の長いその爲めに考へ深さうに見える目付を思ひ起した。

その晩、「驢馬」の同人がその社の部屋に集つてゐて、遺稿の事や、思ひ出話や、その詩の事などに話し耽つてゐるところへ山上も行き合せ、色々の追憶めかしい雜談を取交したが詩ばかりでなく小說も書いてゐた行雄のものには鳥渡面白い作があつた。「メリイ・ゴオランド」と題したものだつた。その梗概は行雄の祖母が亡くなる前後のことから書き下ろされ、その湯灌をした時に左の脇腹にすれ傷であつたが、新しい傷痕が殘つてゐるのを皆で見付けるともなく發見した。

「これはどうしたのだらう。」

南枝は不思議がつたが誰も祖母のこの傷が何處でついたものか、知つてゐるものがゐなかつた。唯、行雄だけがくすくす笑ひ出した。

「これは東京へ行つた時に木馬から落ちた時についた傷ですよ。」

「道理で新しいと思つた。木馬なんかに乘つたのかい。」

南枝は半分可笑しさうに一緒に行つた息子の行雄の顏を見た。

「淺草のメリイ・ゴオランドでどうしても木馬に乘りたいと言ひ出して聞かないんです。大丈夫だらうと思うてぢあお乘りなさいと言つて乘せたが、二度くらゐ廻るとすぐ轉がり落ちてしまつたのです。それを家の者へは默つてゐてくれとおのですから今まで隱してゐたんです。最うかうなつてはお祖母さんも何とも思はないでせう。」

通夜の人達も思ひ設けない祖母の滑稽なその姿を思ひ出してその傷を今更らしく眺め入つたが、悲哀の中にお祖母さん

の氣さくな性質が皆の笑を誘ふのに充分だつた。

山上はその小說を讀んで佳い作だと思うたが、それを書いた本人も湯灌され灰になつた今、餘りに烈しい人間の世の變り方が手强く彼の無常觀を刺戟した。

「大谷行雄は何か書いて世の中へ押し出すものを持つてゐましたね。」

彼と同窓だつた川口が頑狂に大聲で皆に聞えるやうに言つたが、山上もそれに贊成した。數少ない詩も無條件に素直なよいピユアを持つてゐた。佛蘭西物を專攻してゐる同人の池龍二は、人に聞かすよりも何時も自分に對つて言ふやうな調子で、「あれで却々書くことを知つてゐるからな」と、パイプを舐めながら、その處女作の詩の原稿を山上にひろげて見せた。

朝

朝はしづかで
霜がとけなやんでゐる。
げつそりやせた手足が
手洗のぬるま湯の中にうかんでゐる。
こゝは蔭つた庭先だ、
すこし寒いけれど、
干場の空はすつきりと光つて、
遠い木ぬれが梨色にくすんで見える。

二人は、喜びにみちてゐるのだが
涙さへうかべ、
私はものも言へないで、
看護婦に足を洗はせてゐるのです。

南枝老人からまだ行雄が在世の時の手紙も、南枝らしい剛直なところに弱々しい思ひ遣りと愛着に沁みてゐるところがあり、山上は讀み返して行雄もよい父をもつてゐたと思ふのであつた。「行雄の病氣を氣にかけられ度々の御懇書を受け實に嬉しく存じます。一時絕望を思はしめた症狀も皆さまの御氣張りを受けて奇蹟的に多少の活路を開いたやうで氣を盛り返して療養を續けてゐますが、まだ〳〵安心といふ域には進んでゐませぬ。百年の長壽を夢みてゐた私自身の保健城も今度の惱みに遇つて跪くも前衞を一蹴にされその陣據の薄弱さを疑はれてゐます、御憐笑下され。」

山上はお手紙の氣の張り方で、南枝の看護や其打込み方の容子が眼に見えるやうな氣がし、一讀妙に泪ぐんでしまふところがあつた。喞々として何ものかゞ迫る感じであつた。——

間もなく行雄死後になり手紙が到いたが、山上は暫らく手紙を前に置いたまゝ茫然と南枝老人の心を射透するやうに思ひ描くのであつた。「病人は時々短時間喘息風に啖がかゝり息を引締めるやうでしたが、醫師はそのたびに注射を施して防いでゐた。最初一日は一二回刺戟を與へられたが翌日は時間も

倍になり又翌日はそれに倍する程に病勢を進めてゆくやうになり……」と書き「彼が死の二時間前にライスカレーを食してその美味を喜んだ位でした。彼の死後は茫然として爲すことも知らなかつたが、今の處健康上にも些の支障を感じては居りませぬ。慮外ですが御安心下さい。」と、南枝老人らしい氣稟を見せてゐるが、あゝいふ人の悲しみは一層深いことが痛感され、南枝老人自身が彼の最も愛した息子のために、その死といまも戰ひを挑んでゐるやうな壯烈さが紙背に沁み殘つてゐるやうであつた。

山上は其後春も過ぎる頃、故郷へ用途があつて出向いたのであるが、小さいお土産を抱へて南枝の宅の門の前迄行き着いたが、彼は何故か云ふべき言葉を知らないで、急に憂欝になつて門前から元來た電車道へ引き返したのであつた。

「もつと落着いたころにお訪ねしよう。」

彼はそのお土産を若い友達にことづけ、彼自身急用で歸京して立寄れぬからと詫びを托んで梅雨に入りかゝる故山を辭去したのであつた。

七時半

夕食後、お茶を喫みに這入る時間はかつきり七時半であつた。彼はそこの喫茶店の時計を見上げるたびに、その七時半といふ正確な時間に寧ろ輕蔑を感じた。彼の生活が其樣に順序正しい一日の所定を繰り返してゐるからだつた。彼はお茶を喫んで夕刊を讀むと、その晩は、——とりわけ女らは一人づつ別々な抗うた氣もちでゐるらしかつた。左ういふ幾らか荒れた彼女らの動作のよそよそしい中に、何時となく注意されやすい彼女を見出した。彼に取つて注意されやすい女といふものは、世間一般の人々にも注意されやすい女であつた。

彼女は特に忠實な仕事の外に、彼や他の客のためにはばかりの戸まで開ける程の女であつた。出來るだけ忠實に働くといふより寧ろ神經質に客をねぎらふのが常だつたが、彼は役女の働き振りを見てゐると苦痛を感じる程であつた。客が歸らうとすると彼女は往來の方でドアを開けて遣るばかりでなく、絶えず暖爐のまはりの吸殼を掃き清めることは勿論だつた。

そのまめやかな女が心配さうに沈み込んでゐるのだつた。女には親切な彼は、——すくなくとも彼は女に親切であり得ることは、彼の生來の好みでもあり若い時分から持ち腐らした好奇心でもあるらしかつた。彼はこの女に今不圖何か言はうといふ氣持ちを持つたのだが、さういふ氣持ちを持つた時から機會が無い間に、空しく消散されてしまつたのだつた。

支那人の燒栗賣が這入つて來た時に、その支那女がすぐ暖爐へ手を翳して溫るのであつた。彼はよくある事なので女がどういふ態度を取るか注意してゐたが、女は體をずらして支那女の溫まる空きをこしらへ、そとはお寒いでせうと言ふのであつた。彼はこの女は喫茶店には永くゐたことのないことを直覺した。

支那女は彼の外に二人ゐる客の内の、その手近い一人に燒栗を賣りつけるのだつた。客は一見朝鮮人のやうな罪のない顔貌をしてゐたが、燒栗の一袋に對する五倍の金を取出して與へた。支那女は袋を五個取出して其處にゐる四人の女に頒けるのであつた。彼女の良心はそのやうに等分されねばなら

なかつたらしかつた。併し女らは二袋だけを受取つて後の分はいらないといふ意味で支那女にかへした。支那女は喜ばしげに往來へ出て云つたが、彼はこれらの樣子を譯もない善良な氣もちで眺めてゐた。支那女に金を與へた客は紅茶を喫んでしまふと、何度も躊躇ふ樣子をしてゐたが、

「信州の松本から來てゐる女がゐますか。」

と、一人の女に尋ねるのだつた。

女らは顏を見合せ其女がもう此處にゐないことを、その表情の中に可成なり輕蔑を漂はせ乍ら否定するのだつた。去つた女を尋ねることは此麼ところでは善意には解かれないのであつた。それ故先刻この客に好意を見せた眼附を再び彼らは冷然たる容子に取り戻した。彼はこの客がかなり思ひつめてゐるところがあると思うた。

「コックさんに尋ねて見てあげませう。」

先刻から默つてゐた彼女はコック場へ行つて尋ねて來たがその女は何處へ行つたか判らないと客に言つた。客は間もなく歸つて行つた、女らの一人は今時そんな人を尋ねても解るものかといふことを、彼に聞える程度で話してゐた。

彼はその翌晩の七時半にも暖爐の前に坐りながら、夕刊を讀んでゐた。彼は歩いた晩と歩かない晩とでは、その翌朝の食事に故障を來すのであつた。歩いた晩の翌朝の飯はうまく食べられ、散歩しなかつた朝は胃も心も重かつた。彼はさういふ必要上、坂下で夕刊を買うて、十町くらゐ歩いて此の喫茶店へ立寄るのだつた。

その晩は取り分け女らは變に感情的に融けあはないものがあり直にそれらのものが彼に感じられた。分けても彼女の瞼に赤みを帶び、顏の樣子が繼(こはば)つて硬い感じであつた。彼はお茶を喫んでから何氣なく話し懸けたのであつた。

「何かあつたのですか。」

彼は女らの仲間がうまく行つてない反射を感じ過ぎて不愉快だつたので、ただ、これだけの言葉をいうただけに過ぎなかつた。彼の調子は柔しいといふより對手の感情に快よい氣持ちを與へたかも知れなかつた。彼女は鳥渡彼の顏を見るとその顏は悲しげな顏付に變つて、表の扉(ドア)の方へつか〳〵と足早に立つて行つて、その四角な筺硝子から通りの電車道を眺めてゐる振りをするのだつた。今度は彼女は扉をはなれると先刻よりも最つと足早に、最つと感情的な歩調で化粧室とはばかりとを兼ねてゐる部屋へ這入つて行くのであつた。彼はドアの外を惘乎と眺めるより外に眼の遣り場がなかつた。

彼は一緒に茶をのんでゐる木下を一寸見た。木下も彼の眼を見返した。併し彼女に就ては妙に話し出すことができぬ氣もちであつた。他の女らも變つた氣もちでゐるらしく、繼ぎはぎな、寧ろ息ぐるしい氣分であつた。彼女が洗面所から出

て來たときは瞼が先刻よりも一層あかくなり、泣いてゐたことが解るのであつた。彼はかういふ經驗ははじめてであつたが、女が故意としてゐるとは彼の眼には映らなかつた。

彼は何時ものやうに時計を見上げて、歸らうとしてゐる時であつた。顏がよごれてゐるから洗つたらどう。」彼女の同僚がかう言つて彼女に注意してゐるのを聞いて、彼は通りへ出たのであつた。

「あんなことになると困るね。」

彼は木下にさういふのだつた。

「あの女はどうも孤立らしいですね。」

彼はかういふ女らに對手になつてゐる間だけ、心が動いてゐる程度でない微かな愉快さを感じるのが常だつたが、喫茶店を出たあとで心をつなぐものは一切感じなかつた。況んや危險な氣もちなど毛頭覺えることがなかつた。

女はお屋敷勤めをしたことがあると言つて、妙に言葉づかひが丁寧であつた。木下は言ふのであつた。

「あの女は處女ですね。」

併し木下の方が餘程彼女よりも處女であらうと思へる程、彼は彼女を信じようとしなかつた。ありふれた中に注意されやすい女として彼の眼に映つたゞけであるが、併しその單に注意されやすい女といふものは、男に取つては重大なものかも知れなかつた。「あゝいふ女は手に入りやすいところがある。」と木下はいふのであつたが、その氣もちは彼にも感じられる部類の女だつた。親切げな頼母しい女は單に親切であり優しいといふことだけで、打込む隙が透見できるのだつた。非常に優柔な女は危險に陷ち込みやすいと同樣に、非常に莫連者の陷ち込むところも同樣の落し穴でなければならなかつた。

彼は彼女を張つてゐる男に同情をすることが屢々であつたが、それは一つにはその男の氣持を詮索するのに耐へない面倒くさゝからであつた。何よりもその男が四十六七くらゐに見える初老の年齢が、彼に取つて見るに耐へない氣もちであつた。も一つ珍らしいことはその男が酒を飲んでゐると、暫らくして必ずその男の妻らしい女が來て向ひ合せに坐ることだつた。妻が來ることは最初彼には變な氣もちを起させるのであつたが、屢々さういふ有樣を見てゐるうち、妻が迎へにくることを男は先刻に話をしてゐるらしくも思はれるのだつた。妻らしい女は男とは二十以上は年の違つてゐる、内緣の有りふれた黑人上りの黑襟の似合ふ女であつた。

此の夫婦の客は彼女を卓のそばへ呼んで話に耽けるのであつたが、瘠せた彼女は元氣にこの客と話合ふのであつた。彼は何故老人に近いこの男が妻まで連れて來て、彼女と話をして機嫌がいいのか一寸解りさうにもなかつた。

「奥さまが親切にいらつしやいとお仰るものですから、何氣

なく一度きりまゐつたんでございます。」

彼女は之だけを言つて二度は行かないと言ふのであつた。そして朋輩から疎まれるのも此男のところへ出掛けたことに原因してゐるらしかつた。彼はこの手固い狡猾な張り方を手痛く心に感じた。妻までも手馴してかゝるその男の苦心を彼は眼の前に眺めてゐると、其金鎖を下げてゐる胴衣(ヂョッキ)や、磊落な笑ひ聲までが彼に憐憫と輕蔑とを交々に感じさせて來るのだつた。

彼は忌々しく時計を見上げ正確に七時半に針が指してゐるのを見て、秩序正しい生活といふものの乾燥を感じた。彼は夕刊をひろげながら其日の興味のない出來事に眼を落したが彼の故郷は稀しい大雪であつた。小鳥等は餌を拾ふことができないので、梅や櫻の芽や蕾を食ひ荒してしまつたから、今年は花は咲かないであらうと報じられてあつた。彼は味氣ないこの記事を讀み返してゐるとき、紅茶の湯氣が新聞紙と彼の顏との間をかすめたのであつた。彼は茶をのみながら不圖耳を立てた。

「わたくしは此處を出ようと思ひますの。」

「どうして？」

彼はやはり新聞を見たまゝすぐ横に彼女の着衣が卓子(テーブル)にすれすれにあるのを見た。「どうも辛抱ができないんでございます。」

彼はこの場合、妙に彼女と彼との間に必要以外のことが話されてゐるやうな曖昧な氣もちを感じるのであつた。それにも拘らず彼は彼女に「どうして？」と反問しなければならなかつた。人間はかういふ時「どうして？」以外の言葉をつかへるものではない。

「それで君はどこへか的があるんですか。」

「すこしもございません。捜してみるつもりです。」

彼はやつと夕刊から眼を離した。そして直ぐに上野に甥が勤めてゐる西洋料理店のあることを思ひ出した。甥に頼めばこの女の勤め口くらゐあるかも知れない、甥のゐる家は手固い風儀の宜い西洋料理店であつた。併し彼は彼女にさういふ紹介をする氣にはなれなかつた。「そして君は何日出るんです。」

「明日の朝早く出るんでございます。一緒に二三人出るんです。」

さう言へば女らの空氣は何か荒々しく、快活過ぎるやうで又絶望的な氣はひをも感じられた。女らは何かの紛れからも氣のない微笑を取交はしながらゐるのも、彼には妙に味氣なかつた。彼は彼の甥のことを話し出して、そこへ行つて見る氣があれば紹介狀を書くといふのだつた。女は是非書いて呉れといふのだつた。彼は明日此處を出ると聞いて妙に紹介を

かくやうな氣になつた。「四五度會つたきりだが直覺的にはおとなしさうな人だから、君の店で使つて貰へないか。」彼は鉛筆でさう書いて手渡した。

「併し此の人の行く前に君から甥に會つて話してくれんか、突然だと向うでも變に思はないでもないから。」

「朝の内がいいでせうか。」

「此の人のゆく同時刻くらゐが丁度いいやうだね。」

彼は木下にさう頼んで甥へは君から萬端話してくれるやうに言つた。女は鶴見に知り合ひがあるが行きたくないと言ふのだ。その他に別に知り合ひが無いといふのだが、簡單に自分の身の上を人に委すと云ふことが、彼や木下には餘りに考へ無さ過ぎるやうに思はれた。それでゐて猾さや投げ遣りなところがなく、この店にゐても働けるだけ働いてゐる風であつた。唯、此處の主人はお白粉や着物のことまで細かに立入つて干渉するので、氣が荒んでゐられぬといふのであつた。

彼は喫茶店を出てから木下に明日の朝、甥に彼女の勤め先を頼んだ。甥がさういふ事で彼の素行を疑ふやうな男でもなく、その點は安心してもよかつた。行きがかりで木下には氣の毒だつたが、さういふことで厭な顏をする木下でもなかつた、

「上野へ勤めるやうになれば結構だが、それ以上我々が世話をするのも考へものさ。」

彼の好みから言へば彼女は彼の好みの外の女だつたから危險はなかつた。

翌日、木下が來ての話では丁度手の足りない時だつたから今日から居て貰つてもよいと先方が言ふのであつた。

「身元引受書が要るさうですが……」

木下は鳥渡困つた顏付をした。彼も僅か五六度逢つたきりの然も名前や生れ故郷や、これまでの生活も知らない女に、保證書をかく氣にはなれなかつた。木下は書いてもいいと言つてくれたので、木下が引受けることになつた。

「その保證書を持つて行かなければならないんで、實は上野から一緒に來たんです。」

木下は電車道に女を待たして彼のところへ來たのだつたが彼はその待たしてあるといふことに氣重さを感じたが、半ば腹立たしくもあつた。仕方なしに木下に連れ立つて通りへ出ると、女は白いショールを襟に卷いて、寒さで鼻をあかくして待つてゐた。

彼は行きつけの菓子屋と喫茶店とを兼ねてゐる店へはひり女に椅子をすゝめた。「どうも色々御めんだうをおかけして濟みません。」と彼女は固くなつて餘程目上の者に物を言ふやうな調子だつた。彼はどうしましてと平凡にいふのであつた。何か職業を周旋する以外に關係のない人間同士のやうだつたのが、氣安くも飽足らなくも感じられるのだつた。

木下は硯箱と半紙とを借りると、保證書と大きく書いて、木下らしく寛々と女の顔を見ていふのであつた。

「生れは？」

「埼玉縣でございます。」

「兄さんだけしかゐないんですね、岡本春樹、妹れつ子、二十一、――それから他に係類はないんですか。」

「いゝえ、ございません。」

彼女は生眞面目になつて眼ばかり大きく瞠いて答へた。彼は喫茶店で見た女の性質を此處でも素直に見ることができた。しかし妙に固苦しい感じであつた。

「あなたは結婚したことがあるんですか。」

彼のかういふ質問は彼の長上者らしい立場から自然に言ふことができたが、彼女は少し顔を赧らめ、あいまいな言葉つきで答へるのであつた、

「いえ、ございません、そんな・・・」

にも拘らず時間が經つごとに彼女は氣の毒なほど、赧くなるのであつた。彼は木下の書いた保證書を彼女に渡して、此間書いた紹介狀の名刺を返して下さいと言つた。その時その名刺を甥に見せてから、彼に返す約束であつた。彼女は紙入の中から名刺を二つ折にしたのを取り出し、禮をいひながら彼に返すのだつた。彼は彼の文學上の名前のある名刺を女の人に渡して置くのに、永い間の不安を思ひ像いたから取り返して置くのであつた。

「よごしてしまひまして・・・・」

喫茶店の女らは彼や木下や女の樣子を異樣な眼付で見てゐたが、彼は何も氣にならなかつた。彼女は電車で上野へ行つた。

「これは物好きといふ奴かね。」

彼は女が行つた後で氣安さにのんびりと言ふのだつた。

「乘りかけた舟ですかね。」

「あの女はあれきりで何も知らしてくれないといい。」

彼はかうなると女の方が男よりも氣を重くして來るばかりでなく、女であるための憂欝さを強ひてくることを感じた。男なれば名刺もそのまゝ取戻す必要がなかつた。

四五日後に彼は机に向うてゐたが、木下が來て女が自分の下宿へ來て待つてゐると言ひ、上野の西洋料理店では折角雇つて見たものの、人手が多くて肝心の支配人の留守の間に極めたので、支配人の方から苦情が出て折角だがお斷りするといふのであつた。

「一たん雇つて置きながら酷いね、それに女が僕らを頼み過ぎるやうぢやないか、あそこへ世話をしたゞけで後は自分で何か捜してくれなければ困る。」

彼はかういふ風に妙にこの女に繋がりを感じることに欝陶

しさを感じた。一體どんな氣もちで女が自分を手頼つて來るのか解らなかつた。或は自分を親切者だといふふうに考へてゐるかも知れない、――最初、彼女の女らしいところに好意はもてたが、併しそれは女に仕事を見付けたり一身上の話對手にされる程のものではなかつた。彼女の話すところに依ると手頼りになる人がゐないと云ふことだつたにしろ、緣もない自分に手頼つて來るのが不思議だつた。

「それでどうしたらいいかと云ふんです、今朝起きると遣つて來たので驚いたんです。」

「どうも仕やうがないぢやないか、泊るところがあるのかね。」

「それはあるらしいんです、神明町に何か近づきがあるので、其處へ一先づ落着くといふんですが・・・・・」

兎に角、彼は木下の下宿へ行つて見ると、女は茶褐色のコートを折りたたんだそばに坐つて、先日から色々お世話さまでしたと云つた。彼は別に外に云ふことが無かつたので、あけすけ問ひ質すのであつた。

「あなたは今後やはりああいふ喫茶店などへ勤める心算なんですか。」

「どうも仕方がないものですから。」

「あてはやはり無いんですね。」

「ええ。」

「僕に手頼られちや困るが、今度は自分で尋ねたらいいでせう、新聞廣告によく人を求めてゐるのですから。」

彼は木下の取つてゐる時事新報の廣告を見出して、銀座の有名な料理店や、數寄屋町の支那料理店なぞを數へ立てて自分でたづねて行つて見たらいいだらうと云つた。いくら何んでもあなたなぞに關つて居られないとも云へなかつた。併し彼は用談の後にももぢ〳〵坐つてゐる女を見ると、木下の下宿の人にも厭だし、彼自身もひどく臆劫だつた。僅かなことで彼の心が妙に世間的な憚りを有つのも、餘り經驗しない氣もちであつた。さういふ冷たい氣もちは彼が彼の机のそばで何時までも坐つてゐる文學志望の青年に對ふやうな、妙に對手に女性を感じないやうな氣持にならせた。

「ではあなた自身で捜してください、これ以上は私にはどう相談していいか解りません。」

「飛んだ御心配をおかけして濟みません。今日これから行つてまゐります。」

彼女は素直にさういふと、コートを着て出て行つた。彼は女が自分らを利用してゐるやうにも思へず、またそれ程の女でないとも思うた。

「誰も相談する人が無いことは事實らしいですね、若しあるにしても成可く新しい關係のない人がいいらしいんです。」

「さういふ感じだな、併し僕らを信用しすぎるよ。」

彼は彼の文學的な名前を彼女が知つたことで、安心してゐるのが可笑しかつた。さういふ意味で女は彼に介意を感じないらしかつた。操つたい氣もちで彼は若し彼女が美人ででもあつたらと思ひ、木下も笑ひ出すのであつた。

「もうこれで來ないだらうね、何時までも引づられるのは困るさ。」

「けふ行つた勤口さへ甘く運べば來ないでせう。」

彼は女に勤口が定つてこれきり彼女との往來の無くなる方がいいと思ふのであつた。度重なるごとに最初に彼女に持つた好意らしい氣持ちが薄れて行き、いまは欝陶しさだけが硬まつて頭に殘つた。

その後女は勤口が見つかつたのか、何の便りがなく自然彼は彼女のことを忘れ勝ちになつてゐた。人間は親切にならうとしても對手が女の場合は、すくなくとも逢つて氣もちが快い程度のものか、または戀愛に似たものを感じないかぎり、女の一身上のことなぞ相談に乘れないものらしかつた。

三月の中程に稀しい隆雪があり、往來も途絶えるやうな雪の日にありがちな靜かな朝、彼は机に向ひ仕事を始めようとしてゐたが、門の潜り戸から誰か這入つて來るものがあつた。彼は午前中に仕事をする習慣になつてゐたので、午前の客を厭つてゐたので小耳を立てた。

「車屋さんがこれを持つてゐらつしやいましたが、誰方かが停車場に待つてゐらつしやるらしいのです。」

妻は手紙を机の上に置いて怪訝な顔附で、手紙と彼の顔を鳥渡見較べながら云つた。彼はすぐ彼の女だなと思ふと、到頭、家庭へまで飛沫をかけたかと不愉快な氣もちでその鉛筆の走り書きを讀んだ。「一身上のことでお話したいことがございますので、停車場までお出くださらないでせうか。」と書いてあつた。彼は機械的にその手紙の端にあとで行きますと書いて手渡した。

「お返事はこれでいいんですか。」

「それでいい。」

妻は自然硬くなつて玄關へ出て行つた。彼は車夫が行つてしまつてから、何故斷らなかつたかと一層自分自身が不愉快だつた。此の雪に出て行く自分が妻に與へる或る氣持に同感されたが、動機に不潔なもののない安堵があつたゝめ、彼は妻に外出の用意を命じた。彼は故意と氣難しい顔をするのだつた。

「どちらへ？」

「ちよつと用事がある。」

彼はこれだけを言ひ、明らかに妻の表情に息詰りのあることを感じながらも、その表情を押し退けるやうな氣もちになつた。女に呼ばれた不愉快さを鳥渡の間に忘れて、妻の氣も

ちに挑むやうになつてゐる自分の位地が不思議だつた。併し妻は言葉に表しては何も言はなかつた。

外套の胸のところが吹雪の的になり白くなつた。彼は烈しい不機嫌な怒りを感じてゐた。何も家へまで使を寄越さなくともいいのに、苦勞も思惑もない女だと思ふと腹立たしかつた。郊外の停車場に行き着くとベンチの上に小さくなつて坐つてゐる女を見出し、一層何か腹立しさを感じた。

「わたくし郷里へ歸らうと思ひまして——お呼立てをして濟みません。」

「それで僕にどういふ用事があるのです。」

彼は益々苛立たしくなり、女に詰問するやうな語勢で云つた。

「いろいろお話したいことがございまして……」

「それは木下君にでも話して下さい、僕は今日は少し忙しいのですから。」

彼は吹き込む筑波颪にそそ毛立つた女の顔から目を離し、鈍感な女を見るに耐へなかつた。今更女の一身上の話も聞きたくなかつた。寧ろ彼は露骨な險惡な表情を自分でも感じる程度の、氣むづかしさで一杯だつた。

「車夫に手紙なぞ持たせたりして下さると、家庭まで騒ぎ立てることになりますから、これからは止して下さい。それに疑へば疑はれさうに思はれますからね。」

「どうも濟みません、外に方法もないものでございますから。」

彼は煙草を一本喫んでしまふと、何か話があるやうであつたら言つて呉れと云つたが、女は別に何も無いといふのであつた。寒くもあり不愉快でもあつたので、彼は卒氣なく女に別れて自宅にかへつた。彼は妻の顔に妙に硬張りを感じたが却つて心は平氣であつた。何か云ひ出したらといふ待ち設けてゐるやうな氣持ちだつた。

「先刻のお手紙は女の人からですね。」

「さうだ。」

彼は險惡になり、「それでどうした。」と心にもなく衝きかかるやうに云つた。

「用事のある女なら家へゐらしつたらいいぢやありませんかあなたを呼び出したりなぞして……」

「おれにも女の一人くらゐゐてもいいぢやないか。」

彼は故意と戯談めいた逆手を打ち、對手が勝手に想像するなら關はないと投げ遣りな氣もちだつた。彼女の損になつても彼には何の痛みも感じなかつた。

「あなたはそれでいいでせうが女はさうは參りません。」

彼はそれも一應はさうだと思つた。

「あの女は問題にしなくともいいのさ、これきり言ひ出してくれるな。」

彼はそれだけを妻に云ひ取り合はなかつた。彼があまりに平氣でゐることや、却つて笑ひ顏に近い表情をしてゐることなぞが、妻を大して不安にしないらしかつた。それでも彼女は午前中はどう云ふ要事が起きても出向かない彼が慌てて行つたことは、彼女の心から消え去らない混亂された氣持ちでもあつた。彼はそれを釋明するのが厄介だつたが、自然彼は何氣なく云ひ出すのであつた。

「その事實が絶對に心配のない事柄であることだけ、おれから瞭乎と云つて置いてもよい。」

それ以外に彼女が女らしい考へで自分で自分を苦しめる「作り話」の中へ這入つて行くなら彼は知らないと云ふのであつた。彼女は幾らか解つたやうであつた。

「おれ自身實は弱つてゐることなんだ、こんなことで厭な思ひを内と外で續けては耐らない。」

彼は妻が去つてから猶歇まない雪を庭のあたりに眺めたが漸つと先刻女に餘りつけつけ言つたことが鳥渡氣になつて來るのであつた。

「女の人は喫茶店のひとですか。」

「さうさ、それだからつて詰らない想像はしない方がいい。」

彼は妻が十分先きから見ると餘程落着いてゐるのを見て、恁麼事から大した不愉快を起さないのをいい按配だと思つた。氣もちから云へばどちらも損のある氣持ちだつた。

「おれの親切氣がずるずるになつて後を引いたのだ。」

「その人はどうなすつたのです。」

「國へかへつて行つたらしいのさ、それともどうか能く分らないがおれには孰方でも係はない。」

「家へ呼んで來てくだされば、いいのに——」左ういふ意味のことを彼女は言つたが、併しそれは最初からはできぬ相談だつた。かうなれば左うもいへるが、…彼は先刻女が寒さうに肩をすぼめながら云つたことを不圖思ひ出した。

「これまで私がして來たことをすつかり今日はお話をしようと思ひますの、歸郷しますと何時お目にかかれるか分りませんから。」

女は彼に何かこれまでの生活の逐一を聞いて貰ひたいらしかつた。併し彼には興味のない嫌厭だけが頭に殘つてゐて、此の女と話をするだけでも、味氣なかつた。

「僕が聞いても何にもならないことですから。」

彼は女に取合はなかつたことが、餘り無愛想だつたが、それ以上彼は女に何の氣もちも動かなかつた。

午後になり雪が晴れてから、埼玉の田舍へ歸つてゆく女のことも忘れてしまひ、彼は彼の輕蔑してゐる七時半の規則正しい生活に入つてゆくのであつた。

神も知らない

一

妻の遠縁に當る眞砂町の知人から肝煎をしてくれたおきみは、兎も角も落着いて勤めて居るので、郷里の方へ出掛ける山川夫妻は、休暇に來合せてゐる甥と二人に留守居を托んで旅行に出たのであつた。一ト月餘り故郷の山河の空氣に親しんだ山川は、田端の住居へ歸るとおきみの東京辯が爽やかに聽かれる程田舍の濁つた言葉訛に惱まされてゐたのであつた。

性質は少しは鈍な健忘性な傾きもあつたが、甥は別におきみの惡口らしいものも云はなかつた。女學生上りのやうで鳥渡眼の素直にぽんやりと開いてゐる按配や、帶を胸高に締る工合に生育盛りの娘らしい厚みのある身體つきをして、何を言つても諧々と身輕に動いてゐるので女中としては上乘の方だつた。それにおきみの父親は加賀生れだつたことなどが、一層山川の田舍辯などを彼女に思ひ起させ、仕事さへ素早く片附けられるやうになれば、家族の一人として懇しんでもよい程だつた。

よく物事に氣のつく甥は山川夫妻の留守中、朝などおきみの使ふ水を洗面の序に汲んで遣り、小間々々とした彼女が當然しなければならぬ庭や井戸端の掃除なぞも心得て手傳ふやうにしてゐたが、甥は山川の戯談に答へて可笑しさうに云ふのだつた。

「一向に反應がないんだ。」

山川は何となく甥の顏を見て苦笑した。甥は時々下町へ遊びに出掛けるらしい樣子も窺へたが、歸ると湯に遣るくらゐで山川は別にその事で小言らしいことは云はなかつた。そしておきみはまだ何も分らぬ少女だといふのであつた。山川もそれには反對はしなかつたが、東京も眞砂町近くの下宿に住んでゐたおきみは、男の兄を三人と、姉を二人までもつてゐる末ッ子だけに、見た儘のおきみではなからうと思へるのであつたが、取り立てゝ山川夫妻に疑惑や不安を抱かせることもなかつた。

翌年の夏信州への長期的な旅行にも子供のある都合上、おきみも連れて出掛けるのであつたが、涼爽な山上の生活を喜

んで鈍いが働くだけは働いてくれるので、山川夫妻には何彼と調法であつた。或日山川の妻とおきみは町へ食料品を買ひに行き、その歸りに彼女はどうした途端だつたのか、豆腐をつつんだパラピン紙を取落して、慌てて赧くなつて拾はうとしたのであるが、山上の清冷な水を離れた豆腐は道路の上に形をくずして碎けて了つたのだつた。西洋人の散歩時間ではあり避暑地の賑ふ頃だつた矢先で、華美な裝ひをした男女らは此奇異な光景に散歩の足を笑ひ乍ら留めた。山川の妻はよその家の軒端に佇んだきり身動きのできない恥かしい氣もちを經驗したのだつた。

「落したらそれなりで知らん顏をしてゐてくれゝばいいのに、叮嚀に拾ろつてゐるんですもの。」

わたし全く窮つて了つたと、山川の妻はあらたに顏をあからめ乍ら云ふのだつた。山川もその光景に思ひ當つて腹を抱へて苦笑した。おきみもきまり悪がり「わたしどうしたらいいか分らなくなつたんですもの。」と云つた。併し十分も後にはその事に氣をくさらしてゐないで、默々として立働いてゐるおきみであつた。氣質は正直一圖で、極端に寡默で、しんねりと心でねばり付く程考へる性質らしかつた。或時なぞ子供が途中で疾走する自轉車に衝飛ばされ額を腫らして歸つて來たが、態々その時は自轉車の乘手に山川の家まで同行を求める程、氣の利いた東京も盛り場の娘らしい强氣な氣轉をも有つてゐた。

或朝山川の妻は勝手の古新聞の上におきみが投函することを忘れた郵便物の中に、おきみの手蹟らしい此山上の風景の繪葉書を發見して、その宛名が清水邦男と書いてあつたので慌てゝ、山川に報告を齎らしたのであつた。

「眞砂町といへばあれの姉のゐる町ぢやないか。」

「何時の間に男の人と交際してゐたのでせう。」

山川は何となく自分のところへ來る以前からの知合である男のやうに思はれ、文面には何度も手紙を出したが返辭のない事と、此處は涼しい山の上の原ッぱで樂しく暮してゐるとかいてあり、秋にはお逢ひしませうねと物優しく相應のすぢみちのある文章で書いてあつた。或は去年の秋の旅行に甥と二人でゐる間に、この清水邦男と逢引くらゐはしたのであらうと思うても見たが、甥が何も云はぬところから見ると或はさうでないかも知れなかつた。反應がないと言つた甥のことを思ひ出して、やはり反應のあるところにはあるのだと可笑しく思ひ出した。「あれが男をこさへても我々には何の影響がないのだから打つちやつて置かうぢやないか。」と山川は人情の機微には自由で放膽の方だつたから、妻をなだめ戀愛のことだけは干涉せぬやうに言ひ含めるのであつた。それにしてもまだ十八くらゐで男と交際うてゐるのが、やはり東京者らしいおませだと思うた。

永い夏も過ぎ涼風の立ちそめた頃、おきみは此間と同じい葉書をかいてゐると妻がいふのだつた。ノートなども勝手の米櫃の上に置き忘れてあつたりして、それには短かい斷片的な手紙とも文章ともつかない書き入れがしてあり、清水邦男の名前ばかり書いてある頁もあつた。夜おそく仕事を終つてから書くらしかつた。

「その清水さんから返辭が來ないらしいんですね。手紙をくださらなくとも私は想つてゐると書いてあるんですもの。文章も却々うまいわ。」

「とにかくあれで却々情熱家らしいね。しんねりとしてゐるところが氣性の重いところを見せてゐる。」

「返辭も出さないなんて清水つてひとはあの子を嫌になつたのでせうか。」

「さあどうかね。」

山川夫妻は秋暑い東京へ歸つて來ても、月一回の休みの外にはおきみに暇のあらう筈がなかつた。青年の出入りの多い山川は來客と書齋で畫集などを開いて見てゐると、それに多い裸婦像などをちらと見過したおきみは驚いて妻にいふのであつた。

「それはお前西洋の書物なんだよ。」

おきみは自分の同性の寫眞にさへ或刺戟を感じる鋭い年頃であるらしかつた。婦人の訪問者にもおきみらしい目立たぬ併し周到な注意をして、妻へいちいち告口をするらしかつた。夜おそくまでこそこそ何か書いてゐることは毎晩のやうだつた。何時か前の日の郵便を裂いて取棄てた處書きを見直す必要があつて、山川自身勝手の反古籠を調べてゐると、レタアペエパ樣の紙片に書きそこなつたおきみの手紙が、幾通も見出されるのだつたが、やはり同じい眞砂町の清水邦男の宛名だつた。どれにも返辭のないことが書いてあり今度の二十五日には眞砂町の停留場に待つてゐるなどと誘うたのもあつたけれど、その二十五日はとうに過んでしまつてゐて、彼女はその朝山川の妻や子供と上野の動物園で半日を暮したのであつた。思ひつめて書いては棄てゝゐる焦燥した其氣持ちの配り方には、對手が時間の自由にならないだけに山川には可憐に感ぜられた。

去年の秋の旅行中に清水邦男と逢つてゐるらしかつたが、それから一年の間男は何かの事情で身を引いてゐるらしくも想像された。甥にこの話をすると、彼は笑ひながら一かどの賴母しい青年らしい顏付をして云ふのであつた。

「夕方から早めに米を磨いで了つてから能く出掛けました よ、餘り度たびだから誰かに會ひに行くのかと尋ねると、ええと正直に答へましたが、その男でせう。併しをぢさんには言つてくれるなと云ふんで、今まで默つてゐたんです。」

「君も義理がたいところがあるね、では情を明して逢ひに行

つてゐたんだな。」

「まあ云はゞそんなもんです。子供の自分からの友達同志らしいんです。」

おきみから口留めされ乍らそれを實行してゐる若い甥の心持の素直さも快よく聽かれたが、その清水といふ男と幼な友達で散歩だけしたのだと、甥に問ひ詰められて情を明したおきみにも鳥渡少女らしい戀を誇る無邪氣さがあつて不愉快ではなかつた。眞砂町といへば元山川夫婦が住んだ覺えのある町で、妻はその清水といふのは小間物店ではないかと山川に家の地理や周圍を話して聞いたが、山川もその清水といふ小間物店では度々買物もしたことがあつて、聞かぬ氣らしいおかみさんが何時も店さきに坐つて縫物をしてゐたことを思ひ出した。

併し山川はどういふ息子がゐたか覺えてもゐなかつた。おきみの家とは對ひ合つてゐたことは實際だつた。

「今から男と逢引なぞしてゐては末のことも思ひ遣られますね。」

山川の妻は女らしく非難をしてゐたが、身體は彼女のものであるから關はず打抛らかして置いたら、氣の附く時についた方がよいと何事にも干渉せぬ山川は、咎め立をしないでゐたのであつた。

仕事のにぶい彼女は夜更けてから、折々井戸端で子供の不淨物を洗ひ濯ぐ傍ら、低い聲音でロオレライなどを唱つてゐたが、神田の英語學校を二年まで修めただけあつて原語ですらすらと唱ふのであつた。近隣に若い娘のゐないのに昨夜は獨唱の聲がきこえて來たが、雨戸が閉つてゐるせゐか却々美い聲だつたと朝目を覺して妻にいふと、

「あれはおきみが唱つてゐたんですよ。」

と云ふのであつた。

「却々うまいぢやないか、おれは奥村さんの所へ何處かのお孃さんでも泊りに來てゐるのかと思つた。」

隣の奥村さんの塀を越えて聽えて來たやうだつたから、山川はおきみにしては上手だと清水邦男のことをも思ひ合せて、却々切なるものがあると、書齋で竹のさわがぬ靜かな晩なぞ、一人で微笑みを漏らすことがあつた。

その内妻はおきみと内輪話をしたらしく、時折戯談に清水邦男の名前が出、妻もこだはらずに何となく許してゐるやうな傾になつたのは、その清水の母親がおきみから出した手紙を揉み潰して、一切邦男に手渡ししないらしく、又邦男からは時節の來るまで手紙はくれるなといふやうな事を聞いて妻の心も同情に近い氣もちになつてゐたのであつた。おきみはその事では深い自信があるらしく妻に逐一を話してからも、手紙は以後は出さないといふのであつた。山川は何か清水といふ男がよい加減にあしらつてゐるやうにも思はれ、今どき

の青年には餘處の家に雇はれてゐる女風情に、永く心を留めてゐるものなぞあらう筈がなく、結局彼女が憂い目に遭ふだらうくらゐに考へてゐたが、おきみの打込み方の熱心なのには一樞に笑へもしなかつた。

春になりおきみの姉から結婚談が持ち上つたが、おきみが手固く斷つたのにも何か心に考へ信じてゐることがあるらしい樣子だつた。

「その清水さんが本統にお前を貰つてくれるかどうか分らないぢやないか、母親がお前との間を裂くやうにしてゐるくらゐだから。」

妻は結婚談の持ち上つた時に語におきみの心をさぐつて見たが、おきみは結婚の心持には初めから傾いてゐなかつた。

「着物もできませんからまだお宅で働かしていただくつもりでございます。」

三人の兄にはそれぞれの暮し向きの困難が付き纏うてゐた。近間の眞砂町の姉などは赤ん坊を負ひ乍ら乏しいおきみの所へ少額ではあるが、小金の時借に來てゐるのを山川は知らないではなかつた。おきみはその毎度に快よく用立てゝゐるので、妻などはお前あまりお人がよすぎるよと注意する程だつた。それ故おきみは嫁に行くにしても誰も手頼ることができないで、彼女の働いた分でそれぞれの着物や持物まで今から心掛け用意をして置かなければならなかつた。山川の家では取り付けの上野の呉服屋に話をして、僅少な月賦拂ひで着物をつくる便宜を與へてゐる程だつた。おきみは一年半もゐる間に四季の物をそれぞれに取揃へ、不時の外出に事缺くことはなかつた。

彼女は一度も締めたことのない帶や着物を夜おそくに行李から取り出して、皺や襞を樂しげに伸しては眺め入つてゐることを山川は妻から聞いたことがあつた。

おきみが結婚の話を眞砂町の姉へ斷つてから、鶴見の在にゐる叔母、——おきみは幼少の折から身の廻りや、複雜な相談事を委してゐるばかりでなく、山川の家へ勤めない以前まで季節折々の着物を拵へて貰つたりしたその叔母が田端まで出て來て、山川の勝手口でおきみと何かひそひそと立話をしてゐたが、昂奮した顏のおきみは鶴見の叔母が訪ねて來たから、鳥渡暇をくれといふのであつた。

二時間ばかりして歸つて來たおきみは、すぐ通りの喫茶店で勝氣な叔母から清水のことを諦めるやうに言ひ含められ、叔母の近所の或勤人のところへ行かぬかといふのであつた。そして清水邦男は去年の十月亞米利加へ渡航したことが、初めて叔母の口から漏れたのであつた。その打擊は半ばおきみを結婚の話に打込みはしたものの、却つて反撥的な自暴な氣持にもなるのだつた。兎に角考へて見ますと云つて叔母を歸したのであつたが、おきみは絶望に近い沈んだ顏色に

持前の紅い血色を混濁させ、精神の大きい驚きを持ち應へられぬ程狼狽してゐた。

「亞米利加は誰も入れないんだ、が妙なことがあるものだね。お前に諦らめさせるために叔母さんがさう言つたのぢやないの。」

「わたしもさう思ひますの、けれども本統かも知れませんわ、ちつとも手紙がこないんですもの。」

おきみは妻にさういふ程馴染んでゐたものの、矢張り顏を赧めるのであつた。併し亞米利加へ清水が行つたことで彼女を信じさせてゐたことは、清水といふ青年の氣風にさう思はせる覇氣に似たものがあるに違ひなかつた。おきみの萎れて弱つてゐる態が露骨に毎日の仕事に表はれ勝ちだつた。

二

春も闌けた頃亞米利加の少女達から日本の少女達へ美しい人形の國際的な贈物があつた。その新聞の記事なぞもおきみの心を動かすに充分であつた。何かの紛れにも亞米利加といふ言葉はおきみには或る刺戟をふくんで聽かれるらしかつた。妻は亞米利加はわたし達の住んでゐる直ぐ地面の下だといふことを說明して聽かした。

「では地面を掘つてさへ行けば亞米利加へ出るわけでございますね。」

「理窟はさうなんだが途中火や熱や水があつて行けないのさ。」

「ではこちらから見れば亞米利加の人はさかさまに歩いてゐる譯ですね。何んだか考へるとをかしいわ。」

彼女は寫眞や繪葉書で見る高層な建物や自動車や人物なぞが、逆さまに濡れた甃石に影容を映してゐるやうに亞米利加の風光を眼に描いて見るのであつた。爽やかな或朝だつた。おきみは使先で聞いて來たのか、狼てゝ妻に話すのであつた。

「田端の小學校にも亞米利加の人形が來たんですて。」

彼女は昂奮してゐた。

「あの人形は市内の學校で分け合ふのだから、田端へも來るのさ。」

「わたしお孃さまと一緒に行つて見て來てもようございますかしら。」

子供はそれが見たさに甘えて最うおきみの手を引いて、鼻聲に變化つてゐた。

おきみは歸つてくると亞米利加の人形の美しく愛らしいことを褒め讃えてゐた。「お父さま、わたしにも亞米利加のお人形さんを買つて頂戴。」と女の子は山川の机の傍を承諾するまで離れようとはしなかつた。併しおきみには變に憂鬱らしい樣子が氣のせゐか交つて見えた。尠くとも人形を見て歸つ

てから山川の氣のついた憂鬱だつた。

その翌日の夕方だつた。おきみは井戸端の喞筒の手に靠れたまゝ晞いてゐた。呼び入れて尋ねると姉から手紙が來て、それには亞米利加へ清水邦男が行つたといふのは嘘で、急性肺炎で去年の十月亡くなつたといふことが書いてあつた。

「まさかね、お前が鶴見の叔母さんに結婚を斷つたからですよ。」

「わたしもさう思ふんですけれど、しかしどうか分りません。」

おきみは半ば疑ひながら姉へさう嘘を言つても分つてゐるといふ意味の返事を出したといふのであつた。「わたしまだ働かないと呉服屋に借りもあるんですもの。」と彼女は泣き笑ひをして結婚なぞしないことを手固く妻に云ふのだつた。併し神經に應へてゐたおきみは、むつつりと一人で昂奮を内訌させ上氣してゐた。

二三日後におきみは妻に手紙を見せたが、その中に挿入された清水家の戸籍謄本を一讀した時に、妻自身も餘り唐突な出來事に驚いたのだつた。清水家の長男邦男二十三歳と書いた細長い罫の中に、大正十五年十月二十日死去と書き入れられ、赤インキで×印に戸籍面から完全に抹殺されてあつた。この一枚の謄本はおきみを根柢からその生活面の喜憂外に追ひ出したのであつた。

「やはり本統でした。」

おきみは泣き妻はなだめ樣もなかつた。

「こんな謄本を送つて寄越すなんてどんな氣でしたのだらう。」

おきみに邦男を諦らめさせる手段としても苛酷だつた。動機に深い考へは罩められて無いにしても、子供らしいおきみを脅かし過ぎると思はれた。

「亞米利加は入國させないのだから變だと思つてゐたが、まさか亡くなつてゐるとは思はなかつた。」

妻もさう云つたが、おきみの弱り方は想像外だつた。「亡くなつたものは仕方がないからね、何時までもさう考へ込んではいけないよ。」赤ん坊の守をしながら茶の間に坐つてゐるおきみは、障子硝子の小窓から空ばかり眺めてゐた。じめじめと朝目を覺せば覺すで泣き腫れた重い瞼をあからめてゐた。

「お前清水といふ家へ行つてお線香でも上げて來たらどう。知らない家ぢやないのでせう。」

「子供の時分によく遊びに行つたことがあるんですけれど……」

「それならなほ行つたらいいぢやないの。」

「ええ、ですけれど……」おきみは考へ込んで、「わたし叔母さんが怖い。」と云つた。

清水の母親を怖がるのは無理はなかつた。併し清水の母親の氣持にも死んだ息子に線香を上げに來るものを拒む譯はないと思はれた。却つておきみの優しい生地が解り、母親が彼らを裂くやうに仕掛けてゐたことを自分で氣附いて惱むかも知れないと思はれた。山川もそれに賛成し、おきみも夕方になつて出かける氣になるのであつた。

「その方が爽ぱりしていいかも知れないね。」

「ええ、わたしもさう思ひますわ、何も持つて行かなくともいいでせうか。」

「さうね、手ぶらでも何んだから果物でも持つて行くといいね。」

「はい、では行つてまゐります。」

彼女は着換へを濟して髪も撫でつけ、取り附けの八百屋で一籃の果物の進物籃を調へて、いそいそと元氣よく出かけたのであつた。

「ひどく參つてゐるな。」

山川は背後姿をいぢらしく見送つた。

「そりやさうでせう、謄本まで見せつけられちや叶ひませんわ。」

併し三十分程經つて歸つて來たおきみの手には、置いて來る筈の果物の籃が提げられた儘、ぐつたりと喪失した極度に元氣のない顏色をしてゐた。

「どうしたの。」

おきみは妻の顏を見ると戸棚の板戸に向いて、遽かにしくしく泣き出すのであつた。默つてゐては分らないぢやないの、妻は柔しくなだめるとおきみは漸つと泣き歇んだ。

「わたし參りますと淸水の叔母さんが怖い顏をして物も言はないで睨んでゐらつしやるんですもの。わたしどう言つていいか分らなくなつて俯向いたきりでゐました。」

おきみは淸水の母親に睨まれたまま居竦んで、漸つとお悼みと線香を上げに來たのだと云ふのだつた。母親は矢張り默りこくつてゐたが、突然に腹立しげに次の間の佛壇の扉をぎしぎし音を立て乍ら開くと、邪嶮な尖つた聲音で諷刺けるやうに云ふのであつた。

「邪男は此處に居ります。」

おきみは殆ど命令されたやうに佛壇の間へ行き、震へる指さきで燐寸で線香を點すのであつた。淸澄院善士の位牌の前でおきみは夢中になつて禮拜はしたものの、氣が附くと母親は茶を汲んで來て前に置くと、御苦勞さまと言つたきり依然憎々しげにおきみの身體の端々を尖りを帶びた眼付で見据ゑるのだつた。おきみは疊の上を摺り辷るやうにして怖々茶の間へ出た。

「どうも濟みませんでした。」

と店の間を殆ど無感覺で歩いて出たのであつた。

「能くも圖々しく來られたものだ。」

母親の尖つた聲音は二三歩あるいたうしろから落膽したおきみの襟元から斜かひに浴せられたおきみは果物の風呂敷包みをかかへ、怖しさ悲しさで一杯になつて戻つて來たのであつた。

「初めから睨んだきりなんですもの、わたし參らない方がよかつたと思ひました。」

「そんなにつけつけしなくともよいのにね、きつとお前が邪男さんを騙してゐたとでも考へてゐるのだらうね。さうでなければそんな筈はないものね。」

淸水の母親の氣持ちから云へば、おきみに酷く當るのにも何か悲壯な感じが交つてゐるやうに思はれ、優しく當るか辛く當るかの其孰方かでなければならぬと山川は思ふのであつた。却つておきみに悼みを言ひに出さない方がよかつたやうにも思はれた。

おきみは其日あたりから物を言はないで、物憂いしれしれた容子をしてゐた。絕えず口を結んで締めつけてゐる居苦しげなそれでゐて絕えず昂奮を打通して續けてゐた。

「すこし變ぢやないか?」

「わたしもさう思ふんですけれど……。」

淸水の母親をおきみが訪ねてから六日目だつた。子供のことで山川は妻を烈しく叱責し、おきみの不愉快な憂欝にも癇癪を起したのであつた。山川は家族を叱り飛ばした後では決して外室はしなかつた。家で不愉快な時には外へ出ても不愉快だつた。

晩は早くから寢て目をさまして厠へ立つと、消燈をしてゐる山川の部屋に玄關を隔てたおきみの部屋の電燈の明りが漏れてゐた。妻と子供との部屋にも物音がなかつた。まだ起きてゐるのかと思うたが、床へ入つてからおきみの部屋で板戸に身體を打ちつけたやうな物音がしたが、又うとうととすると明りは襖の隙間からも依然漏れてゐて目ざはりであつた。山川は不吉な或る想像をしたものの、それは山川自身の病癖的な神經作用としか思はれなかつたので、その氣もちを自分で笑ひながら眠つた。

朝が來て美しく晴れあがつてゐた。何も變化つたことがなかつたが、書齋を掃除する時おきみは電燈に頭髪を打ちつけ、狼てて搖れる電燈を元の位置にもどすと、すぐ勝手へ行つたが其處で十能に躓いたのか金屬物の轉がる劇しい物音がした。何か狼狽して居て其日着換へたらしいセルの單衣がどういふものか皺だらけだつた。顏を見せぬやうにしてゐるのも山川には氣附かずにはゐられなかつた。

食事の時に妻はおきみが今朝七時まで寢てゐたが朝寢をして困ると云つた。

「何んか變で使ひにくくてこまります。」

山川はその事では默つてゐた。

午後おきみは赤ん坊を抱いて、茶の間で妻が外出をしたあと、山川が机に對うて仕事をしてゐると、不意に稀らしく唄をうたひ出すのであつた。どうも可笑しいと思うて見たが、唄は低い聲だつた。郵便物を持つて來た何時もならよすぎる烈しい血色の上に、薄いパラビン紙を透し見たやうな蒼白い色があつた。變に美しい顏だつた。

「おきみは家を出るらしうございますね。」

「何故？」

不意で山川は妻の顏を見た。

「呉服屋の月賦を二タ月分拂つてしまひましたよ。」

「何時。」

「きふのお勘定の時です。」

その日は朔日だつた。向うで辭めることは仕方がないが、姉の暮しも旨く行つてないのに何處へ行くつもりだらうと山川は云つた。何に渴くのかおきみは禁じてある生水を手杓で飲むのだつた。妻はそれを見付けて注意をしたが、今度は自分の茶碗でぐいぐい飲むのだつた。邦男の死去以來食の細れてゐたおきみは二日前から勝手で冷飯の始末に窮る程食べなかつた。夕方近く妻は顏色を變へて、山川の机の傍へ來ると「あなた」と呼びかけ脣を顫はせながら、大變よと云つた。山川は机に手をかけてゐる妻の指先の震へてゐるのを只事でないと思うた。

「おきみの押入れを何氣なく見ますと、遺書が六通もあるんです。」

山川の顏色もすぐに變化つた。

「矢張りそのつもりだつたか、おれもひよつとすると何かしなければいいと思うてゐたが。」

「わたし達にあてたのにはお世話になつたが、どうしても生きてゐるのが厭だからと書いてあつたんです。」

「では今夜實行するつもりらしいな。」

「今夜でせうね。」

「併し昨夜遺書をかいたとすると昨夜中に遣るのが順序だが、しかしいい時に氣がついた。」

山川は午後彼女が珍らしく唄をうたつてゐたことを思ひ出し、いまから思ふと何か悲調がこもつてゐたと思うた。昨夜明りが永い間點いてゐたのも其の遺書をかいてゐたのに違ひない、――何かの不吉な豫感はないでもなかつたが、彼の家庭に起りかけてゐる事件としては、彼らの靜かな生活を根こそぎ搔き廻したも同樣だつた。

「何か死ぬやうなことを平常言つてゐなかつたかね。」

「あの子はそんなことは言はない子ですよ。考へ込んでばかりゐるんですから。」

山川はこれは眞砂町にゐる彼女の姉にこの事を報らせて、

今夜中に事情を明して引取らせた上、姉からみつちりと親身になつて言つて貰つた方がよいと思ふのであつた。なまじひ山川夫妻が事を荒めて何か云ひ出したら、意地にでも不吉を決行するかも知れない、こちらは飽迄知らぬ素振りで姉に渡した方がよいと思つた。

「とにかくおれは眞砂町へ行つて來る、しかし處は分らないが困つたな。」

「何んでも木吉といふ家ださうです。長く住んでゐる左官屋だからすぐ分るでせう、何んならわたし行つてまゐりませうか。」

「お前が出かけるとおきみに感づかれるかも知れない、多分分るだらうからおれが行つて來る。」

山川は留守中おきみを一人で置かないやうに言ひ付け、動坂から眞砂町へ自動車を飛ばしたが、山川の氣は沈んで憂慮と混濁とで一杯だつた。眞砂町で降りるとすぐ此のあたりにゐた車夫の木村の家を考へ出して、木村の家の前まで行くと、永い間神經痛で病臥してゐた彼は、車夫の方の仕事を廢めて長屋のお神さん達や子供相手の人形燒を燒いてゐるのだつた。今も彼は鑄型の中へ餡を塗り込みながらゐたが、山川の姿を見ると無性髭の中から幾らか味氣なく笑ひかけるのであつた。

「その節は色々御心配をかけましたが、もう人形燒屋になり下りました。」

「却々いい商賣ぢやないですか、時に左官屋の木吉といふ家が此邊にありませんか。」

「木吉といふんですね。」彼は勝手の方へ向いて云つた。「左官屋の木吉は八百春の裏だつたな。」

そこらまで御一緒にと云うて、八百屋の裏まで連れ立つてくれたが、山川は木村にそこから歸つて貰つた。

「いづれ後で話をするから。」と云つた。

おきみの姉の家の前で木吉といふ表札を讀むと、山川は格子戸を開けたが、直ぐに取次ぎがなかつた。山川は未知の家を久しく訪ねた經驗に乏しいので、事件が事件だつたので變に胸さわぎを感じるのだつた。

「御免下さい。」

漸つと出て來たのはおきみの姉らしい、おきみによく肖た髮の質の惡い女だつたが、表情の直覺には惡意のない善良げな顏立であつた。彼は田端から訪ねて來たことと、おきみの事件を簡單に話したのだつた。人手の足りない時ではあるが一時引取つて不心得を悟してくれる事、また荒立てない程度で慰さめてやつてくれる事を山川はいふのだつた。

「思ひ詰めてゐるのですから此儘では危ないと思ふんです。」

「どうも色々ご心配をおかけして濟みません。ではさつそくにあの子を連れて參つて能く言ひ含めますでございます。」

「そのかはり遺書のことは話をしないで、何となく慰さめるといふことにして遺つて下さい。」

「承知いたしてございます。態々遠いところをおそれ入ります、ではすぐ……」

おきみの姉は小鼻に汗を掻いて狼てて立たうとしたが、次の間から亭主らしい男が出て來て、山川の顏を幾らか反抗的に見て首を烏渡下げて、彼とおきみの姉との間に職人らしくべたつと坐りこんで云ふのであつた。「おきみを引取るにいたしましても、あれには澤山の兄もあることですから、わたしの勝手で始末する譯には行かないんです。奉公する時にもわたしどもは別に相談もされなかつたやうな始末で……」

「それでもあなた方に引取つて貰はなければ誰が引取るものですか、それにまあ當分、當人の落付くまでのことです。落付いてさへくれゝばわたしの方では又來てほしいのです。」

「はあ、では當分……」

「その間にあなた方で種々慰さめてやつてくれゝばいいのです。わたしどもは言はば他人であなた方は親身ですからね。」

姉の亭主はおきみがもうどうにかなつてゐると誤解してゐたらしく、山川の言葉で漸つと血色のわるい顏に愛想笑ひをうかべた。山川は直覺的に此處へはおきみを歸されぬと思ひ或は歸したら却つて意地にでも不心得をするやうに思はれた。職人ではありがみがみ云はれたら傷みやすいおきみの心は、一耐りもない弱腰をへし折られると思ふのだつた。

山川は姉があとで來るといふので、一人で通りへ出たが、どうもおきみを欺してあの家へ歸すのが氣がかりであつた。それに本人に默つて姉の手へつき戻すのも、しかもおきみへは嘘でかためた手段を取るのも、普通の家庭ならともかく文學者らしくもないことだと思ふのであつた。普通の家庭なら此れをきつかけに暇を與へるだらうが、それは山川の氣質からも薄情には出られないことだつた。

「いつそおきみにぢかに當つてやらう。」

そして遺書のことも云ひ、內輪にじつくりと不心得を悟した方が本人の爲めにもなり山川の本來の心でもあると思ふのであつた。姉などを中へ入れると山川一家だけで濟む事がらをも、却つて大きく波動を起す面倒があると思ふのだつた。今まで同じい米鹽を食ひながら女中だからといふ意味で粗略にはできなかつた。死なぞといふことは最う對人的なものを超越してゐる或る壯烈なものだつた。

彼は自宅へかへると、書齋におきみは分らぬやうに妻を呼び入れた。

「あれはどうしてゐる。」

山川は先づかう聽かずにゐられなかつた。

「落着き拂つてゐます、何ともいはれぬ顏をしてゐます。」

「ところで眞砂町へかへすのは駄目だ。」

山川は眞砂町の家庭の模樣を說明した。決しておきみの心を元へ戻すことはあの家庭では到底できぬ事、却つて惡い結果を及ぼすかも知れぬ事、おきみの姉の亭主の事などを話して聽かした。

「でもあれに若しもの事があつたらどうなさるのです。」

「その點だ、あれにお前から何も彼も一切を打ちあけて言ふのだ、一遍あばかれたら例令次に死ぬとしても間があるものさ。」

「次ぎに死ぬ、それが怖いのよ。」

妻は慴えた聲で云つた。山川も不愉快な想像や混雜を自分らの家庭の、或る日の朝の光景のなかに想像せずにはゐられなかつた。

「何が怖いの？——」

山川は妻を叱つておきみに話をすることを命じた。それにしても迎へに來る眞砂町の姉が來てから、一應その事も明した上にして姉を歸さうと云ふのだつた。

「怎んな方法で死ぬ氣かな。」

山川はじろりと妻を見、次の間に赤ん坊を抱いてゐるおきみを想像した。彼はその時或る豫感で飛び上る程驚いたのであつた。慥に彼處へ行けば判ると思ふのだつた。

「一寸行つて來る。」

「家にゐてくださいよ。」

山川は怖がる妻を叱つてすぐ通りの彼が行きつけの家で目藥を買ひ乍ら云つた。

「女中が何か藥品を買ひに來ませんでしたか。」

「いいえ別に——」

山川は家へかへると安堵に似たものを感じた。大抵あそこで買ふに決つてゐると思ふのだつた。「何も買つてはゐないやうだ。」

「でも餘處の藥局もありますからね。」

「それもさうだ。」

併し一々藥局を調べて廻る譯には行かなかつた。彼らは慌しい夕食を取つたが喉に通らず、固い能く嚙まなかつた食物が胃につかへることを感じた。五つの女の子も山川夫婦の狼狽の氣もちを感じてゐるらしく思はれ、彼らは佗しい夕食を終へた。

眞砂町の姉の來る前、山川の妻は茶の間におきみを呼んだが、おきみは落着き拂うてゐた。

「お前は何かわたしに隱してゐることがないの。若しあつたら言つておしまひ、此間からお前の考へ込んでゐることは分つてゐるのだけれど……」

おきみは俯向いて顏を擡げなかつた。堅苦しい壓力のある氣もちは、山川の妻の肥つた肩を凝り上げるやうだつた。

「かうなれば皆云ひますがね、お前の書いた遺書をけふ見た